正義執行

ラキア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「――正義を執行する」

目次

第01話 1
第02話 9
第03話 18
第04話 25
第05話 31
第06話 39
第07話 47
第08話 57
第09話 65
第10話 73
第11話 80
第12話 89
第13話 96
第14話 104
第15話 113
第16話 122
第17話 129
第18話 140
第19話 150
第20話 159
第21話 168
第22話 176
第23話 187
第24話 196

第25話 206
第26話 216
第27話 224
第28話 232
第29話 245
あとがき 253
後日談　一撃聖王 257

第０１話

――――新暦〇〇七五年。この紀年法は管理世界第一世界ミッドチルダを中心とした、管理世界で共通する紀年法である。管理外世界である地球では勿論分からないこの紀年法に、最初は戸惑ってつい西暦として年を数えてしまう。これに慣れるまでミッドチルダに転居してから一年はかかった。

思えば闇の書事件から一〇年経つのかと、高町なのはは感慨深く思った。フェイトやはやてからの誘いがあって、高校卒業後にミッドチルダに引越したが、別段管理局に入局するつもりは無く、あくまで退屈凌ぎの為である。

なのはとしては地球で生活するよりも、ミッドチルダの方が肩身を気にせずに生活できると考えた。ミッドチルダは基本として魔法を使っている。もちろん公共の場での魔法使用は禁止されているが、管理局に適正な許可を取ればそれも可能となってくる。子供は学校の授業で魔法を習うくらいだ。地球では非現実である事が、ここでは常識として存在する。

無論魔法適正の無い人間も生活しているが、それでも企業などでも魔力運用の機械などを使って仕事をしているの殆どであり、魔法を使ったスポーツなどもあることから、魔法の世界と言っても過言ではないだろう。

現在居るスーパーの内装を見ても、デバイスを通してのチラシや、立体ディスプレイで書かれた値札など、地球では考えられない技術の無駄遣いのように思えてしまう。一六になるまで地球に住んでいた身としては、最初にこの日常の光景に驚きを隠せなかったが、一九になった今では慣れてしまった事もあり、広告ぐらいは紙に書けばと思う。それも資源の無駄なのだがと考え、思考するのを止めて、特売商品だったカニの爪お得パックを手にとって、買い物籠に入れる。

今日の夕飯のおかずだけを目当てで買い物に来たため、他には何も買わずにレジへと向かう。

「四八ガルです」
「はい。……と、ちょっと待って」
　ミッドチルダにおいても、お金に関しては札も硬貨も実物を使用する。勿論デバイスに入金した電子マネーもあるのだが、そこは地球と変わらずに安全性の問題から、完全に信用することが出来ずにお金は実物を使用している。
　五〇ガルという、日本で言う五〇〇円相当の硬貨を出したが、細かい硬貨があった為、それを小銭入れから取り出す。普段から硬貨を溜めやすい性格な為か、一枚一枚を探して取っていく。後ろに人が居ない為、迷惑にはならない。
　しかし、硬貨を全部取り終えるまでに、事件は起きた。
「――――全員手をあげろォ!!」
　片手に小銃のようなデバイスを構え、その場にいる全員を脅す男が現れる。見た目はよくある強盗の姿である。こんなスーパーを襲うなら銀行にでも行けばいいのにと思いつつ、店員に探し終わった硬貨を渡して会計を済まそうとするが、レジの店員のおばさんはそれを受け取ろうとしない。強盗の言うとおりに手を上げて腰を低くしている。怯えている。辺りを見れば、皆が同じように手を上げていた。なのはは溜息を吐きつつ、買い物籠を取ってからセルフレジのほうへ移動して会計を済ませようとするが――――。
「そこ!・　動くんじゃねぇ!!」
　強盗が此方に銃口を構えて怒鳴り散らしてくる。だが構わずにレジの操作を始めるなのはにイラつきが頂点に達した強盗が近寄って来て、至近距離から銃型デバイスを突きつけてくる。だが引き続きバーコード読み取りの作業を行ったなのはに、とうとう強盗が銃を撃って来た。弾丸は魔力弾であり、殺傷設定の弾丸が此方に飛んでくる。が、なのははそれを回避もせずに某として待ってから、その弾丸をゴミでも弾くように手で叩き落とした。
　それに強盗が目を丸くする。周りの人々も同じ様子であり、何が起こったのか理解が追いついてない状態だ。だが別に理解して貰う必要はない。強盗が目の前で固まっているので、死なない程度に加減し

て顎にアッパーを叩き込むと、強盗はそのまま気絶して倒れた。
一瞬訪れる唖然だが、直ぐに騒ぎ始める。このままこの場に居ては面倒な気がしたので、カニの爪は諦めてさっさとスーパーから去ることにした。

◇

ミッドチルダには管理局の地上本部が存在し、治安も改善しようと日々努力しているが、多発する犯罪が消滅することは決してない。確かに大きな事件などには迅速に行動できるが、こういった日常の犯罪はいたるところで起こっている。
なのはもミッドチルダに来てから三年になり、趣味で魔導師をしながら見かけた犯罪を解決している。日常で起こった犯罪はそうやっていくつか片付けているが、それでも世の犯罪は一向に消える気配は無い。それはなのはがミッドチルダに来てから変わっていないことだ。
つまり、なのはは基本社会に何ら影響を与えていないということだ。それに関しては別段悲しくは無い。なのはは魔導師を趣味としてやっている。つまり、自己満足が出来ればそれでいいのだ。
スーパーでの買い物が台無しになった為、日が落ちて来たとこで酒屋で卵一パックを購入する。出て外を見れば、廃棄都市が広がっている。ミッドチルダの端に存在する廃棄都市群は昔は栄えていた都市であるが、度重なる凶悪な事件やロストロギアの影響ですっかりとゴーストタウンと化してしまった場所だ。故に普通の人は住んでいないが、普通でない分類の人間はここで身を隠す為に住んでいる事が多い。よく見かけるのは情報屋の類だ。
なのはは生活費にはあまり余裕が無い為に、この廃棄都市にある廃アパートに住んでいる。他の入居者は居ないが、設備は壊れていない為、光熱費を払えば普通に生活出来る。階段を上り、自分の住む部屋へと移動する。扉を開けて玄関から上がる。一度卵をキッチンの台に置き、手洗いを済ませる。

折角卵を買ったので、昨日炊いたご飯を冷蔵した物を電子レンジで温め直し、そこに生卵をかける。テレビをつけて適当なバラエティを見ながらご飯を食べる。食べ終わったら食器はテーブルに置き、そのまま風呂に入る。

風呂上りに、万年床となった布団に横になりながらテレビを見る。数時間が過ぎ、そろそろ寝ようと決めて、テレビを消してから電気を消すための紐を握る。食器はテーブルに放置されたままだが、明日、歯磨くついでに洗おうと考え、電気を消した。

布団に包まり、見慣れた天井を見ながら思考する。

なのはには今、悩みがある。日々感情が薄れていくのだ。恐怖も無い。喜びも無い。緊張も無い。怒りも無い。力と引き換えに、人として大切な何かを失ってしまったのだろうか。以前は戦いの際には心の中で様々な感情が渦巻いていた。恐怖。焦り。怒り。

それが――ワンパンで片付く。無傷のまま自宅に戻り、同じ日々の繰り返し。

このまま生活を続けて、何か変化はあるのだろうかと、考えてしまうのだ。目を閉じれば、昔の記憶がぼんやりと思い出せる。魔法と関わったきっかけになったプレシア事件。そして闇の書事件。どれも普通とは逸脱したものであったが、それでもなのはが本気で闘争できる相手はいなかった。

唯一、過去一番の強さであった闇の書事件で戦ったリインフォースとは、一撃のみ本気で拳を叩き込んだが、それで終わってしまった。

【――お前は強すぎた。高町なのは】

別れの際に言われた言葉は、今でもはっきりと覚えている。自分はこのまま何も感じずに生きていくのだろうかと、虚しく思ってしまう。そうぼんやりと思考すると、まどろみに包まれる感覚が支配し、それに委ねた。

◇

翌日に、それは起こった。

いつも朝から晩まで静けさが支配するこの廃棄都市で、朝から爆発のようなものが響いた。いや、正確には遠くのほうからもいくつも爆発音が聞こえる。地震のように地面が揺れ、それによって布団から飛び起きる。

と、同時に家の壁が突如破壊され、そこから巨大な手がなのはの頭をつかむ。凄まじい力で握り、そのまま頭部をつぶそうとしているのが分かる。それはなのはが恐怖するほどの力であった為、すぐさま手を叩き落として立ち上がるが、次に部屋全体が何者かによって完全に破壊され、その衝撃で身体が吹き飛ばされる。

マンションの表の道路に着地し、自分の部屋が破壊された惨状を見る。

「!!　私の家が……ッ！」

マンションはなのはの部屋は愚か、もはや人が住めないほどに破壊されてしまった。襲撃者のことよりも家の心配をするあたりに、まだ事態を冷静に把握できていない訳だが、思考を無理やり襲撃者に向けさせるように、背後の地面を破壊して現れた何かが、その巨大な腕を振りかぶって拳を横に叩き込んでくる。

それを腕でガードするが、驚愕する。

相手の力に耐えられなかったのだ。

咄嗟のガードでは対応できずに、そのまま殴り飛ばされてしまう。マンションから程近い環状道路橋の下のコンクリートに身体がぶち当たる。幼き頃のトレーニングの成果から、怪我をすることが無くなったなのはだが、今まで経験したことの無い力に、頭から血を流す。

すると目の前に襲撃者が近寄る。その姿は黒い人のような巨大であるが、頭部が明らかに人とは違う骨格をしており、歪な頭部から低い声が響く。

「驚いたな。殴っても死なない地上人がいるとは」

「それはこっちも同じなの。……何者なの、お前たちは」

「何だとは失礼だな。我々は真の人類だぞ？」

「我々？」

疑問の声を漏らすと、周りを囲うようにして真の人類と名乗る怪人

たちが無数に姿を現していく。
「貴様らは我々を地底人と呼ぶそうだな？　我々は数が増えすぎた。よって地上を頂くことにした。だが地上人も中々多いらしい。このままでは我々の邪魔になる。よって地上人には――――絶滅して貰う事にした」
　地底人は手を広げ、言葉を続ける。
「我々が侵略を開始してから、すでに七割の地上人が土に還った。これも生存競争だ。潔く受け止めろ」
　その言葉に驚愕し、開いた口が塞がらない。七割りという事を聞いた事から、恐らく管理局でも手に負えなかったのだろう。この地底人の力を知ればそれが理解出来てしまう。間違いなく人類滅亡の危機に変わらなかった。
　だが、こんな状況だというのに、自然と胸が高鳴ってしまう。その為、笑みが零れる。地底人は訝しげにこちらを見てくる。
「――――こんな手ごわそうな相手は初めてなの。……地底人!!」
「……我々は真人類だッ!!」
　言って、地底人はなのはに拳を叩き込んでくるが、それを上体を横に倒すようにして回避し、その拳が背後にあったコンクリートの柱に突き刺さっている隙に、その胴に拳を叩き込む。拳が食い込み、次の瞬間には地底人の上半身が破裂した。その光景を目撃した他の地底人が狼狽するが、なのはの横に立っていた地底人が両手で拳を握り、それを振り下ろしてくる。それを横に飛んで回避しつつ、地面を蹴って跳躍し、集団にいた地底人の頭部に蹴りを叩き込んでから着地し、正面にいた地底人に向け、起き上がる反動を利用してアッパーを繰り出す。衝撃で天井の橋が崩れ、なのはは上に跳んで幹線道路の上に着地するが、それを追って地底人も跳躍してくる。
　四方から次々と地底人が襲い掛かり、それを拳を叩き込んで一体ずつ片付けていくが、無限のように襲い掛かる地底人に終わりは無く、次に三方向から同時に拳を振り下ろしてくる。それを頭上に腕をクロスさせて耐える。衝撃で道路が崩れるが、なのははガードしつつも三体の地底人の足を払って、蹴りで三体を纏めてから拳を叩き込ん

だ。それで地底人は遠くの柱にぶち当たり、絶命する。
だが、思い切り腕を振り抜いた為に隙が生まれてしまい、その隙を突いて一際巨体の地底人が地面ごとなのはに拳を繰り出す。さすがに耐え切れずに吹き飛ばされて、遠くまで飛ばされてから巨大な爆発が起こった。
激しい戦闘の末に、辺りが火の海に包まれた大地にて、巨大な地底人が次々と地中から這い出てくる。
「……終わったか？」
「何者だったんだ……あの地上人は」
地底人たちは爆発を直撃させ、息の根を止めたと思ったなのはの事に驚愕を表すが、それもつかの間、マグマと化した地面から現れるなのはの姿がある。
「私は……趣味で魔導師をやっている者なの。――地上は……私が守るッ!!」
胸に拳を当てて、宣言する。それに地底人が激昂し、全員が一斉に襲い掛かる。が、人間大の大きさの地底人は一気に吹き飛ばされ、なのはは巨大な地底人の集団に向けて跳躍し、拳を繰り出す。
そう、これだ。久しく忘れていた。この戦いの昂揚感。それを全身で感じつつ、なのはは地底人たちを一掃していった。
やがて倒れ伏す地底人の亡骸で地面が多い尽くされて、その山の上で激しく呼吸する。本気での闘争を繰り広げ、体力がひどく消耗しているが、心が満たされる。その表情にはもう無気力さなど存在しなかった。
だが、一息するのもつかの間、大地を震わすほどの声が響くと同時に、地中から今までとは比にならない巨大な怪人が現れる。
「どうやら息子たちがずいぶんと世話になっているようじゃないか――この地底王が、相手をしてやる!!」
気だけで分かってしまうほどの強敵。自分よりもしかしたら強い存在かもと感じてしまう程の相手が現れるが、上等だ。これが――。
「これが――私の求めていた――」

◇

ジリリリリリリリリリリリリリ――。

目覚まし時計がけたたましく鳴り、なのははそれを拳で止めて、目を開いて見慣れた天井を見る。瞬きを数回する。朝日がカーテンから漏れ、電線にとまったスズメがチュンチュンと鳴いているのが聞こえる。

いつも通りの、廃棄都市の静けさ。爆発音も地鳴りも無い。

完全に夢を見ていただけである。呆然と天井を見て、なのはは改めて思った。自分が昂揚感を感じることはもう無いかも知れないと。

――私は強くなりすぎた。

第０２話

――小さい頃の自分は泣き虫で臆病で、弱い人間だった。嫌なこと、辛いこと、痛いのから逃げてばっかりだった。

新暦〇〇七一年。ミッドチルダ臨海第八空港にて大火災が発生し、子供だった自分はそれに巻き込まれた。家族と離れてしまい、気付けば辺りは火の海であった。ひたすら炎が広がっていない方へ歩いてきたが、それもエントランスにて行き止まりとなってしまった。更に背後の道が爆発し、吹き飛ばされる。膝や顔を擦りむいてしまい、酷く痛い。

徐々に炎が迫ってくる。逃げ道など無い。あふれ出す涙が止まらない。自分はここで死ぬのかと思ってしまった。

そんな自分に、背後の像が崩れて自分目掛けて倒れてくる。避けられない。もう終わりかと思った瞬間――。

突然像が木っ端微塵に破壊される。

何が起こったのか理解出来ない。ただ、自分の目の前に人が現れて、像が跡形も無く壊れたというだけ。目の前に現れた人物を見ると、その人は白いバリアジャケットに身を包んだ女性だった。長い髪をサイドテールにしたのが特徴。その右腕は斜め上に掲げられており、握ってある拳からかすかに煙が残っている。拳で像を破壊したのだろう。

その人は腕を下げてから此方に振り返り、自分の顔を見る。その人は、自分の身体を抱える。すると上を向いてから、ゆっくりと膝を曲げる。

「今すぐ安全な所に移動するから、少しだけ歯食い縛って我慢して」

その人の言うとおりに従い、歯を食い縛ってから頷く。するとその人は地面を蹴って跳躍すると、そのまま天井目掛けて飛んだ。当然コンクリートの天井が迫るが、その人は空いている腕で拳を作ると、その拳を天井に突き刺す。それだけで天井が粉砕された。破片などは

防御魔法を展開してくれていたので当たることは無く、そのまま空港の上空まで飛んでいった。
その時見た綺麗な夜空と、そして助けてくれた女性の人が、とても眩しくて。
だから、私は生まれて初めて心から思った。泣いているだけなのも、何も出来ないのも、もう嫌だ。
――強くなるんだ。

◇

――新暦〇〇七五年、四月。
風を全身で受けるように、廃ビルの屋上の端で深呼吸しながらそれを感じる。少し風が強いと感じるがこの程度なら自分の機動力に大した影響は出ない為、問題ない。既に装備しているバリアジャケットも問題なく、身体にフィットして自分の動きを全快で引き出せるようになっている。足に装備したローラーブーツの履き心地も問題ない。風を受けつつ、右手で拳を作りその腕についたアームドデバイス【リボルバーナックル】を見る。全体的に黒く、リボルバーのように回転するパーツが特徴のデバイスは母の形見であり、ここ数年自分を戦いと訓練で支えてきたデバイスだ。
時間を確認する。もうじき指定された時刻に迫るが、別段不安になる訳でもない。既に情報はパートナーが集め、そして分析も終わっている。その結果、今の自分達であれば問題ないということが分かっている。故にこの場所――管理局訓練用として確保されている廃棄都市区域で行われる魔導師試験に一緒に参加するパートナーに視線を向ける。
オレンジ色の髪を頭頂部で二つに結っており、その手には拳銃型のストレージデバイス【アンカーガン】を持ち、その軽いメンテナンスを行っている。彼女も既に白とバリアジャケットを装備し、カートリッジの薬莢を確認している。彼女がここ数年での自分の親友でパートナーとなった仲であり、彼女が頭脳で、自分が動くという役割

のコンビネーションで幾つもの場を乗り越えてきた。彼女と自分が揃って試験に受けられるという心強い気持ちがありつつも、自分ももう一度調子を見る為に身体を動かしていく。

身体をあたためる様に拳を左右交互に繰り出してから、足に装備されたローラーブーツでステップを取る。このステップに慣れるのもかなり時間がかかった。このローラーブーツを装備した理由は機動力の向上であるが、これを履いた状態での細かいステップはかなり難しい。これをパートナーに初めて見せた時はそれはもう訝しげな視線を向けられたのは言うまでもない。

すると――。

「……スバル。あんまり暴れるとそのローラー壊れるわよ。元々オンボロなんだから、本番に故障したらどうするのよ」

「ちょ、ティアー。そんな不吉な事言わないでよ。ちゃんと油差してきたから試験終了まで問題ないって」

「油差せば壊れないって訳じゃないわよ。メンテくらいちゃんとしなさいよ」

ティア――ティアナ・ランスターに言われ、自分――スバル・ナカジマは苦笑いを返す。確かにメンテナンスはしっかり行いたいところなのだが、訓練校の入学前から使っている装備であり、なにより機械式である。自分達では技術力が足らず大規模なオーバーホールが出来ないし、そんな事をデバイス工房に頼むお金も無い。だから時折貯めた金で細かいパーツを交換するくらいしか出来ないのだ。

コンディションも整えたところで、互いに顔を見やる。調子については悪くない。故に問題は一切ない。軽くストレッチしてから、ビルの屋上にある中心部へと移動する。

『――おはようございます。魔導師試験受験者二名、揃ってますかー？』

空にホロウインドウが出現し、そしてその中に女性が映し出される。その言葉に腹から声を出すようにはっきりと返事をすると、女性はうんうんと頷く。

『元気があるのは良い事だと思います。でもそれだけなら誰にだって

出来るのですよ。肝心なのはその元気に見合った実力を証明することです。という訳で改めて、今回の試験の試験官をやらせていただくリインフォース・ツヴァイ空曹長です。貴女たちをスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士と確認します。今回受ける試験内容が、陸戦CランクからBランクへの昇格という内容で間違い無いですか？』

「はい！」

「間違いありません！」

『はい。では試験内容を確認しますね』

ツヴァイがホロウインドウを更に出現させ、そこに様々なターゲットを表示させる。

『小型の浮遊砲台型ターゲット、そして攻撃能力の無いエネミーマークのついた人型ターゲット、姿だけは一緒で攻撃してはいけないダミーターゲット、そして最後に中型浮遊砲台型ターゲット。以上四種類のターゲットがここ廃棄都市の試験用区間に設置されているですよー。ターゲットを撃破する事で点数が入り、ゴール時の残りタイムで点数が加算されます。――でも、こんな言い方をするのはあれですけど、普通の動きをされても高評価を得られないと思って下さいねー。試験内容をどれだけ優秀な動きでクリアするか、それを見ていると思って下さい』

と。予め調べていた情報とツヴァイからの話を聞いて試験のルールを確認し直す。ゴール時点も前々から確認していた場所だ。そこに齟齬はないので問題ない。

『では説明は以上です。何か質問はないですか？　あ、因みにとりあえず何か聞かなきゃ心証が下がるとかそういう古臭い考えは無いので、何も無ければ無いでいいですよー？』

「えと……」

自分だけでは細かい点には気付けないので、目線だけティアナに向ける。彼女としても特に何も無かったようで、はっきりとありませんと答えるので自分も同様に声をあげた。言うとツヴァイは最後に頑張ってと一言残し、ホロウインドウが消失する。他のウインドウも同

様であり、代わりに出現するのはカウントダウンを示すタイマーだった。三秒前を示すそれが出現した瞬間、思考が全てこれから行う事を最適化する為に切り替える。

カウントが三秒前になる。ティアナに視線を向けると完全にスイッチを切り替えているのが確認できる。屈んでいつでも走り出せるようにして、カウントを待つ。二秒、一秒となり、軽く力をほぐして無駄な力を抜く。力を抜きすぎても駄目であり、大事なのはバランスである。どんな状況でも精神を落ち着かせ、冷静な判断と思考をし続けなければならない。

スタートダッシュをする為術式を展開する。ティアナもアンカーガンをほどよく握っている。問題ない。

カウントが終了する。

同時にローラーブーツを走らせてロケットスタートする。ティアナは打ち合わせ通りに背に乗り、それを腕で固定しながらビルから勢いよく飛び降りる。ティアナは既にアンカーガンからその名のとおりアンカーを射出して適当なビルの上に固定し、振り子のようにして移動する。同時に此方はビルの中に固定されたターゲットを殲滅する為に、勢いをつけて窓を突き破り、此方が認識される前にターゲットを破壊し、床に着地と同時に勢いを利用して回転することで次の行動に繋げる。回転しながら地面を蹴ることで、回し蹴りを部屋の端にいたターゲットに命中させ、粉砕する。

そのまま部屋を出て中央の通路をローラーで走らせる。すると遠くのエントランスでターゲットを数個確認する。調べていた情報通りだ。この試験は事前に調べようと思えば細かいところまで情報を集めることが出来る。情報が開示されているのだ。それはBランクの試験内容はターゲットの破壊をどれだけ効率的に行えるか、という所にある。つまり事前に情報収集し、把握することも試験内容に含まれており、評価対象になっているのだ。

はっきり言えば自分はこの事に気付けなかったが、そこは頭が回るパートナーのお陰で何とかなっている。だから自分はティアナから得た情報を頭に叩き込み、そして打ち合わせ通りに完璧に行動する。

それが役目である。
そうすれば、躓く理由など存在しない。
ターゲットは全部で一五程度、うち一〇基ほど砲撃形であり、魔道障壁を展開するタイプである。こちらの姿を確認する事によって障壁を展開する特性を持つ為、真っ直ぐ突撃を仕掛ける此方に気付いて既に障壁を展開している。遠距離から確認される前に破壊する技もあるが、それは射撃に特化したティアナの役目だ。自分は中距離からの射撃、並びに近づいて殴ることしか出来ない。故に、構わず突っ込む。
やる事は一つ。障壁ごと吹き飛ばして破壊する。リボルバーナックルに魔力を集中し、同時にカートリッジを装填する。すると拳に魔力弾【バレットシェル】が形成され、それを射程距離まで近づいた所で放つ。拡散性能を持つそれはターゲットを全て破壊する事に成功し、他にターゲットが無いことを確認してからその場を去る。
ビルから出て合流地点に着くと、予定通りにティアナも合流して立ち止まることなく先へと進む。迷う事無く背に乗ってくるティアナを腕で支えてからローラーブーツを全快で走らせて、次のターゲットが集まる幹線道路の方へと向かっていく。
背でティアナがアンカーガンを構えて遠くにあるターゲットを狙撃しつつ、橋の横の地点にアンカーを固定して背から離れると同時に安定して着地する。それに合わせるように機動力を生かしてティアナの周囲のターゲットを破壊し、勢いを殺す為にコンクリートの柱に垂直に着地してから跳躍するようにして回し蹴りをターゲットにぶち込む。勢いはそこで止まり、一瞬の隙が生まれるがティアナが直ぐ様援護した為ミスは無い。全て予定通りだ。
このまま幹線道路を進み、ターゲットを破壊していく。基本的に自分が敵陣に突っ込み、囮となってティアナに撃墜して貰う。通常なら危険極まりない荒業であるが、相手は機械だ。此方が微かに身体を動かすことによって回避できる故に、攻撃を避ける事も迎撃する事も容易い。だから組み立てた方程式を解くように一番荒業で効率が良い事を実行できる。

崩れた道路等の遮蔽物を利用しつつ一気に殲滅する。自分がクリアリングをしながら、ティアナはホロウインドウを出現させて時間を確認する。時間にはまだ余裕があると告げられ、一度深呼吸を行う。余裕があるといってもゆっくりするつもりは無い。幹線道路は二層になっており、この上の道路には一〇程度のターゲットが待ち構えている。普通に進めば集中砲火を食らうことになる。

「さて、打ち合わせ通りにいくわよ」

「頼もしいティアのお陰でこっちも落ち着けるよ」

冗談混じりに言葉を返しつつ、ティアナがアンカーガンにカートリッジをリロードして仕舞うと同時にアイコンタクトをしてくる。それに頷いて答えつつ幹線道路から飛び、ビルの壁を蹴る事によって上層へと移動する。一直線に伸びる道路の向こうにはターゲットがある。このまま進めば集中砲火を浴びて殆どの受験者は落ちるが――。

関係無しにローラーブーツを全快で走らせて突っ込んで行く。

当然砲台ターゲットが砲撃を放って来るが、機会的な砲撃など自分の脅威にすらならない。少なくとも此方が接近するのみであれば先ず当たることは無い。ステップを挟みつつ砲撃を避けながらリボルバーナックルにカートリッジを装填する。先ほどと同様に中距離拡散砲撃を浴びせる為だ。

スバルが正面から突撃するのに集中しているターゲットの隙を突き、ティアナは道に空いた穴から上層に上り、ターゲットの密集地点の背後に回る事に成功する。が、それに何基か気付いて砲撃を放ってくるが、横に身体を転がしながら瓦礫の背後に回って回避する。その間に魔力を集中し、マルチモードに切り替える。

タイミングを合わせ、発動する。

スバルが拡散砲を放ってターゲットの殆どを撃破し、残りのターゲットをティアナが狙撃して撃破する。クリアリングをしつつ、時間を確認する。予定通りだ。

「残りは中型浮遊砲台型ね」

確認する為にティアナが言葉を零す。スバルがそれに頷いた後にティアナが足に強化魔法をかけて、幹線道路を駆ける。上の道路が途切れ、空が露になることで高い位置から二人の姿を確認出来るようになる。となれば中距浮遊砲台の射程範囲内に入っている為、一角のビルから巨大な砲撃が飛んでくる。誘導弾であるが故に、確実に此方を当てに来てるが、即座にティアナの前に出て、そして砲撃を拳で打撃する。拳に相殺され砲撃は消える。

事前に調べた為に、次の砲撃が放たれるまでの秒読みも完璧に頭に叩き込んでいる。相手が攻撃した為位置は特定した。故にティアナは魔力弾を銃口に形成し、弾丸を射出する。するとターゲットに命中した爆発音が聞こえるが、まだ中破といった所だ。だが砲撃の秒読みを伸ばすことには成功した。故に後はトドメを指すだけである。ウイングロードと呼ばれる、魔力で構築した道を展開し、それをターゲットがいるビルまで一直線に結ぶ。

ローラーブーツを全快で走らせ、リボルバーナックルのカートリッジを装填する。砲撃によって壁は破壊され、障壁を展開出来ない砲台の姿が見える。なら一撃を打ち込むだけだ。魔力強化した拳をターゲットに叩き込み、轟沈する。直ぐ様踵を反して幹線道路を真っ直ぐ走るティアナに向けてウイングロードを展開して、合流する。

最初と同様に此方の背に乗るティアナを腕で固定して、そのままゴールまで突っ走る。ゴール前の最後のターゲットをティアナが狙撃して、全てのターゲットを撃破する。徐々にスピードを落として、ゴールイン。到着してティアナがスバルから降り、ハイタッチを決めると、試験官のツヴァイが近寄ってくる。

「終了です。お疲れ様でしたー」

「「ちっさ」」

ホロウインドウで見た時には普通の女性だと思っていたので、事実を目の当たりにすると驚愕を隠せない。思わずツヴァイの姿を見て同時に呟いてしまう二人。幸い相手には聞こえていないようだった。近づくツヴァイに姿勢を正し、緊張と共に姿を見る。

「ターゲット全基撃破。タイムも良好。監視スフィアで動きも見てい

ましたが、荒削りなものの、非常に効率の良い動きをしていました。個人的感想を述べると、間違いなく合格には十分だと思う結果です」

その言葉にスバルは笑みを浮かべ、ガッツポーズする。ティアナも少しだけにやけていたが、自分が飛び跳ねたりして嬉しさを表していると、冷静になったようで、直ぐにいつもの表情に戻り、溜息を吐いた。

第０３話

「――――さてと、突然ですまんなー」
「いえ……」
　自分の記憶が正しければ、自分達はランク昇格試験を受けたはずだ。そして結果は考えられる限り最高の結果だった。ミスはしなかったし、問題は起こさなかった。問題なのは今の状況だ。ガラスのテーブルを挟んで相対するのは現在の管理局でもかなりの有名人、現在大活躍中のエース。茶髪のショートの女性、八神はやて。その実力と経歴は見る者を認めさせるしかないものであり、歩くロストロギアと呼ばれている程の人物だ。彼女の肩の上の小さな存在がリインフォース・ツヴァイでユニゾン型デバイス、今回の試験を受け持ったのが彼女だ。
　丁寧にコーヒーを入れてくれて、それを自分とティアナの前に出してくれる。それに礼を言うとはやてはコップを手に取りコーヒーを一口飲む。それに合わせて自分もコーヒーを飲んだ。こういうのは相手に合わせたタイミングで一口飲むのが一番礼儀が良いと思っている。飲み終わってから一息つき、はやてが自分達を呼んだ理由を説明してくれた。一つ一つの説明を頭で整理しながら聞いていく。
「――――っと、そういう訳で私としては二人を私が設立する部隊に来て貰いたいと思ってるんよ」
「正式名称は古代遺物管理部・機動六課。古代遺物、つまり主な業務内容はロストロギアの探索と確保です。と、言っても探索が任務内容では無いので見つかったら確保しに行く感じになります。二人にとっては部隊に入ることによって経験は勿論、昇格への近道にもなるです。悪い条件は無いと思いますが、どうですか？　何か疑問があれば質問に答えますよー？」
　ツヴァイが補足しながら説明を引き継いでくれる。スカウト。それが今、自分達が受けているものだ。それも八神はやて程の人物が設

立しようとしているものにだ。まず間違いなく多くの経験と昇格をするためのチャンスだ。それに関しては全く疑う必要は無い。ただそこには色々と情報が抜けていると自分でも感じる。
　隣のティアナに視線だけ向けると、彼女も疑問を浮かんでいるのが分かる。
「八神二等陸佐」
「なんや？」
　ティアナが視線を真っ直ぐはやてに向けてから、ふぅと軽く息を整えてから、口を開く。
「では質問させていただきます。古代遺物を確保する為の部隊とお聞きしますが、正直な話それに対して我々をスカウトする意味が解りません。私達は八神二等陸佐とはあまりにも実力が離れ、足手まといも良いところです」
「そんな事ないで？　未来の貴重な戦力を迎えてもこっちには損は無いんよ」
　はやてが笑みを浮かべつつ答えるが、ですがと言葉を挟んでから言葉を続ける。
「八神陸佐の事については自分達も色々と知っています。そして調べました。八神陸佐にはヴォルケンリッターという強大な戦力を個人保有しています。それを己の部隊から外す理由が見つかりません。その時点で一部隊で保有できる戦力としては十分です。それにわざわざ自分達をスカウトする理由が不明だと思います」
　ティアナが言うように、そんなエリート部隊にわざわざ自分達を迎える理由が見つからない。確かに自分個人と、ティアナの評価をするならば、才能はあるほうだと思う。自己評価を認識することは、自分には何が出来るのかと認識するためには先ず大事な事だ。それに己が出来ることを把握できていれば、状況判断。分析。それら必要なものが把握できる。だから自己評価は正確に認識しなければならない。下手な謙遜など不要だ。だが確実に発展途中の魔導師だ。
　部隊に引き込んだとすれば、部隊に入ってからの成長という事で部隊の強化が行える。それが理由だとしても――――。

はやてが設立する部隊には、恐らく管理局執務官、そしてエース・オブ・エースのフェイト・T・ハラオウンも入隊すると考えられる。そうなれば部隊の保有としては確実に過剰なレベルだ。その旨を伝えた上で、ティアナは正確な任務と業務内容を伝えてくれないとスカウトには自分共々答えられないと宣言し、自分もそれに答える。

自分には細かい、高いレベルの交渉など行えない。考えが直ぐに表情に出てしまうからだ。だからティアナに任せて、自分は頭を整理しつつなるべく言葉を口に出さない。此方がある程度強気に出ないと、交渉を対等に行えないと考えているのだ。そうしてはやての反応を待ち、相手が笑みを浮かべる。

「成る程なぁ……。調べた通りに、ランスター二等陸士はなかなか賢いなぁ。それに黙って思考整理しているナカジマ二等陸士も流石や。目をつけただけはある。十分やね」

はやての言葉から理解するに、これも試されてやられていたのだろうと確信する。相手が部隊を指揮する立場なので部下になるかもしれない人間は試しておきたい所だ。はやては一度コーヒーを一口飲んでからテーブルに置き、口を開く。

「なら試すんはここまでや。ここからは正直に話すで」

情報を整理しつつ、話を聞く。はやての話からは自分達が保有する戦力だけではせいぜい部隊の手伝い程度しか出来ないと思い、いざという時に行動できる自分たちの部隊を設立し、目的を確実に達成したい。それがざっくりと話した内容だ。その目的とは何なのかとティアナは質問をするが、はやてはそれに平和への貢献と答える。ティアナは呆れそうになるのを堪え、具体的にと話す。

「最初に言ったように、私たち機動六課の目的はロストロギアの確保って言ーたけど、そのロストロギアが結構大変な代物でな。ここだけの話、うちらが集めるロストロギアは悪意ある誰かが狙っている代物なんよ。つまりこのロストロギアを追うことは、この犯人に確実に近づく事になる。既に相手の戦力と衝突している現状や。だから、戦力はなるべく多く保有したい。それが戦力の過剰保有の理由や」

その説明を聞き、自分の思う疑問は粗方片付いたように思える。そ

のロストロギアの事、既に起こっている事件の詳細なども聞かねばならないが、それは部隊に入ってからでないと知ることは難しいだろう。ティアナも思考を固めている最中だ。
ここで仮に部隊に入ることになれば、それは普通に陸士部隊にいるよりも確実に前に進める。それは確かなんだ。
「……まあ、ここで決めてと言われても無理な話や。また改めて答えを聞かせてな」
はやての言葉を合図に、交渉の場は幕を閉じ、次にツヴァイから試験の結果を告げられる。合格の通知だったので安堵出来た。

◇

広場にある休憩スペースに足を運び、全身の力を抜くように溜息を吐いた、やはり自分にはあのような頭を使う場は合っていない。少しでも油断すると話に付いていけなくなる。その様子を隣で見るティアナは依然として難しい表情を浮かべていた。彼女の中ではまだはやての言う内容に気がかりを感じているのだろう。
確かにはやての言葉にはまだ明かされていない思惑があるのは確実だ。機動六課事態も怪しさ抜群である。まだ自分だけの部隊を作ってドンパチしたいと言われた方が楽に思考できた。
広場の一角にあるベンチにティアナが腰を下ろし、自分が自販機に向かって飲み物を買ってくる。それをティアナに渡すとありがとうと礼を言われてから自分もベンチに腰掛けて、買った炭酸飲料を飲む。スカッとしてそれが脳を刺激するように爽快感を与える。これで少しは疲労が取れた気がする。
「八神陸佐が作る部隊、機動六課。ティアはどうする？　確かにまだ不審な点は残っているけど」
「……そこなのよねぇ……。明らかに情報が不足している。信用するには情報が抜けている。はっきり言って信用して身を置くには不安要素が在り過ぎるわ」
溜息を吐いて、ティアナが顔を手で覆って軽く俯く。たまに情緒不

安定になるのがティアナの悪い所だ。その点については自分も心配しているところだが、まあ、いつもの事として無視することにした。
八神はやてとフェイト・T・ハラオウン。彼女らはかれこれ十年ほど前から管理局に所属する魔導師であり、子供の頃から高い魔力を保有する人物として有名である。フェイトに関しては過去に大きな事件を幾つも解決していることから、若手ナンバーワンとしてエース・オブ・エースの称号を得ている。
自分が彼女達の事を調べたのは、彼女達が過去に起こった四年前の事件。空港で起こった火災の時に彼女達が緊急出動したからだ。だから彼女達を調べれば、自分を助けたあの魔導師について何か分かるかと思ったのだが、管理局の公開データベースには魔導師の手がかりは一切載っていなかったのだ。
ジュースを飲んで思考を切り変えつつ、改めて今回のスカウトについて考える。もし部隊に入ってはやてやフェイトと接する機会が増えれば、彼女達の口から直接その事に付いて何か手がかりが掴めるかもしれない。そう思ったからこそ、自分は既に入る方向で思考を固めている。
だが、ティアナは別だ。ティアナは用心深く、ましてや相手が有利に進めるこのスカウトに素直に受けるとは考え辛い。確かに昇格への近道であり、執務官として有名であるフェイトにも直接指導しても貰える機会もある。入っていて損は無い。
だが、リスクは大きい。
「……あんたは入るんでしょ？　調べていた本人たちに近づくチャンスなんだし」
「まあね。ティアは難しい感じ？」
「ええ。入るにしても情報よ。それが全てだわ」
ベンチの背に寄りかかり、空を見上げてからティアナは言葉を話す。それを顔をニヤつかせながら見ると、何よと訝しげにこちらに視線を送って来る。
「でもティア、内心フェイトさんにライバル意識向けているでしょ。負けず嫌いだもんねー、付き合い長いから大体分かるよー」

からかう様に言うと、ピクリと頬を強張らせたティアナが静かに自分の肩の皮膚を掴むと、それを引っ張ってつねる。結構痛いため、軽くオーバーリアクション気味に反応すると手を離す。
「まあ良いわ。これ以上情報を探ろうにも出てきそうにも無いしね。あんたが入るってなら、入ってやろうじゃない。どうせ私は何処にいたってあんたとコンビ扱いされるんだし」
「うん！　だからティア愛してる！」
「はいはい」
リアクションを取りやすいように喜ぶと、ティアナはいつもの如く軽く流してから、缶に残るジュースを飲み干す。それに合わせて自分も飲み干し、二人でベンチから腰を上げて自販機の隣に設置された回収ボックスに入れる。
悩むのも程ほどにして置かなくてはならないと、ティアナも思ったのだろう。結論として、この世界はなるようにしかならない事ばかりなのだ。いくら思考を巡らそうが、結果がどうなるかなんて確実に当てられるはずも無い。そこそこにしておくのが一番だ。自分達は未熟と思考を補完しておく。
「何か食べにでも行きましょうか」
「え、ティア奢ってくれるの？」
「あんたに食事奢ったら、私の財布はおろか、口座から金を下ろすことになるわ」
軽くティアのローキックを受けつつ、その場を後にした。

◇

窓から見える中庭の広場。そこでスバルとティアナの様子を見て部隊の加入確定だなと思いつつ、計画通りに進んでいることに安堵しておく。すこし強引だったかも知れないが、折角見つけた原石を手放したくは無かったのが事実。教導官であるヴィータに任せれば立派に育つことだろう。
「いやー、でも年下を騙すようでやっぱり良い気分せーへんなー。

もっと本音で話せて説得出来ればいいんやけどなぁ……」
　ソファに体重を預けながらぼやくようにして言葉を零す。だが、それが愚かで子供だと言う事は数年前に叩き込まれたことだ。自分に交渉と仕事での効率など様々な知識と経験を積ませて貰ったゲンヤ・ナカジマに教わった事だ。彼から見れば、はやての交渉などヒヨッコと言われても仕方が無いだろう。
　しかし、ティアナ・ランスターは情報通りに中々鋭いのは確かだが、スバル・ナカジマのほうも、ゲンヤの娘だからだろうか、内心では結構鋭い思考と判断をしていたのに気付いた。双方ともに優秀な人材だ。それが確保できたとして、今は安堵しておこう。
　これで残る枠は二人。その二人はフェイトのほうの紹介であり、現在任務中のフェイトに変わってシグナムが迎えに行っている。あの二人とは違ってこちらは部隊に加入することが確定しているのでいずれにせよ心配は無い。
　さてとと声を漏らしつつ、ソファから腰を上げる。昼飯でも食べに行くかと思った矢先に、一仕事終えたツヴァイが此方に寄ってくる。
「お疲れ様です、はやてちゃん。今フェイトさんから報告があって、ガジェットドローンのその三型に当たる機体が発見されたそうです。どうやら外観が大きく、ＡＭＦの範囲も一型、二型より広く、攻撃防御ともに飛躍的に増大していると。これはデータでも残してくれましたから、後で細かく分析しておくです。――――あ、ちなみにフェイトさんはこれを初撃一振りで終了させたそうです」
「ん、了解や。相変わらずフェイトちゃんは規格外やね。何処かの誰かと比べたら可愛い方やけど」
　昼飯を食べたらまた溜まっている仕事を片付けなくてはならないなと思いつつ、休憩モードにギアチェンジをして食堂に向かうのだった。

第０４話

古代遺物管理部機動六課。通称機動六課が正式に設立した事により、今まで自分達の使っていた寮から引越しする必要が出来た。なぜなら機動六課には専用の隊舎と寮が与えられているからだ。普通ならば新設の部隊にそう簡単に隊舎が与えられる事なんて無い。これに関しては協力してくれた義兄クロノと、聖王協会代表である騎士カリムに感謝しなければならない。

内装を見て感嘆の声を漏らしつつ、見かける局員に挨拶していく。今日から自分と共にここで働く仲間になると思うと感慨深いと感じる。そう思いつつ、自分が使う部屋にまで来た為、早速部屋の状態を見る。新設とあってかなり綺麗な内装である事に軽く感動しつつ、予め準備をしていた転移魔法による引越しサービスに預けていた荷物を取り出し、予め生活品を詰めていたダンボールを部屋に置いていく。この転移魔法による引越しサービスは結構値段がかかる為、普通に車やトラックでの運送業者に頼んだ方が安くてメジャーだ。だが、この費用も六課持ちである為、はやてには悪いが活用させて貰おう。

荷物が全て部屋に置かれ、後は部屋の片付けをしたいところだが、今日は色々とやることが多く、一日を部屋の片付けの時間に回せない。何より設立初日なのだ。六課の皆や、地上本部並びに本局に赴いて挨拶と、これからについてのブリーフィング。そしてその他執務業務が残っている。片付けは深夜に帰ってから、もしくは最悪休日まで持ち越しとなるが仕方無い。今日一日のスケジュールの多さに溜息を吐きつつ、意識を切りかえる為に腕を組んで上に伸ばし、背を伸ばす。そして息を吐き出したところで深呼吸をしてから部屋を出た。

課長室は自分の部屋からそう遠くない所にある為、数歩歩いた先には課長――――八神はやての部屋がある。正しくははやてとツヴァイの部屋となるが。執務官の制服から陸士部隊の制服に着替えは済ませてある。扉の前で軽く服装を整えてからインターホンを鳴らすと、スピーカー越しにはやてがどうぞと案内してくる。失礼しますと声

をあげつつお辞儀をしてから入室すると、はやては別段身分関係無しに、友達としての関係で此方に歩み寄ってくる。
「フェイトちゃん、制服似合ってるなー。こうして同じ制服着るのも、中学校以来とちゃうか？」
「そうだね、はやて」
　互いに笑みを浮かべつつ言葉を返してから、同じく室内にいるツヴァイのほうへと顔を向ける。彼女ははやての机の横に置かれた専用のデスクの上で、恍惚とした表情を浮かべている。余程自分の専用の仕事場が用意されたことが嬉しいのだろう。確かに借りの仕事場ではツヴァイははやてたちが用意する専用の鞄の中でオフィスワークをしていたので、嬉しいのも理解出来る。
　直ぐに意識を戻し、フェイトのほうへ寄ってきてはやて同様に挨拶を交わす。そして改めて正式に上司と部下として挨拶してから、はやてやツヴァイと共に課長室から出る。この後は朝礼と共に設立の挨拶があるのでロビーへと向かい歩いていく。廊下を歩く途中で指揮系統の副官の立ち位置でもあるグリフィスと会い、握手を交わして挨拶を交わし合う。
　ロビーには既に六課の隊のメンバーと、バックヤードスタッフが姿勢を正して整列していた。その中にはスカウトした新人のスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター二等陸士が居る事を確認し、目線が合ったので軽く微笑みを返すと、お辞儀を返される。視線を変えて、もう二人の新人の姿を確認する。と、そこには小柄な少年と少女の姿がある。新人とは言っても、彼等は自分が保護責任をしている者であり、身内のような者だ。
　赤毛の少年がエリオ・モンディアル三等陸士。桃色の少女がキャロ・ル・ルシエ三等陸士。前線ではエリオがガードウィングで、キャロがフルバックを担当する事になる。彼等の真剣な眼差しや姿勢を見ると、どうも保護者として微笑ましく思ってしまう。だが、それはこの場では失礼に当たる為、軽く微笑むだけにしておく。エリオは軽く頬を緩ませたが、まだ子供故に仕方ない。
　ロビーの中央に、先ずはグリフィスが全員に整列をし直させてか

ら、はやてに話を移す。皆の前の中心にはやてが立つと、その横にフェイト、グリフィスが並び、そしてその更に横にヴォルケンリッターが控える。新人たちから見れば凄まじい顔ぶれだと思われるだろう。

一度気をつけと指示してから礼をして、休めと指示する。全員が半歩程足を開いたのを確認してから、はやては全体を見回すと笑みを浮かべて頷く。壇上に立ったはやてを機動六課に参加するメンバー全員が視線を向けている。誰もが一字一句逃さないように視線をはやてへと注ぎ、その言葉へと集中している。恐らくそれをはやては理解している。だから直ぐに言葉を喋る訳でもなく、ゆっくりと考える時間を与えるように短い時間を置き、口を開く。

「皆さん、おはようございます。私がこの隊の総隊長であり、課長の八神はやてです。この隊の正式名称は古代遺物管理機動六課。通称機動六課って私は呼んでます。この隊は古代遺物ロストロギアの確保を目的としている専門の部隊でありますが、これは私が前から思っていた迅速に行動できる部隊を理想として設立した部隊となります。ですが理想を掲げてばかりでは設立できなかったのもあり、その目的以外にも様々な思惑、本局の意向もあり、設備を融通して貰いました」

そこで一息つき、皆の表情を見る、中には表情を不安げに歪めている者も確認できる。しかし直ぐにそれも切り替わっていく。その様子に優秀なメンバーが揃ってくれた事にはやては感謝しつつ、言葉を続けた。

「でも、そう言った事情は皆には気にしないで欲しいと思うんよ。最高のバックヤードスタッフにフロントという、たった一年だけの夢の部隊、それが私達や。この試験運用の僅かな期間やけど、皆で良い結果残せるように一丸となって頑張っていきたいと思います。……と、あんまり長い話は嫌われるんで、この辺で終わりにします。――機動六課は本日より発足です、今日から頑張っていきましょう。気をつけ！」

言うと、皆が体勢を整えて礼をする。はやてが壇上で頭を下げて降りてから、全体での安全目標を復唱し、挨拶兼朝礼が終了する。同時

に周りが慌しく動き始める。それぞれの部隊へ、役割を果たす為に動き始める。新人達へと目線を向けると、既に四人集まっている所にヴィータが歩み寄る。基本的に新人達は出動がなければ訓練というのが平時における日常だ。主に教導官であるヴィータが指導するが、たまに自分も直接指導しようと考えている。

だが、今はやるべきことがある。一度書類を取りにオフィスへと向かう中、シグナムと共に廊下を進む。

「こうして一緒の部隊で働くのは久しぶりだな、テスタロッサ」

「そうですね。最後に一緒の任務になったのは、半年ほど前でしたよね」

「ああ、確かそうだな。……しかし、お前には驚かされるな。子供の頃から既に剣士として輝くものを魅せていたが、それが今では剣術の達人とはな。一角の強さでは私を超している」

「いえ、そんな……」

確かにシグナムの言うように、自分はあれからトレーニングとシグナムからの指導を元に鍛錬を続けた結果、一つの強さを極めることにした。それが遠距離攻撃を捨て、速さと大剣による一撃にのみ集中した、言わば一撃必殺型の剣士として確立することだった。自分の最大の武器である速さを生かし、バルディッシュを常に大型のザンバー状態にしておくことで、大抵の敵ならば横一閃の一撃で終わらせることが出来る。昔シグナムが教えてくれた【斬れる範囲まで接近して斬る】という戦術を極めたものである。

だが、シグナムもフェイトに劣らずの剣戟である。一意専心という心構えは勿論、初撃で仕留められ無かった場合のトドメの一撃に長けているのが、現在のシグナムだ。シグナムと戦うことになれば、恐らく自分は負けてしまうだろう。初撃で仕留められなければ自分が負けるからだ。そしてシグナムには初撃で仕留められないと気だけで察せる。

「そういえば、六課ではお前が上司、私が部下だったな。呼び捨てや【お前】と呼ぶ訳にはいかんな。ハラオウン執務官と呼び、敬語にしたほうがいいかな？」

「そ、そんな意地悪は止めてください。良いですよ、普通で、お前で」
「うむ。そうさせて貰おう」
シグナムと共に事務室へと着き、彼女はオフィスワークの仕事をする為にデスクに座る。自分も机に仕舞った書類を出して、ファイルを確認する。ちゃんと必要な書類が入っていることを確認して、それを鞄に入れてから、連絡事項を書く為に用意された立体ディスプレイの前で足を止める。そこには役職を持つ者の名が書かれており、何処か出回った時に等ここに行き先を書いたりする。自分の名前のところに地上本部・本局と書き込んで確定する。はやての名前を見ると、そこには既に自分と同じく地上本部・本局と書かれていた。
事務室から出て、外にある自分の車へと向かう。既にはやてとは駐車場前で待ち合わせしている為、軽く急ぎ目に廊下を歩く。既にバックヤードスタッフが仕事をしているのを見てお疲れ様と声をかけながら、隊舎から外へ出る。するとそこには既にはやてが立体ディスプレイで確認作業をしながら待っている。
「ごめん、待たせたかな」
「いや、私も今さっき来たところや」
そう言ってはやてと共に自分の車へと向かう。そこには黒いボディのスポーツカータイプの車両がある。緊急車両の役目もある為、かなり速い車を選んだのだ。鍵を開け、はやてと共に乗り込む。エンジンをかけて車両を走らせる。魔力エンジンで走らせるために音が静かなのが特徴である。
隊舎の敷地から出て、幹線道路へと合流して首都クラナガンへと向かう。するとはやてが助手席で窓の外を見ながら口を開いた。
「それにしても、結局なのはちゃんを六課に誘えんかったなぁ……」
「仕方無いよ。なのは、肩身狭いのと責任持つことが嫌いだから。嘱託でも嫌だってはっきり断られちゃったしね」
苦笑いし、そう答える。はやてとしては機動六課に高町なのはを迎えることで完成と思っていたが、そのなのはが局入りを断った以上無理強いは出来ない。最終切り札のカードとして温存できなかったのが本当に悔しいようで、溜息を吐いた。

「……やしかし、なのはちゃん今頃何してるんかなぁ。ちゃんとご飯食べてるんやろか……」
なのはの生活がきちんとしているかの心配をしつつ、はやては窓の外を眺めて言った。

◇

「――――新人共、揃ってんな」
声に呼ばれて、その主を見れば先ほどまで副官の傍にいたヴォルケンリッターの一人、ヴィータが機動六課の制服姿で近づいてくる。素早く敬礼しようとすると、軽く敬礼を返しつつ、こちらに寄って来る。
「あたしはそう言った形式ぶったもんは苦手だから、あたしの前では基本的に楽にして構わねぇ。だがしっかりする時は礼儀ちゃんとしろよ。あ、それと一時間後に早速訓練開始すっから、荷解きするなり訓練用の服装に着替えるなりポジションの確認するなり、いろいろ準備しとけ」
その言葉に声張って返事を済ませてから、各々準備を済ませに行った。

第０５話

一度更衣室にて訓練用の動きやすい服装に着替えてからティアナ、エリオとキャロと合流し、素早く隊舎の裏手の湾岸方面に出る。細い通路が湾の上へと続いており、そこには人工島のような空間が見える。この広い空間で、普通に訓練するには良さそうな場所が見える。しかし遮蔽物は何も無い為、この訓練場では様々な状況下での訓練は出来ないだろうなと判断する。ただの平面では基本の動きしか訓練出来ないからだ。

並んで走り、海上の道へと降りる階段の手前――――訓練場らしき場所の入り口が見えてくると、既にそこにはヴィータが教導官の制服姿でその場に立っている。その横には技術官らしき人物が居て、ヴィータと何か会話をしていた。その技術官の傍にあるケースの上に自分達のデバイスが置かれてある。着替える前に預けたのだ。

ヴィータは此方へやって来て構える自分達を見渡し、そして頷いてくる。

「皆揃ってるな。遅れたら少し指導しなきゃいけないところだったが、そこまでトーシロじゃねーか」

ヴィータは言って此方を見ると、ケースの上に置かれたデバイスを此方に返してくる。エリオとキャロは待機中のデバイス故に小型だが、自分とティアナの場合は形そのままである為、ティアナはともかく自分のデバイスは少しばかり持ち運びが大変だ。その為普段は装備したまま行動する。

「とりあえず始める前に紹介だ。こっちはお前らのデバイスのメンテやデータ取りをしてくれるシャーリーだ」

そう言われ茶髪ロングで眼鏡が特徴の女性が笑顔と共に挨拶してくる。

「通信士とメカニックを兼任しているシャリオ・フィニーノ等陸士です。皆からはシャーリーって呼ばれているので皆さんもそうお願いしますね」

そう言ってウインクを送ってくる彼女に明るい印象を持ちつつ、視線をヴィータへと移す。余り畏まる必要は無いと言われても、相手は文字通り次元の違う相手だ。見た目に反して歳も実力も階級も、全てにおいて格上の人物。内心少しだけ緊張しているという事実は拭えない。

「お前らに返したデバイスの中にはこっちでデータが取れる様に少しだけ弄ってあるから、少しだけ大切に扱え。あと機能に関しては別に損なっている訳じゃねーから」

「そこら辺は自信を持っているので安心してね」

軽くリボルバーナックルとローラーブーツを装備して調子を見る。自分が使う分には特に違和感は感じられない。だが、ティアナに目線を向けるとどうやらアンカーガンの内蔵データにチップが追加されていたらしく、アイコンタクトでそれを伝えてくる。だが自分と同様、他の皆も特に問題はないので背筋を伸ばしてからヴィータの方を向いて言葉を待つ。

「うし、やる気は十分のようだな。じゃあシャーリー頼む」

「了解!」

そう言うとシャーリーがホロウインドウを複数表示させ、素早くそこに様々なシステムを展開させ、そこに数字や文字を入力して操作する。そのスピードは凄まじく、彼女のその分野においての優秀さを確認して一流の人物なのだろうと思える。

「ふふふ、八神総隊長考案とヴィータ教導官、フェイト執務官監修の機動六課自慢の空間シミュレーター、ご覧あれ!」

言ってシャーリーが入力を完了させた瞬間、湾上に浮かび上がる光景があった。

平らで何も無かった湾上の訓練空間。そこに突如として廃棄都市が出現する。ゆっくりと出現し、そして確かな形を生み出すそれは完全に普通のシミュレーターの範囲を逸脱した現象だった。それには自分を含め全員が驚いて目を丸くする。

しかしいつまでもそうしている訳にはいかず、ヴィータが水の上に

浮かぶ通路を歩いてシミュレーターへと向かうので、その後を追っていく。

◇

到着したシミュレーター空間。遠くから見た外観はホログラムのように見えたが、こうして内側まで来るとそれは現実のものと相違ない。

恐らく、デバイス等が展開してくれる仮想空間の練習プログラム。その進化型の最新型である空間一体型神経伝達バーチャルリアリティシステムを使用しているのだろう。軽く床やビルに触れるが、そこにはちゃんと感触などが存在していた。ビルの壁を軽く殴れば相応の強度を感じるし、破片を取って軽く舐めれば普通に味覚にも感じる。システムで偽りと分かっていても、味覚が残ってしまうので口に入ったものを吐き捨てる。

本当に途方も無い金額が使用されている感覚に頭が狂いそうになる。

「よしお前ら。とりあえず基本的にあたしの目標としてはお前達をこの一年の間に最低でもあたしらの後ろや、空いた一角のカバーに回せるまでの実力の魔導師まで引き上げることが目標だ。最低でもそれくらいの実力がないと安心することが出来ないし、お前らも死ぬ気でそれだけの実力をつけてもらう。いいか」

ヴィータが此方から十歩ほど離れた位置でそう問いかけてくる。四人全員で息をあわせ、はいと答える。

「新人っつうのは返事だけは一人前だからな。重要なのは相応の実力をつけることだ。……っと、無駄話もしてらんねーな。先ずは準備運動だ。始めるぞ」

言うと、ヴィータは飛行魔法を使ってシャーリーの身体を抱えると、そのまま遠くのビルの屋上まで移動する。そしてビルの上から通信で此方に指示を出す。

準備運動――――指示されたのは腕立て伏せ一〇〇回、上体起こし一

〇〇回、スクワット一〇〇回。そして終わったらランニング一〇キロという内容だった。その普通なトレーニングメニューに若干戸惑いつつも、基本が大事という事だろう。

ランニングを終わらせて再び集合すると、ヴィータが口を開く。

『じゃあ、早速訓練開始だ。先ずは主にあたしらが戦う敵と戦闘シミュレートして貰う。シャーリー』

ヴィータがそう言った瞬間、床に、道路に魔法陣が浮かび上がる。そこから卵型のロボットのようなものが現れる。卵のような姿をしたその機械を目にして、皆首を傾げていた。

『あたし等が任務の都合で敵対する事になるのがこの機械だ。通称ガジェットドローン。動きは素早いし、攻撃も中々鋭い。とりあえず今回はこれを逃げるように設定するから、自分らで工夫して全機撃墜してみな』

その言葉を合図にガジェットドローンは四方八方に分散して結構な速さで逃走していく。エリオとキャロが慌てて後を追おうと走り出すが――。

「待って！」

ティアナがそれを声で制止させた。振り返るエリオとキャロにティアナは近寄って、自分もその輪に入る。

「ただ追いかけて簡単に撃墜できるなら訓練になる筈は無いわ。ヴィータ教導官は工夫して撃破してみろと言った。つまりただごり押ししては駄目なのは既に分かっているのよ。先ずは落ち着いて動きと出来る事を話し合いましょう。そうすれば問題なく達成できる筈よ」

エリオとキャロは今日初めて会って組むことになる。だから先ずはお互いに息を合わせ協力していく必要がある。自分はティアナに影響されてか、ティアナの言う事が理解できた為、普段どおりティアナの指示を受けてから行動を起こすというスタンスを取っている。

「エリオ、貴方速さには自信ある？」

「は、はい！」

エリオは強く頷いて、ティアナは次にキャロに視線を向ける。

「キャロ、貴女は確か召還魔導師だったわね。その竜……フリードとで、あの素早いガジェットドローンを確実に仕留める策はある？」
「あ、えと、はい！　試してみたいものがいくつか！」
その言葉を聞き、ティアナは笑みを浮かべると、早速作戦を立てた。

◇

ローラーブーツを全開で走らせて廃棄都市と変わった訓練場を見渡し、走行する。その後をエリオは生身で付いて来る辺り、速さに自信があるかどうかに元気良く返事しただけはあると思いつつ、目標のガジェットドローンを探す。先ずは目標を見つけることが優先であるが、二人で組んで探すというのが現状の基本だ。一人ではどうしてもあの素早さを追うには限度がある。だが二人であればそれをカバー出来る。
キャロにより、このだだっ広い廃棄都市のどこにガジェットドローンがいるかの大体の位置を教えて貰いつつ、その地点にまで向かう。すると三体ほどのガジェットドローンを肉眼で確認し、その事をティアナに報告する。ティアナはキャロを抱えてビルの上を飛ぶようにして移動し、自分たちからある程度後ろに配置するようにしている。
見つけたら作戦通り、先ずは誘導だ。そう遠くない地点に誘導するように追いかけると、ティアナが手始めにガジェットドローンに向かって狙撃を行う。回避予測したものでティアナの得意とするものだ。だがその魔力弾は確かにガジェットドローンに当たるが、見えない何かに防がれ、そして魔力が消滅する。
「……ッ!?　バリア!?」
その機能に驚いていると、ヴィータが通信で声を発してくる。
『そうだ。ガジェットドローンには厄介な機能があってな。アンチマギリンクフィールド。通称ＡＭＦ。これがあると効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化する。しかも効果範囲内では攻撃魔法どころか移動系魔法も妨害されっから、スバルのようにウイングロードとか使った時には途中結合分離されて空中で真っ逆さまという訳だ。

ま、だからと言って何も出来ないんじゃ話になんねーから、どうにかしてみせろ』

話を聞くととても面倒なものだと思い知らされる。つまりこっちは純粋な加速魔法以外と、射撃では普通に攻撃しても駄目という訳だ。だが、驚いたものの何らかの防御はしてくるだろうと予測はしていたので、魔力自体を消されるという点を除けば予定通りだ。

逃げるガジェットドローンを再びこの周囲に寄せるように追いかけつつ、エリオが先回りして橋を切り崩し、瓦礫で道を塞ぐ。だが別段上などに回れば通れるため、ガジェットドローンはそのように動くが、そこで桃色の魔力光のネットのようなものが展開されて、ガジェットドローンはそれに捕まる。ＡＭＦでネットが消される前に、直ぐ様エリオがガジェットドローンを切り刻み、残った機体をリボルバーナックルで粉砕して破壊する。

近接であれば魔力を通すことに苦は無い。一瞬だけ動きを抑えるだけならキャロの魔力も十分使える。もしそれが駄目なら物理で鎖を召還してそれを纏わせるという技もある。そう言った手段で次々とガジェットドローンを撃墜していく。

「どりゃッ!!」

追いかけて行くうちにパターンも覚えた為、避けようとしたガジェットドローンを回し蹴りで地面になぎ倒し、拳を叩き込んで粉砕させる。いくら高知能の機械といって所詮は機械だ。覚えれば後はただのリピートでしか無い。そうなればティアナも狙撃することも楽になる訳であり、安定してガジェットドローンに魔力弾を当てる。無論ＡＭＦがあるが、キャロに予め弾丸に魔力を重ねるようにしている。その為狙撃が通る。

そうやってガジェットドローンを全て撃破して、何とかこの訓練を達成することが出来た。しかし、思った以上にＡＭＦ相手に消耗する魔力が凄まじく、体力も比例して消耗する。荒い呼吸をしながらその場に座る。

◇

「おお、結構早くクリアしましたね、ヴィータ隊長」
「そうだな、これくらいなら特に問題は無いと思ったが、スバルとティアナがしっかりしている分動きが良い」
　ホロウインドウを通して新人四人の姿を確認する。撃墜完了してから直ぐには声をかけずに、少しの休憩を与える。先ほどの戦いを見る限り、ティアナを司令塔として、サポートをキャロ、そしてアタッカーにスバルとエリオという風に役割でチームが動いている。実際の戦闘ではこんな分かれ方をしていたら悪手なのだが、今回は相手が逃げに徹している為問題は無い。
「ＡＭＦの対策も直ぐに組んだしな。ある程度の防御とかを予測してたんだろう。それならいちいちこっちが口を出す必要も無いし、解ってくれればこっちも安心だ」
　下位のガジェットドローンならば実戦でも戦闘は可能と評価しておく。だが、エリオとキャロが現状才能だけで先走っている感じがした。自分の知る人外な存在は例外として、あの年齢で身体を作ろうとしたら成長の仕方がおかしくなるから余り無理はさせられないが、先に言ったようにスバルとティアナが上手い感じに出来上がっている。
「とりあえず現状残っている癖を取り除いてから、そこら辺を調整しつつやるとして、先ずは実戦の経験不足をなんとかするか。実戦でいざというときにびびったり驚いたり痛がる奴とかは足手まといだからな。そうなら無ぇように魔力ダメージ、物理ダメージともに攻撃をもろに受けても気絶しないように育てるか」
「ヴィータさんの教導はスパルタですねー」
　シャーリーが苦笑いしているが、自分はこれでもかなり良心的なほうだ。実戦で変にトラウマが生まれればそれこそそいつの人生を狂わせちまう。だからある程度の残酷さを訓練の内にしっかりと叩き込めば、それだけ実戦での大抵の事は平然と受け流すことが出来る。
　エリオやキャロの指導は自分とフェイト。召還術に関してはシャマルからのデータを参考にしつつ指導する。スバルにはアタッカーとしてのほぼ全てを叩き込むとして、問題はティアナだ。良い動きも

しているし、判断も良い。だが幼い。しかし自分では技術的指導をすることが出来ない為、ティアナに関しては他からデータを引っ張り出してくるとしよう。

第０６話

地面を蹴って跳躍しビルの側面を滑って翻弄するように仕向けるが、一気に戦闘レベルが上がった大型のガジェットドローンはそれに惑わされる事無くこちらに向けて強烈な砲撃を放って来る。それをローラーブーツのスピードをあえて落とすことによって、側面を走っていた自分の身体が重力に引っ張られて下へと落ちる。故にガジェットドローンの砲撃を下降することによって回避した。しかし直ぐ様卵型のガジェットドローンの通称一型によって追いつかれ、細い砲撃を此方に放って来る。着地点に狙って来る為、防御するのが一番無難である。ここでウイングロードを出して避けようとすれば相手の思う壺だからだ。

故にプロテクションを張って砲撃を耐える。だが、その奥からガジェットドローンでは無い存在が襲い掛かってくる。

「どりゃぁぁーーーッッ!!」

叫び、ヴィータがアイゼンを上に掲げて肉薄し、それを振り下ろして来る。それによってプロテクションが破壊され、鉄槌の重い攻撃が直撃し、衝撃で吹き飛ばされてビルの壁へと突っ込む。もろに攻撃を受けたせいで身体が動かず、頭がくらくらする。ここで意識を手放したいが、そうすれば水をぶっかけられて鉄槌をぶち込まれるのが想像できる為、歯を食い縛って何とか意識を保つ。皆に申し訳ない気持ちで一杯になりながら立ち上がると、訓練服の姿のままグラーフアイゼンを肩に乗せたヴィータが口を開く。

「スバルが撃墜したから五分リセット……って言いたい所だが、これで各一人ずつ撃破されたからオールリセットだな。シャーリー、ガジェットの数もリセットで」

「うがぁぁぁぁぁぁぁーーーーッッ!!」

叫ぶしかなかった。もう本当に叫ぶしか無い。あのティアでさえ撃墜された時はキャラを無視して叫びだしたのだ。元から元気が取り柄の自分が叫んだって別にいいだろう。

初日の対ガジェットドローンとの戦闘はまだ良かった。一型の追撃から正面からの戦闘。そして飛行型の二型、大型の三型へとタイプが変わり、それが徐々に戦闘レベルが上がっていく。初戦の戦闘がGだったらしく、初日の終日にはCまでレベルが上がっての戦闘だった。速いわ攻撃も容赦ないわAMFもかなり強力になっているわで、こちらも結構心が折れかけ、ティアナやエリオ、キャロがグロッキーになった。だが、翌日からの訓練ではヴィータとの模擬戦となり、そこで自分らはまるでゴルフボールのようにフルスイングされ、ヤード単位で飛ばされたので完全に心が折れた。

ヴィータ曰く、此方の実力を調べる為に戦闘訓練を行ったのはいい。此方がチームとしてどれだけ動けるかを調べたのもいい。しかし、その後の痛みに耐性をつける事と、戦闘中に意識を落とさないように魔力ダメージをある程度受け慣れておくことというものが悲惨だ。しかもこれはここ数日の訓練で常日頃に行われていることでもある。

魔力ダメージは別にいいのだ。問題はヴィータが時折完全物理で攻撃を繰り出してくることだ。非殺傷というものは、当たり前だが魔力ダメージにしか適応されない。物理ダメージにそんな便利なものは無い。故に此方が魔法で身体を強化していなければ最悪命を落とす。魔法で強化して折れないレベルで調整している。それでも骨に衝撃が伝わって一時的に神経が麻痺するが、痛がったりしては追撃が来て医務室送り確定になってしまう。

そうやってひたすらボールになる訓練が続いた後、本日はヴィータに撃墜されないように用意された全基戦闘レベルBのガジェットドローンを一時間の間で撃破する。又はヴィータに攻撃を当てれば即終了という訓練だ。一人撃墜されれば五分リセットされ、先ほどヴィータが言ったように全員が一度撃墜されればまた一時間からやり直しという鬼畜内容である。一〇分ごとにガジェットドローンを八基以上撃墜しなければならないというノルマがある為、ガジェットドローンをガン無視してヴィータから逃げるという事は出来ない。本当に現実逃避したくなる。

ティアが立てた作戦は一人や二人撃墜されるのはもはや仕方ないという事で、分散してガジェットドローンを破壊してなるべくヴィータに撃墜されないようにするというもの。これならば各一人が時間を稼いで他のメンバーがガジェットドローンを撃破できるという狙いだったが――――。

開始一分でエリオがホームランされたことで全てが狂った。

そこからキャロ、ティアナ、そして自分とあっさり撃破されたという訳である。だがこれで時間制限でこの訓練を終わらせることが殆ど無理だという事が確信出来る。ティアと念話で話をすると、目標を変更して何とかヴィータに攻撃を当てるというものになった。

直ぐ様ローラーブーツを全開で走らせてその場から離れる。同時にヴィータが此方に向かって飛んでくる。だが瓦礫や廃ビルの多いこの訓練場の状況だ。此方はローラーブーツで細かいところも高速移動が可能なので、ヴィータがぎりぎり通れないような所を走行し、引き剥がす。そうやって大分距離が開いてこちらの姿をヴィータの視界から外すことに成功する。

しかし道路を走行していると、背後のビルがシュワルベフリーゲンによって砕け、吹き飛んでいく。貫通した鉄球が勢いでその先のビルさえも吹き飛ばすのだから規模がおかしい。

目線を上方に向けていると、そこにはティアの姿が確認できる。だが見える姿は一人だけではない。同じくティアがビルの上や道路などの至るところに出現してヴィータから逃走している。自分の幻影を生み出す魔法フェイクシルエット。ティアが使う戦術の一つだ。しかしそのフェイクシルエットも次々と撃破されていく。まだ二〇秒も経っていないのに殆どが撃破されていく。丁寧にフェイクシルエットを撃破しているのだからヴィータも手加減しているのだろう。

『スバル！』

「了解！」

ティアからの念話でティアの回収場所を聞いて、その場所へと向けて全力で走る。ウイングロードを展開してビルの壁に突っ込むと、そこにいたティアの腰を掴んで、そのまま身体を持ち上げて全力で加速

し、ビルの反対側から飛び降りて着地する。次の瞬間には先ほどのビルがシュワルベフリーゲンによって貫かれていた。
「魔力の流れが見えて全然隠れてねーぞ」
「くそッ、人外だこの人！」
「あたしなんて普通レベルだ」
　お前のような普通レベルがいてたまるかと思いつつ、ローラーブーツを更に加速させる。するとローラーブーツから異音が鳴り響いてくる。流石に訓練の内容が鬼畜過ぎるせいかガタが来ている。これが途中で壊れたりしたら今すぐ死ねる。なのでこの訓練だけ保ってほしい。
　作戦の要はエリオとキャロなのだ。このまま自分達がヴィータの気を引き付けていれば何とか突破できる。
「何か企んでいるっぽいし、エリオとキャロを潰しに行くか」
「こんちくしょおおおおおおおーーーッッ!!」
　ティアが叫ぶ。気持ちは分かる。
　ティアの指示で一旦ビルの上にティアを下ろして、自分は別方向へと走る。が、既にヴィータが此方の軌道を読んでおり、一瞬で肉薄されてしまった。グラーフアイゼンを構え、それを横に振る。完全に自分の反応速度では間に合わず、胴部に直撃したその攻撃は身体をくの字に曲げさせてそのまま一直線にビルの壁へと衝突する。これは完全にノックアウトだ。治療を受けない限りしばらくは動けそうに無い。
　崩壊したオフィスの床に仰向けになりながら、ホロウインドウで状況を確認する。ティアナが屋上からヴィータを狙撃する。転移魔法と組み合わせたティアの必殺技である。極めれば相手の心臓を直接射抜くなんて物騒なことが出来る凶悪技であるが、ヴィータはそのオレンジ色の魔力弾を掴み、握りつぶした。
「嘘ぉ……」
　まさにティアが思ったことを自分が口に出してあげる。当然独り言なので意味は無い。
『別段悪いやり方じゃ無え。だが、それをするならデバイスじゃなく

て自分で演算組めるようにしな』
言ってヴィータがお疲れ様と言わんばかりにティアに鉄槌を振り下ろす。それにより屋上から叩き落されて大地へと落ちていったティアの姿。もろに食らったなと心の中で合掌しつつ、ホロウインドウを引き続き見ていくと、ヴィータの死角からエリオが特攻する。アームドデバイスが放たれる魔力のジェット噴射で飛びつつ、槍の一撃を放つ。
しかし一直線が故にヴィータが回避するのは簡単な事だ。が、そうはさせないようにヴィータの頭上にフリードが炎を吐き出す。それと同時に下から銀色の鎖が出現し、それがヴィータの身体を拘束する。
『通します!』
エリオが叫び、ヴィータが展開したプロテクションに槍の先端をぶち当てる。魔力ジェット最大で、暴れるアームドデバイスを必死に押さえて攻撃を通そうとする。鎖の拘束を徐々に引きちぎるヴィータだが、槍の先端がプロテクションを通り、そこから突き破ってエリオがヴィータの身体に攻撃を当てた。
ヴィータに攻撃が当たった事により、今回の訓練はこれにて終了だ。しかし攻撃を当たっていてもその姿には傷らしきものが全然見えなかった。改めてヴィータの凄まじさを感じ、苦笑いしか出てこない。お家帰りたいと思ってしまった。

◇

午前の訓練が終了し、全員が応急処置を受けて何とか身体を動かせるまで回復する。こうして直ぐ様治せるのだから、シャマルの治癒能力は凄いと感じさせられる。そう考えるとヴォルケンリッターのメンバーは本当に凄まじい人たちだなと思い知らされる。その主であるはやても含めてだ。
だが、はやて課長、流石に訓練の様子を見に来るついでに広域制圧魔法をブッパするのはやめて欲しい。あの時の絶望に染まる表情の

エリオとキャロが忘れられない。
　そんな事を思い出しつつ、着替えた自分らは現在食堂にて昼食を取る為に集まっている。自分はパスタを注文して新人が集まるテーブル席へと腰掛ける。するとそこには机に伏せてグロッキー状態になっている三人の姿がある。ティアは予め自分用に携帯食を持参していたので、それを食べて水で一気に流し込んでいる。
「ちゃんとご飯食べないと身体に悪いよ、ティア」
「……なんであんたは平気に食べられるのよ、しかもその量」
　ティアが半眼でパスタを食べる自分を見て言う。確かに自分が食べているパスタの量はこの食堂でもかなり大きな皿に山盛りにされている形であり、世間からしたらかなり大食いなのかもしれない。だが昔からナカジマ家ではこの量が普通だったので自分にとっては普通だ。初めてティアと食事をした時にも驚いていたなと思い出し、ティアの言葉に返す。
「だってお腹減ったら食べるでしょ、普通」
「こいつありえんわ……」
　言ってティアは机に伏せて動かなくなった。エリオとキャロも同じ状態だったので、流石に何も食べないことに対し問題があるので、軽めにでも食べた方が良いと教える。
「そうですね……何かあっさりした物注文して来ます……」
「私も……」
　ぐったりした二人はそのまま食券販売機に歩いて行った。それをパスタを食べながら見届けると、此方に向けて近寄るヴィータの姿があった。休憩中なので畏まる必要は無いのだが、流石にうつ伏せているティアの肩を叩いて起こしてあげる。最初億劫に顔を上げたが、ヴィータの姿を見るやばっと起き上がって背筋を伸ばす。別段楽にしていろと手を上げてジェスチャーで伝えて、ヴィータはテーブルの前に立つ。ここにエリオとキャロがいないのに対し、辺りを見渡して受け取り口でパンを受け取るのを確認してから視線を此方に戻す。
「休み中悪いな。休憩終わったら一度デバイスのメンテナンスルームに来い。エリオとキャロにもそう伝えろ」

「了解です」
頷くとヴィータはそれじゃ、と言って席から離れていった。

◇

昼休憩後にメンテナンスルームに五分前には集合すると、既に室内に居たヴィータとシャーリーに敬礼しつつ室内に入る。そこから二人に向かうようにして整列する。一度気をつけと礼をしてから休めと指示が入り、半歩ほど足を開いて視線をヴィータに集中させる。
「――さて、ここ数日で地獄を見たと思うが、その中で経験したものは大きいだろ。これで実戦でもある程度は冷静に対処できる様になる。もう少し続けてみて、今度は実戦に近い戦闘訓練をやるからな。あ、それとさっき飯食っている時にシグナムがウズウズしていたから、ふとした時に適当に訓練にぶち込んで相手して貰うんで宜しく」
「もうマジ無理……」

そう言葉を放ったヴィータは笑顔だ。この人若干ストレス発散も兼ねて教導しているのでは無いかと疑いつつ、隣のティア、後ろのエリオ、キャロを見れば皆表情が真顔になっている。人間限界超えるとこうなるんだなと思って苦笑いしていると、何であんたは平気なんだとティアが言ってくるが気にしないでおこう。
「んで、本題に入るとするが――シャーリー」
「はい！」
ヴィータが声をかけると、シャーリーは笑顔で敬礼して後ろにあった台へと手を伸ばす。そこには何かを隠すように布がかけられており、シャーリーはタイミングを合わせるように一瞬間を置いてからその布を取った。
その台の上に、四つのデバイスが置かれていた。
「じゃーん！　皆のデータを参考に六課で新たに作った貴女たち専用のデバイスです！　エリオ君のがストラーダ、キャロちゃんがケリュケイオン、スバルさんがマッハキャリバーで、ティアナさんのがクロ

スミラージュ。今皆さんが使っているデバイスと違和感が無いように作ったので、合わないという事は無いと思います」
　満足感に満ち溢れた表情で言葉を述べるシャーリーを見て、この人は仕事を楽しくこなせるタイプだなと思いつつ、自分のデバイスとなるマッハキャリバーに視線を向ける。
「お前らのデバイスは既に限界だったしな、これを機に全員取替えだ。お前ら専用に作った六課特別製だ、大事に扱えよ。それと細かいメンテナンスは自分らがするのは当然として、定期的にシャーリーがメンテしてくれるそうだ。良かったなお前ら、素敵なデバイスマスターが居て」
　それには本当に感謝だ。皆も先ほどのグロッキーだった様子から一変して嬉しそうに表情を緩めている。
「さて、じゃあ詳しい説明を受けてから、実際に慣らしとして訓練を再開したい所――――」
　と、ヴィータが午後の予定を説明した、その時だった――――。
――――室内にアラームが鳴り響く。

第０７話

六課自慢の大型輸送機に乗って移動する。場所は機動六課の隊舎から大きく離れたミッドの外れの方へ。ヘリに乗船しているのは新人達四人とヴィータとフェイト、そしてツヴァイだ。スバルやティアナは大分落ち着いている様に見えるが、エリオとキャロは見た感じ緊張の表情を見せている。二人に大丈夫と声をかけると、二人は声を張ってはいと答える。訓練で絞られたこともあって逞しくなったなと微笑みを浮かべると、新人たちの向かいに座るヴィータがブリーフィングを始めた。

「それじゃあブリーフィングを始めっぞ。今回、場所はミッド北部ベルカ自治領へと向かっている列車の一つが急に暴走を始めたって報告が入った。線路上にあるカメラから様子を見た結果、原因はガジェットドローンだと判明し、中にはおそらく密輸物にロストロギア・レリックがあるみてえだ。そうなればあたし達の出番って訳だ」

既に資料は全員に渡されており、チェックも済ませてある。ガジェットドローンはレリックに引き寄せられる性質がある。その事件を迅速に解決する理由の一つとして機動六課が設立された訳だ。ヴィータの言うように、あの列車にレリックがある、という事なのだろう。

現在出動できたメンバーは自分たち七名である。はやてやシグナムは聖王協会にて騎士カリムと会談中だった為、現在こちらに向かっている最中だ。

「まあ現状把握している敵戦力を見ても、特に問題は無いだろうし、作戦とかに関しては初出動という事もあってお前らに頑張ってもらう感じで。航空戦力であるガジェットの二型はあたしとフェイト隊長で霧払いするから、お前らはこのままヘリで列車に突撃かませ。スターズ分隊はガジェットの殲滅、ライトニング分隊はレリックの確保だ。最初に言ったが基本現場の判断に任せる。が、あたしらが命令出した時は即座に従え。わかったな？」

言うと揃ってはいと答える新人四人。すると操縦席からヘリパイロットのヴァイス陸曹が声を上げる。
「姉さん方、そろそろ到着ですぜ！」
ヘリの扉が開いて、そこからミッド郊外の景色が視界に入ってくるのと同時に、暴走して走り続ける列車の姿が見える。だが列車に降りるにはまだ距離が開きすぎている。故に先に自分とヴィータが飛んでいるガジェットドローンを殲滅しなければならない。
椅子から立ち上がるのと同時にヴィータ、そしてツヴァイが一瞬でバリアジャケットを展開し装備する。それに続いて自分もバルディッシュに声をかけてバリアジャケットへ姿を変化させる。
「じゃあ、屋根の上に降りられるように道を作るから、合図に従って降りてね？　決して無理しちゃ駄目だよ？」
スバル、ティアナ、エリオとキャロにそれぞれ視線を向けながら笑顔でそう言うと、皆は笑顔ではいと答える。そしてヴィータと二人でヘリの扉前に立って、次の瞬間には落ちるようにして出撃する。
空中に浮いたと同時に飛行魔法を展開して体勢を整えると、ヴィータが既にシュワルベフリーゲンを複数展開してガジェットドローンの群れに向かって弾き飛ばす。グラーフアイゼンのハンマーヘッドの衝撃とヴィータの魔力で強化されたそれらは無数のガジェットドローンを一瞬で破壊して、空を瞬く間に赤に染める。ヴィータのシュワルベフリーゲンは物理の特性を持つ攻撃である故にＡＭＦを通すことが出来る。だが、この程度のＡＭＦであればこちらの魔力の攻撃も関係なく貫通できるのだ。
直ぐ様ヴィータが生んだその爆発の中に突撃するように一直線に飛びつつ、バルディッシュをいつも通りの対艦サイズのザンバーにしておいて、それを構える。爆発の向こうに浮遊して襲い掛かるガジェットドローンに向けて、ザンバーを横に振るう。
「はあああああぁぁぁぁーーーーーーーッッ!!」
叫び、勢いを増加させる。ザンバーを振りぬきつつ、その刀身を砲撃のように伸ばして横一直線になぎ払うことで、無数のガジェットド

ローンが爆散する。途中で岩山も同時に斬ってしまったが、非常事態故に仕方が無いだろうと無視して、今度は上に跳躍して高く飛んでからザンバーを縦に振る。それにより付近のガジェットドローンは粗方片付く。それによって下方に存在した谷が崩れるが、仕方ない。これもガジェットドローンが悪いのだ。

『フェイト、あんま暴れるな。新人達に残すガジェットまで破壊する訳にいかねぇだろ。それと地図も変える必要が出てくるから地形ごとなぎ払うのはやめろ、マジで』

ヴィータが念話で呆れたような声でそう言ってくる。閃光の如く体現する様な動きで空を飛び、次々とガジェットドローンを撃墜していく。だがそれでも列車の上に存在するガジェットドローンには触れないように気をつけている。

今回の程度であれば新人達の初陣には丁度良く、実戦経験を積めさせるにはいい機会だ。経験を積むには早いほどいいので、こちらとしては非常に助かる。

◇

隊長たちが出撃したのと同時にあれだけ確認していたガジェットドローンの群れが一瞬にして爆散する光景を見て、改めてあの二人とは次元が違うのを実感する。その光景には思わずヴァイスがヒューと口笛を鳴らすくらいだ。

さて、とツヴァイが言葉を漏らしてからこちらに向き直る。

「フェイト隊長とヴィータ隊長が道を作ってくれましたし、いよいよ実戦ですよー。この初陣をこれからの経験の糧にしてくださいね」

ツヴァイの声に揃ってはいと返事をすると、ヘリの扉が開かれる。既に列車の真上に来ているので、問題なく飛び移ることが出来そうだ。ツヴァイはこのままヘリからこちらの援護をしてくれるのでありがたい話である。

まずは列車の上に群れるガジェットドローンを撃破し、エリオとキャロの道を作ってあげなければならない。故に自分とティアが先

行して出撃する。
「スバル・ナカジマ二等陸士、出撃します！」
「同じくティアナ・ランスター、出撃します！」
飛び降りるのと同時にマッハキャリバーに合図を送り、真下に居るガジェットドローンに向けて拳を叩き込む。その爆発の上からティアがクロスミラージュで他のガジェットドローンを狙撃していき、破壊する。
上空からキャロが既にＡＭＦ貫通支援魔法を付加してくれているので、楽に攻撃が通る。それこそ楽すぎるくらいに。
「訓練に比べるとかなり脆い！　ヌルゲーだね！」
言って一番近くのガジェットドローンに向けて接近し、一撃で確実にスクラップにする。それに屋根の上に配置されているガジェットドローンが一斉に此方を向く。ティアの立ち位置の付近にエリオとキャロが下りて、ティアが二人のカバーに入る。
そのまま自分と共にエリオも列車内部に入れる地点まで目指し、敵陣へと踏み込んでいく。素早く確実に無駄が無いようにガジェットドローンを粉砕していく。訓練で覚えた事を確実に動きに入れてから、受け取ったばかりのデバイスを慣らすように戦闘する。
はっきり言って、このガジェットドローンの戦闘能力は低い。脆すぎる。それも普段の訓練でこれ以上の戦力と対峙しているのだから、そう思っても仕方が無いだろう。攻撃も機械的でパターンも見切れる。レベルの高い相手をしているせいで、レベルの低い相手に違和感を覚える程だ。
だが、そんな事は今考える必要は無い。前に出て自分とティアはガジェットドローン殲滅。そしてエリオとキャロがレリックの回収、それだけだ。自分とエリオが先行しているが、前に出ればその動きにティアとキャロがついて来る。時折自分らを避けたガジェットドローンをティアが確実に仕留める。
直ぐに車両の境目まで到着し、エリオとキャロはここで内部へと突入する。ティアも二人の援護をするために内部へと入っていく。自分の役割は車両の外にあるガジェットドローンを破壊して、外から攻

撃を三人に通さない事だ。車両の境目周辺をクリアリングしつつ、他の車両上に群れるガジェットドローンに向けて踏み込んで行く。
正面からの踏み込みは集中砲撃を受けることになるが、それを突破して肉薄さえすれば一気にこちらの間合いで殲滅する事が出来る。が、唯でさえ足場に余裕が無い列車という場所で、しかも最高速で暴走している為かなり風圧もかかる。下手に飛び跳ねる事は出来ない。
しかし、マッハキャリバーはこちらが意識した瞬間に疎通したかのようなタイミングでウイングロードを展開してくれる。そのタイミングに感謝しつつ、その足場を利用して砲撃を回避して肉薄し、リボルバーナックルで拳を叩き込んだ。そのまま数基のガジェットドローンを撃破して先頭車両に向けて踏み込んで行くと、二車両目の天井が突如爆発し、そこから巨大なアームを展開して這い上がるガジェットドローンの三型が出現する。
だが、三型の行動パターンは既に頭に叩き込んである。訓練と実践での違いを修正しつつ、間合いに入る。大きなアームで此方に攻撃を仕掛けるが、自分の機動力の前ではあまりにも遅すぎる。故に少ない動きだけですり抜けて、ガジェットドローンの中心にリボルバーナックルをぶち込み、粉砕した。

◇

結果、無事にレリックを回収し、ガジェットドローンも全て撃墜。先頭車両にて壊れたシステムを止めて列車も緊急停止に成功した。初陣としてはかなり好成績で結果を残せただろう。帰りのヘリに乗せられながら、自分ら四人は早速今回の戦闘に関しての自己分析をそれぞれ行う。
向かいに座るヴィータが熱心で何よりと笑みを浮かべる。現在ヘリに乗っているのは自分ら四人とヴィータと操縦者ヴァイスだ。フェイトとツヴァイは現場に残り、後から来た管理局の応援と共に事件の現場の収拾をし、同時にデータを集めている。
「しかし、簡単な初陣でよかったなお前ら。初陣ってのは一番危険な

ものだからな、訓練怠っている連中は結構これで使いものにならなくなる。ま、普段からの訓練に感謝するこった。つー訳で帰ったら前回より少しレベルを上げたガジェットとの戦闘訓練すっから、そのつもりで」

それに苦笑いを隠せないエリオとキャロと自分。ティアはもう慣れて真顔で返事を返していた。定期的にティアのストレス発散に気をかけないとなと思いつつデータを纏めていると、ヘリの通信システムが起動し、そこにはやての姿が映し出される。

『やー、みんなお疲れさん。初陣は無事に終わったようやな。個人的には初陣でぼろ負けしてくれた方が心を折れたと思ったんやけど』

笑顔で笑えない冗談を言うはやてに、データを弄っていた自分ら四人は姿勢を正してはやてに敬礼する。するとはやては手を下げて敬礼止めと指示し、腕を下げる。はやての背景が輸送機らしきバックなので、戻ってきている途中なのだろうと確信する。

『され、皆疲れていると思うけど、ここで朗報や。――近々また実戦あるで』

その言葉に目を丸くしていると、ヴィータがはやてに質問する。

「八神課長、その事についての詳細は？」

『まだ資料は完全に出来てないんやけどな。今ここで簡易的に説明すると、防衛任務や。場所はホテルアグスタ。皆は聞いた事あるか？』

はやての質問に自分とエリオとキャロは答えられずに眉根を八の字に歪めると、ティアがその答えを説明する。

「確かミッドでも富裕層の方が参加するオークション、その会場に使われているホテルですよね？　次元運搬施設が近くにある事から、周囲が森林に囲まれた環境にも関わらず、倉庫といった建物が多く集まる場所の施設だったかと」

『うん、そうや。そこでロストロギアが複数オークションに出品されるようなんよ。あ、ロストロギア言うても危険性は殆どないことから、管理局の許可も出ている安全なものや。いわばお宝感覚の代物やから、法的には問題ないんよ。たまにクラナガンでも有名な鑑定士さんとかもゲストとして呼ばれるくらいやしな』

その知識を良く知っていたなと感心しつつ、その任務の詳細について耳を傾ける。
『ほんで、そのホテルで近日オークションが開催されるんやけど、今回は特にロストロギアが多く出品されるらしいんや。となると……言わんでも分かるな？』
その問いに揃ってはいと答える。ロストロギアが大量に集まる。危険性の無いものであるが、ひとつの場所に集まるということは、それに釣られてガジェットドローンが現れる可能性がある。つまり万が一の事態に備えて、ホテルの防衛を行うという事で間違い無いだろう。
『まあ、帰還したらまた詳しく説明するんで、それまでヘリの中でゆっくり休憩しててな。帰ったらまた地獄やと思うし』
言って笑顔なはやてに対し、思わず真顔になった自分らは揃って返事をした。通信が途切れ、何とも言えない空気になる中、ヴィータが此方の肩にやさしく手を当てる。
「……許可するから、着くまで寝てていいぞ」
訓練では鬼のように思えるヴィータが、この時は天使に見えた。こちらの事をよく知るヴィータだからこそ内情を察してくれたのだろう。その言葉に甘え、自分たちは椅子に背を預けて身体を楽にした。
来る所、間違えたかなぁ、と思いつつ、徐々に重くなる瞼を楽にした。

◇

昼ごろになっても静けさに包まれる廃棄都市であるが故に、目覚ましなどをかけないと本当に一日寝ていられる環境だ。昨日は深夜番組を見ていたせいで、この時間になっても布団に包まって寝ているなのはの姿がある。
しかし、すさまじい形相になったなのはが一瞬で飛び起きると共に叫びを上げる。
「はぅおおあああああーーーーッッ！　ハナクソついた指で、あっ

ち向いてホイ仕掛けてくるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーッッ!!」

目を覚まし、しばらくは部屋に視線を彷徨わせる。そこで夢だと分かって一気にクールダウン出来る。手元にあったリモコンでテレビをつけると、そこには既にお昼の番組が始まっており、疑問を感じつつ枕元の目覚まし時計を探す。

と、そこで先日壊してしまった事に気がつき、やってしまったと思いつつ後頭部を手でかきながら立ち上がる。テレビが見える位置で歯を磨くため、ダイニングキッチンのシンクで歯磨きを行う。ブラシで歯を磨きながら、今日は時計を買いに行かないとなと思っていると、ふとテーブルの上に置いてあるレイジングハートが光った。

歯を磨き終わり、口をゆすいでからコップとブラシを片付け、テーブルの前に来る。

「ねえレイジングハート、目覚まし代わりとかやってくれないかな？」

『Ｗｈａｔ!?』と返してくるレイジングハートのノリに笑みを浮かべつつ、具体的にお願いを頼んでみるが、レイジングハートは以前にも同じ事を言って私が起こしたら効果が無かったと言っている。そしてさり気無く目覚ましの役割をしたら命の危機などというが、それは無視しておこう。

レイジングハートが断るのならしょうがない為、おとなしく時計を買いに行くことを決める。適当に身だしなみを整えつつ、財布といったものを確認して、レイジングハートを首にかけようとした時に、丁度通信が入る。

表示される名前はユーノだった。珍しいと思いつつ、通話をオンにして立体ディスプレイを表示させる。そこには少年のころの童顔の面影を残しつつ大人になったユーノの姿がある。髪は伸ばして後ろで一つに結っており、その顔には眼鏡をかけており、仕事柄視力が落ちてしまったことが分かる。

『やあ、なのは、久しぶり』

「うん、久しぶりだねユーノ君。珍しいね、ユーノ君から連絡してくるなんて。……仕事落ち着いたの？」

言葉を口に出した通り、ユーノとこうして連絡を取るのも半年ぶりくらいになる。その理由が主にユーノの仕事で時間が空かないというものであるが故に、無理にこちらから連絡する訳にもいかない。だがこうして連絡を取ってきたということは時間に余裕が出たということだ。

だがユーノは苦笑いしてそれに答える。

『いや、実際にはまだ仕事は残っているんだよ。……っていうか終わる気配が無くてね、いつも泊り込みで無限書庫に引きこもっているよ……。あはは、仕事辞めたい……』

そんな彼の職場である無限書庫という場所が思い切りブラックである事実に、なのははご愁傷様とだけ心の中で思った。ユーノは話を戻し、本題を話し始める。

『連絡した理由は、少し護衛任務を受けてくれないかなーっと思って』

「護衛？」

『うん。今度ミッド郊外にあるホテルアグスタって所でオークションが開催されるんだけど、そのイベントのゲストとして僕が呼ばれてね。本当は仕事も残っているし遠慮したかったんだけど、上からの命令だから断れなくて。まあ、切り替えて久々にゆっくり出来る一日と考えることにしたんだ。それで、一応護衛をつけなきゃいけないらしくて、それならなのはが良いなと思ったから……どうかな？』

話を聞いて、腕を組みながら思考する。ユーノのお願いといっても、オークション会場という堅苦しい場所に行きたいとは思わないので、正直行きたくない。申し訳ないが、断ろうと口を開こうとした時――。

『――あ、ちなみに会場ではごちそうが出るから食べ放題だよ？』

「うん！　一緒に行こうかユーノ君！　任せておいて、どんな奴が襲って来てもワンパンで片付けるから！」

見事に手のひらを裏返し、満点の笑みを浮かべサムズアップし、即答で引き受ける。最近食費をケチっていた為ろくな物を食べていなかったので、背に腹は代えられない為、ごちそうが出るなら食べたい。

「あ、でもそのオークションって結構上品な感じ？　私リクルート

スーツくらいしか持ってないけど」
『うん、全然オッケーだよ』
オークションは近日に開かれるらしいので、詳細は後ほどデータで送るという事だ。せっかくなのでこのまま会話もしていたかったが、今日も忙しいみたいなので直ぐに仕事に戻らなければならないらしい。
じゃあまた、と言って通信を切る。
しばらくは何も食わなくて平気かなと、少し思った。

第０８話

　機動六課の隊舎がある駐屯地エリアからヘリに乗ってミッドの街の上空を移動する。ヘリには自分たち新人四人とフェイト、ヴィータ、シャマル、そしてはやてが搭乗している。ヴィータとシャマルが自分たちの向かいの席に座り、はやてとフェイトが操縦席手前に出現する立体ディスプレイの前に立って説明を始める。
「ほんなら改めて、ここまでの流れと今回の任務のおさらいや。今まで不明だったガジェットドローンの製作者及びレリック収集は、現状はこの男……」
　言って、立体ディスプレイにウインドウを追加し、そこに白衣を着た男が表示される。
「違法研究で広域指名手配をかけられている次元犯罪者――――ジェイル・スカリエッティを中心に捜査を進める方針や」
　ジェイル・スカリエッティ。名前だけなら聞いたことはある。はやての言葉を続けるようにフェイトが口を開く。
「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応覚えておいてね」
　揃って返事をすると、はやてはさて、と言葉を挟んでウインドウを切り替えていく。
「んで、今回の任務はホテルアグスタで行われる骨董品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事や。現場には昨夜からシグナム副隊長、ザフィーラ他、数名の隊員たちが見張ってくれてる。私とフェイト隊長は会場の警備に回るから、前線はヴィータ隊長とシグナム副隊長たちの指示に従ってな」
「了解！」
　再び揃って返事をしてから、これから出動する現場を確認するために資料に目を通した。

◇

「おお、結構大きい所だねー。森の中にあるって聞いたからどんなものかと思ったけど、私のイメージの想像の上を行ったね！」
「まあミッドでも有名なオークションだからね。たまにテレビカメラが入ったりしているところだし、この会場事態も他のテレビ番組とかで使われたりしているから。あ、今日はカメラとか得にないらしいから気楽にしててていいよ」
　車に乗って数時間で目的地のホテル・アグスタへと到着し、外観を見て感嘆の声を漏らす。帝国ホテルにイベント会場が併合した施設であり、結構な大きさである。ユーノと共に早速ロビーに入ってから、受付まで後ろに付いて歩くと本人確認と入場許可証の提示を求められた。予めユーノから必要なものを渡されていたので、それを提示し、ユーノ自身からもなのはの事は自分の護衛だと係員に伝える。
　まだオークション開催まで時間がある為、会場を回るようになっている広い廊下、そこにある休憩スペースのソファに座る。通り過ぎる人たちを見ると、さすが富裕層が集まるイベントだけあって服装も高そうなスーツやドレスを着た婦人が多い。対し自分は就職用に買った黒のリクルートスーツであるが、見た目的には特に問題はないだろう。
「あ、ちょっと待ってて」
　ユーノは自分にそういうと、向こうのロビーに居た人たちに向けて歩み寄っていく。どうやら仕事上の知り合いらしく、社交辞令じみたやり取りをしているのが遠めでも分かる。
「(そういえばユーノくん、考古学者だっけ。……無限書庫の司書長やっているのに大変だなぁ……)」
　様子を見ながら某としていと、どうやら連れはいないのかという話になったらしく、こちらに手をむけて自分を紹介している。一応立ち上がってから丁寧に挨拶はしておく。そんなやり取りをしてからユーノはこちらに戻ってきた。
　ため息を吐いて隣に座るユーノに質問する。
「今の人たちって？」
「あー……今回のイベントに僕を呼んだ張本人達で、分かりやすく言

うと役所の【元】お偉いさんだ。今は天下ってこう言う所に出席しているんだよ。……ハハ、必死に作り笑いして愛想よくしたけど、内心こいつら汚職でもバレて人生終わらないかなーって思ってた。良いよねー、定期的にハンコ押すだけの楽な仕事してたのにも関わらず、老後はこういった地方で踏ん反り返れるんだからさー……なんてね！」

周りから見て心象を察せられないように、ポーカーフェイスで表情は優しい笑みを浮かべて結構な事を言っているユーノを見ると、良い空気吸ってるなと思う。司書長補佐だった頃はまだ純粋な少年だった筈だが、やはりブラックな職場は人を変えてしまうのだろう。

そういえば、とユーノがこちらを向いて口を開く。

「なのはは今も相変わらずな感じ？」

「うん、趣味でヒーロー感覚で魔導師やってる。やっぱミッドって広い割に治安維持の人員が足りてないからちょくちょく事件が起こっているよ。よほどの災害レベルにならないと動かないのかな管理局は」

「ああ、確かにそういった中小の事件は嘱託の魔導師に任せているって話聞いたことあるなー。……まあそれでもクラナガンを中心としたエリアでしか成果は出てないみたいだけど。スラム街とか特に犯罪とか起こっているからね……。そういう所には幼い局員とかは回せないから難儀な事だよねー……」

ユーノは苦笑いしつつ言うと、立ち上がって休憩スペースにあった自動販売機に向かう。コップに注ぐタイプだ。コップにコーヒーを淹れてからそれをこちらに渡してくる。ありがとうと礼を言ってからそれを受け取り、再び隣に座る。

「そういえばはやてが部隊を立ち上げたって話は聞いてる？」

「うん、六課だっけ？　ロストロギアの収集を専門とした部隊って聞いたけどね。フェイトちゃんからは一応誘いは来たけど、管理局で働くと色々と堅苦しいから、それは嫌なんだよねー……。はやてちゃんの信頼する人たちしか居ないって言っても、私は自由に生きたいって決めているから、局入りはちょっと……」

「まあ、なのはらしいけどね……。僕もいつか脱局して喫茶店でも営もうかな。……まあ無理な話だけど」
「喫茶店開いたら一緒に働こうよ。父さんや母さんから一応仕事教わっているから」
「あはは、心強いね。その時は頼むよ」
そんな会話をしつつ、時間を確認する。結構な時間が過ぎた為、そろそろ控え室にて待機しなければならない。コーヒーを飲み干すと、コップを捨てて二人で関係者用の入り口へと向かう。そこには係員が立っており、ユーノを確認すると中へと案内してくれる。
護衛はここから先に入る必要はないので、ここで一旦お別れだ。ユーノに手を振ってから扉が閉められる。さて、と声を上げてから、オークション開始までどこかで時間潰していようかなと考える。レイジングハートに時間を確認して貰い、適当な場所で時間を潰していくことにした。

◇

はやてとフェイトが会場内へドレスを来て入って行き、ヴィータはエリオとキャロと共に地下駐車場の見回りをしている。地下駐車場は入庫口と繋がっており、何か異変があるとしたら地下だからである。
現在自分とティアはイベント施設の大きな休憩スペースに居る。ガラスの天井に、所々が吹き抜けで天井が無い、屋外の休憩所になっている場所だ。ティアはその外側の場所で警備に当たっている。
『……スバル、聞こえる？』
『うん、どうしたのティア？』
見回りをしていると、念話でティアがこちらに話しかけてくる。
『あんた、今のところ機動六課をどう見てる？』
『どうって、厳しいけど優秀な部隊って感じ？』
『――そう、そうなのよ』
そこで一呼吸置いてから、ティアは続ける。

『あまりにもエリートが揃いすぎている。最初の説明の時にも言ったけど、八神課長と、ヴォルケンリッター、そしてフェイト隊長。私たちとエリオとキャロ、その他スタッフだって皆優秀な人材ばかり』
自分を過小評価しないティアに流石だなと思いつつ、次の言葉を待つ。
『でも、正直ロストロギアの回収の為だけに作られた部隊としては、戦力が強すぎる。今回との犯人と衝突することになるかっていっても、一犯罪者の集団に対してもハッキリ言って過剰よ。――それこそ、どっかと戦争できるくらいに』
『ティアは八神課長がどっかと戦争でもすると思ってるの？』
『……まだ分からないわ。でも、この先にある【何か】に備えているってのは間違いない筈よ』
確かにティアの言うとおりに、現状集めているロストロギア・レリック。それに集まるガジェットドローン。そしてその収集を目的としている次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ。だが、普通に考えればこのスカリエッティを逮捕すればそれで解決する事件だ。果たしてここまでの戦力が必要か否かと問われれば、必要は無いように思えてくる。
それこそ、何か災いの予言でも無い限りは。
『……くだらない話だったわね。ごめん、任務に集中しましょう』
『いいよ、気にしないで』
いずれにせよ、どういう真相があるのかは分からない。今は目の前の任務にだけ集中しようと意識を切り替えた。

◇

ホテル・アグスタの周囲は大自然に囲まれている。これは次元運輸施設が近くにある事と、ホテルの利用客に景色を楽しんでもらう為に建てられた為だ。その大自然の森の中に、複数の山がある。その一角にある場所で、フードで姿を隠している男の姿と、隣に少女の姿が確認できる。

遠めで見てもかなり大きな建物だなと思う。それこそ何か裏金や黒い背景でもあるように思えてくる。だが、それにしては外観のバランスが自分的にかなり悪い。もう少し見栄えを考えて建てれるだろと思うが、その思考は一度置いておこう。重要なのはあの建物にロストロギアが複数存在しているということだ。その情報を元にここまで来たのはいいが、デバイスで検索した結果、レリックは存在しないと判明する。

「ファ〇ク！」

「……あまり汚い言葉は使うな、ルーテシア」

「だってここまでやっと来たのにレリックは無いって訳でしょ？　不満も言いたくなるわよ」

ため息を吐きつつ、人差し指を親指で押して鳴らす。ポキっという音が小さく鳴る。すると隣に立つ男――――ゼストが眉根を八の字に曲げて口を開いた。

「これまでだって似たようなことはあっただろう」

「今までは割りとイライラを周囲にぶち撒いてストレス発散していたけど、今回はそれも出来なさそうじゃない。なんか管理局が警備に当たっているっぽいし……」

そう言って、手に装備したデバイスで反応を出さないように検索をかけると、周囲を監視する魔力反応がある。結構大きいことから、民間の警備ではないことが分かり、おそらく管理局が張っていると考える。

「面倒だなぁ……。ドクターからなるべく騒ぎは起こすなって言われているし、憂さ晴らしも出来ないなんて。あの馬鹿でかい高級ホテルを潰せば貧富の差別テロを起こすいいきっかけになると思ったのに」

「俺からも騒ぎは大きくしたくないし、そんな事しても無駄な犠牲が出るだけだ。何の意味も無い。今回はおとなしく撤収するぞ」

言って、ゼストが踵を返すが、丁度その時デバイスに反応が出る。

「ん……あれって……ガジェットドローン？」

ルーテシアが反応を元に、肉眼で森の奥からホテル・アグスタに向かって接近する機影を発見する。ガジェットドローンがホテルを囲

う様にして接近してきている。レリックが無いのにどうしてと疑問に思ったが、同時にデバイスにドクター・ジェイル・スカリエッティから通信が入る。
　応答し、ホロウインドウを表示させる。
『やあルーテシア、それに騎士ゼスト。ごきげんよう』
「ごきげんようドクター。というか、相変わらず顔色悪いわね。ちゃんとご飯食べてる？　たまにはウーノさんに手料理でも作って貰えばいいんじゃないかしら？」
　白衣を着た紫色の髪の男、スカリエッティは馴れ馴れしくこちらに話しかけてくる。この男のノリは初めからこうなので、こちらも気にせずに舐めた対応を取るのがデフォルトになっている。ゼストは明らかにスカリエッティに嫌悪感を出しているが、気にせずにガジェットドローンのことについて訊ねておく。
「んで、あのガジェットの数はどうしたの？　レリックはあのホテルに無いようだけど？」
『その事なんだが、あのホテルに紛れ込んでいる密輸品に私が欲しいものがあってね。出来れば二人にも協力して欲しいんだが、どうかな？』
　なるほどと納得する。オークションに出品されるのは許可が取れた安全なロストロギアだが、あのホテルを通して危険な密輸品があるという情報があった。レリックでは無いにしろ、スカリエッティが欲しいものがあるのだろう。
　どうするかと悩むと、ゼストが即答で断る。
「断る。レリック関係でなければ、互いに干渉しないと決めた筈だ」
　鋭い双眸でウインドウを睨み付けるゼスト。たしかにこの人の事情を知ればスカリエッティを敵視するのが普通だ。しかし、現在は目的があり、それに従って互いに協力している以上は、自分は好意的にしていきたいと考える。
「私は引き受けていいよ。ここでドクターに貸し作れば色々便利そうだし」
『優しいねぇ、ルーテシア。今度お茶とお菓子でもご馳走させてくれ。

あ、それと今デバイスに目標の物のデータを送っといたよ』
「あ、それで貸し無しには出来ないから。そこん所よろしく」
言ってサムズアップしてから通信を切る。デバイスに届いた情報を確認してから、早速ガジェットドローンに仕掛けをしようと思い、フードつきのコートを脱いでバリアジャケットを露にさせる。黒のドレスを基調とした露出の高い衣装だ。個人的には好きなデザインだが、寒いんだよなと思いつつ、デバイスを機動する。
「……本当にいいのか？」
ゼストが心配するように声をかけるが――。
「だってこれで派手に憂さ晴らしが出来るんだから、暴れたほうがいいじゃない？」

満点の笑みをゼストに向けると、彼は困ったように額に手を当てた。気にせずに召喚魔法を展開して、足元に術式を展開させる。これで管理局にこちらの位置がばれてしまうが、ガジェットドローンの大群が既に前線に出ているのだ。こちらまで簡単に来ることは無いだろう。
「アスクレピオス――インゼクト」
デバイスの名を言ってから、召喚を行う。と、背後の術式から縦状の繭が出現し、そこから指の関節程の大きさの羽虫が飛んでいく。偵察などに用いられ、時には集団を相手に纏わせて翻弄させるという存在だが、この場合は少しだけ特殊だ。
インゼクトの何体かがガジェットドローンに衝突する。するとインゼクトがガジェットドローンのシステムを操作して有人操作に切り替わる。インゼクトは機械ではなくて召喚によって呼ばれた生きた存在だ。故にそれぞれ独立した行動を取ることが出来る。
「さて、ドンパチと行きますか！」

第０９話

ホテル・アグスタの会場にはパーティのようにテーブルで食事などを楽しむダンスホール。そしてオークションが開かれるステージホール。オークションが始まるまではダンスホールにて食事や酒などが振舞われるので、出される食事を遠慮なく食べて腹を満たしていく。富裕層の方々が此方を訝しげに見ていたが、今更気にすることでも無い為無視しておく。

腹も満たされたところで、会場の中をぐるぐる歩いていると見知った人物を見かけた。

「――あれ？　何ではやてちゃんとフェイトちゃんがいるの？」

ホールの扉横で周りに聞こえないようにひそひそと会話するはやてとフェイトを見かける。二人とも一目では分からないほど綺麗なドレスに身を包んで、元が綺麗な上にそれを引き立てる化粧をしている。男が見たら放っておかない美人揃いだ。自分もパッと見気付かなかったが、はやての日本人という外見で確定できた。二人も声をかけたことで此方に振り向き、そして驚いたように目を丸くする。それに手を上げて歩み寄った。

「なのはちゃん！　何でここにいるん!?」

「いやー、ちょっと用事があってね。はやてちゃんとフェイトちゃんはどうしてここに？」

先ほどの真剣な表情での会話から見るに、単に客として来てはいない事は確かだ。恐らく管理局の仕事でここに居るに違いない。そう思っていると、フェイトが此方の傍によって耳元で話しかけてくる。

「……今は任務中で、とある事情からこの会場の警備をしているんだ」

「例のロストロギア関連かな？　だとすると、出品に？」

はやてが作った部隊・機動六課はロストロギア・レリックの確保を目的とした部隊だと、フェイトから誘いがあった時に話は聞いている。その六課がここに警備に来ているという事はオークションの出品にロストロギアがある可能性がある。

小声でフェイトに聞き返すが、その質問にはやてが答えてくれる。
「いや、出品自体には許可が取れた物しか出されてへん。けど、私らが戦闘繰り広げている機械・ガジェットドローンが、他のロストロギアに釣られて来る可能性がある。……そして今、まさに襲ってきている最中なんよ」
なるほど、と声を零して腕を組み、状況を理解する。係員には情報は伝わっているが、騒ぎを大きくしてパニックを起こさないように参加者には伝えてはいないと聞き、はやてとフェイトが隠密になっているのも理解出来る。
「外の防衛は大丈夫なの？」
「今ヴォルケンリッターと、新人達が頑張ってくれてる。問題は無さそうや。……でも……」
はやては少し眉根を歪めて、言葉を区切る。それにどうしたのか訊ねると、困ったように口を開く。
「……どうやら、敵戦力に優秀な召還魔導師がいるみたいでな。そのせいでガジェットドローンも普段とは比べものにならないくらい良い動きしているらしいんよ。しかも転移で防衛ラインまで一気に攻められている状況や。ヴィータが隊長として頑張っているけど、このまま新人達じゃキツイかも……」
「……」
肩も下げて困惑したように見せている。確かに新人達が守る防衛ラインに届かせないようにヴォルケンリッター・ヴィータ、シグナム、ザフィーラが前線で頑張って戦ったとしても、転移で防衛ラインに直接ガジェットドローンを送り込まれたのでは陣形の意味が無い。しかも前線は前線で苦戦している状況らしく、ヴィータが下がれば事態も悪化するのが分かる。
しかし、この程度の事ならばはやては困惑するよりも、もっと他にやりようがある筈である。しかしこのように自分の前でこういった態度を取ると言う事は、明らかに協力を求めて来ている。本当に管理局に勤めている友人は性格が歪んでいくなと思いつつ、その言葉を静かに聞いた後に溜息を吐きつつ踵を返す。

「……？　なのは？」
はやてのわざとらしい誘導に気付いていないフェイトがどうしたのか訊ねて来た為、出入り口の扉を手で押さえつつ言葉を返す。顔だけフェイトに向いて、笑みを浮かべた。
「――――ちょっと、腹ごなしの運動でもしようと思うの」
言って、扉を開けて廊下へと出る。はやてとフェイトが居るのなら、ユーノの事も心配する事はないだろうし、自分よりも上手くやってくれるに違いない。所詮自分は細かい事を考えて行動するよりも単純に力を振るっていた方が正解なのも分かる。その自分の単純さに溜息を吐きつつ、小走りしながらレイジングハートを取り出して話しかける。スーツを汚す訳にはいかないので、バリアジャケットをセットアップした。

◇

ホテルの四方からガジェットドローンの反応が現れたと伝わられてから僅かな間に、事態はかなり進行していた。ティアと合流してバリアジャケットを装備した後に、同じく装備を切り変えたエリオ、キャロと合流する。新人達はホテルの周囲の防衛ラインの死守。ヴィータ、シグナム、ザフィーラのヴォルケンリッターの面々は前線に出てガジェットドローンを近づけないように殲滅する。これにより、前線から零れたガジェットドローンを自分らが撃破するという確実な防衛だったのだが、そうも言っていられない状況になってしまった。
目の前にはガジェットドローンの一型と三型が転移魔法で出現していく様子が分かる。シャマルから聞いた話だと、今回の敵はガジェットドローンだけで無く、キャロと同じく召還魔導師が居るとの事だ。その為ヴィータとシグナム、ザフィーラといった強力な戦力を通り抜けて転移で防衛ラインまで飛んでくる。非常に厄介な状況だ。
現在ヴィータが前線から戻って来ているらしい。それもその筈、この状況では自分達がいくら尽力したとしても防衛ラインが崩れるの

は時間の問題だ。故に召還魔導師を直接潰すことが出来ずに、防戦一方になる。だが、後ろには大勢の人の命があるのだ。他には代えられない。

転移してきたガジェットドローンの対処だが、転移された場所は一まとめになっている為、戦力を分散すること無く殲滅できる。しかし、第二第三波と転移された時は、戦力をスターズとライトニングに分けて行動する。転移魔法の反応はシャマルが監視している為に予め位置を特定することが出来る。故に待ち構えて撃破することが出来る。

先ずは目の前のガジェットドローンの一型複数を殲滅する事にする。ティアがクロスシフトの支持をしてくる。これは言わば自分が囮になって引き付けてティアが横から狙撃するというパターンだ。単純ゆえに確実なコンビネーションである。

ローラーブーツを全開で走らせてから、ガジェットドローンの間をすり抜けるように移動する。流石に召還魔導師が仕掛けを施してあるだけに動きが鋭い。が、これでも自分らにとってはまだまだ予測できる範囲だ。故に問題ない。十分に引き付けてからマッハキャリバーがウイングロードを展開し、それに飛び乗って森林の上を移動する。それに寄ってくるガジェットドローンを、ティアが一斉射撃で全基撃ち落とした。

それを確認してから、ウイングロードをあえて途中で区切って飛び退く。その下に居たガジェットドローン三型に攻撃する為だ。宙に居る間もガジェットドローンは砲撃を放って来るが、自分の視界にはその弾道が見え、それに当たらないように身体を反らしていく。同時、リボルバーナックルを回転させて拳の威力を溜めつつ、落下する。

真下、ガジェットドローン三型の上部にリボルバーナックルを叩き込む。機体に拳が減り込み、内側から破壊するように衝撃を与える。それが仕留めたと分かれば直ぐ様飛び退いて着地すると、ガジェットドローンは背後で爆散した。これで一帯のガジェットドローンは全て撃墜した。

着地と同時にローラーブーツを走らせてティアと合流しようとす

る。だが、その時――――。
『防衛ライン東の方向！　転移反応来るわ！』
「東!?」
シャマルから通信で報告が来るが、東は現在丁度空いている箇所であり、全速力で向かわないといけない場所であった。四人という少人数である故に仕方無い事態だが、自分のローラーブーツを全開で走らせればまだ間に合う地点だ。
『――――大丈夫、既に予測して待機してあるから、焦らず急いで来て頂戴！』
「流石ティア愛してる!!」
優秀なパートナーに感謝しつつ、殲滅パターンを考えながら出現方向へと向かう。だが、嫌な音が背後から響いた。
「……え？」
丁度自分が通り過ぎた林の中から、ガジェットドローンが三体ほど飛び出して来たのだ。その三体はそのまま正面にあるホテルの裏口へと向かって行く。
なぜ気付かなかったのだろうか。ヴォルケンリッターの戦力から逃れたガジェットドローンが、ジャミングを放ってここまで来る事に。慌ててローラーブーツを無理やり横に倒して急ブレーキをかけるが、直ぐには方向展開出来ないの自分の弱点である。
更に最悪な事態が発生する。裏口の扉から一人の女性が出てきたのだ。恐らくホテルの人間か会場の客かだろうが、このままではガジェットドローンの攻撃に巻き込まれてしまう。攻撃も間に合わず、間違いなくガジェットドローンと出てきた人間は接触してしまう。となれば、もう叫んでその人に危険を知らせるしか方法は無い。
大声で、その人に逃げるように言おうとした、その時――――。
――――ガジェットドローン三体が、次の瞬間に粉々に砕け散った。
「……え？」
思わず呆気に取られてしまった。自分の見たものが確かなら、今ガ

ジェットドローンは、裏口から出てきた人間が放った――――素手の拳で砕け散ったことになる。
その女性は、良く見れば白を基調としたバリアジャケットを身につけていた。一体何者なのかと思ったが、女性は頬を人差し指でかきながら此方に近寄ってくる。
「……今の敵って、まだ残ってる？」
「……え？　は、はい！　ホテルの周辺、東の方向に……」
急に訊かれたのもあり、思わず答えてしまう。いや、この人間が魔導師だと分かっていたのもあったからだろう。だが直ぐに報告してからにすればと後悔し、女性に待つように声をかけようとするが――――。
「……さて、行くか」
ボソッと呟いて、女性は次の瞬間には消え去って行った。

◇

扉から出れば、話には聞いていたガジェットドローンが襲ってきたので、とりあえずそれらを拳で粉砕しておく。丁度魔導師が立っていたので、その女性にガジェットドローンの残りの数を聞くと、どうやらホテルの東側に居るとの事だ。東側といえば、確かオープンカフェなどが合った場所だと思い出す。丁度空き時間に施設内をぶらついてよかったと思いつつ、早速その場所に向けて駆け出す。
着いてみれば、その場所には先ほどのガジェットドローンとは違った大型のものが多数存在していた。一人の魔導師が銃で対応していたが、中々通らずに苦戦しているように見える。既に多きなアームパーツを展開していて、暴れると面倒だと分かっている為に、さっさとワンパンで撃墜しておくとする。肉薄し、拳を叩き込む。それだけで大型ガジェットドローンは爆発を起こす。本来は爆発に巻き込まれると服が燃えるといった被害が出るが、レイジングハートが優秀なのでその必要は無く、被害を考察外にして次の行動に移る。
既に卵型のガジェットドローンが何体か接近してきているので、そ

れらを一気に片付けるとする。
「――連続普通のパンチ」
単に高速に繰り出される普通のパンチ。それを食らったガジェットドローンは破片すら残すこと無く消え去る。他から見れば一瞬で粉上にされたと思っているだろう。事実先ほどの銃を持つ魔導師が口を空けて此方を見ている。
「……これで終わりなの？」
その魔導師に訊ねると、はっと気付いた魔導師は答える。
「は、はい！　接近しているのはこれで全部です！」
自分がバリアジャケットを装着しているからなのか、自分を管理局の人間か何かと勘違いしているらしい。恐らくさっきの子とこの子が六課の新人の人たちなのだろうと考える。と、森の方から見慣れた姿が飛んでくる。
「――新人共にしては、一瞬でガジェットの反応が無くなったと思えば……。なんでここにいるんだ、なのは？」
「あ、やっぱりヴィータちゃんだ。久しぶりだね」
片手を上げて挨拶する。それに呆れながら笑みを浮かべて飛んで来るのは、赤い戦闘衣服に身を包んだヴィータだった。

◇

「……ありゃ？　ガジェットドローンの反応が一気に消えちゃった」
「どうやら向こうの部隊には、優秀な騎士が居るらしい」
転移したばかりのガジェットドローンの反応が一瞬で消えた為、軽く目を丸くして驚く。ゼストが何処か嬉しそうにそう言葉を放ったのを見て、やはりこの男は管理局の人間だなと確認しつつ、術式を止めて魔法を止める。ガジェットドローンの数も減った為、これ以上の戦闘は無意味だからだ。
目的の品は先ほど、自分の相棒である召還獣であるガリューに確保して貰った。これでスカリエッティに貸しを作ることが出来る。とりあえず品はガリューにそのままスカリエッティにまで届けるよう

に命令して、自分達は早々にこの場を後にする事にした。
流石にこの開けた場所では、自分も多勢を相手にはしたくない。相手をするのであれば、数が関係しない狭い場所、かつ召還が行える場所が望ましい。
「……ま、何にしても連中と相手するのはまた次の機会かしらね」
フードを被り、ぼやくように言葉を零す。一応ジャミングを施しつつ、ゼストと共にこの場を離れた。

第１０話

「皆に紹介するな。この人は高町なのはさん。私とフェイト隊長の幼馴染で、かつて一緒に戦った仲間や」
「どーも、高町なのはです。趣味で魔導師やってまーす」
　事件後に現場検証を調査班が行っている時に、はやてがなのはの隣に立って新人たち四人に紹介を始める。それに顔を呆けているが、いきなり出てきて圧倒的な力を見たのではそうもなるだろう。
　慣れない挨拶をして、後頭部を手でかいていると、一足先に正気に戻ったスバルがなのはに訊ねてくる。
「あの……もしかして、四年前の火災の時に助けていただいた……」
「え……？」
　スバルの質問に、なのはは何のことか分からずに疑問の声を漏らす。しかし、スバルにとっては自分が強くなりたいと思ったきっかけの人物であるが故に、さらに具体的に説明をする。
「えっと、四年前に起こった空港での火災の事です。その時に、まだ子供だった私を助けてくれたんです。憶えてませんか？」
「ほら、前に私のところに遊びにミッドに来た時や」
「あー……なんかそんなこともあったような……」
　スバルの説明とはやての言葉から、なのははぼんやりと思い出す。しかし、なのはにとっては当たり前のようにした人助けなので、気にすることでも無かった。だが、スバルの顔を見ると、どこと無くこのような子を助けたような気がしてくる。
　しかし――。
「――あれ？　男の子じゃなかったっけ？」
「おと……ッ!?」
　涙目になって感動しようとしていたスバルへのまさかの言葉である。上体を崩して盛大にこける。これには隣に立つティアナも苦笑いである。
「……しょうがないでしょ。あんた今でこそスタイルから見て女だっ

て分かるけど、成長期前なら男と見られても不思議じゃないわ」
「ティアー……」
何ともいえない涙が溢れる。それは間違いなく感動によるものでは無いだろう。そんなやり取りをしている中、エリオが思った疑問をなのはへとぶつける。
「あの、なのはさんって、局員では無いんですか？」
「うん、あくまで趣味だよー」
「趣味で、あんなに強いだなんて……」
あっさりと答えて、堂々と趣味と言い放つなのはに、エリオとキャロも苦笑いしか出てこない。そうしていると、はやてがなのはに向けて話しかける。
「ねぇー、なのはちゃん。これを気に、もう一度だけ六課入り考えてくれんか？　なのはちゃんの為に、隊舎に部屋も用意してあるんよー」
「そんな事を言われても、局に入る気は全然ないの」
いくら頼まれようが局に入って仕事する気はさらさら無い。それは嘱託魔導師だとしてもだ。一度そういう組織に加入すれば一気にストレスでダルくなるのが目に見えている。そう断ると、はやてはそうかと肩をがっくりと落とした。
「そうかぁ……。あ、でも一つだけ頼まれてくれんか？」
「ん？」

◇

場所は変わり、ホテル・アグスタから戻って機動六課の隊舎。その訓練場シュミレーターに展開された廃棄都市に来ている。その場所にいるのはスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてなのはだ。皆バリアジャケットを装着しており、新人たちの前に立つなのはは腰に手を当てつつため息を吐いた。
「なんでこうなるのやら……」
『別にええやん。バイト感覚で新人たちの相手一回だけして』
念話での通信ではやてが気楽そうに言ってくるのに対して、もう一

度軽めにため息を吐いた。
あの後、半場強引にはやてに六課に連れて来られて新人たちの模擬戦の相手をさせられる事に。ユーノは他の局員も来た所で、後から来た査察官と共に本局へと戻っていった。彼もまた地獄のような仕事量に追われることだろうが、それは置いておく。
後から来たフェイトもなのはがいたら心強いということではやての意見に乗ってなのはをここまで連れて来た一人だ。現在彼女たちはヴィータと共に離れたところからモニター越しにこちらの様子を伺っている。
レイジングハートも腹をくくりましょうと言ってくる為、いい加減に意識を切り替えることにする。
「……じゃ、さっそく訓練といきたい所だけど、何すればいいのかな？」
『それについてだが――』
なのはが言ったタイミングで、ホロウインドウ通信で映されたヴィータが口を挟む。皆もウインドウの法へ向き直り背筋を伸ばしている。なのははまじめだなと思いつつ、片足だけに体重を乗せた気だるい立ち方でヴィータに向く。
『はじめに言った通り、模擬戦だからな。新人共にはこれからなのはと戦ってもらう。制限時間一〇分。無論、倒せとは言わない。あたしとやったみたいに一撃当てられればそれでいい。――だが、今回は一撃当てなくとも良いとする。つまりこの訓練クリアしようがしないがどちらでも今後の訓練に影響はしないとする』
「え……それって」
エリオが疑問の声を上げるが、ヴィータは言葉を続ける。
『――だが、もしなのはに一撃入れられたら、お前らの訓練課程を二段階くらい繰り上げにしてやる』
「――――ッ!!」
ヴィータの言葉に、新人たちは皆驚いたように目を見開かせて、ごくりと唾を飲み込む。つまりこの目標を達成すれば一気に一人前に近い扱いになるのだ。自分たちにとってはなんとも近道であり、そし

て恐怖でもある。
この人物――――高町なのはに一撃入れる。それがどれだけ困難かをその言葉ですべて伝えられたのだから。
なのはは頭にハテナマークを浮かべながら、ヴィータに訊ねる。
「つまり、私はただこの子たちの攻撃を避ければいい訳？」
『ああ。面倒になったら死なない程度にダウンさせてもかまわないぜ』
「そっか」
なのはが無表情で言うと、ヴィータのホロウインドウが消える。と、代わりに訓練時間のカウントダウンが開始された。時間が三〇から二九に切り替わる。
「じゃあ訓練開し――――」
言って訓練を始めた瞬間である。なのはに向けて魔力弾が放たれる。迷うことなく早撃ちであり、撃ったのは間違いなくティアナである。常人ならば反応に付いていけないが、なのはは表情を変えずに弾丸を――――上体を反って回避する。
「あっぶな！」
なのははゆっくりと上体を起こしてから後ろの瓦礫に目を向ける。そこにはティアナの弾丸を受けて損傷している瓦礫の様子があった。その驚異的な反射神経にティアナはクロスミラージュを構えたまま絶句している。
「（――――嘘!?　明らかに防御するしかないタイミングよ、ヴィータ隊長だってあれは回避できないのに……！）」
速さに特化したフェイトならともかく、ヴィータも弾丸を弾くなどして接触せざるえない攻撃を、イナバウアーみたいな動きで回避されては驚きもするだろう。しかしすぐさま意識を切り替えてスバルに指示を送る。
「スバル！」
「うん！」
答えると同時に、スバルはティアナの身体を抱えてローラーブーツを走らせてこの場から去る。なのはは別段新人たちに攻撃してもい

いのだ。不意打ちの初撃を仕掛けて回避され、返り討ちに全滅という結果にはしてはいけない。エリオとキャロもこちらの動きを理解し、各々これまでの模擬戦の通りに行動する。

なのはに対して、単発での攻撃が効果が無いのは分かった。フェイト並の速さであるならば、こちらも作戦を変更するまで。

『動きを抑え、同時に攻撃を仕掛ける！』

『『了解！』』

ティアナの指示に皆が答える。

なのはは特に皆を追おうとはせずに、気だるそうにあくびをした。こういった訓練とかは一番苦手である彼女である。自身がトレーニングで強くなったので、新人たちも魔法に頼らないで毎日トレーニングすれば良いのにと思いつつ、このままではヴィータに文句を言われかねないので新人たちを探すことにする。

地面を蹴って、大地を駆ける。それだけですさまじい速さであり、砂埃が一気にあたりに舞う。だが、そんななのはに攻撃する反応が一つある。

「どぉぉおおおおおりゃぁぁぁあああああああーーーーーーッ!!」

突如ウイングロードを展開し、こちらに突っ込んでくるのはスバルだ。ウイングロードを見て、魔法ってこんなことも出来るんだと思っていくなのはへ向かって、リボルバーナックルを回転させて突っ込んでいく。しかし一直線の攻撃がなのはに当たる筈も無く、ひょいっと回避して足をかけてスバルをウイングロードから落とした。悲鳴を上げて落下するスバルだが、ダウンはしていないだろう。

と、思っていると狙撃で弾丸が飛んでくる。ティアナの攻撃であるが、それを視認するまでも無く、次の瞬間には回避していく。

「(あんな……出鱈目な……!!)」

あまりにも動きが凄まじ過ぎる。しかし、フェイトのようなスマートな動きではなく、ただ避けている。それを凄く速くこなしている。それだけの理屈だ。

――――だが、時間を稼ぐには十分だった。

「……ん？」

なのはの足元に術式が展開されたと思うと、そこから鎖が出現する。拘束魔法【バインド】の上級技である。仕掛けたのはキャロだ。一定の位置に目標を固定できれば、うまく捕縛できる。以前これでフェイトの動きを抑えて攻撃し、訓練達成したことがある。キャロの拘束魔法【バインド】がなのはを捕らえたと同時に、エリオが死角からストラーダで突っ込んで来る。さらにスバルも地面を跳躍してなのはへ攻撃を仕掛ける。

だが――――。

「んしょ」

なのははまるで拘束魔法【バインド】を紐か何かを引きちぎるかのようにして、簡単に破ってしまったのだ。皆が驚愕するが、すでに突っ込んでいるエリオとスバルは動きを止められない。その隙をなのはが見逃す筈も無く、双方の胴部に軽く拳が当たる。

それだけでエリオはビルの壁に、スバルは地面に突き刺さって動かなくなる。目をぐるぐる回して、気絶しているのは明らかだ。その二人の光景にティアナは驚愕する。普段あれだけボコられても気絶しない二人が、一見軽そうな拳一撃でダウンしたのだ。

キャロも目を丸くして驚いているが、すぐになのはに場所がばれてしまい、目の前になのはが現れる。そして、軽くデコピンをキャロに当てると、それだけでキャロは目を回して気を失った。

あっという間に三人がダウンしてしまったのだ。

「(……お家帰りたい)」

そう思い、もはや現実逃避したくなるティアナの後ろに、いつの間にか背後に立っていたなのはによって手刀を当てられ、他三人と同様に目を回して気絶した。

◇

開始三分で終了してしまった模擬戦を、はやて、フェイト、そしてヴィータが苦笑いしながら見ていた。

「……ま、そりゃこうなるわな」
ヴィータが苦笑いを浮かべてそう言葉を零すと、はやてとフェイトもそれに頷く。
「せやなー……なのはちゃんがわざと攻撃を当たらない限り、あの子らが攻撃当てるなんて無理な話やなー……」
「まあ、これで新人たちになのはがどんな人物なのかは分かって貰えただろうけど……」
はやてとフェイトがそう口にする。実際はやてとフェイトは以前になのはと模擬戦をして、何度か攻撃を当てたことがあるが、それは空間ごと攻撃するなどの半場確実な攻撃である。しかし、それでもなのはにダメージを与えたことは一度も無いため、ある意味新人たちと結果は変わらなかったのだが。
「もしあいつらがなのはに攻撃当てたら、あたしより強ぇーわ……」
戦闘スタイルの関係から、同じ条件ならヴィータですら攻撃を当てられないと分かっている。その為、ひたすら苦笑いするしかなかった。

第11話

なのはとの模擬戦から数日が経ち、新人達の訓練もより厳しくなってきた頃。スバル、ティアナと両名はヴィータに個別に指導して貰い、エリオとキャロはフェイトやシグナムが合間を見て訓練に付き合っている。スバルはアタッカーとして防御のし過ぎについて注意を受けて、ティアナは若干無茶しすぎな様子だったので、そこはきっちりとヴィータが鉄槌と怒号で厳しく指導する。一方エリオとキャロはフェイトに回避動作の基本と応用の動きを習い、シグナムには接近戦での立ち回りを教わる。

そして本日、午前中に行われたのはヴィータとシグナムの両名と、新人達との模擬戦であり、難関だった壁であったが何とか合格を貰うことが出来た。これで訓練第二段階終了となり、デバイスにかけられたリミッターも一段階解除される。

衝撃的だったのは、訓練第二段階終了を告げられた後だった。

「――――え？　明日から？」

「そう、訓練再開は明日からだ」

訊ねると、ヴィータは腕を頭の後ろで組んで横を向いてから目を瞑り、表情に笑みを浮かべてそう言って来た。同じく微笑むフェイトがその言葉に付け足しで口を開いてくる。

「皆この頃、訓練続きだったからね。今日は私たちも個別に仕事があるから、今日はお休みだよ。久しぶりに街に遊びに行って、楽しんで来てもいいよ。……あ、でも寝たいなら隊舎で休んでもいいからね？」

そう言って来るフェイトに、まるで疲れが吹き飛んだように元気よく喜ぶ新人たち。隊舎で休む時間は定期的に取ってくれているが、外出許可を貰えたのは今日が初めてだったのだ。これで遊びに行かない選択肢など、四人には無い。

その後直ぐに解散と言われて、早速四人は隊舎へと向かって行く。その様子を、ヴィータは笑みを浮かべて腕を組んで見て、

「げんきんな奴らだなー……」
「そりゃ、あの子たちもまだまだ遊びたい年頃だろうし、街に行けるとなれば元気にもなるよ」
　言って、もう一度笑みを浮かべてから、新人達に続いて訓練シュミレーターから退き、階段を上がる。森に構築されたシュミレーターが元の平らに戻っていく。それを見届けながら、ヴィータはスバルとティアナの訓練のデータを確認し、フェイトもエリオとキャロのデータを見ていく。

◇

　食堂にて昼食を取ってからは私服に着替えて、早速ミッドの街中へと向かう。スバルが着替えるなり準備している間に、さっさと着替えを済ませて先に外に出るティアナ。隊舎の裏にはガレージがある。車両の整備などここで行われているが、今この場所に居るのは一人の男性。ヴァイスだ。彼は赤いカラーの大型のバイクを整備をして、調子が良さそうなのを確認して、よし、と声を漏らす。ガレージに近づいてくるティアナに気付き、ようと腕を上げて、
「こっちは準備完了だぜ。燃料も問題なし、エンジンもばっちりだ」
「ありがとうございます、ヴァイス陸曹」
　なぁに、と言ってから腕を腰に当ててからティアナの表情を見る。ヴァイスは新人達の事を影から見守っていた人間だ。ティアナが訓練で悩んだ時に、何気ないアドバイスをしたのも彼である。ヴァイスからヘルメットを受け取った際に、表情を若干曇らせて、
「……ヴァイス陸曹って、本当は魔導師の経験はあるんじゃないですか？」
「そりゃ、入局するのにある程度魔導師として成績残さないとな」
「でも、あの時のアドバイスは、他人からの言葉よりも、経験から言える言葉だと思うのですが……」
　まあ、と言いつつ工具を片付ける。棚に仕舞いつつ、
「どっちかって言うと、俺もお前さんと同じで、狙撃するタイプだった

からな……。同じタイプだと、何かと見えるものでな。つい気になっただけだよ」
　言ってヴァイスが粗方の物を片付け終わり、手袋を外したタイミングでスバルが駆けつけてくる。ヴァイスはティアナと同じヘルメットを彼女に投げ渡すと、
「ありがとうございます！」
「おう、日が暮れる前に、休日楽しんで来い！」
　これ以上は時間の無駄にするだけだという意味も込められているのだろう。それを察したティアナもシートに跨り、エンジンの動作を確かめる。スバルもティアナの後ろに座って準備を済ませる。最後にヴァイスの方へ向いて、行って来ますと言ってバイクを走らせた。
　街中へ向かうにはそれなりに山道もある為、ティアナは自分の経験を生かしてドライビングテクニックを披露する。後ろでスバルが楽しそうに声をあげる。
「気持ち良いね！」
「しっかり掴まってなさいよ！」
　言うと、ティアナは急なコーナリングに向けてスピードを上げていく。重心を傾けて、コーナーを曲がって行く。抜けてから、スバルが口を開き、
「街に着いたら、何する？」
「そうねぇ。あんたは何かしたいことある？」
「んんー……とりあえず、アイス食べてから考える！」
　了解、と言葉を返してから、ティアナは更にスピードを上げて走り出す。
　程なくして、街中へと到着する二人。スバルとティアナは早速街にある駐車場にバイクを停めてから、以前から大好きだったアイス屋にてアイスを注文する。
　ティアナが頼むのはコーンにアイスが二つ乗った普通のものであるが、スバルの頼んだアイスはかなり多きなワッフルコーンにアイスが五つも乗った大盛りなものである。常人であればアイスを食べる前に解け始めて悲惨な事になる代物だが、スバルはそのアイスを一口

で一玉食べるという恐ろしいスピードで平らげる。流石にスバルが大食いだと知るティアナもこれには苦笑いをせざるえない。近くにあるベンチに腰掛けてアイスを食べていると、スバルがティアナの方に顔を向けて口を開く。
「食べ終わったらさ、ゲーセン行こう！」
「いいわねー」
横を向いて、言葉を返す。訓練校の時によく二人で遊んだのは主にゲームセンターだ。陸士部隊に入ってからは仕事の関係でこういった外出も無く、行く機会も無かった為、本当に久しぶりに遊びに行く事になる。今日は特に目的も無く街で遊ぶというアバウトな予定の為、思いついたらそれを行動していく。
ティアナがアイスを食べると、同じタイミングでスバルも食べ終わる。よくアイスを早食いできるなと思いつつ、二人はゲームセンターへと向かう。

◇

エリオとキャロは基本徒歩で、公共交通手段などを利用して街中へと向かう。エリオとキャロはフェイトから凄い心配をされていたが、二人も局で働く人間であり、殆どの事は問題無い。
駐屯地前にあるバス停からバスに乗って利用し、駐屯地エリアから駅まで移動してから、街中に向かう電車に乗って数十分でミッドの街中へ到着する。人が賑わう駅である為、改札口はかなり混雑している。エリオは元々本局育ちである為、こういった場所の利用も珍しくは無かったので平気なのだが、キャロは街の中心に来たことが殆ど無いので、人の勢いに呑まれつつあった。
「ほら」
「あ、ありがとう」
安心させる為に手を握ってから、何処に行けば良いのかを案内する。いくら親切心とは言っても、エリオも年頃の為に女の子と手を握るのは気恥ずかしい為、若干顔を赤らめて改札口を潜る。一方キャロ

も同様で、顔を下に俯かせて転ばないように改札を通った。駅構内は基本的に人が沢山いる為、一旦外に出て落ち着くとする。
駅から数分歩いた所に広場があり、そこにあるベンチに腰掛けて休むとする。エリオは飲み物を買いに、近くの自動販売機に向かってジュースを二つ買ってベンチに戻る。そこで待たせたキャロにジュースを渡してから、隣に座る。
「キャロは、街に来るのは初めてだったり？」
「ううん、フェイトさんに連れられて何度か。……でも私、田舎育ちだから、どうも慣れなくて……」
苦笑いを浮かべるキャロに、エリオも笑みを返しながら口を開く。
「キャロの育ちって、竜召還の……？」
「うん、代々継承する村なんだけど、私の場合はこの歳でフリードを従える力を持っていたから、追い出される形になっちゃって……。そこからは嘱託魔導師として管理局で働いて、フェイトさんに保護されたから」
キャロの育ちや召還魔導師としてどう触れていったかを、以前に四人で話した事がある。最初聞いた時は重い内容故に皆沈んだ様子だったのだが、キャロ当人が余り気にした様子ではなかったので、此方も気にしないようにしていた。
「でも本当に、フリードを従えるって凄いと思うよ」
「まあ、フリードはずっと私と一緒にいたから、家族のような部分もあるしね。……でも、問題は」
「――ヴォルテール、だっけ？」
訊くと、キャロはこくりと頷いた。
ヴォルテール――キャロが受け継ぐ竜召還の一番の強さを誇る竜である。しかし、キャロはこれをまだ上手く召還できていない。フリードはそれこそ生まれからずっと一緒にいたからだが、ヴォルテールは代々受け継ぐ伝説の竜である。召還師が未熟では到底従ってなどくれない。キャロが村から追い出された二つ目の理由である。
「……けど大丈夫だよ。僕達は今、確実に強くなっていっていると思うし、まだまだ色んな事を経験して、成長出来るんだからさ！」

励ますように言うと、キャロも元気よく頷く。考えてみればエリオとキャロはまだ一〇にも満たない子供なのだ。普通に考えれば、彼等の年齢でここまでの実力があるほうが珍しく、才能があると言わざるえないだろう。故に焦ったり、落ち込む必要など無い。今後、しっかりと経験を重ねて強くなればいいのだ。

が、それはそうと、今日は折角の休日だ。エリオはベンチから腰を上げて立ち上がり、そのままキャロに向けて手を差し伸べる。

「その為にも、今日は息抜きしようか！」

「うん！」

手を握るのも、慣れてしまえば結構簡単なものだと気付き、エスコートするようにしてキャロと歩き出す。とは言っても、デートの予定は参考にシャーリーから聞いているのだが。

◇

ゲームセンターで気持ちよく遊んだ後に、小腹を満たすために近くの店でたこ焼きを買い、それを適当に橋の上に来て食べる。たこ焼きというものは元々管理外世界の地球から取り入れた料理の一つであり、俗に言う地球ブームのものの一つだ。

ミッドチルダは確かにどの世界よりも最も技術が優れている世界だが、その反面に文化というものが乏しく、今のミッドチルダの殆どの文化は他世界から取り入れたものが殆どである。中でも地球の文化はとても好評であり、今ではミッドの文化にすっかり馴染んでいる為、今の世代の子供はこれが地球のものだとは分からないだろう。

ジュースもそれぞれ買っている為、二人はそれぞれ手に缶を持って、たこ焼きが詰まった箱は適当な場所に置いて、それを爪楊枝で指して口に運ぶ。手すりに寄りかかり、後ろを向くティアナに、スバルがたこ焼きの一つを口に運ぶと、彼女はそれを素直に口に入れる。旗から見れば、二人の姿は何処にでもいる学生そのものである。

「それにしても、本当にこんなのんびりするの久しぶりねー……」

「そうだねー……六課に居る時は本当に大変な毎日だから」

言って、たこ焼きを口に運んでその味を楽しむ。するとティアナが眉根を八の字に曲げて、心配そうに訊ねて来る。
「――そういえば、あんた自分の身体、無茶させ過ぎていない？」
「え？　……ああ、うん、大丈夫」
「……それなら、いいんだけど」
新人の中でも、スバルは特に身体張っているポジションに居る。故にスバルの身体に一番負荷が掛かっているのは明らかだ。もしいざという時に問題が出れば大変な事になる為、少しでも不調があるならばきちんと診察を受けるべきだ。まあ、本人が平気だと言っているし、ちゃんと診察を受ける予定があるのならば、問題は無いだろうが。
そんな風に、六課での自分達の生活を振り返っていると、やはり色々と思うところはある。
最初の頃の自分達は、はっきり言って現場で何の役にも立てない人間だったに違い無い。予めの目標やするべき事が分かり、そして情報があるのが前提にした動き。模擬戦だったら優秀だろう。しかし実戦というのは現場の緊張は勿論、目的やするべき事など直ぐに変化していく。そうなればパニックになるのは当然だ。だから六課での訓練で、その自分達のスタイルが一蹴された。
目標は常に変わり、尚且つ自分達に任せられる。どれが正解かも判断し、そして常に最悪の事態を想定された内容の訓練。そして極めつけは実戦よりもキツイ模擬戦。常に痛めつけられるのは本当に心が折れたが、それが経験となって実戦では恐ろしいほど冷静に行動する事が出来た。自分達は確実に強くなってきている。
だが、そこで先日あったなのはとの模擬戦を思い出すと、一気に表情を苦笑いせざるえない。
「……高町なのはさん。本当にあの人何者なのよ……」
「管理局員では無くて、趣味で魔導師をしている。って事くらいしか分かってないけどねー」
最後のたこ焼きを食べ終わり、ジュースも飲み干したところでそのゴミを捨てる為にゴミ箱へと近寄ってから、分別して捨てる。次は何処に行って遊ぼうかと考えて居る時に、ふとティアナの身体を通り越

して向こう側に、見覚えのある人物を見かける。
「あれ？　噂をすれば、なのはさんがいたよ！」
「ええ!?」
　スバルが指を指しながら言うと、ティアナも慌てたように振り替える。するとそこには確かに人混みの中を歩くなのはの姿があった。シャツにジーンズとラフな格好をしているが、本人で間違いない。するとなのはも二人の視線に気付いて、視線が合う。なのはは二人に駆け寄った。

「スバルとティアナ、偶然だねー。今日はお休み？」
「はい」
「なのはさんは、今日はどういった用事でここに？」
　フレンドリーに話しかけてくるなのはに、二人も気楽に話せる。なのはは局員では無いので、遠慮することがあるとすれば歳の差くらいだが、彼女達の年齢差はたったの三つである為、そこまで畏まる必要も無い。ティアナがなのはがどういった用で街にいるかと尋ねると、いたって普通に買い物がてらに散歩と答える。一体どうやって生活費を稼いでいるのか気になるところだが、それを訊ねる前になのはが尋ねてくる。
「エリオとキャロもお休みなのかな？」
「あ、はい。今日は新人達皆休みを貰っています。……と」
　丁度その時に、ティアナのデバイスとスバルのデバイスに、キャロから連絡が来る。こちらもそろそろ二人が順調に街で遊んでいるかどうかを訊ねたいと思っていた所だった。
　だが――――。
「え？　緊急通信？」
　緊急の全体への通信。それは六課で待機している司令室にも繋がる文字通りの緊急通信だ。これを繋いだという事は非常時なのは間違いない。恐らく街中で通信を行っているために、映像は繋げずに音声だけの通信を行っている。通信情報を見ると、二人が現在ここからそう遠くない路地裏に居るのが分かる。通信を繋げ、集中する。

『ライトニングから司令室へ！　今、送った情報の路地裏にてロストロギア・レリックを確認しました！　そして、レリックと一緒に、鎖で繋がれた女の子も発見！　指示をお願いします！』

第12話

エリオとキャロが異変に気づいたのは、店を何件かウインドウショッピングした後だった。街を歩いている人の波に従い、次の場所に移動しようとした時に、エリオが人並み外れた聴覚で、確かに音を聞いた。

ゴト、という鈍いを音を。エリオは眉根を歪め、

「……キャロ、何か変な音聞きこえなかった？」

「変な音？」

首を傾げる。エリオに比べ、キャロは異変には気づいていない。この街中の騒音である為、些細な音など気にする人間はいないだろうが、エリオにはそれと同時に魔力反応を感じ取った。辺りを見回して、その反応の元を探る。それが路地裏から近づいてくると分かり、駆けて行く。

ビルの間に位置して、薄暗い路地裏へと来ると、マンホールが下から開けられる。

そこには、小さな女の子が出てくる。汚れた身体にボロボロの布切れを身に纏い、息を切らして衰弱している。

直ぐに駆け寄って、女の子の元へ行く。地下から上がったところで女の子は気を失い、キャロがすぐさま身体を抱きかかえる。驚くべきなのは、その女の子の腕につながれた物だった。四角いケース。これは見たことがある代物。ロストロギア――レリックだった。

すぐさま状況の深刻さを理解し、キャロは緊急通信で全体へと状況報告する。直ぐに通信の向こうからはやてが応答し、その場で警戒しつつ、待機を命じられる。スバルとティアナにも直ぐに二人と合流するように命じた。

それから数分もしないうちに、スバルとティアナが現場に駆けつけてくる。その際に二人の後ろから見慣れた姿を目にする。高町なのはだ。

「エリオ、キャロ！　状況は？」

ティアナが軽く息を整えながら訊ねてくる。キャロは事の説明をし、エリオが鎖に繋がれたレリックについて説明する。既にキャロが封印処理を行っている為、暴走の危険性は無いが、鎖に繋がれたその形状から、レリックはもう一つあったと説明する。恐らく地下に落ちてしまったと考えられる。

とりあえずは、現在ヘリで応援が駆けつけている為、それまでの現場の警戒である。一通りの流れを済ませた為、キャロは聞きたかったことを口にする。

「えっと、それで何でなのはさんが？」

「あ、やっと喋れる！　やっほーエリオ、キャロ。久しぶりと言いたいけどそうでもないか」

片手を挙げてフランクに挨拶をする。それにエリオとキャロが苦笑いを浮かべ、スバルがなのはと偶然会った事を説明する。緊急通信が入った時に、現場に向かう際になのはに一緒に来てくれませんかと聞いたら「いいよ暇だし！」と軽いノリでここまで来たのだ。――まあ確かになのはが居た方が凄く安心感がある。

新人たちにとって、今のところなのはへの認識ははやて、フェイトに並ぶ実力を持つ人物というもので、とても頼りになる感じがある。

しばらくすると、音声通信ではやてから連絡が来る。繋いで応答すると、はやては緊迫した様子で、

『皆、今シャマルとリイン、そしてフェイト隊長がそちらに向かっているから、それまで何があってもその子とレリックの死守を頼むな。咄嗟のイレギュラーで、心細いのもあると思うけど――』

言葉の途中で、ティアナがいたって平然に、あっと言葉を漏らし、

「大丈夫です。それに今、現場には偶然居合わせたなのはさんが居ますし」

『――なら大丈夫やね！』

手のひらを返したように、言葉の緊迫感が抜けて平然に戻った声色で言葉を返して来る。正直新人たちで現場待機は若干不安だったが、経緯はともかく、なのはが居るのなら安心である。

◇

しばらくして、近くのヘリポートに着地させて、シャマルとツヴァイ、フェイトが現場に駆けつける。当然三人はなのはが居ることに驚き、軽いノリで手を上げて挨拶してくるなのはに苦笑いを浮かべる。
「何でなのはがここに？」
「ん、散歩してたらスバルとティアナに会って、暇だから付いてきた」
「あー……」
フェイトは眉根を八の字に曲げて、納得したように声を漏らす。隣に浮遊するツヴァイも同様だ。
直ぐにシャマルが女の子の容態を調べる。緊急の医療キットで検査をしながら、しばらく経つと、ふうと声を漏らしてから口を開く。
「かなり衰弱しているけど、特に異常は見られないわ。命に別状も無し！」
その言葉に皆安堵して胸を撫で下ろす。レリックと女の子はこのままヘリで運んでいくことにして、フェイトとツヴァイもその護衛に付く。新人たちはこのまま地下水路を探索し、レリックの回収任務に移る。
フェイトはなのはに視線を向け、
「なのは、ごめんね。協力お願いできる？」
「うん、この子達の手伝いをするよ」
笑顔で了承すると、フェイトも笑みを浮かべて礼を言う。そして路地裏に新人たち四人となのはが残り、早速デバイスを起動して各々バリアジャケットを展開する。既に近隣には避難指示を出しており、魔法使用の許可も出た。
さて、と声を上げてから、なのはもレイジングハートに合図してバリアジャケットを身に纏う。五人で向かい会うように囲ってから、ティアナは困惑気味に視線をなのはへと向ける。指示などは自分がしてもいいのだろうかという事だ。なのははそれを察してから笑みを浮かべ、
「あ、私指示とかそういうの向いてないから、そういうのはティアナに

任せるよ」
「分かりました！」
確認も取れたところで、早速ティアナが指示を出す。このまま地下に降りてから、キャロのサーチでレリックの反応を追って探索することになる。司令室（ロングアーチ）に言われたように、すぐにガジェットドローンが出現することだろう。
警戒をしつつ、確実にレリックを確保することだ。
マンホールから地下水路に降りて、一体の場所をクリアリングしつつ、早速探索するとする。人数はこのまま集団で移動し、下手に手分けして探すことはしない。反応を便りに、水路を進んでいく。当然のことだが、辺りはかなり暗いため、魔力で視力を挙げつつ奥へと進んでいく。すると、
「――――ッ！　ガジェット反応、来ますッ！」
キャロが分かれ道に入った際に警告をする。それぞれの方向から反応があると知らせた。皆は一旦一本道へと下がり、迎撃態勢へと構える。衝突までの秒読みをして、それぞれデバイスを構える。
次の瞬間、暗闇からガジェットドローン一型が数基現れる。と同時に、ティアナが先制攻撃にマルチシューティングを行い、キャロの魔力保護もあって一気に撃墜する。だが、煙の向こうにはまだ反応がある。そこにスバルがローラーブーツを走らせて突っ込む。リボルバーナックルを回転させてから煙に突っ込み、同時に煙も霧散する。そこに居たのはガジェットドローン三型。
反応から居るのは分かって居た。故に力を溜めたリボルバーナックルを引き、それを前に突き出す。ガジェットドローンがこちらに迎撃姿勢をとる前に、その躯体の中央に拳を突き当てて、そのまま振動で全体を破壊する。爆発の勢いを利用して後方へと一回転し、着地する。
一方で後方からもガジェットドローン一型が迫るが、これはエリオが問題なく撃破して、第一衝突は問題なく迎撃完了する。基本的に新人たちの後ろでなのははその様子を見届ける。なのははへぇ、と新人たちの動きを自分なりに観察して感嘆の声を漏らした。

「皆、前よりもかなり強くなっているじゃん！」
「ありがとうございます」
揃って礼を言う。ティアナの指示で、なのはには極力自分たちが処理できなくなったいざという時に助けに入るということになっている。相手が新人たちで対応できる範囲ならば、これは彼らにとっても良い実戦経験を積める機会であるからだ。
場所をクリアリングして、先に進むとする。すると司令室（ロングアーチ）から通信が入り、ティアナがそれに応じる。内容はこちらに助っ人が入るというものだ。助っ人は陸士部隊所属のギンガ・ナカジマ。スバルの姉である。
司令室（ロングアーチ）の通信の入れ替わりに、ギンガ本人から通信が入る。
『――こちらギンガ・ナカジマ。聞こえる、ティアナ？』
「はい、お久しぶりになります、ギンガさん」
移動しながら通信を繋いで、ギンガと言葉を交わす。ギンガは笑みを含めつつ、
『挨拶は後でゆっくりとしましょう。それより――』
「はい、合流ポイントをこちらで指定します。そこで合流しましょう！」
『了解』
通信を切る。そこでなのははスバルに視線を向けて、
「ギンガ・ナカジマって……？」
「はい、私の姉です！」
横を走るスバルが笑顔で答え、ティアナが補足するように口を開く。
「ギンガさんはスバルのお姉さんで、私たちの上官に当たる人。スバルにとっては魔法の先生でもある人です」
「へえ、そうなんだー……」
ナカジマという苗字から姉妹かなと思った為、ふと思ったことだ。そういえば、空港火災があった時も、確か姉妹がどうのとうっすらと思い出す。なのはがスバルを助けて、フェイトがギンガを助けたのが事実だ。そういった意味では、ある意味なのはは初対面では無いのか

もしれない。
思考しつつ、先を急いでいると、第二派のガジェットドローンの衝突が来る。先ほどと同様に、皆迎撃態勢に入った。

◇

上空では状況がかなり変化している。ヘリの護衛として空で待機していたフェイトだったが、空からのガジェットドローン二型の襲撃が分かると、それの迎撃でフェイトが出撃する事になった。海から来るガジェットドローンの数は分隊に分かれて相当数あり、囲まれたら結構厄介だ。
だが、陸士部隊の方に行っていたヴィータが緊急で戻って来て前線に参加した為、二手に分かれて迎撃する。ツヴァイもヴィータのサポートに回る為に出撃する。ヘリに関してはシャマルが乗っているので、大抵のことであれば問題は無い。
空から来るガジェットドローンはフェイトが。海から来るガジェットドローンはヴィータとツヴァイが。地下は新人たちとギンガ、そしてなのは。戦力も良いように分かれて順調に撃破して言ったが、ここで問題が発生する。
突如、空からガジェットドローンの増援がやってきたのだ。その数は第一波の二倍どころの話では無く、何十倍との数だ。一瞬で沸いて出てきたとしてはありえない数だ。
試しにザンバーで横に凪ぐと、数基は実機だが、ほとんどが幻影の類である。しかし反応はどれも一緒であり、見分けは付かない。司令室（ロングアーチ）でも必死に情報解析しているが、正直いっぱいいっぱいである。
ザンバーでの一斉撃破でも取りこぼしが激しくなる為、防衛ラインを突破される危険が出てくる。どうするかと思考していると、
『フェイト執務官、部隊長命令や、防衛ラインの迎撃に回って！』
「はやて！　その姿!?」
通信でつながれたホロウインドウ。そこに移っていたのは制服姿

のはやてではなく、騎士甲冑に身を包んだはやての姿だった。背後の空から、現場に居ることが分かる。恐らく自前の転移でここまで来たのだろう。

『私が広域魔法を放って一気に数を潰す。フェイトちゃんは防衛ラインで迎撃しながら、ヘリの護衛を頼みたいんよ。……何か嫌な予感がするんや』

「――了解！」

はやての言葉に、フェイトは頷いて命令に従い、防衛ラインまで下がる。

フェイトが下がったのを確認してから、リンカーコアに意識を集中させた。次の瞬間に身体から白く光る魔力があふれ出てくる。

さて、と声を上げてから夜天の書を展開し、ページをめくる。

「……さて、久しぶりに超広域砲撃魔法、いってみよか!!」

第13話

何回目かのガジェットドローンとの戦闘。新人たちはそれぞれ役割を果たして、順調に撃破していく。

ティアナが援護射撃をしつつ、スバルとティアナが前に突っ込む。もとより狭い水路だということもあって、囲まれる心配は無い。故にスバルの中距離砲撃は確実に一型数基に被弾し、エリオのストラーダも三型の躯体の中心を貫く。爆散と共に後方へと跳び退いて、キャロがタイミングを合わせてフリードに炎を吐かせる。それにより残りのガジェットドローンも消滅していく。

炎といっても、水路は密閉ではないので窒息する心配は無い。故に焦げ臭くなるだけだ。元からひどい悪臭がしているので今更である。

先に進んでギンガとの合流ポイント着くと、そこには丁度ガジェットドローンを始末したギンガの姿があった。スバルと同様で左手にリボルバーナックルを装備し、マッハキャリバーと同型のデバイスの為、その足にはローラーブーツが装着されている。初見の印象としてはスバルが男勝りなら、ギンガはきれいな女性である。

「ギンガさん!」

「ティアナ、それにスバルも」

笑みを浮かべ、スバルとティアナはギンガに駆け寄って話しかける。エリオとキャロ、なのはも後に続いて歩み寄った。三人に向かい、ギンガは自己紹介をする。

「陸士一〇八部隊捜査官、ギンガ・ナカジマ陸曹です」

言うと、エリオとキャロが慌てて背筋を伸ばし、敬礼しながら、

「ライトニング分隊、エリオ・モンディアル三等陸士!」

「同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です!」

丁寧に挨拶を済ませると、ギンガも軽く敬礼を返す。すると奥に居たなのはと視線が合った為、疑問に思ったギンガは口を開き、

「それで、あなたは?」

その問いに、スバルが代わりに答える。スバルはなのはの方へ手を

向けてから、
「高町なのはさん。はやて部隊長とフェイト執務官とは幼馴染で、昔私を助けてくれた人！」
「ああ、あなたが……！　その節はとてもお世話になりました！　スバルの姉の、ギンガ・ナカジマ陸曹です」
　どうやらスバルから話は聞いていたのだろう。目を丸くして驚いたような表情を作りながらも、直ぐに切り替えて名前を名乗るギンガに、なのはは手を差し伸べて握手を促しながら、
「どうも、高町なのはです。趣味で魔導師やってるの。改めて宜しくね、ギンガさん」
「はい！　えと……趣味？」
　自己紹介と共に握手を交わす。ギンガは趣味という単語に疑問を感じたが、ともあれはやてとフェイトの親友、そして過去に助けて貰った命の恩人なのだから、これ以上にないくらい頼もしいのは確かである。
　ギンガはさて、と辺りを見渡したところで皆を見た後、
「それで、現場の指揮は？」
「あ、私です」
　ティアナが手を上げて答える。なのはは先ほどと同じ言葉をギンガに言って、今までの状況をティアナが説明する。ギンガはそれを全て聞いた後に、了解、と言葉を漏らしてから腰に手を当てて、
「なら私もティアナの指揮下に入るわ。宜しくね」
「はい！」
　敬礼し、了解する。

◇

　程なくして、ギンガを加えてからはさらにスムーズにガジェットドローンを撃破していく。姉妹とあってかギンガとスバルのコンビネーションはとても良い。ガジェットドローン一型は問題ないのは当然として、三型もギンガがアームを押さえている間にスバルが一撃

で仕留める。その為、他の三人がフルでサポートに回る形となった。
だが、ギンガが強いといっても、さすがにガジェットドローンが弱いと感じてしまう。今回はレリックが二つも現場にあった状況なのだ。もう少し大変な状況になっても不思議ではない。現に空のほうでは隊長たちが苦戦している状況である。
嫌な予感がすると感じたティアナ、そしてギンガは意見を合わせて、早々にレリックを見つけて確保する必要があると考え、向かうペースを早めていく。地下水路の壁に書かれた都市部の区域を示す表示を見て、なのはが、あ、と声を漏らし、
「ここ、私の家がある丁度真下辺りかな？」
その言葉にスバルが意外そうな表情を作り、
「なのはさんって、廃棄都市区画に住んでいるんですか？」
「うん。生活費安いし、静かだからねー」
その言葉に皆苦笑いしか出てこない。好き好んで廃棄都市に住む人間はほとんど居ない。それこそ金に困ったホームレスや、情報屋のいい隠れ家など悪いイメージしかないからだ。
しばらくすると、広い空間にたどり着いた。各水路から来た水と、豪雨の時に逆流しないために作られた貯水空間だ。キャロの反応ではここにレリックがあるらしい。だが、この暗闇と広さだ。いくら目を凝らしていても見つけるのは困難だ。
しょうがない為、ティアナは手分けして探すことを指示する。もちろん何か以上があれば直ぐに集合することと添えて。
そして数分経つと、ようやくキャロがレリックのケースらしきものを肉眼で確認し、それを手にとって確かめて発見する。
「ありました！」
言うと、早速皆キャロの元へ駆け寄る。だが、その途中で妙な音が鳴るのに気づき、一旦歩みを止めて警戒する。空間の支えになっている各柱の上部に、叩くような音が響く。それが徐々にキャロの方へ向かっているのに気づいた時には、遅かった。
「きゃあ!!」
見えない何かがキャロに打撃を加えて、キャロの身体は吹き飛ばさ

れる。それを直ぐにエリオがカバーするが、その衝撃でキャロの背後に回って衝撃を和らげる役割をすることしか出来ず、柱へとぶち当たる。

微かな魔力反応から察し、その何かに向かってギンガがリボルバーナックルを振るう。が、何かはそれを瞬時に避けて見せる。その衝撃で不可視効果が切れたのか、姿は肉眼で確認できる。人型であるが、人間では無い。まるで甲殻類の何かが人の形をしているようなものだった。

襲撃者が着地すると同時に、スバルが突っ込んで蹴りを食らわせようとするが、その攻撃は安易に回避されて互いににらみ合う形となる。

エリオが身を挺してくれた為、直ぐに立ち上がったキャロは慌てて落としたレリックの元へ駆け寄るが、そのレリックも新たに現れた人物によって拾われる。視線を上に向けて人物を見ると、自分とそう歳も離れていない少女だ。黒いドレスのようなバリアジャケットに身を包ませ、自分と同じ召還用のデバイスを手に装備している。少女は一歩遅れたキャロに手をかざし、掌から魔力光を放ってキャロを吹き飛ばす。

「――――悪いねー、レリック(これ)はうちらが貰うから」

言って、少女はケースを懐に抱えてそのまま立ち去ろうとする。駆けつけようとしたスバルも襲撃者に蹴り飛ばされる。だが、不可視魔法を使えるティアナが少女の背後に回ってから、クロスミラージュを短剣にして少女の首筋に当てる。

「悪いわね。レリック(それ)はこちらが預かるし、貴女の身柄も拘束させて貰うわ」

少女は横目でティアナの顔を見る。少女は今完全に拘束されている状況だ。襲撃者が少女を助けようと意識した隙を狙って、ギンガが一瞬で肉薄して壁へと吹き飛ばす。下手な動きは出来ない。

なのはから見ても、一変した状況はこれで方がついた。

だが、次の瞬間に魔力で構成された閃光弾が炸裂する。それにより視界が潰れ、あらかじめタイミングを見計らっていた少女は視覚、聴

覚を魔力でシャットアウトさせていた為、直ぐに拘束から抜けてその場から離れる。
　まだダメージが抜け切っていないティアナが少女にクロスミラージュの銃口を向けるが、そうはさせまいと襲撃者が跳び蹴りを放ってティアナを壁に向かって吹き飛ばす。直ぐにスバルがティアナの援護に入り、エリオ、キャロ、ギンガも態勢を立て直す。
　正面には先ほどの少女、そして黒い人型の甲殻類。さらにそこに小さな影が追加されていた。
「――もう、ルーもガリューも、あたしや旦那を無視して行動するからピンチになるんだぞー」
　閉鎖的な空間の為、その小さな影が放った声が聞こえる。目を凝らせば、その影はツヴァイと同様の大きさであり、おそらくユニゾンデバイスだと思われる。ルーテシアは目を半眼にして、
「だって、アギトもゼストも別行動だったし、私が現場にいたんだから行くしかないでしょ？」
「だからって、連絡くらい寄越せよなー。……まあいいや、何とかなったし」
　ユニゾンデバイス――アギト。赤い髪が特徴の少女はそう言ってから、こちらに視線を向けて、挑発するように手招きする。
「何はともあれ、このアギト様が来たんだ。――おらおら、お前ら全員かかって来いやぁぁーーーッッ!!」
　その言葉に、なのはが反応して前に出そうになるが、それをティアナが止める。するとアギトは炎に変換した魔力弾【バレットシェル】を複数展開して、それを此方へ向けて放ってくる。炎の魔力弾【バレットシェル】は放物線を描いて地面に着弾すると、そこから爆発を巻き起こす。それを柱の影に隠れてやり過ごしていると、なのはに向けてティアナが口を開いた。
「なのはさん、あの子達何とか出来そうですか？」
「ん、たぶん普通にいけると思うの」
　なら、とティアナは言葉を零してから、他の四人にアイコンタクト

で合図する。まずはアギトの攻撃をどうにかして隙を生み出し、此方が仕掛けるタイミングを作らなければならない。
「私たちが何とか道を作ります。その隙に――――」
「――――いや、大丈夫なの」
指示を出すが、なのははティアナの肩を掴み、柱から前に出る。当然それはアギトの視覚に映り、にやりと笑みを浮かんで魔力弾【バレットシェル】を展開する。
「は！　堂々と出てきたのは馬鹿すぎやしねーか!!」
叫び、なのはへ向かって魔力弾【バレットシェル】を放る。避けようと思えば何とか避けられるかもしれない。だがなのははそれを一歩も動かずに、ただ腕を引いて拳を作るだけだ。一体何をするつもりなのかとティアナは思ったが、直ぐにそれが拳で弾こうと馬鹿な行動するものだとギンガは気づく。
無茶です、と口を開こうとした。
が、
――――迫り来る炎の弾を、本当に拳で霧散させた光景が、目の前に映される。

「……は？」
アギト、ルーテシアも含め、全員が信じられないものを見たかのように絶句する。だが、なのははいたって平然とした様子で前に歩き出すため、アギトははっと意識を切り替えて、もう一度炎の魔力弾【バレットシェル】を展開する。
まぐれだ。何かの間違いだ。そうだ、炎を集中したから手前で相殺されたか何かだと、自身に納得させて、もう一度攻撃を仕掛ける。
しかし、今度は分かりやすく、弾を横へと弾き飛ばした。壁にぶつかった炎はそこで爆発を生み出す。これで二度、驚愕せざるえない。なんなんだあいつと、混乱する。だが、悠々となのはは此方に迫って来る。
ガリューが直ぐに近距離まで肉薄し、拳を叩き込もうとするが、そのガリューの拳は空を切るだけで、そこに居たなのはは一瞬にしてガ

リューの横へと回り込む。直ぐに身体を捻らせて拳を繰り出すが、その前になのはの拳がガリューの胴に叩き込まれる。
容疑者を殺すわけには行かない。故に手加減した。だがそれでもガリューの身体は壁に叩き込まれて、そのまま動かなくなる。
次の瞬間、ルーテシアはなのはの前に跳躍し、肉薄して掌を向ける。すると先ほどキャロに放ったものとは比べ物にならない砲撃が放たれる。完全に相手を滅する為に繰り出した砲撃。インファイトから相手の懐に放つ制圧形の攻撃だ。常人ならばこれをまともに食らえば動けなくなる。
しかし、
「ん？」
確かに砲撃を当てた。胴から全体を包むようにして光に飲まれた筈だ。手ごたえもあった。だが、霧散するとそこには目の前、微動だにせず立っているなのはの姿があり、まったくの無傷だった。
ありえない。そう思った次の瞬間には、ルーテシアは保険に用意していた転移魔法を即座に発動させて、アギトと共にこの場から消えた。不利を悟って、逃げたのだ。
「あ、逃げた」
なのはは相変わらずの無気力な表情でそれを確認する。追撃を考えたが、肝心のレリックはここに落としている。まずはこれの回収が先と判断し、近づいてケースを拾う。
やけに静かだなと後ろを振り向くと、そこには呆然としている皆の姿があった。口を開けて、呆けている。なのははケースを皆に向けて、
「回収したよー」
そんななのはに、スバルは恐る恐るといった様子で口を開き、
「……な、なのはさん。やっぱり強い……！」
「……いや、強いとかのレベル？」
スバルの言葉に続き、つっこむようにティアナが口を開く。だんだんと理解が追いつき、皆なのはの方へ集まる。何はともあれ、これでレリックの確保は出来た。直ぐにキャロに封印処理を頼む。

辺りの状況を確認する。壁に衝突したガリューも隙をついて逃げたようで、そこにはくぼみしか残っていなかった。他に危険は無いかを確かめてから、ギンガは、さて、と声を上げて、
「あまり長居しないほうがいいわね。あの子たちも、まだ遠くには行っていないようだし、追撃の許可を――――」
と、言った瞬間である。突如、足がぐらついた為、慌てて地面に伏せてバランスを整える。地面が揺れている。周りの破損した壁も柱もみしみしと崩れ始め、それに加えて重力の負荷の異常にも気づいた。
キャロが驚いた様子で口を開く。
「これは……召還術の反応です！」
「……どうやらあの子達、私たちをこのまま生き埋めにするつもりね」
確実にこちらを仕留めようとしているのが伺える。確かになのはのあの強さを知れば、こういった手段に出てもおかしく無い。ティアナは眉を立てて皆に指示する。
「とにかく脱出よ！　スバル!!」
「了解！」
リボルバーナックルを地面に当てると、そこから術式が展開され、ウイングロードが上に向かって伸びていく。動きが遅いキャロはギンガが抱え、スバルが先行して天井を破壊して道を作る。なのはもスバルに続いて駆け上がっていく。
ティアナは抱えられるキャロの帽子が落ちていることに気づき、それを拾って汚れを叩いて落としてから、それを手渡す。
「ありがとうございます」
礼を言うと、ティアナはいいえと言葉を挟んでから、続けて、
「それとレリックの封印処理についてなんだけど、ちょっと考えがあるんだ」

第１４話

廃棄都市の中の一角。丁度下水の貯水路の真上に位置する場所が良く見える位置に、ルーテシアとアギトが居る。現在ルーテシアの召還魔法によって呼び出された召還獣により、重力操作によって地面がミシミシと音を立てて崩れようとしている。このまま地下水路を埋めて、まだ地下にいるなのはたちを殺す為だ。

「ちょ、ルーやめようぜ！　あいつら局員だけど、殺すのは流石に不味いって……。レリックだって、回収できなくなっちまう」

「あれだけの強さなんだから、死にはしないって。それにこうでもしないと足止めできないよ。レリックはセインに任せれば回収できるし」

重力操作をやめるつもりは無いルーテシアに、アギトは横からルーテシアの正面に回り、訴える。

「あの変態医師を信用するのはやめろって！　私たちの事なんて、所詮実験動物くらいにしか思って――――」

そう言葉をかけていた途中で、凄まじい音が辺りに響いた。アギトは視線を先ほどの召還獣の元へ向けると、そこには地面が沈んだ場所に召還獣が佇む様子がある。

「……やっちまった」

そう言葉を零し、アギトは溜息を吐く。今までも人を殺めた事も無いという事は無かったが、それは死んで当然といえる下郎な者たちだ。だが今回は普通に善を通す局員たちであり、殺めれば面倒になることは分かっていた。だが、こうしてしまった後では考えても仕方がない。

ルーテシアはデバイスの光を一度収めた後、さて、と言葉を零して踵を返し、その場を離れようとする。

が、ルーテシアの元へ向かう魔力反応があった。アギトも気付き、辺りを見回しながら、

「ルー、何か来る！　魔力反応は……でけぇ!!」

数秒後には何処から来るか反応から分かり、そこに視線を向ける。すると、そこには傍らにツヴァイを乗せたヴィータが此方に向かって突撃してきた。手にはグラーフアイゼンを構え、それを振りかぶりながら来る。アギトはそうはさせまいと、炎の玉を形成し、それをヴィータのほうへ投げる。

だが、横に居るツヴァイが直ぐ様魔力弾【バレットシェル】を作り出し、それを放る事によって相打ちにして相殺する。迎撃が出来ないことが分かったルーテシアは回避することを頭で切り替え、直ぐにその場を跳躍する。

それと同時に、

「なッ!?」

地下を埋める為に召還した召還獣が、突如として内側から破裂するように吹き飛んだ。瓦礫と同時に、辺りに破片と爆煙が舞う。ルーテシアとアギトは空中に居ながらそれを確認し、驚愕の表情を見せた。召還獣はあくまで呼び出すだけの存在故に、召還状態で絶命しても特に問題は起こらないのだが、あれだけの巨体をどんな方法で殺せばあんな状態になるのかが気がかりだ。

「一体何が……!?」

様子を見る限り、下から突き上げるように吹き飛ばされている。だとすれば、地下から攻撃を受けたということだ。ルーテシアはハッとして、目を見開いた。地下には、先ほど生き埋めにした筈の局員が居た筈だ。まさかと思いつつ、煙のほうへ視線を集中させる。

――その煙の中から、跳躍するように出現するなのはの姿があった。右手を突き上げて、先ほどの一撃は自分だと主張するように。

同時に、穴から出てくるのは先ほどの局員。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてギンガだ。次の瞬間には二本のウイングロードが展開され、その道が此方に向けて伸びて来る。それぞれのウイングロードにスバル、ギンガがローラーブーツで此方に接近する。

このまま着地点に降り立つのは不味い。そう感じたルーテシアは宙の手前、足元に魔方陣を展開して、それを足場にして一度片足をつ

けると直ぐに跳躍し、距離を取って後方へと着地する。環状道路の上である。
しかし、
「――ッ!!」
電光のようなものに気付いた次の瞬間には、エリオがストラーダの先端を此方に構えていた。距離は零。動けず、ルーテシアは拘束された。直ぐに助けようと慌てたアギトだが、そんなアギトも既に接近していたツヴァイによって拘束魔法【バインド】を展開されて、それに拘束され、宙に浮くことも出来なくなり、ルーテシアから数歩ほど距離が空いたところに落ちる。
続いてルーテシアもツヴァイによって拘束魔法【バインド】を展開され、身動きが取れない状態になる。眉根を歪ませて、悔しそうな表情を見せる。
直ぐにヴィータと新人たち、ギンガとなのはも集まる。ヴィータがホロウインドウで現行犯の逮捕状を提示する。
「なんか、子供を苛めてるみてぇで気は進まないが……。市街地での無断魔法使用、そして殺人未遂。施設破壊や公務執行妨害もろもろで逮捕する」

◇

海上から来るガジェットドローンの二型と幻影の混合部隊は、はやての超広域砲撃魔法により順調に撃破され、ヘリの防衛もフェイトが付近で防衛線を張っていた為、これといった被害は出ずに済んだ。はやてが街に近づけさせないように全て撃破したのが決めてである。
その様子を、廃棄都市のビルの一角の屋上で窺う二つの影があった。一人は長い砲筒を片手にして、茶髪で襟足が長い女性。もう一人は長髪を三つ編みにして二つに結っている眼鏡をかけた女性だ。二人とも密着型のスーツを着込んでおり、眼鏡の女性はコートを、もう一人は毛布を肩から羽織っている。
「――クアットロ、どう状況は?」

「ダメねぇ……。ガジェットもシルバーカーテンで作った幻影も、皆纏めて撃破されて全滅。――ディエチちゃんの方はどう？」
「こっちも駄目。さっきからヘリの周りに例のＳ級が居る。エースオブエースが居るから、とても上手く狙撃できる自信は無いよ」
　ディエチは嘆息気味に溜息を吐いて、視線を下に向けながら言葉を述べた。ディエチの目は特殊であり、カメラのピントのように視界を合わせることによって遠くの様子を視認できる。彼女の能力の一端でもあるそれは、砲撃という主武器を使う為だ。体内の魔力を直接砲撃のエネルギーに変換し、放つ。それがディエチの能力だ。
　一方クアットロはシルバーカーテンと呼ばれる能力で、幻影を作り出したり、あらゆる端末に干渉して操作したりなど、かく乱や情報操作などを行うのに優れている。
　人間とも魔導師とも一線を置く彼女らだが、その二人は現在任務が実行できない状態にある。クアットロがディエチの溜息に釣られるように溜息を吐くが、こちらはどうも作ったような態度のものである。
「はぁ……。ルーお嬢様も捕まったみたいですしー、管理局にバレる前に撤収といきますか」
「お嬢は？」
　立ち上がりながら背伸びをして言うクアットロに、ディエチが振り向きながらクアットロに訊ねる。すると背伸びを終えたクアットロが脱力と共にそれに答えた。
「今セインちゃんが助けに行ってるわー。流石にマテリアルとレリックを局に奪われた挙句に、ルーお嬢様まで局に渡す訳にはいきませんもの」
「ん、なら心配は無いかな」
　一先ず撤退を優先として、二人はそのままビルの屋上から去ろうと踵を返す。だが、
「――もう少し、詳しい話を聞かせて貰います」
「――ッ!?」
　急に背後に感じた気配と言葉に、クアットロとディエチの二人は同

時に振り向くと、そこには一瞬でここに姿を現したフェイトの姿があった。二人は驚愕した表情を浮かべる。
「そんな、いつの間に!!」
「さっきまで、ヘリの所に居たんじゃ!?」
狼狽した声を漏らすが、フェイトはそれを鼻を鳴らして答える。
「ここまでの距離なら、私にとって零距離と相違無い」
「化け物め!!」
フェイトの人外な能力に、ディエチは眉根を寄せて声をあげる。一瞬後に二人はビルから飛び降りて、途中でクアットロがシルバーカーテンと呼ばれる能力で不可視の効果をディエチと共に展開して隠す。二人は魔法ではない仕組みで能力を使っている為、こちらの魔力を察知することは出来ない。
ビルから降りて地面に着地すると同時に、跳躍する。この場から脱出する為に、ひたすら街の外へと向かって飛ぶ。一方フェイトは一歩も動かずに先ほどの屋上に立っている。
が、ゆっくりと息を吐くと、フェイトの姿は瞬く間に電光の光となって消え去り、その電光は逃走するクアットロとディエチの周囲に現れる。
「――――はぁ!!」
叫ぶと同時、フェイトはザンバーを展開して振り抜き、横に一閃する。それだけでクアットロとディエチを狙った斬撃が繰り出された。鋭い正確な斬撃に驚きながらも、何とか跳躍のタイミングをずらすことによって回避する。その後に背後の建物が斜めに一閃されて、ブロックがスライスされたように建物がずれ落ちる。
「なんて馬鹿な!!」
もう声を出さずには居られない。仮にも管理局なのだから、周囲への被害を出すようなことは止めて欲しいと考える。しかしフェイトは構わず斬撃を次々と繰り出していく。クアットロが跳躍しつつ、必死にシルバーカーテンで自分達の幻影と、周囲に音を反響させる事によって狙いを拡散させて何とか命中せずに済む。
しかし、フェイトの斬撃の嵐は直ぐにやむ事になった。最後の一振

りを繰り出した後に、何か意図したようにしてその場から離れていく。一体どうしたのかと疑問に思ったが、その理由が次の瞬間判明する。

現在自分たちが居る廃棄都市区画の空に、一つの影があった。八神はやてだ。夜天の書を展開し、杖を天に掲げて詠唱を唱えている。

「……まさか!?」

クアットロが何か察したように目を丸くした。ディエチもはやてが何を考えているのか理解が追いつく。わざわざフェイトを撤退させて、はやてが現れたという事はつまり、広域魔法を仕掛けて此方を確実に仕留める為だ。

杖を上げ、はやてが魔力を集中させると、周囲に黒い魔力光が浮かんで出現していくのが分かる。それが杖の先端の先に収束されていき、一メートルほどまで形成された魔力が球体となる。

「遠き地にて、闇に沈め――――デアボリック・エミッション!!」

詠唱を唱えると、はやては球体を下に向けて放り投げた。はやてから放られた球体は膨らみ、中心から広域殲滅魔法が展開され、魔力の爆発に廃棄都市は飲み込まれるように破壊されていく。クアットロとディエチは慌ててその場から離れようとするが、周囲の魔力に少し巻き込まれる。

デアボリック・エミッションは中心につれて破壊の衝撃が増す為、外側の衝撃はまだ軽い。だがそれでも身体を蝕むことには変わりなく、苦虫を噛んだ様に辛い表情を浮かべて何とかギリギリで回避することに成功した。

跳躍する事を続けながら、背後を見る。すると先ほどまであった都市の姿が、まるで隕石でも衝突したように丸く削られていた。それを見てぞっとする。仮にも管理局なのだから、こういう事は自重して欲しいと、犯罪者二人は思いながら全力で逃げる。

しかし、二人の軌道を狙って再びフェイトが斬撃を繰り出した。初撃は何とか回避する。だが次の跳躍と同時に二撃目が繰り出され、狙いも修正された為か、ディエチに斬撃がかすってしまった。

「――痛ッ!!」
悲痛に顔を歪ませて明らかに動きが悪くなる。直ぐに飛行能力を持つクアットロがディエチの身体を抱えて飛ぶが、抱えた状態でとてもフェイトの速さから逃げ切れる筈も無く、正面に回りこまれてしまう。
「……罪状は沢山ある。逃亡の危険がある為、とりあえず貴女たちをこのまま昏倒させて連行します」
フェイトがザンバーを構えながら言葉を述べる。ディエチは怪我していることもあって悲痛な表情。クアットロも苦い表情を見せながら、
「……きょ、今日は遠慮しておきまーす……」
当然その言葉に了承する訳もなく、聞く耳持たないようにフェイトは黙ってザンバーを構え、一閃を繰り出した。その空間ごと切り裂く勢いで繰り出された斬撃はそのまま二人に向けて振り下ろされる。
だが、
「ＩＳ発動――ライドインパルス!!」
言葉が響くと同時に、何かが二人の下へ来ると同時に、その一瞬で二人の姿は虚空へと消えた。ザンバーの斬撃はそのまま背後の建物を切り裂くのみだ。フェイトは直ぐ様反応を検索するが、自分で検索した結果反応はロストしている。ロングアーチに通信するが、ロングアーチの方でも反応はロストしたようだった。
上空で様子を窺ったはやてもその事を知り、顎に指を当てて眉根を寄せながら、
「……逃がしたか」
悔しそうな表情を浮かべた。

◇

捕まったルーテシアとアギトは、ヴィータがロングアーチと連絡を取っている隙を狙って現れたセインによって連れ出され、彼女の能力

であるディープダイバーによって地面の中に潜られて追跡不能となってしまった。なのはは咄嗟に自力で地面に潜ろうかと考えたが、相手の能力が水のように地面を潜っていたことから、速度の差もあって間に合わないと判断し、追うことは出来なかった。
ヴィータもはやてから容疑者を逃したことを聞いて、目を細めながら、
「……悪い、こっちも最悪だ。容疑者は逃しちまった挙句、レリックも持っていかれた」
ヴィータの報告に、横にいたツヴァイも落ち込んだ様子で浮遊している。
そんなヴィータに恐る恐るといった様子で話しかけようとするティアナとスバルの姿があった。しかし邪魔するなと言うように二人に向けてグラーフアイゼンの先端を向ける。直ぐに背を向けて再び報告の続きを話す。しかし、どうもヴィータに何か言いたい様子の二人の様子を見て、なのはがどうしたの、と声をかけた。
「実は――――」
「――――……え？」
スバルがなのはに耳打ちするように言うと、なのはは意外そうに目を丸くした。話を全て聞き終わると、なのははヴィータの元に向かって肩をとんとんと叩く。それにヴィータはイラついた様子で振り向き、
「何だ、今報告中だぞ!!」
「まあまあカリカリしないで、牛乳飲んでないから怒りっぽくなるんだよ？」
「別にカルシウム足りないからイライラしてんじゃねーよ！　それに牛乳は毎朝飲んでる!!」
なのはの冗談にもしっかりと答えるヴィータに少しだけ微笑ましく思いつつも、なのはは要件を話す。
「ヴィータちゃん、レリックは無事だよ？」
「――――……へ？」
その淡々とした言葉に、ヴィータとツヴァイは揃って目を丸くして

言葉を零した。なのははそれを見せるために身体を引いて、背後にいた新人達をヴィータに視界に移す。するとティアナは説明を開始する。

「実は、レリックには少し特殊な封印をしまして……。えっと」

言うと、ティアナはキャロに視線を向けて、

「水路でキャロにレリックを封印処理して貰ったんですが、その際にレリック本体はケースとは別に隠しておいたんです。それが、ここにあります」

ティアナはキャロの帽子を取ってあげると、そこにはキャロの頭部に花が乗せられていた。次にティアナが指を鳴らして合図を送ると、花は姿を変えて、レリックのいつもの宝石のような姿に戻る。その光景に思わずヴィータも目を丸くする。

「本当はケースごと偽装しようとしたんですが、流石にケースを偽装すると反応でばれてしまうので、本体だけをここに隠したということです。一番敵との接触が少ない、キャロに持って貰う形で」

「なるほどー！」

ティアナの説明に、ツヴァイは納得したようにレリックの元へ近寄った。その様子に、ヴィータはもう苦笑いしか出来なかったが、何はともあれ、レリックを守れたのだから良しとした。

第１５話

薄暗く、機械的に装飾された床と壁、洞窟の中だろうか、むき出しの岩が上を覆うという、なんともアンバランスな空間。それは遺跡発掘の現場に似たような雰囲気を漂わせてはいるが、それとは似ても似つかないような雰囲気がここには醸し出されている。

フェイトとはやてによる追撃を何とか免れたクアットロとディエチ。そしてルーテシアとアギト。彼女らは現在自分たちの拠点へと帰還して、この施設の通路を歩いていた。その横には頭一つ分大きい長身で屈強な姿だが、身体的な特徴で女性と分かる人物と、細身の女性がそれぞれ左右に並んで歩いている。屈強な女性は「はあ」と溜息を吐いた後に、クアットロとディエチに鋭く細めた双眸を向けて口を開き、

「まったく……。中々連絡を寄越さないから不安になって駆けつけてみれば、何だあの様は？」

「と……トーレ姉様」

苦笑いを浮かべ、合わせ辛そうにクアットロが口ごもる。

あの時、間一髪の所でクアットロとディエチを助けたのはこの人物――トーレである。彼女の固有能力であるＩＳライドインパルスは瞬間的高速移動能力を発揮する。その為、あの寸前で二人を救出する事が出来たのだ。

トーレに苦手意識があるのだろうか、クアットロはおどおどとした様子なので、ディエチが代わりに頭を下げて謝る。クアットロの性格も、ディエチのこの素直な性格も、トーレにとってはもはや分かりきっている事なので、トーレもクアットロに対しこれ以上叱咤するつもりはない。

クアットロはでも、と口を開き、

「マテリアルとレリックの一つは管理局に取られましたが、レリックの一つは無事に回収出来ました。マテリアルの件はドクターの計画の一部なので、実質此方の成果は十分に――」

「クアットロ」
「うぐッ……」
　悪怯える様子もなく口を次ぐんだクアットロに、流石にトーレも再び睨みを効かせると、クアットロは再び口を閉じる。
「大体、そのレリックの一つも危うく管理局に渡るところだったんだぞ。セインがお嬢とアギトの救出ついでに回収出来たからいいものの……」
「そうだよクア姉！　どっちかって言うと、あたしの功績だよ！」
　トーレの言葉に次いで、水色の髪が特徴の女性――――セインが訴えるように口を開き、その脇に抱えられたレリックのケースを見せながら文句を放つ。結局、今回に関しては様々な面に関して尻拭いをして貰ったのが事実。クアットロもこれ以上は何も言えずに頭を下げた。その様子も、どうもワザとらしいと感じるのは彼女の性格故か。
　そういえば、とトーレがセインに向けて、
「今回のレリックは何番なんだ？　もしお嬢の探しているレリックなら」
　と、トーレは一歩下がって歩いて来ているルーテシアを見ながら言った。ルーテシアはこの人たち賑やかだな位に考えながら腕を頭の後ろで組んでいた為、不意に話を振られて少々驚く。
「ＸＩ番のレリックなら、お嬢の目的も……」
「あはは……ありがとう、トーレさん」
　気が抜けている時にトーレに話しかけられて完全に不意打ちだったルーテシアは、そんなトーレの優しい言葉に慌てて手を振りながら笑みを浮かべて礼を言う。
　トーレは協力してくれているルーテシアには何かと面倒見が良い。というよりかは、ルーテシアがその幼い年齢とは反例してとても優秀な魔導師だからという点もあるのだろう。トーレの身近には、確かに頼れる仲間が多くいるが、クアットロのようにどうにも抜けている

面々がある分、優秀なルーテシアには高い好感を持てる。
　そんなトーレに、ルーテシアも好感を持っているのが事実だ。隣に浮遊するアギトはその事が気に入らないようで、複雑な表情をしている。
「セイン、どうせだ。今中身を確認してみろ」
「あいよトーレ姉！　ちょいとお待ちをー」
　視線をセインに戻し、セインはケースを持って少し移動する。通路の柱に丁度良い出っ張りがあったので、その上にケースを置いて、指に解除のシステムを発動させて、ケースの鍵を開ける。その間に他の皆もセインを囲むようにしてケースが開かれるのを待つ。
「パンパカパーン！　……って、あれ？」
　セインが注目を浴びている中、勢いよくケースを開ける。しかし、その中身の中央にある筈のレリックが、綺麗に空白を明けており、その姿が見当たらない。皆が驚く中、
「セイン……まさかディープダイバーでレリックだけすり抜けちゃったとか？」
「しないよ！　ていうか返って器用すぎる芸当だよそれ！」
　ディエチがぼそっと口にした言葉にセインが両手を上げて言い返す。念のためにトーレがケースを持ち上げて確認するが、レリックが無いのは確かであり、ケースを置いてセインに視線を戻し、
「セイン、保存している映像データを見せてみろ」
「う、うん！」
　言われてセインが腕についた端末を操作すると、立体モニターが幾つも表示されていく。彼女たちは一応現場での映像を保存している為、こういった確認作業などが出来る。セインは「えーっと」と口に出しながら立体モニターのウインドウを直接手で動かしながら、肝心の場面を探っていく。
「えーっと……あった！　ほら！　ちゃんとレリックの魔力反応もサーチしながら回収してるし、間違えて落とすなんてこともしてないよ！」
　言ってセインが丁度回収する寸前の場面で保存した映像データを

提示する。そこには管理局の面々――――ティアナ、スバル、ギンガ、エリオ、キャロ、ヴィータになのはが映っている。そんな中、キャロが持っていたレリックのケース。確かに鍵は閉じており、サーモグラフィーのように映っている魔力反応からも間違いはないように見える。

その映像を見ながら、クアットロが、

「うーん……確かに間違い無さそうね」

「なら、レリックは一体どこに？」

ディエチが不思議そうに顎に手を当てて首を傾げる。トーレもまた腕を組んで映像を注視する。そんな中、ルーテシアが横から入って彼女らと共に映像を確認する。そこに映るのは変わらずの映像。あの時の様子で間違いない。不審な点も見受けられない。

だが、ルーテシアは違和感に気付いた。

「あれ、この娘って……？」

ルーテシアが見たのは、映像に映るキャロの姿。確かにケースを持っているのはキャロだ。しかしルーテシアが見たのはその手元では無く、キャロの装いである。

正確にいえば、その頭に被る帽子である。そこに僅かにだが熱量があるのに気付いた。

「あ……もしかして、これって？」

ルーテシアは映像のキャロの帽子の所を指差す。するとトーレも気付き、片手で頭を抱えた。

「え？　どういうことルーお嬢様？」

「なにか可笑しいところあります？」

セイン、クアットロがまだ気付かずにそう言った為、トーレは流石に睨みを聞かせて、

「馬鹿者、まだ気付かないのかお前達！　レリックはここにあったんだ！」

トーレはルーテシアと同じくキャロの帽子に向けて指を指した。確かに魔力反応が魔導師から出てるのは当然の事である。だが、この映像で見るとキャロの帽子の一点にだけ強い反応があるのが分かる。

デバイスがここにあるとも考えられず、だとすれば導き出される答えは一つだ。
流石に理解が追い付き、クアットロもディエチ、セインも気付く。セインは特に悔しそうにしながら、
「えええーー!? そんな所に隠してるなんて普通気付かないって！てか子供騙しにも程があるよこんなぁ！」
「その子供騙しに引っかかったのがお前だセイン。……まあこの状況でこんな事をされては無理もないが……」
トーレも叱咤はするが、流石にこういった策を用意していたなんて予想外であった。なのでこれ以上セインを責めても仕方がない。ルーテシアもまあまあと手でトーレを制止しながら口を空けて、
「今回は私が探していた番号じゃなかったし、そこら辺で……」
「いえ、すみませんお嬢。そう言って頂けると良いんですが、今回レリックが彼等に渡ったのは事実ですので、流石に悔やみます」
「まあ、そうよねぇ……」
ルーテシアは申し訳無さそうなトーレに対し、自身も頬を掻いて苦笑いを浮かべる。だけど、と口を開き、
「起きた結果は仕方無いんだし――例の計画で取り戻せば問題ないでしょう？」
ルーテシアが放った例の計画という言葉で、トーレも「そうですね」と言いながら心の切り替えがついたのか、悔しそうな表情を一変させて他の三人へと向き直る。
「今回の結果は仕方無い。きちんとドクターとウーノ姉さんに報告しよう」
その言葉に、セインは眉を八の字に歪ませて顔色を青くさせる。
「あああ……絶対怒られる……特にウーノ姉さん」
「折檻されるのは間違いなさそうねぇ……憂鬱だわ」
落ち込むセインとクアットロである。ディエチも流石に顔を暗くさせた。「ほら行くぞ」とトーレが背を叩いたので、皆が足取り重い中通路を進んでいった。
ルーテシアは開かれたレリックのケースを一応回収しつつ、その

ケースの縁に書かれた番号を見て、ボソッと呟いた。
「……もう少し待っててね――――母さん」
その呟きを聞いたのは、肩の上を浮遊するアギトだけだった。

◇

街中での事件が起きてから数日後。
早朝の準備が終わった機動六課の隊舎では皆が集まり、朝礼が開かれる所だった。簡単な連絡事項をグリフィスが告げた後、はやてが壇上に立って挨拶する。
「おはようございます。皆先日は本当にご苦労様でした。お陰様で被害も最小限に収めつつ、敵の情報に関しても貴重なデータを得られました。これも私達機動六課の成果があってのものです。ありがとうございました」
はやてが言って軽く頭を下げる。
先日の事件は直ぐに対応出来たとあって、街への被害は何とか抑えられた。ギンガの所属陸自の部隊が予め現場を抑えていたのもあり、レリックが流れ着いたのが廃棄都市であったのも幸いして被害が抑えられたのだ。
それに今回、二つのレリックの回収。そしてそのレリックと共に発見された幼い少女。そして現れた犯人の数人の姿とそのデータ。得たものが多いため、今後の捜査に大きく役立つのは確かだ。
報告を受けて、皆の表情も明るくなっていく。新人であるスターズとライトニングの面々も微かに笑みを浮かべており、ヴォルケンリッターの皆も笑顔を浮かべ、フェイトも笑顔を浮かべ――――てはいるが、苦笑いである。その原因は、フェイトの隣に立つ人物である。
「えー、それでですね。今回の事件をきっかけではありますが、ここで今日から正式にうちに所属することになった新しいメンバーを紹介します。――――なのはちゃん、こっち」
「あ、はい！」
はやてに呼ばれ、フェイトの隣に立っていた人物――――六課の制服

に身を包んだ高町なのはが小走りで壇上に立つ。こういう事に不慣れななのはは緊張気味に皆に顔を合わせてから口を開く。
「お、おはようございます！　今日から、嘱託という形ではありますが、こちら機動六課で働かせて頂く事になりました。高町なのはです。宜しくお願いいたします！」
なのはの不慣れな挨拶に、スタッフ一同拍手を送る。もう一度だけ頭を下げて、なのはは壇上から降りてフェイトの隣へと戻っていく。次いではやてはなのはの事について軽く説明を始める。
「高町なのはさんは、言わずもがな私とフェイト執務官の昔からの付き合いで、私らに並ぶ……いや、それ以上の実力の持ち主やと思ってます。戦力としてはこれ以上ないくらい頼りになる助っ人になるのは間違いありません。まあ、こうやって仕事をするのは何分初めてなので、皆フォローよろしくお願いします」
大多数が顔を合わしたことがあるスタッフ一堂なので、特に問題はない。ヴァイスやシャーリーも含めて十分顔馴染みなのだ。
――だが、何故高町なのはがこうして嘱託として六課で働く事になったのか。
その理由は、先日の事件がキッカケである。はやてとフェイトが犯人二人を捕らえようとした際に、生命反応が無かった廃棄都市ごと攻撃した時だ。実を言うと、その廃棄都市はなのはが住んでいる場所であり、なのはの家が木っ端微塵に破壊されてしまったのだ。
これにはなのはも衝撃で混乱し、慌ててマンションに向かったが、そこには瓦礫が散乱しているだけであった。
勿論、はやても謝罪し、破壊されてしまった資産や被害額、慰謝料も支払うことになったが、それだけで直ぐに解決という訳にもいかないのが現実だ。なのはは内職とアルバイトで生計を立てており、その必要な物は勿論、資産全てが瓦礫の中で粉々になった。
被害者なので色々と生活保護が受けられるのは分かる。だが、なのはとしては友人の迷惑で保護を受けるという事実に心痛むのもある。まして破壊したのがはやてのデアボリック・エミッションでは無く、フェイトの一薙ぎによるものだと分かれば尚更だ。フェイトからは

泣きながら何度も謝罪を受けて、なのはとしてもなんだか申し訳ない気持ちである。その為、早く安定した生活を得たいというもあり、そこではやての提案である六課に入って隊舎で生活を送ることを選んだのだ。
　なのはとしても、今までのフリーターという立場から、一気に公務員という立場になったので、望んでいなかったとはいえ社会的に立場を得たといえる。悪いことは無いのだ。
　だが、成り行きとは言え、仕事の拘束と責任を持つという事実から逃げたくなるのは事実だが、ここまで来たら腹を括るしかない。
　はやてが「では」と言葉を発し、
「挨拶はこの辺にして、皆、今日も一日頑張りましょう！　以上です」
　その一言で、部隊長の挨拶が終わり、六課の仕事が始まる。皆が各々の作業場に向かい、スターズ、ライトニングの面々も早速制服から訓練服へと着替える為、更衣室へと向かって行く。
　なのはも次いで皆について行く形になる。基本なのはの仕事はヴィータと一緒に新人教育の手伝いをすることである。早速用意された服へと着替えようと更衣室に向かおうとした時、
「あ、なのはちゃん、ちょっとええかな？」
「ん、何？　はやてちゃん」
　はやてがなのはに声をかけて、振り返りつつ返事をする。組織に所属する事になった以上は上司に対してそれなりの態度と言葉使いをしなければならないのだが、なのはは嘱託で特別加入という事もあってそれは免除されている。はやてとしてもなのはからそういった態度は求めていない。
　次いではやては口を開き、
「先日保護した娘なんやけど、ついさっき目を覚ましたらしいんよ。今から私とフェイトちゃんが様子を見にいこうと思うんやけど、なのはちゃんも一緒にどうかなと思ってな」
「そうなんだ！　良かった、目を覚まして……」
　なのはの記憶では、保護した娘はとても酷い怪我をして意識不明だった為、その事を聞いて安堵する。はやての誘いの為、断る理由が

無い為、同行する事にした。

第16話

六課の隊舎からはやてとなのはが出ると、正面入り口で黒い車が止まる。フェイトの車だ。運転席を見ればフェイトがハンドルを握っている。こうしてフェイトが車を運転するのを見るのはなのはにとって随分久しい。しかもこんなスポーツカーは初めてだ。緊急車両という意味もあって速い車を選んだのだろうが、これが趣味で選んだとしたら意外な趣味だなと思っておく。まあフェイトのバルディッシュがどちらかというと格好良いデザインなのでイメージ通りといえばそうだが、と思考する。

ドアを開けてはやてが後部座席に座り、反対側からなのはがその隣に座る。さて、と口にしてはやてがフェイトに話しかけ、

「じゃ、行こうか、フェイトちゃん」

「うん、了解」

返事をして、フェイトがアクセルを踏む。広い敷地内を走って行くと、丁度訓練場に向かうヴィータと新人四人を見かける。当然だが今から訓練を始めるのだろう。ヴィータが此方に気付き、手を上げる。それに次いで新人四人も敬礼して挨拶した。はやてはそんな皆に手を振って挨拶。なのはも同じように返した。

正門を抜けて、港の道を走行して行き、やがて市街地の道へと景色が変わる。目的地は聖王教会だ。

「カリムと会うのは、なのはちゃんは初めてやっけ？」

「そうだね。何度か話は聞いてるけど、会うのは初めてかな」

聖王教会の騎士、カリム・グラシア。管理局の理事官で名目上は少将にあたる。クロノと共に六課の後見人の一人であり、後ろ盾として重要な人物である。魔導師としての実力は、戦闘能力では無く、情報を扱う部類に入るものだと記憶にある。

そして何より、レティ提督とともにはやての生活を保護してくれた恩人でもあるのだ。なのではやてにとっては親戚のような存在でもある。

そのカリムが長を勤める聖王教会。ミッドチルダでも外れのほう

にあるその施設。そこには文字通り教会、礼拝堂、資料館や学校までの施設を揃え、病院もその敷地に存在するとても大きな場所である。
走行してしばらく経つと山道に差し掛かる。道は悪いが車で行けなくもない道だ。そのまま走って行くと、その奥に大きな施設が見えてくる。あれが聖王教会の施設だ。
今回、保護した娘は事件の重要人物である為、国営、民営の病院は使えない。そして六課の病棟も使えないことは無いが、聖王教会の病院には設備が整っている為、こちらで治療を受けた方が何かあった時でも対応出来るのだ。
正門に近寄った所で車を止め、門番である教会の人間が此方に近寄って来る。はやては車の窓を開けて挨拶を交わし、
「六課の八神です」
「お疲れ様です。お話は聞いております。どうぞ中へ」
「おおきに」
軽く会釈をして、再び車を走らせて門を通って中へと入っていく。施設内に入って駐車場まで辿り付き、そこに駐車してから車から降りる。辺りを見渡すと、ミッドとは違う西洋な外観が広がっており、植えている木々の数々からとても良い雰囲気が広がっている。地球で幼少の頃育ったなのはにとってはヨーロッパの街並みに近いなと考えつつ、案内してくれるはやてとフェイトについて行く。
歩くこと数分で立派な外観の正面玄関へと着く。そこには修道服のような衣服に身を包んだ女性が待っており、頭を下げてから口を開く。
「お疲れ様です。お待ちしておりました、騎士はやて」
「お疲れ様です。お出迎えありがとうございます、シスターシャッハ」
女性――シャッハ・ヌエラははやてと挨拶を交わし、次いでフェイトに目を合わせてから同じように挨拶を交わす。次になのはに視線が向けられ、はやてが先に口を開き、
「紹介します。こちら高町なのはさん。私とフェイトちゃんの親友で、今日から正式に六課所属になった娘です」
「初めまして、高町なのはです」

はやてに紹介され、頭を下げて挨拶する。
「お話は聞いております。シャッハ・ヌエラです。宜しくお願いいたします、なのはさん」
笑みを浮かべて挨拶を返す。笑顔がとても綺麗なシスターである。
挨拶も済んだ所で早速中と案内される。建物の内装もこれはまた綺麗なもので、例えるなら西洋の城などがなのはの記憶では妥当だろうか。そんな光景が視界を埋め尽くす。
正面の階段を上っていき、上階の通路を歩いていくとシャッハが一つの扉の前で止まり「こちらです」と手を促してくれる。シャッハがコンコンとノックすると、部屋の中から「どうぞ」と女性の声が聞こえた。「失礼します」とシャッハが言って扉を開いて中へと入る。
「騎士カリム。騎士はやてとフェイト執務官、そして高町さんをお連れいたしました」
「ええ。どうぞ中へ」
「失礼します」
カリムの言葉に従いってシャッハの後ろからはやて、フェイト、そしてなのはが順に入っていく。室内の壁には本棚が覆っており、上手の窓の前にはカリムの仕事場といえる机があり、彼女はその椅子に座っていた。こちらが入って来るタイミングでカリムは椅子から立ち上がり、此方に笑みを浮かべる。
「はやて、先日振りですね。フェイトさんも久しぶりです」
「カリム、先日はお茶ありがとうな」
「お久しぶりです、カリムさん」
はやてとフェイトが挨拶を返し、次になのはに向けて視線を移すカリム。先ほどと同じようにはやてが紹介をしてくれる。
「はやてから話は聞いてるわ。カリム・グラシアです。よろしくお願いします」
「あ、こちらこそご丁寧に。高町なのはです」
カリムが歩み寄り、なのはに挨拶して手を差し出す。なのはもそれに応じて手を差し出して握手を交わした。手を離すとカリムははやてに視線を向けて「それで」と口を開き、

「今日は例の娘の様子を看に来たのよね？　話は聞いているとは思うけど、先ほど目を覚ましたわ」
　カリムが言ってアイコンタクトをシャッハに向けると、シャッハは会釈をした後に扉を空けて静かに廊下へと出て行く。はやてはそれを横目で確認した後、
「その娘はまだ病室？」
「ええ……まだ目を覚ましてから様子もまだはっきりしていないし、しばらくベッドで休ませているわ。今も看護師に様子を診て貰っているけど――――」
「――――騎士カリム!!」
　カリムが状況を説明し始めた途端、勢いよく扉が開かれた。先ほど廊下へと出て行ったシャッハである。その表情には緊張が走っており、何かあったのだと理解できた。
　慌てた様子のシャッハに、カリムも含めた全員がシャッハに身体を向ける。一体どうしたのかとカリムが訊ねると、シャッハは慌てた様子で声を上げ、
「目を覚ました娘が、突然姿を消したと――――！」
　その言葉に全員が身体を強張らせ、同時に警戒に入る。姿が消えたという事は一人で消えたか、それとも何者かに連れ攫われたかのどちらかだが、ここは聖王協会の敷地内。そしてはやてとフェイトがそれぞれ周辺警戒を行っている。転移の反応も無ければ侵入者がいたとは思えない。
　なら起きた少女が勝手にどこかへ行ってしまったのが最も考えられる。
「そう遠くへは行ってない筈や。手分けして探そう！」
　はやての言葉で皆が頷き、全員が廊下へと出て行く。カリムとはやては建物内、シャッハとフェイトは病棟へ行き、なのはが外を探す。
　廊下へと出て、一番最初に目に入った窓を開けてそこから飛び降りて外へと出る。後ろから驚くカリムの声が聞こえるが、失踪だとしたら早めに探した方が良いと判断して直ぐに外へと出るのが効率が良い。

下を見る。そこには芝生が生い茂った地面があり、壊れそうなものは存在しない。着地点を確認してそのまま地に足をつけて周辺を見渡せる場所へと移動する。
少女がどれくらいの速さで逃げたかは分からないが、あの体躯だ。それこそ異常な身体能力の持ち主でなければそう遠くへは行っていないはず。だとすればと、なのはは病棟からそう遠くない場所である中央の中庭へと進路を向けた。途中に建物が障害になる為、壁を蹴って屋根へと上っていく。高い場所なので敷地を見渡せる形となる。
その際に、なのははその驚異的ともいえる視力であるものをその視界に納めた。中庭の隅にある茂みが動き、そこから僅かにだが金色の髪が揺れるのを見つける。あんな場所に他のシスターがいるとは思えない為、恐らく当たりだろう。
『はやてちゃん、フェイトちゃん。見つけたよ、中庭の影に隠れてる』
念話にてはやてとフェイトに連絡する。二人は了解といってこちらへと向かってくる。なのはは少女がこれ以上どこかへと行かないように早めに接触することにした。
屋根から下りて、その落下衝撃を前方に進むことで逃し、そのまま少女のいる方へと向かう。流石に少女も気付いたのか、茂みに隠れる様子が映った。
「よいしょっと……」
少女のいる茂みまで辿り付き、近くで茂みを見る。気配からして隠れているのは分かる。だが、どう話しかけるべきか。
「(……子供の面倒なんて、看たことないしなぁ)」
幼少の頃からトレーニングの毎日と、子供離れした非日常を送ったなのはにとって、幼い子供と関わる事は無かった。故に、少女にどう接していいか分からないでいる。これがフェイトならば、彼女の経験から直ぐに対応出来るのだろうが。
そうしていると、茂みの影から僅かに顔を出して此方を見る少女の顔があった。どうやらなのはが何もしないので様子を見たのだろう。だが、なのはがそれに気付き目が合うと再び茂みに隠れてしまう。
「……大丈夫だよ、怖くないよ？　だから出ておいで？　良い子だか

ら？」
なのははそんな少女に対し、先ずはしゃがんで少女と目線の高さを合わせてから声をかける。手を広げて、少女が出て来易いようにする。
恐らくだが、目を覚まして知らない場所で怖かったのだろうと考える。もし自分が幼く、目を覚まして同じような状況ならば不安で一杯になる事だろう。
なのはがそうやって待っていると、少女は恐る恐るといった様子で茂みから頭を出し、そして影からその姿を出す。金色の髪とその左右に違う双眸が特徴的な綺麗な顔立ち。子供用の患者衣を身に纏い、手にはウサギのぬいぐるみを持っている。病室に飾ってあったものを持ってきたのだろう。
安心させるように笑顔でいると、少女はなのはへと歩みを進めていって、ついにはなのはの手が届く距離まで近づいてくれた。少女の髪やその服は茂みに隠れていたせいか少しだけ汚れている。
「お利口さん。ごめんね、不安だったよね？　もう大丈夫だから」
言いながら少女の髪と服の砂埃を軽く払って落としてから安心させるように頭に手を乗せて撫でる。少女も少しだけ安心したのか、表情の強張りが穏やかになった。
「私、高町なのはって言います。君のお名前、聞かせて？」
「……ヴィ、ヴィヴィオ……」
少女――ヴィヴィオが小さく口を開いて、小声でそう言った。
「ヴィヴィオ。良い名前だね。ヴィヴィオはどこへ行こうとしてたの？　何か探しもの？」
不安でも、ここまで外に出るという事はヴィヴィオにとって何かをしたかったのではないかと考え、それを訊ねる。するとヴィヴィオのその目が涙で濡れ始め、
「……ママ……いないの……」
「……あ」
その言葉に、なのはは思わず声を漏らした。そうだ。普通に考えれ

ばこの少女は幼い。複雑な事情があるにせよ、子供には変わりはないのだ。ならば親がいなくて不安なのは当然の事。それをなのはは痛いほど分かっていた。

――――この少女が、恐らくスカリエッティによって生み出された人工生命体であり、故に本当の母親が存在しないことも。それを理解しているからこそ、なのはは胸を痛めた。

だが、その事実をヴィヴィオに言う事なんて勿論出来る筈が無い。そういう現実は、この幼い少女に伝えるべきでは無い。だからこそ、なのはは安心させるように笑みを浮かべ、ヴィヴィオの頭を再び撫でながら、

「そっか……じゃあ、一緒に探そう？　ね？」

「……うん」

言って、なのははヴィヴィオの手を握り、一緒に中庭を散歩することしか出来なかった。それしか、今ヴィヴィオを安心させる事が出来ないのだから。

なのはがヴィヴィオと共に教会の敷地を歩いて行くのを見届け、その様子を、先ほどこちらに駆けつけたはやてとフェイトも見ていた。丁度なのはがヴィヴィオの汚れを払っていた頃からだ。

「……なんや、珍しいなぁ。なのはちゃんがああやって子供と話すの」

「うん……でも、何だか上手くやっていけそうだね」

今までのなのはのその無気力さとずぼらさから、そういった事に関して不安を感じていたはやてが、ヴィヴィオに対する接し方を見ていて珍しそうに声を上げた。フェイトも頷くが、先ほどの様子を見る感じだと問題ないように見えた為、笑顔でその様子を見守った。

第17話

「よーし……午前の訓練はここまでだな。もうすぐ昼休憩だ。各自着替えて午後に備えとけ」
「「はい！」」
グラーフアイゼンを肩に乗せてヴィータが皆に視線を向けて言葉をかけると、スターズとライトニングの皆は元気良く返事をする。その訓練服には訓練の壮絶さを物語るように汚れが付着しており、装着している各々の装備にも砂埃が被っている。
訓練場のシステムがオフになり、廃ビルの街中から景色の良い海辺へと景色を変える。当たる潮風をその身で感じつつ、スバルはふうと息を吐いて皆と一緒に海岸から階段を上って敷地の道路へと上がる。
訓練も次の段階へと上がったことにより、今までの訓練内容から一変して、より実戦に近いシチュエーションでの模擬戦なども混じっていき、求められる技量も多くなった。だがそれも実戦に確実に役立つ事である為、新人としてはむしろありがたい。まあ、その内容がスパルタなので身体にかかる負担は大きいが、それは今までの訓練で慣れてしまったので問題はない。
隊舎へと戻る道を歩いていく。三人の少し後ろを歩いていると背中が見える。皆疲労はしているが以前に比べ肩で息をしたり、猫背で歩いたりする様子はなかった。厳しい訓練を重ねて実戦も何回か経験したので身体が慣れてきた様子だ。段階が上がった訓練は確実に厳しさを増していったが、それで身体がダウンを起こすことはもう無い。最初の頃のヴィータの言った慣れという言葉がこうして身体で実感できる。人間慣れって怖いなと思いつつ、早足でティアナの隣へと並び、歩を進める。隣を歩くティアナに話しかけ、
「そういえば、はやて部隊長たちは聖王教会に行ったんだっけ？　あの時保護した娘の様子を看に」
「そうみたいね。まあ、特に心配する事は無いだろうけど」
此方に視線を向けずにクロスミラージュを手にして不調が無いかチェックしながら言葉を口にする。すると同じく隣を歩くエリオが

その話題に入ってきて、
「でも、あの娘って確か……その……普通の娘じゃないんですよね？
その……」
その言葉の続きである確信的な言葉が言い辛いのか、口ごもるエリオに、ティアナが答える。
「そうね。調べた結果だと、あの娘は人工生命体だっていうし、色々と問題があるのは確かね。今後どう保護されるか分からないし」
「そう……ですよね」
ティアナの言葉に、複雑そうに表情を歪めるエリオ。以前聞いた話で皆は知っているが、エリオも色々問題があってフェイトに保護された身である。故に思うことも多々あるだろう。だから本人の心境も複雑だ。その隣を歩くキャロも複雑そうにしてエリオの顔を窺う。
しばし気まずそうに無言になってしまうも、依然としてクロスミラージュのチェックをしていたティアナがそれを終わらせ、デバイスを待機状態に戻す。まあ、と声を上げて、
「その辺の事は隊長たちで考えてはいるでしょ。検査して万が一って事はあるかもだけど、今のところそんな複雑な事は聞いてないし、あっても報告が上がる筈だからその可能性も低い。だとしたら暫くは保護観察って形になるんじゃない？」
「そ、そうですよね！」
はっきりと言葉を吐くティアナに、エリオも少しは気が晴れたのか、表情を明るくして声を上げる。それと同時にキャロも笑みを浮かべた。
あの娘がどうなるのか、それを考えるのはティアナの言うようにスバルたちがどうこうする問題ではないのだ。それこそこの機動六課が、はやてやフェイトが上手く対処するだろう。
喋っているうちに隊舎へと到着し、その扉を通ってから更衣室へと向かう。そこで一旦着替えを持ってからシャワー室へと向かって行く。キャロは一旦フリードの様子を見るため、後から来るとの事。なので先に二人で済ませる事にする。シャワー室に着いて服を脱ぎつつ、後ろの着替え入れの前で脱いでいるティアナに話しかけた。

「部隊長たち、もう戻って来ているのかな？　せっかくだし、昼休み辺りその辺の話も訊いてみようよ？」
「そうね」
　応え、脱ぎ終わる。スバルも脱ぎ終わったので、そのままシャワーの個室へと入ろうとした。が、それはティアナの声で止められる。
「そういえばあんた、身体の調子はどうなの？　ここん所訓練と実戦続きだから、何かあれば検査してたほうがいいんじゃない？」
「ああ、大丈夫。この間も言ったけど、一応簡単な検査はいつもシャーリーさんに診て貰ってるし、今度ギン姉と一緒にマリエルさんの所に行って全体を診て貰う予定だから」
　腕を動かして元気に振る舞いつつ、自分は大丈夫だとティアナに見せて言葉をかける。しばらく訝しげに見て来たが、はあとため息を吐いた。いつものティアナの様子に戻ったことが分かる。視線を外し、個室へと入って行きながら、
「あんまり無茶しないでよ。いざという時にあんたに異常が出たら皆の迷惑になるんだからね」
「うん、分かってるよ、ティア」
　言って個室へと入り、ティアナはシャワー浴び始めた。勿論、今の言葉だけの意味ではない事もスバルには良く分かっている。それをティアナも察しての事だ。だからこそ、その言葉の意味を重々胸にしつつ、スバルもシャワーを浴びた。
　数分後にはキャロもシャワーを済ませて三人で室外へと出る。すると廊下の壁に寄りかかって此方を待っていたエリオがいた。エリオもシャワーを浴びたとの事だが、さすが男の子というべきか、速攻で済ませられるなと思いつつ、一緒に廊下を歩いて行く。
　まだ昼休憩まで時間がある為、午後の書類作成の準備を済ませておこうと思い、事務室へと向かう。その途中、丁度はやてとフェイトが居たので挨拶すると、二人も此方に気付いていたので返してくれる。
「ご苦労さんや皆」
「お疲れ様。皆は今から事務室？」
「はい。午後の書類作成の準備だけしようかと」

言うとはやては時間を確認した。現時刻は昼の三〇分前であり、準備程度で丁度いい時間になるだろう。そうやねと一言を口にしつつ、はやては周囲を見た。丁度廊下が交差している為、それぞれの方向を確認している。何かを探しているのだろうかと疑問に思ったところで、スバルはここにいない人物の事を思い出した。

「あの、なのはさんはどちらへ？」

なのはの姿が無かったので、それを訊ねるとはやてが「ああ」と口を開き、

「なのはちゃんも今からこっちに来るよ。今戻ってきたばかりやから、一旦部屋に戻ってから来るはずやけど……」

そう言ってはやてがディスプレイを起動してなのはに通信しようとする。部屋に戻って来るだけなのでそう時間はかからない筈だが、それにしては時間がかかっていたのだ。

するとと通信が繋がり、ウインドウに映像が映し出される。すると——。

『うわぁぁぁあああああああああああああああん！　やだぁぁぁあああああああああああああああ!!　行っちゃヤダぁぁぁぁぁああああああああああああ!!』

突然泣き声が辺りに響き渡る。突然の事でその場に居た一同が驚く。ウインドウに映し出された映像には先ほど教会で会った娘、ヴィヴィオの姿があった。ヴィヴィオはあれから教会から引き取って六課に連れてくる事になったのだが、

「これは、また……」

はやてが苦笑いを浮かべて、

「なんや大変そうやね、なのはちゃん」

『えと、はやてちゃん……』

画面越しに困るなのはの姿があったので、一同はなのはの部屋に向かう事にした。スターズとライトニングの四人には先ほどの事を説明しつつ移動し、なのはの部屋を開けて室内に入ると、そこには未だに泣き叫ぶヴィヴィオと、そのヴィヴィオにしがみ付かれているなのは。そして寮母のアイナさんが傍で苦笑いを浮かべていた。

「なのはちゃんでも、流石に泣く子には敵わんようやねぇ」
「あ、はやてちゃん、皆ぁ……」
「すっかり懐かれちゃったみたいだね」
　はやてとフェイトが笑みを浮かべつつ歩み寄る。皆がなのはの方へと寄ると、なのはは困ったように苦笑いを浮かべた。ヴィヴィオはいきなり大人数が部屋に入って来た事により、不安そうになのはにしがみ付く腕に力を込める。
『仕事に戻ろうとして、とりあえずアイナさんに面倒看て貰おうかと思ったんだけど……』
『まあ、この様子じゃなぁ……』
　ヴィヴィオの耳に聞こえないように、念話で話しかけるなのはにはやてもヴィヴィオの様子を見ながら答える。するとフェイトが一歩前に出てきて、
『大丈夫、私に任せて？』
『フェイトちゃん？』
　念話で伝えた後、フェイトは床に落ちていたウサギのぬいぐるみを手に取る。教会の病室にあったものだが、すっかりヴィヴィオが気に入ってしまった為、特別に貰ってきたものだ。仕事に戻ろうとしたなのはを引き止めるために掴みかかった際に落ちてしまったのだろう。
　フェイトはそのぬいぐるみを器用に持って、ぬいぐるみの腕を動かし、
「こんにちわ」
「……え」
　視線をヴィヴィオに合わせしゃがみ、ぬいぐるみを動かしてその影からフェイトが声をかける。ヴィヴィオもその様子に興味が出たのか、不安な表情を一変させる。
「ヴィヴィオは、なのはさんが行ってしまうのが、嫌なんだよね？」
「……うん」
「でもね、なのはさんはこれから大事なお仕事があるから、行かなくちゃいけないの。それなのにヴィヴィオが離してくれないから、なのはさん困っているよ？　うさぎさんも、ほら？」

「……うぅ……」
　言って、ぬいぐるみの腕を動かして頭を抱えるポーズを取る。するとヴィヴィオもなのはが困っている事を理解しているのか、眉を八の字に曲げる。フェイトは困った表情から安心させるように笑みを浮かべ、
「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたい訳じゃないんだよね？」
「……うん」
「なら、少しの間だけ我慢しよっか？　なのはさんも直ぐに戻ってくるから、ね？」
「……うん」
　次第になのはの足を掴むヴィヴィオの手の力が緩む。なのははしゃがんでヴィヴィオの頭を撫で、
「ありがとうヴィヴィオ。直ぐに戻って来るから、お留守番できる？」
「……うん」
「そう。良い子良い子」
　笑みを浮かべて撫でるなのはに、ヴィヴィオもようやく落ち着いた。その様子を見てスターズとライトニングは内心驚いていた。
『何と言うか、フェイトさん子供のあやし方が上手いっていうか……達人じみているというか……』
　スバルの疑問にエリオが、
『フェイトさん、甥っ子の世話とかもしてきましたから』
『それに、使い魔の世話も幼少の頃にしたと聞いてますし』
　エリオとキャロの言葉に「ああ」とティアナが反応し、
『それに、あんた達がまだ小さい頃の世話もしているもんね、納得だわ』
　ティアナの言葉、エリオとキャロが恥ずかしそうに頬を赤く染めたのは言うまでも無い。

◇

　ヴィヴィオをアイナに預け、なのは達は予定よりも遅れてしまった

為に先に昼食を摂ることにした。食堂での食事を済ませた際に、はやてに呼び出しを受けたので、フェイトと共に部隊長室へと向かう。
フェイトがインターホンを鳴らしてから室内へと入る。すると部屋の中央にある来客用のテーブルの席に既にはやてが座っていた。促されたので、フェイトと共に下手の席へと腰掛ける。はやては先に昼休憩中に呼び出してしまった事を軽く謝るが、フェイトはともかく、なのはにはこれといって用事があった訳では無いので別段それは構わない。
それよりも、はやてが呼び出したその理由の方が気になった。
「それで、要件って何？」
「ああ、そうやね。早速本題に移ろう」
はやては軽く咳払いをした後に、
「実はな、近日この機動六課に、地上本部から査察が入る事になったんよ。もとより色々無茶して作った部隊や。こうなる事は分かってたけど、まあグレーな部分とかは上手く誤魔化すつもりや」
それを聞いてフェイトは心配そうに表情を顰めた。地上本部と聞いてなのはは指を顎に当てて以前教えて貰ったことを思い出す。地上本部は文字通り、各次元世界に駐留して治安維持を担う組織であり、その管理世界の中心であるこのミッドチルダを統制、管理している管理局の本部だ。
次元世界を航行を担当する管理局本局、通称【海】に比べて与えられる予算が格段に少ない上、配備されている人員も海より少ない。更には一定の能力に達した人材は海が引き抜きを行うらしく、それもあって満足な活動が行えていない。
その結果、首都クラナガンの外れにある廃棄都市問題や軽犯罪の対策が未だに片付いていないのだ。次元世界の住民からも信頼が低いとされ、政治的にも問題になっている。
万年人手不足である管理局故に、海も人員を得たいのは分かるが、それもあって陸からの印象は悪い。
そんな地上本部のトップに位置する人物――レジアス・ゲイズ。階級は中将。陸の状況がそんな状態である中、その屈強な姿勢と確か

な統率で地上の犯罪を抑えている優秀な人物だ。一番の苦労人であるのは間違いない。
彼は現在、地上の人員不足、並びに戦力不足問題を解決すべく、戦力増強を図ろうとして各地上支部に働きかけており、政界に対してもその問題の事を演説して説明を行い、民衆に対する意識をこの問題に向き合わせようとしている。色々試行錯誤している様子は分かる為、なのはとしても考えさせられる人物であった。
そんな人物がこの突っ込み所満載の部隊に、とうとう査察を送り込むという話である。元より本局と地上では溝があり、それでいて本局の指揮下にあたるこの六課が気に入らないという点もあるのだとか。
レジアスはユーノから以前に聞いた話によれば、犯罪者には勿論、レアスキル持ちの人間を好まないらしい。レアスキル持ちの人間が気に入らないのは恐らく、自分達が努力で積み上げたものをいとも簡単に超えられてしまう事実に、全体の士気が下がってしまった問題があるのだろう。前の空港火災事件もその事実を体現してしまった故に、はやての事も陸に知れ渡ってしまっている。
故に、今回の査察だ。なのはからしてみれば、同じ組織内で馬鹿らしいという考えだが、そうもいかないのがこの現実だろう。
しかし、査察に関してははやては上手く対処すると言った。それだけの要件でなのはとフェイトを呼び出したとは考え辛いと思考する。その思考を察したのだろう。はやてが口を開いて、
「んで、これを機に二人に話そうと思ったんよ。――六課が設立された、本当の理由を」
その言葉、なのはは以前にティアナとスバルから聞いた話を思い出した。この機動六課の目的はロストロギアの回収任務であるが、それにしては集めている戦力が大きすぎるという点だ。
「機動六課が確かにロストロギアの回収の部隊として作られたのは本当や。でも、それとは別に目的がある。それが――カリムの予言や」
「予言？」
なのはが首を傾げる。カリムの予言というのは、カリムが持つ強力

な能力だ。彼女はその名の通り先の未来を予言する事が出来るとの事。にわかには信じがたいが、今まで彼女のその能力が確かな情報を提供し、今の地位まで上り詰めたのだろう。
「カリムの予言を要約するとこうや――――近い日に、地上本部に大いなる災いが振りかかる」
「地上本部に？」
「ああ、そうや。大いなる災いって言うのが恐らくスカリエッティの事を指している。彼の持つガジェットドローンや、その所有するロストロギアの力を使われれば十分に脅威や」
無論、それだけで収まればまだ良いが、その予想の範疇を超えることが起こらない事も考えられなくもない。その為に今回、機動六課は予防策として設立されたと次いで説明を受ける。
だが、予言の内容ではその対象は地上本部だ。本局所属の人間が対策を打つのでは無く、陸に対して警戒態勢を取らせて全体で問題に対処するのがむしろ定石だろう。あまりにも回りくどいやり方だと思ってしまう。
――――が、少し考えれば今のこの状況がなるべくしてなっているのが理解出来る。そもそも情報自体が【予言】によるものなのだ。レジアスはその性格から占いという類は信じない。当然海から警告はしたらしいのだが、不確かな情報に手をかけている余裕は無いとのこと。
その為、本局の指揮下で地上に部隊を設立したのだ。
「うーん……予言ねぇ……。正直に言うと、私も信じがたいっていうのが本音かな？　それこそ傍からしたらレジアス中将の言う事がもっともだし」
隣で思慮するフェイトははやての言葉に深刻そうに表情を歪ませているが、なのはとしては予言は占いと何ら変わらない類としか認識していない。朝一番のニュースで自分の運勢が良いか悪いかなんて言われても、正直どうでも良いと思うのが本音である。
それが、カリムの力がその予言であり、それが信用できる情報だとしても、だ。はやてもフェイトもなのはがこういう反応するだろうと

は思っていたので苦笑する。
「まあ、でも備えあれば憂い無しともいうし、地上本部で行われる公開意見陳述会ももうすぐや。スカリエッティたちが仕掛けてくるとしたらその日が濃厚やし、警戒は怠らんよう注意しよう」
はやてが口にした【公開意見陳述会】。文字通り、各世界の陸の管理局役員が集まって会議を行うものである。かねてよりの陸の状況と本局の対応、そしてレジアスが目指す人員確保と戦力増強の為、その意見を通す為のものだ。政界からも人が集まり、ここでの意見が認められれば彼の努力が報われるという事だ。
当然、お偉い方が集まる場である為、襲撃があってもおかしくない。当然陸でも厳重な警戒はするだろうが、そこに六課も加わって防衛を確固なものにしたい。
頷くフェイトとなのはに対し、一呼吸置いてからはやてが「それともう一つ」と口にしてから立体ディスプレイを表示させる。そこに映し出されたのは、先日の街中での戦闘データとその時の様子が映された写真の数枚だ。そこにはスカリエッティ一味と思われる女性の姿。
「先日現れたこの犯人達やけど、陸自とうちで調べた結果で分かったことがある。この人たちは魔法とは違う力を使っていた。そこから分析した結果、恐らくこの犯人たち――――戦闘機人や」
「戦闘機人？」
聞きなれない単語になのはは首を傾げる。その説明をはやてに変わってフェイトが始めた。
「戦闘機人。魔力とは違う仕組みで戦闘を行う、半機械化された人造人間。前にこの存在と関わる事件が起こったんだ」
「半機械化ってことは、つまりサイボーグってこと？」
「まあ、そうだね。問題はこの存在が魔力を使わない戦闘能力を使い、さらに体力も消費せずに行動出来るということ」
フェイトの言葉にはやてが頷き、
「魔力を使わないって事は、ガジェットドローンとの相性も抜群や。戦闘指揮を戦闘機人に、ガジェットドローンによって襲撃されたら魔

法技術しかもっていない管理局にとってひとたまりも無いのは明白や」
　成る程、となのはは顎に指を当てて思考する。六課や陸自でこそガジェットドローンの戦闘経験はあるが、それ以外の管理局員にとってＡＭＦに対処できるかといわれれば出来ないだろう。それに足してこの戦闘機人という存在だ。
「戦闘機人が出てきたという事やし、今後戦闘になる可能性も高い。少しでも情報を分析して報告すべきや。その為、査察後にはマリエルさんが六課に出航して貰う事になった。陸自からもギンガも」
　マリエル・アテンザ。なのはたちにとって昔から世話になった人物だ。情報分析科としてこれ以上ない助っ人だろう。陸自からもギンガが六課に出向となる。元から過剰戦力であるが、公開意見陳述会の前である為の対策だろう。
「……まあ何にせよ、杞憂であればええんやけどなぁ」
　何も無ければ良し。あったとしても対処して被害が抑えられれば良し。これ以上イレギュラーが起きない事をはやては願った。

第18話

地上本部の査察部から機動六課への査察を無事に潜り抜け、その数日後にマリエルとギンガが六課の隊舎へとやって来た。マリエルはシャーリーと共にメンテナンスルームへ。ギンガは早速スターズ、ライトニングと共に訓練に参加する事になった。

訓練にはいつもの様に教導官としてヴィータが。そしてシグナム、フェイト、そしてなのはが参加していた。なのははヴィータに付き添ってその補佐という仕事を行うが、特に難しい仕事ではない。今日に至ってはギンガとスバルの模擬戦を観戦して感想を述べるというものだ。

模擬戦の結果はギンガの勝利という形で終わる。ティアナの指導を終えて途中からその様子を見ていたヴィータが、最初から様子を観戦していたなのはに訊ねる。

「どうだなのは？　二人の戦闘を見て」

「そうだね。ギンガは先輩とあって皆より動きがいいと思う。けど、スバルもこの前に比べると良くなっているっていうのは分かるかな」

なのはは腕を組んで、一通り見た模擬戦の様子から、自分が感じた率直な意見を口にした。その言葉はアバウトであるが、それも仕方の無いことだ。なのはは確かに強いが、戦い方、動きという事に関しては素人なのだ。その事はヴィータも良く知っているので、あくまで感覚的にどう思うかだけを訊ねている。ヴィータは「そうか」とだけ呟いて、訓練が終了した皆の下へと歩み寄った。

スバルとギンガ、そしてティアナ。フェイトとシグナムに相手して貰ったライトニングの二人。皆が集まってヴィータやフェイト達に向かって整列する。

「皆ご苦労さん。ライトニングの二人に関してはフェイト執務官とシグナム副隊長も言うように、訓練第二段階の動きにようやく慣れてきたって感じか。ティアナもあたしとグラーフアイゼンの動きに対応して来ていると思うぞ。スバルは惜しかったな、動きに関しては悪く

ねーが、今回は経験の差が結果に出ちまったな。ギンガは流石と言っておくぞ」
　内容が褒められた事が多かったので皆疲弊しながらも笑顔だった。スバルは悔しそうにしていたが、相手が姉のギンガだからか落ち込んでいる様子は無く、むしろリベンジに燃えているといった様子だ。
「じゃあいつも通り、最後にうちらと模擬戦……と言いたい所だが」
　ヴィータが言葉を途中で区切り、なのはの方へと視線を向ける。すると二ヤっと笑ってから視線を戻し、
「今からフェイト執務官と、高町教導補佐による模擬戦を行いたいと思う」
「え？」
　突然のヴィータの言葉に、なのはは目を丸くする。すると斜め後ろにいたフェイトがなのはの隣にやって来て、
「ごめんね、なのは。これは私からのお願いなの。久しぶりになのはと手合わせしたいなって思って」
「フェイトちゃん……」
　申し訳無さそうに言って手を合わせて頭を下げるフェイト。そういうのも、フェイトは自身の強さがどこまでなのはに通じるのか試していたいという欲求があった為だ。今までなのははあくまで一般人。管理局員が一般人に手を上げてはならないのは常識だ。その為、丁度なのはが六課に入った事によって今まで望んだ事が実現可能という訳である。
　基本的に相手に命令されることを好まないなのはだが、今はお役所仕事に勤めている身であり、更には珍しくフェイトの我侭なのだ。なのはとしても驚いたが、こうなったら断る理由も無い。
　なのはは苦笑いを浮かべつつ一呼吸置いたのち、フェイトに向き直ってから、
「いいよ。じゃあやろっか、フェイトちゃん」
「！　うん！　なのは！」
　まるで子供のように表情を明るくするフェイトに、なのはも笑みを浮かべる。当人が納得した事により、早速模擬戦の準備を行うことに

なった。
訓練場は森林の舞台であった為、このままで模擬戦を行うことに問題ない。スターズ、ライトニング、そしてギンガとヴィータとシグナムが離れた場所に移動する。
移動しながらスバルが隣のティアナに話しかける。
「なのはさんとフェイトさんの模擬戦……何だか凄い事になりそうだね」
「そうね。なのはさんもそうだけど、フェイト執務官も人外じみた強さの持ち主だから……」
言って、ティアナは先日のフェイトの戦い方を思い出す。フェイトはその速さと対艦サイズのザンバーで相手を一瞬で一刀両断する。相手が多数なら地形ごとなぎ払うという、正に人外と呼べる実力の持ち主だ。
そして言わずもがな、なのははその拳で相手を瞬殺するという実力の持ち主。正直、この二人が戦ったら周辺に及ぶ被害がとてつもない事になるのではないかと心配になってくる。
「二人はどっちが勝つと思う？」
「「え？」」
スバルは前を歩くエリオとキャロに訊ねる。二人は不意に声をかけられたので目を丸くするが、直ぐに思考に耽る。先に口を開いたのはエリオだ。
「僕は……やっぱりフェイトさんかな。なのはさんも凄く強いけど、フェイトさんの速さは常人を逸しているから」
「私も、フェイトさんが有利かなと思います。フェイトさんのあのザンバーって、文字通り相手が何処に居ようが切り裂くって感じですから」
二人は今まで見てきた二人の戦い方を参考にした結果、フェイトが勝つ事を予想する。それは保護責任者がフェイトである事あって肩を持っている、という訳ではないだろう。冷静に分析した結果、自分らに考えられる事をまとめるとそういう結果になったからだろう。
ティアナにとってもフェイトのあのザンバーから逃れられるのか

と考えると、確かにフェイトに分があると考える。
拳の範囲よりも圧倒的に対艦サイズのザンバーの方が範囲が広いからだ。さらにフェイトはザンバーの長さを変えることも出来る。速さもフェイトは凄まじい為、避けられた瞬間に近寄られて反撃を食らう、という事も考え難い。そう考えれば有利なのはフェイトと思う。
「……お前らも、まだまだ若いってことかな……」
会話を聞いていたのか、ライトニングよりも前を歩いていたヴィータが苦笑いを浮かべつつ、そう呟いた。その言葉が意味するのは、果たして何なんだろうとスバルは首を傾げた。
なのはとフェイトはそれぞれ互いに距離を取り、その身にバリアジャケットを纏わせる。他の皆も十分に安全圏へと移動した為、立体モニター越しにヴィータがカウントを始める。
『カウント始めっぞー。くれぐれも施設ごと破壊するのはやめろよなー』
一見冗談のように思えるヴィータの忠告が冗談では無い事は知っている。勿論、そんな事はしたくない。だが、訓練場が耐えられるまでのギリギリまでは全力を出していきたいとフェイトは思考した。
やがてカウントがスタートし、それがゼロになった瞬間に模擬戦が開始される。
「――――!!」
先に攻撃を仕掛けるのはフェイトだ。即座にバルディッシュをいつも通りの対艦ザンバーに展開し、なのはへと向けて瞬発、離れた距離を殺して肉薄してザンバーで横になぎ払う。だがなのはにとってはその速さは十分目で追える距離だ。フェイトのその動きの軌道を見て、横に薙がれるザンバーを避けるために上へと跳躍する。
跳躍後にフェイトのいた下方へと目線を向けると、そこには既に姿は無く、気付いた瞬間にはフェイトはなのはに再び肉薄していた。気付くと同時にフェイトはその胴へと蹴りを繰り出す。跳躍からの勢いでザンバーを振るより蹴りの方が速く、次の攻撃にシフト出来る為だ。

胴に蹴りを食らった為、なのははその勢いで空中から一気に吹き飛ばされる。その姿を確認する必要は無く、フェイトは直ぐ様ザンバーを振るって予測地点へと薙ぎを振るう。

予測地点へと振るう。それだけでいいのだ。フェイトにとってはそこに敵が居れば、場所ごとなぎ払えば良い。それくらい単純で、それくらいの猛威でなければ頂の強さは得られないからだ。

巨大に伸びたザンバーの刃によって、周囲の木々ごと文字通り一刀両断される。着地点に対する攻撃であり、浮遊からの着地という隙を狙っての攻撃であり、物理法則の観点から言えば避ける事の出来ない攻撃だが、魔導師では話が変わってくる。

レイジングハートが瞬時になのはの足元に魔力で出来た床を展開。これはスバルやギンガが使うウイングロードを応用したものであり、あくまで足場となる僅かな範囲にだけ展開させた。瞬時に作られた足場によってなのはは蹴り上げて横へと飛んで斬撃を回避する。飛行魔法では間に合わないタイミング故にレイジングハートが判断したのだ。

優秀なデバイスに感謝しつつ、フェイトの方へ向く。だが当然のように姿が無く、横に気配を感じた為振り向く。

だが、気配の感じた方にはフェイトの姿が無い。

一瞬判断が遅れる。その遅れが、なのはに衝撃を与えた。

文字通り衝撃。ザンバーの切っ先がなのはの横腹に直撃したのだ。裂かれはしないが、その衝撃で吹き飛ばされていく。落下して地面を引きずり、そのまま木々を薙ぎ倒していき、大地に巨大な爪痕を生み出した。

衝撃がやっとの事で収まり、抉られた地面の出っ張りに背中を預けながら、なのはは目を丸くした。気配がしたが、気付けなかったのだ。フェイトの速さがそれほどまでに速くなっていたのだ。

フェイトもなのはが驚いているので一旦一呼吸を入れつつ、なのはの正面へと立つ。なのはの姿を確認すると、汚れてはいるが致命傷を負っているようには見えない。それは予想の範疇だ。

何より、この程度でなのはを倒せるとは微塵も思っていない。

なのははフェイトの姿を確認する、ザンバーを普通のサイズにして此方の様子を窺っている。待っているのだ。それに合わせてこちらも身体を起こす。頭を左右に倒してポキポキと音を鳴らす。そしてもう一度フェイトに目を合わせてから、仕掛ける。

行動は単純。接近して拳を繰り出す。だが当たらない。残像すらも残さずにフェイトは消える。だがなのはも反撃を許さない。気配を辿って拳を繰り出す。だが当たらない。四方八方に攻撃を仕掛け、そのどれもが虚空を突くだけだ。

何度目に繰り出した拳だろうか、なのははフェイトの気配が完全に消えるのを感じて攻撃を中断する。

一気に静まったことにより、潮風が身体に伝わる。

その瞬間、肩を叩かれる。

振り向くと、人差し指を作ったフェイトの姿があり、なのははまんまと頬を突かれる形になった。

呆気に取られていると、フェイトは珍しくいじらしい笑みを浮かべて、

「――これで、お相子だからね、なのは」

「……あ」

その言葉で思い出す。それはまだフェイトと会って間もない頃。それはジュエルシード事件の時だった。当時フェイトと決戦した時に、なのはがした事だ。しかも今回は頬を突かれるというおまけ付きでだ。

フェイトはなのはから距離を取り、こちらに向き合う。なのははそんなフェイトに笑みを浮かべ、

「……あーあ、やられたなー。フェイトちゃん、凄く速くなったね。正直、驚いているの」

「うん。実はなのはにこれをやり返そうって昔から思ってたんだ。だから私の中では結構満足してる。……でも」

と、フェイトはバルディッシュを構え、

「このまま、なのはに勝ちたいって欲もあるから！」

その刃を、なのはへと向けた。そう、まだ終わっていない。だから

再び戦闘を始めるのだ。構えるフェイトに対し、なのはもその目を見据える。
「そうだね。フェイトちゃんも凄く速くなった。凄く強くなったって分かった。――――なら、私も本気をぶつけないと失礼だよね」
その言葉を合図に、なのはの雰囲気が変わる。それをフェイトは肌で感じた。辺りは先ほどの衝撃で障害物が無い。ならばと、フェイトは動いた。
フェイトが動くと同時に、その周囲に信じがたいものが展開される。
それはフェイトの影だった。いや、影というよりは実体に近い。だがそこにフェイトがいるとは確認出来ない。なぜならば、その影は大量に周囲に展開されたのだから。
この光景に、観戦する皆が驚愕する。忍術で言う影分身のような光景だが、決して魔力で作り出したものとは違うからだ。
この技は、正真正銘フェイトの身体能力によって体躯しているものに他ならない。
それくらい、フェイトの速さは逸しているのだ。
だから、なのはは構え、対抗する。
「必殺【マジシリーズ】」
なのはの足が動いた瞬間、
「――――マジ反復横跳び」

なのはが居た場所のその横一帯に、フェイトの残像とは比べ物にならない程の影が展開された。その影が一斉にフェイトに襲いかかった。
「あばッふッ!?」
目で追えないその光景に、フェイトはなす術無く、数個の影ごと巻き込まれて吹き飛ばされた。回避方法は他にあったのかもしれない。一帯から距離を取るなど方法はあった。
だが、それで回避したところで、このなのはの動きを目で追えない

時点で結果は察せるのだ。
吹き飛ばされたフェイトは放物線を描いて地面へと落ちる。身体が動かない。空を見上げる形になったフェイトになのはが歩み寄る。
「……なのは、今のは、一体何なの？」
「反復横跳びしながら移動しただけだよ、フェイトちゃん」
いたって真面目に答えるなのはに、フェイトは遠退く意識の間際に薄ら笑いを浮かべ、
「……はは。その衝撃だけでこのダメージか。……私より、速かった……」
がくりと、フェイトは気を失った。これにより、模擬戦は終了となったが、観戦していた皆が驚きで声を失ったのは言うまでもない。

◇

模擬戦終了後、治癒魔法によってフェイトが意識を回復し、改めて訓練の振り返りをしつつ、午前の訓練は終了となった。
なのはとフェイトの模擬戦を見てスターズ、ライトニング、そしてギンガが改めてこの二人は凄まじいと認識する。ヴィータとしては、
「まあ、フェイトも十分人外なくらいに強くなったと思う。けど、なのはは駄目だ。こいつは何ていうか、チートだ。いや、歩くゲームオーバーと言った方が適正かもな」
「ヴィータちゃん、流石にそれは酷くない？」
「本当の事を言ってるだけだが？」
腕を頭の後ろに組んで、ヴィータが半眼で笑みを浮かべつつ、なのはへの認識を口にした。なのははそんなヴィータにそう言葉を口にするが、あながち間違いでは無いように思わされる。
ギンガは信じられないものを見たといった様子であった。スターズ、ライトニングの各々も、以前になのはと行った模擬戦が本気を出されていないと分かり、もはや苦笑いを浮かべることしか出来ない。
そろそろ隊舎へと戻ろうとした際、此方に来る人影があった。
「ママぁーー！」

それは元気よく此方に駆け寄って来たヴィヴィオだった。アイナさんが用意して着せたのだろう可愛く着飾った服に身を包み、その頭にはリボンで髪をサイドで結ってアップしていた。その後ろからはヴィヴィオのもう一人の世話役として付き添う事になったザフィーラの守護獣としての姿がある。

「あ、ヴィヴィオ！」

なのははそんなヴィヴィオに対し、笑顔で手を振る。

「ママって？」

ティアナが疑問の声を漏らす。それはエリオ、キャロ、そしてギンガも同様だ。その疑問にスバルが説明する。

「なのはさん、ヴィヴィオの保護責任者になったんだよ。あくまで一時的にだけどね。その時にね、分かりやすくヴィヴィオに説明する為にママって言ったら、ヴィヴィオがそう呼ぶようになったんだ」

スバルの言葉通り、それは丁度ティアナがはやての同行に。ライトニングがフェイトと同行し、新人の皆がほぼ外出している時の事だった。ヴィヴィオの今後の事だが、育て親が見つからないうちは誰かが面倒を看るしかない。

その為、なのはが自ら保護責任者になる事を決めたのだ。なのはとしては自分に懐いているのもあり、このまま保護責任者になるのも悪くないと思ったのだ。

「でも、なのはさんってまだ二〇歳（はたち）前でしょ？　ママっていう言葉に対して抵抗はないの？」

「あたしもそれは思ったんだけど、むしろなのはさんはそれで構わないってことで」

ティアナが言った疑問に、スバルはそう答えた。なのははまだ成人前であり、ましてや結婚もしていない独身女性だ。普通ならば思うところもあるのだが、

「うん。ヴィヴィオがそれで安心するなら、それでもいいかなって思ったから。悪い感じは全然しないし」

会話を聞いていたなのはがそう言葉を口にする。一瞬ドキッとしたが、穏やかに言うなのはに安堵した。

視線を戻し、駆け寄るヴィヴィオの姿を見る。と、その時であった。
――ヴィヴィオの足がもつれ、転びそうになった。皆が反応するが、なのはの反応はもっと早かった。
ヴィヴィオが転び、地面へと接触する寸前に、一瞬でヴィヴィオの元へと移動してその身体を優しく抱き止める。ヴィヴィオも何が起こったのか分からず、目を丸くする。
なのはは受け止めた腕を上げて、ヴィヴィオの身体を起き上がらせる。笑顔をヴィヴィオに向けて、
「大丈夫？　怪我は無い？」
「え？　う、うん」
「そう。気を付けるんだよヴィヴィオ」
優しく言葉をかけるなのはに、
「うん！」
満面の笑顔で元気良く返事をした。
一瞬の冷や汗と、なのはの行動によって皆が安堵する。その光景を見たヴィータやシグナムは意外そうな表情をしながら、
「何か珍しいっていうか、変わったよな、なのは」
「今までのあいつの性格からは想像できない光景だな」
笑みを浮かべつつ、思った事を口にする。二人がこう思うのも、今までのなのはを知っているからこそである。それこそなのはが人に関心を示す。ましてや世話をするなんて考えられなかったからだ。無気力であり、無関心。それが今までのなのはである。
「だからこそ、良い傾向だと私は思います」
ヴィータとシグナムの隣に立ち、フェイトはなのはとヴィヴィオのやり取りを見ながらそう口にした。

第19話

公開意見陳述会の前日。時計の針が一二時を指す間際。六課の隊舎のヘリポートでは今まさに出発しようとしているタイミングだ。陳述会の警備は数日前から厳重化されており、六課も深夜から警備にあたることになった。なのはは夜勤という事に慣れない為に、眠そうに欠伸をしてしまう。正直だるいと感じるが、これも仕事故に仕方ないことだ。

はやてとフェイトは後からの合流の為、出発するメンバーの見送りをする為その様子を見守る。ヴィータを先頭にスターズやライトニングがヘリに乗り込み、なのはも乗ろうとしたタイミングである。

「あれ？」

ふと視界の横に、アイナと共にヴィヴィオの姿があった。近寄ってヴィヴィオの前でしゃがんで目線を合わせてから頭を撫でる。

「どうしたのヴィヴィオ？　ここは危ないよ？」

なのはの言葉に、ヴィヴィオは不安気な表情を見せた後に俯いてしまう。一体どうしたのだろうかと疑問を浮かべると、その疑問にアイナが口を開き、

「ごめんなさいね。ヴィヴィオがどうしてもお見送りしたいっていうから」

その言葉に、横から歩み寄ったフェイトも加わり、

「なのはが夜勤に出るの、初めてでしょ？　だから不安なんだよ」

「ああ、そっか……」

なのはは納得し、ヴィヴィオへと向き直る。ヴィヴィオが来てからはなのはは寝る時もヴィヴィオの傍にいた。一緒にベッドで寝ていた。その為、ヴィヴィオにとって夜になのはが出かけるという事に、とても不安で仕方ないのだ。

なのははヴィヴィオに笑みを浮かべつつ、

「ヴィヴィオ。今日、なのはママお泊りに行って来るから。大丈夫、直ぐに帰ってくるよ？」

「……本当？」

「うん。良い子にお留守番出来たら、ヴィヴィオの大好きなお菓子用意するからね」
「……うん！」
不安で歪めていたヴィヴィオの表情がなのはの言葉で明るくなり、笑顔で頷く。そしてもう一度ヴィヴィオを抱き寄せてから、行って来ますと口にしてヘリに乗った。
準備が完了し、ヘリのプロペラの回転が勢いを増して速くなり、上昇を始めて、その姿はあっという間に上空へと消えていく。その様子をフェイトはヴィヴィオの手を握りながら見送った。
「ごめん、お待たせ」
ヘリの後部座席に座るスターズとライトニング、そしてヴィータに向けて軽く謝りながら空いている席へと座る。それにしてもと、スバルは口を開いて、
「なのはさん、もうすっかりヴィヴィオのお母さんですね」
「ええ？　そうかな？」
スバルの言葉に、他の三人も同意して頷く。
「ヴィヴィオが懐いてくれているのは嬉しいけど。私としては、あくまで保護してくれる家庭が見つかるまでって思っているから。もし見つかれば、ヴィヴィオに納得して貰うように説得するつもりだし」
「いや、ヴィヴィオ、絶対に納得しないと思う……」
キャロが苦笑いを浮かべて言葉を吐く。それにまた皆も頷いた。なのはにしがみ付いて泣き叫ぶ光景が安易に想像できる。でも、となのはは口を開き、
「私とずっと一緒に居るより、私よりもっとまともな人が、円満な家庭があれば、ヴィヴィオにとっても幸せだと思うんだ。ほら……私って、こんなだし」
言って、なのはは右手で拳を作って見せるようにして腕を上げ、苦笑いを浮かべる。その意味は当然皆にも伝わっているが、そんななのはにヴィータが半眼の視線をなのはへと向け、
「お前自身の問題なんて、この際関係ねーと思うぞ。肝心なのは、ヴィヴィオにとって何が一番幸せなのかって事だ。ヴィヴィオがお前を

選び、お前と一緒にいる事が一番の幸せなら、それを受け入れる選択もある。……まあ、答えを急ぐ必要もねーし、よく考えてみることだ」

「ヴィータちゃん……」

ヴィータの言葉に、なのはは目を丸くして視線を合わせると、ヴィータはそっぽを向いて目を閉じた。ヴィータとしても、はやてに家族として迎え入れて貰ったからこそ、思うところがあったのだろう。

「そう、だね。とりあえず、受け入れ先が見つかるまでは、ちゃんと責任持って世話するよ！」

言われた言葉をしっかりと理解しつつ、なのははこの事を一旦保留する。受け入れ先が、今よりも幸せな環境である可能性もあるわけで、それこそ今急いで答えを決める必要は無い。

だから、その答えを決めなくてはならないその日まで、自分がヴィヴィオにとっての幸せになれるように頑張ろうと決意した。

◇

地上本部には現在、各地上世界の役員と同行して来たであろう局員と、地上本部の局員で厳重な警備態勢がされている。公開意見陳述会は午後からであるが、その前に襲撃される可能性は十分に高い。故に六課も深夜から警備にあたる。

深夜から本部に着いたメンバーは四方八方のあらゆるエリアを確認する。現地の局員とも情報交換をしつつ、予め怪しいものが無いかも徹底して確認を行うなどする。そうやって夜が明け、朝を迎えた。

そこから更に時間が経過。午後からはやてやリインフォース、フェイト、シグナムが。そして聖王教会からカリムやシャッハも現場入りする。

本部内には基本的にテロ防止の為、デバイスの持込は出来ない。そのため、デバイスをヴィータに預け、五人は本部内へ入り、会議室にて内部の警備を担当する。

陸自の部隊も警備にあたり、ギンガも午後から警備に参加する。六

課のメンバーに挨拶を交わした後、六課とは別のエリアの警備する。
基本的には異常がないかの確認の徹底だ。いつ襲撃を受けても対応出来るようにする為、少しでも変わった点が無いかを意識し、周辺警戒へと努める。だが、人間常に集中を維持しているのも無理な話だ。故に各エリアにはそれぞれ余分に人員を割き、一定時間で交代で小休憩を挟む。
外で待機するスバル、ティアナ、エリオ、キャロ。そしてなのはとヴィータ、リインフォース。丁度時間も区切りが良いので、四人をリインフォースに任せ、なのはとヴィータは休憩に入る。用意されたトラックの荷台にある飲み物を取り、それを飲む。水分補給を取りながら、荷台に体重を預けて少しでも楽な態勢を取る。なのはの隣にいるヴィータも同様だ。
周囲を見る。もうすぐ陳述会が始まる時間ともあり、皆の緊張感が一層に増しているのが見て取れる。
「なあ、なのは？」
「ん？　どうしたの、ヴィータちゃん？」
ペットボトルを片手にヴィータが、視線をそのままにしつつなのはへ訊ねる。なのははヴィータに顔を向け、ヴィータは視線を固定したまま話を始める。
「……正直、今回の襲撃の可能性。もしスカリエッティ一味が襲撃をしたとして、奴らの目的は何だと思う？　確かに奴らは犯罪者だが、そもそもスカリエッティという奴は研究者だ。レリックやその他ロストロギアを狙ってそこに襲撃を仕掛けるのは分かる。だが、今回の襲撃は奴に何の得がある？」
ヴィータは飲み物を一口飲み、
「たしかに今回の陳述会を襲撃すれば、集まっている重要人物を消す絶好の機会だ。だが、奴にとって管理局やその他お偉い方を始末したとして何になる。管理局が邪魔だから襲撃するって訳じゃねー。むしろ、ここを襲撃すれば大事件として一気に注目を受け、今までとは比べ物にならない程の厳戒態勢がスカリエッティに向けられる。そ

うなれば奴は碌にロストロギアの回収も出来なくなるし、研究だってしにくくなる。デメリットしかないんだ」
一呼吸置き、
「奴が生粋のサイコ野郎でも、犯罪者でなければ天才的な頭脳の持ち主だ。自分の研究成果を見せびらかしたいって理由も無くは無いだろうが、それだけにしても自分が損をしてまでそんな行動を起こすとは思わねー。目的が分からねー……」
確かに、となのはは口に出しながら腕を組んで思考に耽る。ヴィータの主張はもっともだ。スカリエッティにとって今回の襲撃で何の得があるのだろう。ここには彼の欲しているものがあるとは考え難い。考えれば考えるほど、疑問が浮かぶ。
だから、なのはは一旦、情報を分かりやすく整理する事にした。それは分かりやすく単語から。ロストロギア、研究、地上本部、襲撃、人、と。
思考する内に、なのはは人という単語から派生して考える方向性を変えた。もし襲撃されれば、少なからず人的被害は免れない。それがスカリエッティの狙いだとしたら、だ。
なのはは腕を解き、人差し指を立てながらヴィータの方へと向き直り、考えを述べる。
「……もしかして、そこまでして憎い人、もしくは生かしてはおけない人が居るから、かな？　色んな人が集まるし、一斉に始末できる絶好の機会だし」
思いつきで浮かんだ可能性を口にするなのはに、ヴィータは「あ」と声を出して顔をなのはへと向けた。ヴィータは腕を組み、ぶつぶつと独り言を始める。
「……そうか。もしそうだとすれば狙いも分かるし、こんだけ集まっているところを襲撃すれば誰を狙ったのかも誤魔化せる。無くはねー可能性だ」
なのはがどうしたのかと訊ねようとした際、レイジングハートが時間を知らせた。陳述会が始まったのだ。その知らせに、ヴィータも我に返って顔を上げる。まあ、と口を開いて、

「何にせよ、あたし等は何があろうと対処する。それしかない」
「うん、そうだね」
区切りも良いので、小休憩を終わらせ、警備に戻る。

◇

陳述会が始まって更に時間が経った。既に会議の時間も残り半分を切ったところだ。未だに何も起こらないまま、空の色も紅に、そして日が沈もうとしている。
横から指す夕焼けに当たり、なのはは息を吐いた。今のところ異常無し。もしかしたらこのまま何も起こらないのではと思ってしまう。予言は外れ、スカリエッティも襲撃しない。その他イレギュラーも発生しない。そうであればそれに越した事はないのだ。
だが、そんな淡い期待は直ぐに打ち砕かれた。
急に辺りがざわつき始める。どうしたのかと状況を確認するため念話し、
『ヴィータちゃん！　一体何が!?』
『どうやら本部の管制室に異常が発生したみてぇだ！　来るぞ！』
その言葉に、同時に念話を繋いでいたスバルたちも警戒態勢に入る。周りの局員も同様にだ。デバイスを構え、各々バリアジャケットを展開する。辺りを見渡す。まだガジェットドローンの反応や戦闘機人の反応は無い。
どのタイミングで来るかと構えていたが、次の瞬間には全く予想だにしない事が起こる。
突如、辺りにいた局員のバリアジャケットが一斉に解除されてしまったのだ。
不意を突かれた局員が狼狽の声を上げる。すると次の瞬間には地上本部からある程度離れた地点から、肉眼でガジェットドローンを確認する。一斉に出てきた数としては多すぎる。おそらく召還か何かで瞬時に出現したのだろう。
状況を確認する為、再び念話でヴィータに話しかけようとするが、

いくら話しかけても応答しない。そして感じる違和感。念話をしようとしても、会話が出来ないどころか、念話そのものが出来ていないのだ。

一体何が起こったのか理解が負いつかずにいると、ヴィータ達が此方に駆けつけてくる。なのはも駆け寄り、ヴィータに訊ねる。

「ヴィータちゃん！　皆！　これって!?」

「くそッ！　やられたッ！」

ヴィータは怒気を含ませた声を吐き、未だに混乱する辺りにいた局員に対し、建物の影に避難するように指示する。魔法どころかバリアジャケットも展開出来ない局員はガジェットドローンに対抗する手段が無く、ただの的になるだけだ。なのは達もとりあえず影に隠れ、状況を確認する。ヴィータは表情を険しくしながら、

「ＡＭＦだ！　奴ら、本部一帯に強力なＡＭＦを展開しやがったッ！」

「ＡＭＦって、ガジェットが展開しているものだよね？　あのガジェットがそれを？」

その疑問に、ヴィータの肩の上に乗るリインフォースが答える。

「いえ、あの数のガジェットから展開しているだけではありえない規模と濃度です。恐らく、近くに大掛かりな装置を起動して展開しているんだと思います」

成る程、となのはは頷く。外部から予め用意したとすれば、確かに実現可能なものだ。今日の陳述会の警備はこの場所に集中している。狙いが地上本部だと確信していたからだ。だが、スカリエッティはそれを逆手に取った。

警備が厳重、という事はそこに戦力が集中しているという事だ。なら、それをまとめて無力化してしまう。管理局が魔導兵器しか使えないという穴を突いて。

「皆さん！」

六課のメンバーに一人近づく。ギンガであった。反対側のエリアからこちらに駆けつけて来たのだろう。念話も使えない状況では、状況確認は直接合流して行うしかない。

ギンガは皆と一緒に影に隠れつつ、

「こちらの部隊には避難指示を。そちらは？」
「同じだ。考えられる限り最悪だよ、この状況は……」
ヴィータが鋭い双眸を、浮遊する無数のガジェットドローンに向けながら答える。ガジェットドローンは隠れる局員達に攻撃はせず、あくまで本部の建物に取り付くといった行動を行っている。殺戮マシーンと化さないのはスカリエッティの慢心故なのか分からないが。
ギンガにも先ほどの装置の可能性を説明すると、険しい表情を浮かべながら顎に指を当て、
「そうなるとやはり、外部の部隊に対処して貰うのを待つしか……」
「いや、そんなもん待ってたら遅い。早急に対処しなきゃ不味い」
ギンガの言葉にヴィータがそう口にする。が、それをどうやってとギンガは訊ねた。するとヴィータは視線をなのはへと移し、
「そういう訳だ、なのは。頼めるか？」
「うん、任せて」
なのはは頷き、影から一歩踏み出して表へと出て行く。それにギンガはハッと気がついた。言わずもがな、なのはのその強さは魔法というものに一切頼らない己の強さ。故に唯一通常運転で行動できるのがなのはであった。
リインフォースはその背に向かって、
「恐らく、発生原因は本部の敷地からガジェットが出現した地点より前の位置までを半径にしたライン。そこにあると思われます！　万が一、装置が無かった場合、或いは別のシステムが原因であった場合、それの排除を！　不可能であれば直ぐに戻って報告をお願いするです！」
「了解、リイン！」
言って、地面を蹴って跳躍する。それだけでかなりの距離を飛ぶ事になり、放物線を描いて落ちて行く。その途中でガジェットドローンが反応し、なのはへと攻撃を繰り出すが、なのははそれをワンパンで返り討ちにして数機撃墜し、地面に着地する。それを繰り返していき、なのはの姿は幾つも生まれる爆風と共に離れていく。
その光景にもはや苦笑いを浮かべるスバルたちだが、生憎そうもし

ていられない状況だ。ヴィータは他の皆へ視線を向け、
「なのはが頑張っている間、あたしとリインがここで外を見張ってる。お前らは内部へ行ってはやてたちにデバイスを届けてくれ」
言って、ヴィータが中にいる皆の分のデバイスをスバルたちに預ける。現状展開出来ないが、なのはの事だ。上手くやってくれることだろう。なら次の手を打っておくの最善だ。
「ギンガは管制室へ行って状況を確認してきて貰えるか？」
「了解です！」
ギンガは敬礼で返す。そうと決まれば早速行動だ。スバルたちは中へ入り、ヴィータとリインはこのまま待機しつつ、なのはが状況を変え次第、直ぐに外部の戦力を掃討するつもりだ。

第２０話

管理局地上本部の敷地より少し離れた上空。そこには自らの能力――ＩＳ・シルバーカーテンを展開し、操作するクアットロの姿がある。鍵盤に似たような操作盤を打ちながら、幾つも出現させている立体ディスプレイで状況を確認しつつ、口を開き、

「うーん……順調順調！　ＡＭＦ拡散機も予定通りに稼動。ルーお嬢様の転移によるガジェットの襲撃。チンクちゃんとセインちゃんによる本部の管制室制圧も予定通り」

眼鏡を人差し指で上げて位置を調整し、立体ディスプレイを見る。

「管理局の皆さんには出来ればこのまま大人しくして貰いたいので、拡散機の防衛はしっかりと維持して下さいねー。特にノーヴェちゃんとウェンディちゃん」

ウインドウの一つに映るのは、拡散機を防衛している赤髪の女性二人――ノーヴェとウェンディの姿だ。ウェンディは元気よくこちらに向かいながらグッドサインをして、

『任せて下さいっス！　クア姉！　このウェンディ、初陣でしっかりと役目を果たすっスよー！』

『ウェンディ、煩い。少し黙れ』

『ちょ、ノーヴェ。どうしたんスか不機嫌で。カルシウム足らないッスか？』

『違ぇよ！』

陽気なウェンディに対し、噛み付くノーヴェ。その様子を半場呆れた様子で見届け、ウインドウをそっと閉じた。すると新たにウインドウが開かれ、画面に現れたルーテシアがクアットロに話しかける。

『クアットロさん？　とりあえず用意された分のガジェットは全部転移しましたんで、早速次の行動に移ろうと思うんですけど』

「あら流石ですルーお嬢様！　ではその様にお願いします」

『了解です！』

先ほどのやり取りを聞いていたのかは知らないが、ルーテシアもウェンディのテンションよろしく、笑顔でグッドサインを出した後に

通信を閉じる。相変わらずテンションが高いと思いつつ、クアットロは「さて」と口に出して、
「では、そろそろ邪魔な外野が駆けつけて来る頃合いですし、ガジェットの幻影を追加してっと」
　言うと、クアットロはシステムを操作する。すると此方に向かって来ていた管理局員の部隊の前に、クアットロのシルバーカーテンによって現れたガジェットドローンの幻影が姿を現した。局員は困惑した様子で慌てて幻影相手に迎撃態勢を取る。その隙に本物のガジェットドローンの群れを向かわせておくとしよう。
「うふふ……宴はまだ始まったばかりです。まだまだたっぷりと踊って貰いましょう」

◇

　地上本部の周囲に位置する空きビル。その屋上には無機質な機械が中央にでかでかと鎮座しており、その横にノーヴェとウェンディは待機していた。クアットロの通信も切れ、ショートの髪が特徴の方――ノーヴェが不機嫌そうに設置してあったベンチにドカっと座る。一方、長い髪を後頭部で纏めた女性――ウェンディがそんなノーヴェに向かって前かがみになり、その顔を見ながら、
「もうどうしたんスか、ノーヴェ。作戦開始からずっと不機嫌そうじゃないッスかー！」
「別に。ただ、あたしとしてはこんな後衛で不満があるから、とかそんな事思ってるわけじゃねー」
「不満ありありじゃないッスかー！　駄目ッスよー。これはドクターから私たちに任せられた立派な任務なんですから」
　人差し指を上げ、注意するウェンディ。ノーヴェは舌打ちしつつ、
「分かってるよ。……ただ、どうせなら確かめたかったんだよ。直接この目で。あたし達の王様が、本当にあたし達の上に立つ存在であるのかって」
「それはまぁ……気になる所ッスけど……」

ノーヴェの言葉に、ウェンディは少しだけ眉を八の字にして口ごもる。だが直ぐに調子を取り戻すため、元気良く腕を上げながら再び口を開いた。
「でも、私達の与えられた役目はこの拡散機を守ることッス！　今日この日の為に用意された【三つ】のＡＭＦ高濃度拡散機！　その一つが設置されているこの場所！　責任もって防衛するッス！　それこそ、どんなイレギュラーが起こったとしてもッス！」
「おお！　格好良い！　……ところで、この拡散機って全部で三つあるんだね？」
「えへへー、どうもッス！　そうッスよ？　ここと、もう一つはトーレ姉さんとセッテ姉さんが。三つ目がディエチが防衛してるッス！」
と、ウェンディが疑問を投げられた声の方へ向かって人差し指を向ける。だが、そこで気付いた。だいぶ遅れて気が付いた。今の疑問の声は当然ノーヴェのものでは無い。
するとおかしい。ここにはウェンディとノーヴェ以外に誰もいない筈だからだ。しかし、視界の中央には当然のようにして存在する――なのはの姿があった。
「え？　ええ!?　ちょッ!?　一体誰ッスか!?　いつからそこに!?」
「こいつ、管理局!?　どうやってここまで!?」
仰け反って動揺するウェンディに、慌ててなのはから距離を取るノーヴェ。なのはは人差し指でぽりぽりと頬を掻く。跳躍してここまで飛び、浮遊する間に周りを注視していたところ、明らかに異質な機械と、異質なスーツに身を包むウェンディとノーヴェの姿があったのでここに来た訳だが、二人がなのはに中々気付かなかったのでしばらく話を聞かせて貰ったという。
少しでも魔力反応があれば二人は気付いたのかもしれない。跳躍でここまで飛んでくるという予想外な接近をしなければ生体反応で感知していたのかもしれない。だが、なのはは魔法を使わずに凄まじい身体能力の持ち主であり、更に元々存在感を薄める特技があるというのも相まってこのような事態になったのだろう。
慌てて警戒態勢になるウェンディとノーヴェ。不意を突かれてし

まったが、別段ダメージを受けた訳ではないのは事実。故にウェンディは早々に余裕の笑みを浮かべ、自身のＩＳ――――エリアルレイヴを発動する。彼女が持つ固有装備のライディングボードを、盾のように使ったり、浮遊させて高速飛行移動を行う乗機としたり、砲撃をしかけたりできるという、防御・射撃・飛行の三種をこなす優秀な能力の持ち主だ。

一方、ノーヴェも自身の装備である篭手「ガンナックル」と、ローラーブーツを模したジェットエッジを装備。彼女のＩＳ――――ブレイクライナーは格闘能力を上げるものである。

なのははウェンディとノーヴェ。特にノーヴェを見てスバルにそっくりだなと感想を思った。髪形もそうだが、顔つきも似ている。おまけにその装備までほぼ同じなのだ。もしかしたら生き別れの姉妹なのかもと想像する。

そんな呆けているなのはに、ノーヴェは眉根を寄せて不機嫌になり、早々に仕留めることを決行する。

「行くぞウェンディ！　合わせろ！」

「了解ッス！　あなたには悪いッスけど、こっちは二体一。しかも連携の相性の良い私らが相手ッス！　悪く思わないで欲しいッス！」

ノーヴェの言葉を合図に、ウェンディはそう言葉を口に出しつつ、エリアルレイヴで砲撃を放つ。ノーヴェもまたウェンディの砲撃に合わせ、ジェットエッジでなのはに接近。そのままガンナックルで拳を繰り出してくる。

――――が、次の瞬間には二人の姿は空の彼方へと飛んでいった。なのはのワンパンによって。

これがギャグ漫画か何かであれば間違いなく空に星が光っていただろうのワンシーンだった。なのははそのままＡＭＦ拡散機に近寄り、拳を打ち込んで破壊する。

二人が飛んでいったであろう空へなのはは顔を上げた。

「こっちも急いでるんで、悪く思わないでね」

◇

ノーヴェ達が居た空きビルとは別方向に存在する空きビルの屋上にて、ディエチは固有武装である大型の狙撃砲【イノーメスカノン】で、地上本部へ応援に駆けつける管理局員を迎撃していた。ディエチの背にはウェンディ達と同様、拡散機がある。拡散機の防衛と管理局の増援の迎撃を担っているのだ。

何度目の狙撃かで、とうとう此方の方向から来る増援を全て迎撃完了する。

一息つき、ディエチは状況を確認する為、ウェンディたちに連絡を取ろうとする。だが、繋がらない。どうしたのかと思った矢先、ディエチの視線の先に変なものが映る。

「あれは……？」

望遠能力で視認する。それは管理局の制服に身を包むなのはの姿。おかしいのは、魔法を使っている様子もなく、人間ではありえない超脚力で跳びまくっている事だ。

一瞬、自身の解析が壊れたのかと誤認するが、どうやらそうでは無いらしい。

「そういえば、あの人……前に市街地でお嬢と戦った……」

思い出す。あの時に六課のメンバーにいた一人だと。ならばやる事は一つである。イノーメスカノンを構え、望遠能力で狙いをなのはへと定めた。なのはは此方には気付いていない。

跳躍して一見狙いにくいと思われるが、実際タイミングを狙えば難しい事ではない。更にディエチはその能力でそのタイミングが正確に分析できるのだ。

「よく分からないけど、これでお終い。バイバイ……」

そう一言だけ口にして、ディエチは引き金を引いた。砲撃が放たれ、なのはが空中へと跳躍したタイミングが重なり、直撃。それで終わりのはずだった。

だが、砲撃は人に命中したものとは思えずにそのまま光が空を彩るだけである。

「……え？　一体どういう……？」
理解が追いつかず、目を丸くするディエチ。もう一度能力で状況を確認しようと望遠能力を使った瞬間である。
――こちらに一直線に飛んでくるなのはの姿があった。まるで砲撃のように直進してくる姿に、ディエチはさらに驚愕の表情を見せる。一秒経ったか、経っていないかくらいの後には、迎撃をする余裕も無くディエチは吹き飛ばされ、後方の拡散機もその勢いのままなのはに破壊された。

◇

「――ッ！　ＡＭＦ濃度が薄くなった！　なのはの奴、上手くやってくれたな。いくぞ、リイン！」
「了解です！」
なのはが出て行ってからしばらく経つと、ＡＭＦの濃度が薄くなったのを感じた。ヴィータはアイゼンを起動し騎士甲冑を装備、リインフォースと共に周囲のガジェットドローンの迎撃に出た。
跳躍してそのまま飛行魔法で旋回し、片手に装備したグラーフアイゼンを構える。そしてそのままガジェットドローンの群れに向かって殴り込みする。
アイゼンの槌分部が跳ね、
「――グラーフアイゼン！　ロードカートリッジ!!」
アイゼンが反応し、跳ねた槌が次の瞬間には変形し、片方が鋭利に尖り、後方が噴射口に変形し、そこから魔力が放出される。生み出された遠心力で回転し、勢いを増しながらガジェットドローンの群れを駆け抜ける。その結果、周囲のガジェットドローンを粉砕。それだけでかなりの数のガジェットドローンが撃墜されていく。
一旦空中で停止し、アイゼンの槌が元の形状に戻り、カートリッジ装填した薬莢が飛び出していく。一呼吸吐いてから周囲を確認する。
「とりあえずここらのガジェットは殆ど撃墜したな。あとは別方向か。……リイン！」

「はいです！」
辺りを見渡し、ヴィータ以外にも何人か戦闘に復帰する局員を何名か発見。後は本部の建物に取り付いているガジェットが居るだけで、彼等にその対応を任せて良いだろうと判断する。後から追いついてくるリインフォースを連れ、別のエリアへと迎撃に向かった。

◇

本部内部へと向かったスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてギンガ。電力が落ちている為、所々行き止まりの所を何とか潜り抜けつつ、確実にはやてたちが居るであろう会議室へと向かっていた。
何度目かの扉を開けて後、走って移動していると皆のデバイスがそれぞれ起動し、反応する。それはＡＭＦの濃度が薄くなった事を教えてくれていた。気付いた皆はデバイスを起動し、バリアジャケットを装備する。
デバイスを起動できた事により、ギンガは先に管制室に向かう事にした。残りの四人はこのまま合流すべく会議室へと向かう。
復旧していない暗くなった通路を四人で駆けて向かっている途中、スバルは心配そうな表情を見せる。
「ギン姉……大丈夫かな、一人で……」
「私たちの中で一番能力が高いんだから、大丈夫でしょ。それにあんたとは違って敵に突っ込んで行かないし、何かあれば直ぐ連絡寄越すわよ」
隣を走るティアナが視線を前方に向けつつ言葉を吐く。現状確認すると、管制室はもう制圧されたのは間違いない。会議室の状況がどうなっているのかは知らないが、地上本部の守りは堅い。流石にもう制圧されたとは考え難いだろう。
だとすると、敵が現在会議室を狙っている可能性の方が高いのだ。制圧した管制室にいつまでも居るほど敵も愚かではないだろう。だとすれば敵との戦闘になる可能性が高い此方だ。戦力的には問題ないだろう。

しばらく進むと広い空間へとたどり着く。するとそこに人影があり、警戒したものの直ぐにそれがフェイトのものだと気付いた為合流する。フェイトもこちらに気付いて手を上げていた。
「フェイトさん！　ご無事で何よりです！」
「皆も無事で良かった。状況は？」
ほっと安堵しつつ直ぐに互いに情報を交換する。現在、会議室にははやてとシグナム、そしてカリムとシャッハがいる。フェイトは別室のロビーで待機だった為、何とかここまで来れたという事だ。
だとすれば、会議室の状況がどうなっているのかが気になるところ。すると丁度こちらに来るシャッハの姿も確認できた。合流し、シャッハから状況を尋ねる。
「現在、会議室のドアは有志によって開かれはしました。ですが隔壁が閉まっているのもあって、他は会議室で待機しています」
いくら扉が開いたとしても、現場職では無いお偉い方全員がここまで来れるかと考えれば不可能であり、復旧もしていない状況では避難は出来ない。故にシャッハが外と連絡を取ろうとここまで来たわけだ。
スバルはヴィータから預かったそれぞれのデバイスをフェイトとシャッハに渡す。シャッハは皆のデバイスを届けに再び会議室へと戻る。フェイトはバルディッシュを受け取る。
「私も外に出て迎撃に出る。皆はギンガと合流して内部の警戒を――」
バリアジャケットを装備し、フェイトが皆にそう伝えようとした。が、
「……？　ギン姉？」
その時である。スバルは中々連絡を寄越さないギンガが心配になり、連絡を取ろうとしたのだが、念話が通じない状態になっていたのだ。ＡＭＦは展開されているものの、念話が通じない程ではない。故にギンガと連絡を取れないという状況は何かあったという可能性が高く、焦りが募る。
状況を理解したフェイトと他の皆は直ぐ様アイコンタクトで合図

する。フェイトは先ほどと同様外へ、四人はギンガの元へと急いだ。

◇

空もすっかり暗くなり、地上本部の周囲に展開するガジェットドローンが発する光が目立っている。建物に取り付いているのが見て分かる。だがヴィータの迎撃と復活した局員達によって確実にその数は減らされていた。

そんな中、近くの道路に紫色の魔力光が現れ、召還魔法によって二つの影が現れた。先ほど吹き飛ばされたノーヴェとウェンディの二人である。二人は身体を起こし、

「ふう……何とか戻って来れたッスねー！　まさか着地点のすぐ近くを、ルーお嬢様通りかかっていたんスから、とても運が良いッスよね！」

言いながらウェンディは手で前髪をかき上げる。見ると二人の姿は海水で濡れていた。吹き飛ばされた場所が海であった為だ。ウェンディの言葉通り、たまたま移動中のルーテシアによって救助を受けて、更にこちらに向けて転移までしてくれたのだ。

――と、丁度その時であった。二人のもとに通信が入る。ディスプレイは表示されず、耳に聞こえる音声のみのものだ。

『ノーヴェ、ウェンディ。聞こえるか？』

「チンク姉？　どうしたんだ急に……？」

相手は彼女ら戦闘機人の一人――チンクである。チンクは現在、セインと共に地上本部内にいるはずだ。ウェンディは険しい表情をして訊ねる。

「もしかして、不味い状況ッスか？　だとしたら直ぐ応援に！」

『……いや、別段不味い状況ではない。ただ少し手を借りたい。エリアルレイヴで運んで欲しいんだ』

「え……それは大丈夫ッスけど……もしかして？」

ウェンディの言葉に「ああ」と言った後、チンクは次いで、

『――対象の一人を確保した。面倒な増援が来る前に頼みたい』

第21話

辺りはすっかり夜と化して、辺りで戦闘によって光る魔力光が地上を彩る。地上本部に取り付くガジェットドローンは復帰した管理局員の魔導師によってその数は減っていた。

そんな中、クアットロは戦闘不能となったディエチを抱えて回収し、適当なビルの屋上に降りる。

「……ごめん、クアットロ……」

「世話が焼けるわね。まあ、こっちもこんなに早く事態が変わるとは予想外でしたし。……でも」

一旦ディエチを下ろしてクアットロは顎に指を当てて思考する。いや、思考をするまでも無く状況は此方に不利になりつつあった。一度髪を手で靡かせて立体ディスプレイを確認する。

ウインドウにはこちらに駆けつけていたゼストとアギトの二人と対面し、戦闘を行っているヴィータの姿だ。普段の赤い騎士甲冑とは違い、その姿が白基調となっているのはリインフォースとユニゾンしているからだ。

もう一つのウインドウを起動させる。そこにはスカリエッティのアジトと繋がっており、通信の向こうにはウーノの姿がある。

「ウーノ姉様。もうそろそろ潮時かと」

『そうね。クアットロはこのままトーレたちと共に作戦エリアを離脱して頂戴』

「了解です」

通信を切る。ディスプレイを起動して別のエリアの状況も確認する。ルーテシアが向かった作戦エリアのほうもどうやら上手くいったようであり、オットーとディードも初陣で良く活躍してくれたようだ。

チンクのほうも確認するが、どうやらこちらも問題なく目的は完了しそうだ。さらにウェンディとノーヴェも向かった為問題ないだろう。だとすればウーノの指示通りにトーレたちと合流した方がいい。

どの道もうＡＭＦ拡散機は用済みだ。放置してさっさと撤退しよう。
そう思い移動しつつ、通信を起動する。
「トーレ姉さま、そろそろ撤退ですわ。そちらはどういった状況で――」
言葉の途中、遮るようにトーレから荒々しい声が聞こえた。
『クアットロかッ!? こっちは少し不味い状況だ……!』
その言葉にクアットロは目を丸くして驚愕した。いつもならば問題なく冷静に戦闘をこなすトーレがこのように余裕が無いのは彼女の中で初めての事だったからだ。眼鏡を抑えつつ、状況を訊ねようとしたが、途中で切れてしまう。その余裕すら無いという事だろう。
「ディエチちゃん、自力で戻れそう?」
「うん、何とか」
言ってディエチは立ち上がる。戦闘は難しいが撤退することには問題無さそうだ。
クアットロは急いでトーレ達の下へと急いだ。

◇

トーレとセッテはなのはと交戦中だった。なのははＡＭＦ拡散機の破壊を目的としていた為、それを防衛していたトーレとセッテの二人と交戦になるのは必然である。
セッテが自身のＩＳ――スローターアームズで固有武装であるブーメランブレードを投擲するが、なのははそれを回避し、或いは手で弾き飛ばすという人間離れした技を繰り出した。
しかもなのはの服装は管理局の制服であり、バリアジャケットをその身に纏っていない。魔力反応も無いことから、彼女が魔法を使っていないことが判明する。此方は戦闘武装を固めているのに関わらず、相手は生身なのだ。それだけで現状の異常性を物語っている。
「ＩＳ発動！ ライドインパルス!!」
丁度セッテに接近しようとしていたなのはに対し、間に入って腕の固有武装インパルスブレードで振り下ろすようにして斬りかかる。

それによりなのははインパルスブレードを受け止めるが、跳躍中ともあってその勢いのまま下方へと落ちてしまう。
「大丈夫か、セッテ？」
「いや、直撃は避けたが、何発か掠った。内部構造に異常が出ている。このままでは不味い」
セッテの珍しく苦渋な表情を見て、トーレは眉根を寄せた。セッテはトーレに次いで戦闘能力が高い戦闘機人だ。速さ、攻撃において強さを誇る彼女をここまで追い込むのだ。自分でも厳しい状況になるのは目に見えている。
だとすれば戦闘続行は不可。撤退するしかないのだが、この状況で背を向けたりしたらそれこそ的になる。何か隙を生み出さなければならない。
そう思っていると――――。
「ＩＳ――――シルバーカーテン」
突如声と共に大量のガジェットドローンの幻影が辺りに出現する。ガジェットドローンの幻影と合わせてそこに現れたのはクアットロであった。こちらをみて状況を悟ったのか、不味いと察したのだろう。
だが、これは良い切っ掛けだ。この隙に撤退することを互いにアイコンタクトで疎通し、その場を去る。トーレはクアットロを抱え、セッテも自身の移動速度を高めて、三人はそのまま戦闘エリアを離れる事に成功した。
下方へと飛ばされたなのはは起き上がると、自身の身にバリアジャケットが展開されていることに気付いた。長距離離れたことによって魔法が使えるようになったことを起動したレイジングハートによって伝えられる。
「ありがとうレイジングハート。お陰で制服を傷めずに済んだよ」
笑顔でレイジングハートに感謝を言うと、レイジングハートはお気になさらずと答える。優秀なデバイスに感謝しつつ、魔法も使えると分かって早速飛行魔法でビルの屋上へと向かった。
屋上にはＡＭＦ拡散機の最後の一つが見える。辺りを見るが、そこ

には先ほどの戦闘機人の姿は無い。今の隙に逃げられたのだろう。だが、なのはの目的はあくまで拡散機の破壊だ。
近づくと魔法無効化を食らってしまうので、近くにあった石を掴む。恐らく先ほどの戦闘によって出来た瓦礫の一部であるが、折角なので利用させて貰う。思い切り投げ、それを拡散機に命中させる。するとおよそ石が当たったようには見えない威力となって拡散機はそのまま爆散する。
これで一帯のＡＭＦは解けた筈だ。レイジングハートに確認すると、それも確認出来たとの事。
なら早速ヴィータ達と合流しようと動こうとした時、耳に通信が聞こえた。
『なのは！　聞こえる!?』
「フェイトちゃん！　どうしたの？」
相手はフェイトであり、焦りを含んだ声色であった為、なのははどうしたのか訊ねると、次いで言葉が発せられ、
『今、六課のロングアーチに連絡しようとしたんだけど、六課が――』
そこから発せられた言葉に、なのはは驚愕せざる得なかった。

◇

スバルは急いでギンガの元へと急いだ。出来るだけ早く、最大スピードでマッハキャリバーを走らせて通路を駆け抜ける。後ろでティアナがこちらに向かって叫んでくるが、気にしている余裕は無い。
ギンガは現在一人で行動しているのだ。もしそんなギンガに戦闘機人と戦闘となれば不安だ。相手が一人ならばギンガでも対処できるかもしてない。だが複数人が相手ならば不利なのは明らかだ。
通信が出来ないとあって何かあったのは間違いない。一刻も早く、駆けつけなければならない。
そして、やがて広い空間へと出る。建物の設計上、管制室の近くで

間違いない。
そこで、スバルは見てしまった。
ギンガが、自分の姉が――――
――――鮮血に彩られた頭を掴まれ、戦闘機人によって運ばれようとしている所を。
「……え？」
一瞬言葉を失う。驚愕で身動きが取れなくなる。だが、目に映るものは間違いなく現実だ。
ギンガの姿は悲惨なものであり、装備も大破し、身体中の至るところから血を流し、目も虚ろになっており、頭から止め処なく血を流している。そしてそれだけでなく、その身体の傷から見えているのは、
自分と同じく身体を司っている――――機械の部品が露になってしまっていた。
「あ……ああ……あああああああああああああああああああああああああああ」
やがて発狂するようにして声を発する。相手の戦闘機人、チンクとウェンディとノーヴェがスバルを見て警戒態勢を取る。ウェンディは驚いた表情を見せ、
「あれって、タイプゼロセカンド!?」
「捕獲対象の一つか。まさか向こうからやってくるとはな。……いいだろう、姉が相手をするから、お前達はタイプゼロファーストを運んで脱出しろ」
「そんな、チンク姉!?」
チンクはギンガを専用ケースへと入れた後、視線をスバルに向けて一歩踏み出す。ノーヴェが慌てて声をかけるが、それを制止した。
「いいから、姉なら心配ない。セインと共に脱出する。だから先に脱出しろ。ウェンディ！」
チンクの言葉に、ウェンディが頷く。ノーヴェは未だにチンクを心配してその場を動こうとしなかったが、ウェンディがノーヴェに急かすように声を荒げた。ケースを牽引させたライディングボードに乗り、エリアルレイヴを発動する。

ノーヴェも頑なに拒んでいたが、仕方ないと判断し、ノーヴェと共にその場から退避した。
しかし、スバルはその様子を見て、発狂するように声を発し、全身からエネルギーを爆発させるように辺りに撒き散らす。それはもはや魔法ではなく、戦闘機人のもつエネルギーであった。
瞳は変わり、光が一時的に収まると、初速を無視した突進がチンクに襲い掛かる。
「ギン姉ぇを……返せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーッッ!!!」
ローラーブーツが悲鳴を上げる。リボルバーナックルでチンクを攻撃するが、彼女が展開した防御壁に阻まれる。が、それを爆発的なエネルギーと限界を超えて回転するローラーによって、徐々に防御壁を貫通し始める。
だが、チンクとて愚かでは無い。彼女は懐からスローイングナイフを数本取り出しそれをスバルへと投げる。すると彼女のＩＳ――ランブルデトネイターによって爆発を起こし、スバルはその爆発に巻き込まれる。
チンクは寸前の所で後方に跳び、爆風から逃れた。ランブルデトネイターの威力は凄まじく、それを間近で直撃とあっては普通は致命的ダメージとなる。
だが――。
「ああああああああああああああああああああああああああああああーーーーーーーーーーッッ!!」
爆風から出てくるのは全身がボロボロな状態になりつつも、それを全く気に留めずにこちらへ突進をしてくるスバルだ。もはやマッハキャリバーは大破寸前であり、亀裂を生み出しながら此方に肉薄せんと接近する。
しかし、チンクとしてもそれを許すわけにはいかない。次いでスローイングナイフを床に投げて差し込ませ、近づくスバルに対しランブルデトネイターによって次々と爆発を起こす。
スバルの身体にはダメージが蓄積している筈だ。もはや立ってい

られない程の傷を負っている筈である。だが、それでも勢いが止まることが無い。全身から血を流し、ギンガと同様に機械部が抉れても、止まらない。

叫び、チンクへとリボルバーナックルで攻撃を繰り出す。拳を振り上げ、突き出す。防御壁を出すが、先ほどの勢いとは比べものにならない負荷が掛かり、突き破られてしまう。

スバルの拳が顔面に炸裂する。その勢いで後方へと吹き飛ばされてしまい、床と当たる衝撃でバウンドする。

だが、チンクも防御壁が突き破られた瞬間に、その腕にスローイングナイフを突き刺し、吹き飛ばされると同時に爆破させた。流石に致命的なダメージになるだろう。

チンクは起き上がろうとするが、視界がぼやけてしまい、思考も碌に出来ない。これは内部に異常が出たかもしれないと思うが、それにしては不自然だ。いくらダメージを受けたとして、一発食らった程度で破損するだろうか。

――否だ。そこから考えるに、スバルの固有能力は振動破砕だと推測する。つまり、生物には勿論だが、通常より防御力が高い戦闘機人にとっても最大に厄介な攻撃である。

身体を起き上がらせようとするが、内部機能が破損したせいで身動きが取れない。これは本当に不味い。これではセインがこちらに来る前に管理局によって拘束されてしまう。そう思い、何とか身体を起こそうとした。

だが次の瞬間、信じられない事が起こる。爆煙の向こうに人影が見える。その姿はスバルだ。スバルはこちらにゆっくりとだが近づいてくる。バリアジャケットは既にマッハキャリバーが大破したことによって解除されており、ボロボロの制服姿である。その身は至るところが大破し、片方の腕なんかはもう肘から下が無い。片足も破損、膝が裂けて機械の部品が抉れている。

通常ならば死んでもおかしく無い状態であるのに関わらず、此方に来るその姿からは、とてつもない執念を感じた。

「……返してよ……返してよ……ギン姉ぇを……返して

よぉぉぉぉーーーーーーーッッ!!」
血と涙が混ざったものを目から流し、スバルは叫ぶ。
――その瞬間、スバルの身体から得体の知れない波動を感じた。
それはチンクが感じたことの無い、未知の感覚。だが、それがこの状況をもっと悪くさせるものだというのは理解出来る。力が放出されているのは分かるが、それとは別の何かを感じた。
まるで感情の渦といったものだろうか、強い波動はその正体を不明にしながら、スバルから発せられる。
それでチンクは理解した。
「――……そうか、お前が……」
言葉の途中で、チンクの意識は途切れた。それと同時、スバルの身体から得たいの知れない何かに包まれる。
「……ぎ……ん姉ぇ……」
とっくに限界を超えていたスバルは意識が途絶え始める。その際に、感じた事の無い感覚に包まれ、スバルは完全に意識を失った。
やがてティアナ、エリオ、キャロが駆けつける。
「……スバル?」
ティアナは辺りを見渡す。至るところが爆発の損傷が激しい中、その場に居たのは倒れるチンクだけであり、スバルの姿は――そこになかった。

第22話

地上本部襲撃事件から一週間。
管理局本局に停留している次元航行船クラウディア。クロノが艦長を務めるこの艦に、現在はやてとフェイトが赴いていた。応接室に案内され、クロノを正面にはやてとフェイトが座る。内容は言わずもがな、今回の地上本部襲撃と、それと同時に襲撃を受けた機動六課についてだ。クロノは用意したコーヒーを口にしつつ、表示させた立体ディスプレイを見ながら口を開き、
「……状況は芳しくないな。先日の地上本部襲撃で、地上はかなりの被害を受けた。機動六課に至っては……」
そこでクロノが言葉を切る。はやては険しい表情を見せながらもクロノを正面に見据えてから口を開く。
「地上本部の襲撃に合わせて六課を奇襲……。ヴィヴィオ、そして保管されていたレリックを奪われた」
はやての言葉通り、地上本部はあくまで六課を引き付ける陽動であり、手薄になっているところを奇襲された。狙いはヴィヴィオとレリック。待機していた局員などが迎撃したものの、相手は召還魔導師と戦闘機人二人。召還魔導師によって転移されたガジェットドローンの群れだ。隊長陣が不在では防ぎきれない戦力だ。
結果、機動六課は壊滅的なダメージを受けた。シャマルとザフィーラが奮闘してくれたものの、戦闘機人の攻撃に耐えることが出来ず、防衛線は崩落。多数の重傷者を出す結果となってしまった。
現在怪我人は聖王教会の病院にて治療を受けている。怪我人には隊舎に居た局員の他に、前線で戦闘していたヴィータ、リインフォースも含まれていた。地上本部に接近して来た敵の魔導師と交戦になり、善戦するも相手がヴィータの実力を上回り、撃墜されてしまったのだ。
更に、地上本部内にて敵と交戦したスバルも――――現在行方不明となっている。

被害状況は深刻だ。機動六課の半数が動けない状態であり拠点も失っている。行動を起こすにしても現状厳しい状況だ。だからこそ、先ずは現状の問題を確認する事が先決だ。はやてはディスプレイに表示されている情報に目を向ける。先ずはギンガが敵に攫われた事についてだ。フェイトが口を開き、

「スバルやギンガの事については、ナカジマ三佐から話を聞いたよ。やっぱり、昔に起こった事件が関わっているらしくて」

「やはり……そうなるか」

クロノは表情を険しくさせて、戦闘機人のデータと、過去に起こった事件の詳細を開いた。

過去、戦闘機人という存在が関わった事件がある。まだジェイル・スカリエッティという存在が知られていない時だ。当時、アンドロイドという技術は発展途上の技術だった。それは人型の機械というものに汎用性が利かなかった為だ。人工知能と機械の身体だけではどうしても安定せず、人間に近づけることは当時の技術では不可能だったのだ。

そこで新たに着目されたのが、人間と機械の融合化だ。元々医療用に研究されていたもので、人の身体を機械で補うという技術だ。しかし、生身の身体が拒否反応を起こしてしまい、結局研究は失敗に終わった。

だがそれを機械を弄るのでは無く、人間の身体の方を弄ることによって、人間と機械の融合化という存在は完成してしまった。その基礎を作り上げたのが、当時では不明だったが、間違いなくスカリエッティだ。

しかし人間を弄り、人工素体として扱うという倫理的観点から、これらの研究は中止され違法とされた。その後研究施設は取り締まられたが、各世界で秘密裏に違法研究が行われるのが後を絶たなかった。その為、地上管理局が研究施設の捜査を始めた。

当時の陸戦のエリート部隊を筆頭に、研究施設の捜索と制圧の任務を行っていた。その隊員の中に、ゲンヤ・ナカジマの妻、クイント・ナカジマが所属していた。彼女は任務の際に研究施設で発見した実

験体の幼い子供二人。幸い危険性は無かったため、ナカジマ夫妻は二人の保護責任者となり、子供二人――スバルとギンガを自分の子供として育て、現在に至るという訳だ。

だが、クイントはその後、他の隊員と共に死亡し、事故で殉職となってしまった。当然、ゲンヤとしては不可解でしかなかった。任務中であり、何故、事故として処理されたのか。これらから考えて、敵との接触があって死亡したと考えて間違いないのだ。そこから考えてある可能性が浮かび上がる。

――この戦闘機人の研究に、管理局が関わっていた可能性だ。

当時から、レジアス・ゲイズは地上本部の戦力不足に嘆いていた。もし戦闘機人という戦力が手に入れば、間違いなく戦力は飛躍的に上がるだろう。だとすれば、何故違法研究が後を絶たなかったのか。どこから資金を得て研究を行っていたのか。それら全てに筋が通るのだ。事故で処理したのは、本格的な捜査に移行させない為と考えられる。

そして極めつけに先日の地上本部襲撃だ。ギンガが連れ攫われたのは勿論だが、スカリエッティは次いでとして、その事を隠蔽すべく襲撃を行った可能性もある。レジアスを始めとする協力者を消し、全て闇の中へ葬る。それが機動六課奇襲に次いでの目的の一つだった可能性がある。

しかし、これらはあくまで仮説の話だ。これだけでは容疑をかける事は不可能だろう。

だが、先日の襲撃が収まった直後。管理局の通信にスカリエッティからメッセージが送られて来たのだ。それをクロノは再生させた。

『――やあ、親愛なる管理局諸君。……いや、スポンサーと言った方が適切だな。どうだね、私からの演出は。気に入ってくれたかね？ これらの技術は諸君達が今まで支えてくれたから完成できたものだ。素晴らしいだろう、実に感謝するよ。そして、もう一つ。君達に伝えなければならない事がある。今日という日を境に、世界は新たな時代へと移行する。新たなる秩序が幕を開けるのだ。今日の宴はいわばその前夜祭といった所だ！ 最高だろう！ さあ、祝おうではないか

！』
　高笑いし、映像が途切れる。スカリエッティの姿と共に発信されたこの映像。この映像で言われているとおり、管理局の事をスポンサーと呼んでいる事から、先の仮説の可能性が濃厚となったのだ。元より黒い噂が絶えなかったレジアスに容疑がかけられ、緊急査問が行われる予定であったが、事態はさらに動くこととなり、
「この映像が終わると同時に、世界各地で同時多発テロが起きた。現在各地で交戦中だが、どうやらスカリエッティによる魔導兵器を使用しているらしい。恐らく次元犯罪者に兵器をばら撒いたとされる」
　地上本部襲撃から立て続けに起こった同時多発テロ。元より治安維持が十分に出来ていなかったのが原因で、各世界で犯罪組織がスカリエッティに利用された形になった。本部の復旧もままならず、レジアスの査問どころの状況では無い。
　本局の方でも対処にあたっているものの、スカリエッティの兵器が思った以上に厄介で制圧に時間がかかっている状況だ。
　クロノはスカリエッティの映像を見て、現在起こっている同時多発テロの状況を合わせて思考し、
「この同時多発テロが、スカリエッティの言う【新たな時代の幕開け】の全容では無いと思うが……。ともかく今はテロの鎮圧と、スカリエッティの身柄拘束が最優先となっている」
「スカリエッティのアジトの方はどうなった感じ？」
　はやてが訊ねる。スカリエッティのあの通信で即座に逆探知に成功し、アジトに突入を仕掛けたのだが、
「生憎、そこはもぬけの殻だった。恐らくダミーをいくつか用意していたんだろう」
　スカリエッティの通信は何十もの回線を繋いでおり、逆探知には困難を極めたが成功し、直ぐに突入部隊が制圧に出動したのだが。結果、そのアジト自体がダミーだったのだ。
　だが、それはスカリエッティという人物に対してこちらも十分想定できた事だ。回線の情報からアジトの場所はある程度判明し、おおよその場所は判明。後はヴェロッサやシャッハの操作を待つのみだ。

しかし現状、機動六課は壊滅状態であり、動けるクルーは半分も満たない状態だ。はやて達が動くには厳しい状態である。その為、今回はやて達は本局に、クロノに合同捜査の願いを出したのだ。
「もうじきクラウディアは出航の準備に入る。はやて、動ける部隊のほうに連絡を」
「了解や」
今回ここに来たのは状況報告と同時に、このクラウディアへ異動する準備もあった為だ。クロノの部隊と合同となれば、このクラウディアの戦力として行動でき、はやても現場に出動して指揮を取ることが出来る。勿論エース・オブ・エースのフェイトと、強大な力を持つなのは。そして十分戦力として期待できるフォアード陣もいる。
スカリエッティのアジトに突入となれば、相応の戦闘が予想されるだろう。その為、今回の異動の提案は直ぐに通ったのだ。機動六課は臨時でクラウディアに配属される形となる。
クラウディアの最終調整がそろそろ終える。既に殆どの隊員をクラウディアに移したが、まだフォアード陣が来ていない為、はやては一度席を立って連絡する。
――と、その時だった。クロノとはやてに通信が入る。繋ぎ、その報告を受けた二人は驚愕した。

◇

管理局本局の廊下を、なのはとティアナは並んで歩いていた。現在本局のメンテナンスルームではマリエルが破損したマッハキャリバーと、捕らえた戦闘機人の治療を行っている。
互いに口を開く事が無く、表情も暗い。だがそれも仕方の無い事だ。
「……それにしても、状況は良くないよね。こういうのをボロ負けっていうのかな。スバルの行方も、結局分からないままだしね……」
「……そう……ですね。……本当に、どこに行ったのよ……あの馬鹿」
何か言おうとして出た言葉だったが、ティアナは返事をするもの

の、その言葉しか返せなかった。あの時、駆けつけた時には既にスバルの姿は無く、そこには激しい戦闘の傷跡と負傷した戦闘機人、そして破損したマッハキャリバーが落ちていただけであった。敵に攫われた可能性もあるが、それならば仲間の戦闘機人を放置するだろうかという話になる。どちらにせよ、スバルの行方も現在調査中だ。

はっきり言えば、ティアナは自分に責任を感じていた。あの時、スバルを止めていれば、自分がもっと早く駆けつけていれば、こんな事態にならなかったのではないか、そんな思考が頭を駆け巡っている。

また数歩歩き、今度はティアナが口を開く。

「……なのはさん、その……ヴィヴィオの事……」

「うん……。攫われちゃった……ね」

少し俯き、言葉を返す。ティアナがスバルの事でそうであるように、なのはもその事で頭が一杯だった。あの時、地上本部で迎撃を行っていた時に聞かされたフェイトからの通信。その内容は機動六課の隊舎が奇襲を受けているというものだった。

直ぐに駆けつけたが、その時には既に終わった後で、そこには悲惨な光景とヴィヴィオが攫われたという事実のみが残されているだけだった。

数秒沈黙が続き、足音だけが廊下に響く。互いに俯いていたが、なのはが顔上げて口を開き、

「でも、わざわざ攫ったって事は、ヴィヴィオはスカリエッティにとって必要な存在だったって事だよ。だから少なくとも、死んではいないと思う」

「そう、ですよね」

ティアナもやるせない気持ちで一杯で、なのはの言葉に頷く。ヴィヴィオは彼等にとって必要とされるならば、少なくとも命は無事の筈だ。それ以外の可能性など、考えたくも無い。

「ねえ、ティアナ。……私ね、見て分かるとおり、とても胸を張って生きていけるような人間じゃないんだ。小さい時から力を手に入れて、そのせいでどんどん性格が歪んで……その結果、何事にも無関心で感情が希薄してる人間になった。もう自分はこのまま、何にも関心を持

たず、何にも心を突き動かされる事なく、そうやって一人生きていくんだと思ってた」
　そこで一旦歩みを止める。ティアナも同じく歩みを止めて、此方に顔を向けた。
「だけどヴィヴィオに会って、そんな自分が少し変わっているって気付いた。正直、子供の世話なんかしたことなかったし、どちらかっていうと、そういうのって自分は面倒だって思ってた。でも、初めてヴィヴィオに会って、怖がらせないように、安心させるようにって自分なりに考えて、フェイトちゃんがしていた事を参考にしたりして接して。そして懐いてくれて、それがとても嬉しくて。ヴィヴィオと話すのも全然自然に出来たし、寧ろそうしてると、どんどん自分の中で失っていた何かが蘇っていく気がして」
「なのは……さん」
　ティアナはなのはの表情を見た。その表情は彼女が今まで見たことの無いくらい、悲壮に溢れていて、そこにはなのはの感情というものが明確に表れていた。
「だから正直、今、凄く不安なの。こうしている間にも、ヴィヴィオは酷い目に遭っているかもしれない。泣いているかもしれない。……そう思うと、ジッとなんてしていられない。助けたいんだよッ！」
　まるで感情を爆発させるように、なのはは叫んだ。今すぐ助けに行きたい。単独でスカリエッティの元へ突撃してしまいたい。だが、自分は所詮力を振るうことしか出来ない。もし自分が迂闊に行動を起こして、それでヴィヴィオに何かあったら。そう考えて、今ははやて達の指示に従うのだ。確実に、絶対に助ける為に。
　そんななのはに、ティアナはいつの間にか震えていたなのはの拳を両手で握り、その双眸に合わせて言った。
「助けましょう、絶対！」
「――――うん。助けるよ、絶対！」
　今までの自分ではない、孤独ではない。絶対に助けるために、この力を使うんだと、なのはは瞳に決意を露にした。

◇

「「失礼します」」
「あ、なのはちゃん！　ティアナも」
　室内にはディスプレイを見て操作するマリエルの姿があった。此方が入って来たのに合わせて視線を向けてくる。
「マッハキャリバーの具合はどうです？」
「いやぁ……さすがに破損が激しいからね。辛うじて残っていた映像データとか抽出したはいいものの、それも戦闘機人の戦闘の途中で機能停止したせいで途切れちゃってるから」
　言って、マリエルは両手を肩まであげて手を広げた。
　部屋の中央にはデバイスメンテナンスようにあるポッドがある。その一つにマッハキャリバーが浮いていた。遠めでも見て分かるほど破損が激しい。だがシステムは生きていたので、そこからどうにかスバルの手がかりを探ろうとしたが、それも望めない様子だった。
「確保した戦闘機人のほうは？」
「ああ、あの娘ね。外傷はそんな無いけど、脳の機能にすこし異常が出てた。多分振動的に攻撃を受けた感じかな、あの損傷具合から見て。でも大丈夫、命には別状はないよ」
　現場に残されていた戦闘機人。彼女は意識不明の状態で、直ぐに治療とメンテナンスに連れられた。現在は本局のメンテナンスルームにて、監視されながら眠っている。
「それで、彼女のデータを見た時にね、スバルとの戦闘の記録を見つけたんだ。これなんだけど……」
　言って、マリエルはコンソールを弄って立体ディスプレイを表示させ、そこに映像が映される。それは戦闘機人の視点から見たスバルとの戦闘の様子だった。怒気迫る勢いで攻撃を仕掛けてくるスバルに、戦闘機人の攻撃が命中する。だがそれを物ともせずに何度も攻撃を仕掛けるスバル。正直に言って見ていられないような戦い方だった。
　その映像を観て、ティアナは眉根を寄せて悲痛な思いを寄せる。

「この映像でも、スバルがどうなったかは結局分からず仕舞い。最後の方を見ると、とても活動できる状態には見えないよね」
最後に映ったスバルの姿は全身が酷い怪我を負っており、関節など機械の部品がむき出しになっていた状態だ。もし一人であの場から去ったとしても、長く活動できるとは到底思えない。
以上の事から、スバルは地上本部からそう遠くへは行ってないと推測し、捜索が進められてはいる。状態から見て、早く治療しないと命に関わる。
「地上も地上で大変な状況だし、早く見つかれば――と」
その時、はやてからなのは達に通信が入る。立体ディスプレイが表示され、はやての顔が映し出される。
『なのはちゃん、今どこに居た？』
「本局のメンテナンスルームだよ。ティアナも一緒」
『そか。それなら一度クラウディアに来てくれるか？　――非常事態や』
その言葉に、なのはとティアナに緊張が走り、直ぐ行くと伝えてから通信を閉じ、マリエルに一言言ってから転送装置へと足を運んだ。

◇

クラウディアが出航し、艦隊の指揮を取りつつ次元の海を航行し、現在ミッドチルダへと向かっている。
会議室では、クロノ。そしてはやてを筆頭に六課のメンバーが集まっていた。ディスプレイの前にクロノとはやてが座り、それに向かうようになのは、フェイトを始めとした六課のメンバーが座る。
ディスプレイが光り、そこに現在の状況が表示される。そこにはスカリエッティのアジトがあると思われる森林地帯。そしてクラナガンの街中。最後に、巨大な船が映された。
「皆にも先ほど伝えたとおり、クラウディアが出航してから事態が急速に動いた。スカリエッティのアジト周辺から突如高エネルギー反応が現れ、地中から巨大な船が出現。それに合わせてクラナガンに

は、廃棄都市から現れた戦闘機人とガジェットドローンが襲撃。現在巨大船には航空魔導師が交戦にあたり、地上は陸戦魔導師が防衛線を張ってくれている」
　クロノが説明する。それはつい先ほどの出来事だった。アジトを探っていたヴェロッサとシャッハがアジトを発見すると同時に、地中から巨大船が姿を現し、上昇し始めた。
「この巨大船は、解析の結果と、聖王教会の調べによってその正体が判明した。古代ベルカにあったロストロギア――――聖王のゆりかご。戦乱の時代のベルカの伝えられた巨大兵器や。その脅威は戦乱の時代に終止符を打つほどのもの。これがこのままミッドの上空まで上昇すればもう手が付けられない。なんとしてでも阻止しなければならない」
　はやての言葉どおり、聖王のゆりかごはその存在そのものがロストロギア。巨大な力を誇っており、これによってもたらされる被害が甚大だ。なんとしてでもゆりかごにダメージを与え、クラウディアの艦隊の一斉砲撃で沈められる状態にしなければならない。
「聖王のゆりかごはその名の通り、本来聖王が制御しなければ機能しない兵器や。だけど聖王はとっくにこの世には居ない。だからスカリエッティは聖王の存在を人工的に作り出した。それが――――」
「ヴィヴィオ……だね」
　はやての言葉に、なのはが口を挟んだ。はやてはなのはに視線を合わせて頷く。
「せや。ヴィヴィオの特徴から、聖王教会が調べて、そこから聖王の血族の特徴と一致した。あの巨大船に、ヴィヴィオがいるのは間違いない。恐らく何らかの方法でヴィヴィオを使って船を制御してるんやと思う。だとすれば、ヴィヴィオを救い出せばあの船は機能を失うっちゅう訳や。その為に、なのはちゃん」
「うん、任せて。絶対に助けるよ」
　真っ直ぐはやてに向き合い、なのはは頷く。はやては頼んだと一言言ってから、
「なのはちゃんが突撃し、ゆりかごの外部からは私が支援を行う。現

場の航空魔導師と合流して指揮を取る予定や」
　ディスプレイの映像が切り替わる。そこには森林地帯の画像だ。
「アコーズ査察官とシスターシャッハの調べで、スカリエッティのアジトは判明してる。フェイト執務官には二人と合流し、アジトの制圧にあたって貰いたい」
「了解」
　次に、地上の映像が映し出される。まだ避難も間に合っていないのか、逃げる市民を防衛する陸戦魔導師の姿。防衛線を張り、必死にガジェットドローンの攻撃を食い止めている様子だ。だが、その中でも戦闘機人の攻撃が凄まじく、迎撃にあたった魔導師が撃退されている。
「シグナム副隊長を筆頭に、六課のフォアード部隊は地上の迎撃にあたって貰う。基本的に地上は大混乱や。現場の指示に従いつつ、戦闘機人の撃墜を最優先にしてほしい。――――間違いなく、これが最後の戦いや。皆、無事に帰ろう！」
「「了解！」」
　皆が一斉に返事をする。作戦会議は以上だ。時間も惜しいため、直ぐに出撃の準備に入る。会議室を後にして、六課の皆は転送装置へと向かった。

第２３話

クラナガンへと戦域は拡大し、ガジェットドローンと陸戦魔導師が交戦する中、戦闘機人三人はこれに乱入して魔導師を秒で仕留めていく。オットーとディードの連携によって防衛線は崩れ、混乱する魔導師をウェンディがライディングボードで砲撃を仕掛けて倒していく。

現場の魔導師をクリアにしてからウェンディは満足そうにして、気を失って倒れる魔導師の頭を踏み付けながら、

「いやぁ、楽勝ッスね！　前回とは違って蓄積データも十分に揃っているッスから、この程度の魔導師なんて屁でもないッスよー。二人もそう思わないッスかー？」

浮遊する二人に向かってフランクに話しかけるウェンディだが、オットーもディードも無表情であり、その言葉を耳ともしない。感情が稀薄でコミニケーションを取ろうともしない為、ウェンディは顰め面で舌打ちして苦手意識を露にする。

ともあれ防衛線の一つは崩壊したのだ。ウェンディはライディングボードに乗って飛行し、二人を背後につけて地上本部の方向へと向かっていく。

目的は聖王のゆりかごが安定して上昇する為に、地上の機能を無力化する為である。その為地上本部を潰そうという事だ。先日の襲撃の建て直しがまだ進んでいないため、目的地に着けば直ぐに終わるだろう。だが地上の部隊もそれを絶対に阻止すべく、必死の抵抗をしている訳だが。

現在は戦闘機人、ウェンディを含む三人に加え、さらに別方向からノーヴェと、先日捕らえて調整を施したタイプゼロファーストが攻め込んでいる。さらにゼストとアギト、ルーテシアがそれぞれ本部へと向かっている。

ウェンディは移動しながらノーヴェへと通信する。

「ノーヴェ、そちらはどうッスか？　ファーストの調子も含めて」

『こっちも楽勝だよ。こいつも特に問題は無さそうだ。――――さっさ

と終わらせて、チンク姉を助けるぞ』
その言葉に、ウェンディは少しだけ表情を曇らせるが、直ぐにいつもの表情に戻って了解と返事をする。チンクは結局セインの救出が間に合わず捕らえられてしまった。それに酷くショックを受けたノーヴェは何としても救い出そうと奮走しているのだ。この作戦が成功すれば、このミッドチルダを実質制圧できるのだから。
そしてノーヴェと一緒に行動するのはタイプゼロファースト――ギンガを回収した後、スカリエッティの調整によってその自我を更新。無感情で任務に遂行する戦闘機人へと仕上がっている。コミュニケーションが取れないが、戦力にはなる。
更にはゼストとアギトが航空魔導師による空の防衛線を攻め込み、別方向からもルーテシアが交戦している状態だ。二人の戦闘能力の高さからみて空のほうも問題なく制圧できるだろう。
「さて、じゃあ私等もさっさと向かうッスかー……って、お？」
その時、アジトから通信が入る。ウーノだった。どうやら管理局側に増援があり、魔力反応からみて機動六課の魔導師と判明した。その報告を聞いてウェンディは鼻で笑う。
「ようやくお出ましッスかぁ……。先日の借りもあるし、来るというならお望み通りッスよー」
「ウェンディ、油断しないで」
「ありゃ、こういう時だけ喋るんスか……」
調子に乗るウェンディにオットーが目線を合わせずに言葉を口にする。その一言のみだったが、ウェンディとしては馬鹿にされているようでやはり複雑だ。だが気にしても仕方ないと思考を払い、前方へと進んでいく。
ボロボロになった幹線道路を進んで行くなか、ウェンディは視界に何かを見つける。
「あれは……民間人ッスかねー？」
道路の真ん中に、人が立っていた。その姿は魔導師とは異なり、全身黒い服装に包まれている。いや、服装と呼べるかも分からない姿であり、既にボロボロな状態だった。戦闘にでも巻き込まれたのだろ

う。避難もままならない内に街は戦場と化したのだ。ボロボロな民間人が居てもおかしくない。
不審には思ったが、気にしている余裕は無い。邪魔なので排除しようとオットーがＩＳレイストームで砲撃を放つ。
が――――。
「――――え？」
砲撃が当たる寸前、その人影はまるで最初からそこに存在しなかったように一瞬で姿を消した。一体何が起こったのかと思考しようとした刹那――――。
――――オットーの顔面に拳が突きたてられ、後方へと吹き飛ぶ。
「は？」
慌ててその場で急停止し、吹き飛ばされたオットーを見る。地面に何度かバウンドし、その後ピクリとも動かなくなった。オットーがやられた事により、ディードが怒気を放って辺りを警戒する。
だが、次の瞬間――――。
「ここだ」

その声が、ディードの後方から聞こえる。振り返ると、そこには先ほどの黒い影が居た。先ほどのボロボロな姿では無く、真っ黒な戦闘装束を身に纏い、首から巻いたスカーフのようなものが風に揺らいでいた。
姿を確認した一瞬、次の瞬間には振り向きつつ、その勢いのまま上体を回して固有武装である赤い光を刀身とする双剣を横に薙いだ。ディードのＩＳツインブレイズは双剣術において長けている。だが、振り抜いた刀身はそのまま空を切るだけであり、その姿は消えた。
「遅い」
その声は今しがた自分が向いていた方向だ。振り向くとそこには何かを手に持っている黒い人物。その手に持っていた【モノ】を見て、ディードは恐る恐る自分の腕を見た。
――――自分の両腕が、肘から下が無く、もぎ取られたように切断されていた。当然、黒い人物が持っていたのは双剣を握ったままでいる

自分の腕である。ディードは気付いた瞬間、凄まじい痛みにその場で蹲る。いくら余剰要素排斥により感情が薄いとは言っても、強烈な痛みには耐えられない。

「……このッ!!」

ウェンディが横から砲撃を放った。黒い影はディードの腕を捨ててからその砲撃を避けていく。その動きは既に常軌を逸しており、消えては現れの繰り返しのようにして砲弾が外れていくのだ。点滅する立体映像に攻撃しているかのような感覚に陥る。

そして距離は詰まり、黒い人物は目の前まで接近し、

「他愛ない」

言って、ウェンディの胴に拳を入れた。それだけで身体の機能が内側から破損する。その事に気付きも出来ないウェンディは薄れ行く意識の中、自分が吹き飛ばされた事だけ理解できた。地面にバウンドし、そのまま勢いで引きずられ、ウェンディは意識を失う。

黒い人物は振り返り、未だに放心するディードへと歩み寄っていく。それに気付き、ディードも痛みに耐えながらなんとか撤退しようとするが、立ち上がった瞬間に肉薄され、後頭部を掴まれて地面へと沈められる。地面が砕け、ディードは力尽く。

僅か数分。その間に、陸戦魔導師を圧倒し蹂躙していた戦闘機人三人が潰された。まるで羽虫の如く、叩き落とされる程度の感覚で。

黒い人物はその後、一瞬にして姿を消した。

◇

聖王のゆりかご。その内部にある聖王の玉座には現在、クアットロとディエチ。そして玉座に拘束されているヴィヴィオの姿があった。ヴィヴィオは明らかに衰弱している。スカリエッティがヴィヴィオの聖王としての力を蘇らせるために、レリックをその身体に埋め込み、そしてゆりかごを起動した事により、幼き身体のヴィヴィオにかかる大きな負担がかかっている。

そんなヴィヴィオの様子を、ディエチは複雑な表情で見つめた。そ

の隣でクアットロは愉快そうに展開させてある端末を操作する。
「ゆりかごの航行は良好。上昇も問題なし。厚い装甲と周囲へのＡＭＦ展開もあって、周りの煩い航空魔導師は手も足も出来ない。さらに無数の砲撃によって迎撃もばっちり。まさに理想の空中要塞」
「でもクアットロ……何だか可哀想じゃない？」
　ディエチが言うと、クアットロは眼鏡を手で上げてからディエチを見る。その表情はいつも通りの彼女の笑みだが、その瞳には少しだけ冷たさが混じっている。
「可哀想……と思うのは勝手だけど、ディエチちゃん。これはドクターの願いの為。今更そんなつまらない感情に囚われている余裕なんて無いわ」
「うん、分かってるよ。だから別にどうこうしようっていう訳じゃない。自分の役目はきっちりやるよ」
　言って、ディエチは踵を返してイノーメスカノンを担ぎ、玉座の間から去って行く。その様子を見てからクアットロはウーノへと通信を繋いだ。
「ウーノ姉様、ゆりかごの方は問題ないです」
『分かったわ。予定通り……と言いたい所だけど……』
「……？　何かトラブルでも？」
　クアットロが首を傾げて訊ねる。
『地上の方で、ウェンディとオットー、ディードの三人がやられたわ』
「ウェンディ達が？」
　それを聞いて、クアットロは驚嘆する。ウェンディはともかく、オットーとディードがやられたというのはクアットロにとっても予想外だった。いや、管理局の戦力から考えて、撃墜されることは予想していたが、それにしても早すぎた為だ。
　顎に指を当てて思考していると、ウーノに次いでスカリエッティが通信を開き、
『問題ない、全ては予定の範疇さ。この計画の中心はクアットロ、君にかかっている。期待しているよ』
「ええ、ドクター。このクアットロ、ドクターの夢を叶えてみせます」

『頼もしいね。よろしく頼むよ』
　ウーノとスカリエッティの通信が途切れる。クアットロはヴィヴィオのほうへ向き直る。ヴィヴィオが拘束されている手錠に、ゆりかごの制御に関わるエネルギーの振動が伝わり、ヴィヴィオは苦痛に表情を歪ませて悲鳴を上げた。それを見て、クアットロは愉悦に似た表情を浮かべた。
「そう。結局、ドクターの夢はこのゆりかごにかかっている。なら、私さえ目的を果たせば何の心配もないわ。他の娘達がいくら犠牲になろうと、ね。さあ、聖王様、新たな世界構築の為に頑張りましょうね」
　そう言うと、クアットロは眼鏡を外し、それを投げ捨てた。三つ編みに結んでいた髪も解き、今までの彼女の印象ががらりと変わる。その姿は、もう一人のスカリエッティとも呼べるような狂気染みた雰囲気を漂わせていた。

◇

　ルーテシアは飛行型ガジェットドローンに乗り、多数のガジェットドローンと共に地上本部へと向かっていた。航空魔導師が迎撃に出てくるが、ルーテシアは腕を動かし、その掌から魔力砲撃を放って撃墜。背後を取ろうと接近した魔導師に対してはガリューが入り、その蹴りによって吹き飛ばされていく。ガリューはルーテシアと同じように飛行型ガジェットドローンに着地する。
「ウェンディたちの反応が消えたって事は、やられたって事ね。ゼストも六課の騎士と交戦に入ったようだし、現状本部に攻め込めるのは私たちとノーヴェたちか……。結構厳しくなって来たわねー」
　ルーテシアは端末を操作して状況把握し、そう呟いた。だが別段焦る様子も冷静に把握する訳でもなく、それはいつも通りのフランクな彼女だった。端末を閉じ、アスクレピオスを操作。インゼクトの召喚を行い、周囲のガジェットドローンに同期させていく。
「まぁでも、ここまで来たらやれる所までやるしかないか。悲しいけどこれ、戦争なのよね」

右手の中指を折って親指で押してポキッと音を鳴らす。グローブ型のデバイスを握ってから、正面に気配を感じたのでルーテシアは途中のビルの屋上へと飛び降りた。着地し、こちらに接近する存在を待つ。

するとその姿が露になる。飛竜だ。その背には六課の魔導師が二人乗っており、此方を視認している。以前に戦闘を交えた同年代くらいの女の子と男の子――キャロとエリオだった。飛竜フリードリヒがビルの屋上まで下がり、二人はフリードから降りてルーテシアとガリューと相対する形となる。

「いつだか会ったわね。また会うとは思っていたけど、どうやら結構強くなったみたいね。お姉さん驚きだわー」

「え……お姉さん？」

「どう見ても同い年くらいにしか……」

ルーテシアの緊張感の無い言葉と、そのわざとらしく手を口に当てる仕草を見て、身構えていたキャロとエリオは少し動じていた。

「人を見た目で判断してはいけないの。私はあなた達と違って事情があるのよ。こんな身体になって……ああ……私可哀想……」

「……ッ！　それって、何か病気とか？」

「まさか……スカリエッティに!?」

「いや、無い無い。多分あなた達と同年代」

ルーテシアの言葉に心配する様子を見せた二人だったが、直ぐにそれが嘘だと片手を横に振りながら答えるルーテシアにずっこける様子を見せた。中々弄りがいがあって面白いなとルーテシアは笑いつつ、

「そういえば自己紹介まだだったわね。ルーテシア・アルピーノ。ルーテシアでもルーちゃんとでも好きなように呼んでくれて構わないわ」

「あ、えっと、管理局機動六課所属、キャロ・ル・ルシエです！」

「同じく、エリオ・モンディアル！」

至って普通に、そしてフランクに自己紹介するルーテシアに対し、キャロもエリオも困惑気味にだが各々名乗る。ルーテシアはあっと

思い出しように隣にいるガリューへと手を向けてから、
「紹介し忘れるところだったわ。こちら私の召還獣のガリュー。召還獣とはいっても私の相棒みたいな存在だから、普通に人と接する感じで問題ないわ」
「う……うん」
　ガリューはルーテシアに紹介されると、キャロとエリオに対して軽くお辞儀をする。二人は困惑気味にだがお礼を返した。
　先ほどから感じていたが、ルーテシアという人物はどうも分からないと二人は思考する。それはルーテシアから敵意というものを感じられないからだ。それどころか、二人に対してフランクに接し、むしろ友好的にすら感じてしまう。前回の地下水路の時も互いにそんな余裕が無かったが、今回のルーテシアからは余裕を感じる。いや、余裕とはまた別の何かをエリオは感じていた。
　――まるで、もうどうでもいいような雰囲気を。
「……一つ、質問したい」
「はい、どうぞ」
　エリオはルーテシアに尋ねる。
「ルーテシア、君はスカリエッティの仲間だよね？」
「んんー……仲間といえばそうだし、そうでないとも言えるかなー」
　ルーテシアは上方を向いて口元に手を当てる。
「私には目的があって……まぁぶっちゃけると、私の母さんの為、かな」
「お母さん？」
「そう。私の母さんね、地上の陸戦魔導師でエリートだったんだけど、ミスって重症を負っちゃって。スカリエッティは母さんの身体を回収して、その遺伝子データから私は生まれた。あ、勿論戦闘機人じゃないから安心してね」
　誤解を招かないように手を振ってから言葉を続ける。
「しばらくはスカリエッティに利用される日々だったけど、別段無理やり意識を強制されてたって訳じゃなかったし、身体に仕掛けとかも無かった。プラス、同じく実験体として利用されてたゼスト……ゼス

ト・グランガイツ隊長ね。元陸戦魔導師のエリート部隊隊長で、母さんの上司。そのゼストと一緒に居た影響もあって、スカリエッティに心酔する事もなかったって訳。だから割と自分の意思で戦うし、命令されて戦うって訳でもない」

一呼吸置き、キャロとエリオの目を真っ直ぐ見ながら言葉を続ける。

「私はゼストから母さんの話を聞かされた。昔起こった事も全て知った。だから、私は母さんを目覚めさせたいって願った。母さんは意識不明の状態で、目を覚ますには指定番号のレリックが必要となった。だから私とゼストは共にレリックを探す事にした。母さんの為に」

ルーテシアの話を聞き、キャロのエリオは複雑そうな表情をした。ゼストについては管理局のデータベースから情報が出ており、隊員であったメガーヌ・アルピーノの事も調べられた。それを本局での会議で知っていた為、ルーテシアの説明にも納得がいった。ルーテシアは嘘は言っていないと分かった。

そんな事を察してか、ルーテシアは「でも」と口を開き、

「もうこんな状況だしね。おそらくスカリエッティにとって、もはや母さんの事なんて二の次状態よ。だから、私もはっきり言って頑張る理由なんて無い。強いて言えば、ゼストの目的を手伝いたいってのはあるけど」

「なら……ッ！」

キャロが声を上げるが、その先に何を言いたいのかを理解していたルーテシアは遮るように言葉を続け、

「でも、だからって今私が裏切れば、それこそ母さんの身に何が起こるか分からない。だから悪いけど、付き合って貰うわ」

言って、ルーテシアはアスクレピオスを構えて二人に対し戦闘態勢に入る。それに対し、キャロとエリオもそれぞれデバイスを構えた。キャロはルーテシアに、エリオはガリューと向き合う。

しばらくの睨みあいの後、ガリューが踏み込んだのを合図に、戦闘が開始した。

第２４話

「くそッ！　何て数だ！　切りが無い！」
「泣き言言ってる暇があれば手を動かせ！　落とされるぞ！」
　航空魔導師が迫り来るガジェットドローン一型を迎撃しつつ、苦言を漏らす。撃墜していってもまた別方からガジェットドローンによる砲火が此方を狙い、善方向から砲撃が来る。それを回避しつつ、少しでも死角を無くす為に連携を取り、背をくっ付けて視野に映るガジェットドローンを撃墜して行く。
　ゆりかごは依然として上昇を続けている。船のいたる所にある砲門が火を吹き、さらに無数に出てくるガジェットドローンによってその周囲の戦火は凄まじいものだ。航空魔導師が交戦するが、その猛威故に取り付く事が出来ない。
「だが、流石は六課の八神二佐……いや、歩くロストロギアと今は言ったほうが良いか……凄まじい。これ以上頼もしい援軍はいないな」
「同感だ」
　魔導師は背を預けている同僚に言葉をかける。それに同意する魔導師もまた、駆け付けたはやての戦力の高さに感嘆の声を漏らした。先ほどまでガジェットドローンの戦力差に戦局が崩れかけており、撤退を強いられる寸前の状態だったが、
「各部隊は連携を取ってガジェットを各個撃退しつつ、砲撃に注意！　集団の群れは私が吹き飛ばす！」
「了解!!」
　だが、はやてが来た事によって、崩れかけていた包囲を何とか立て直す事が出来た。戦力としては勿論の事だが、それとは別にはやての指揮能力が高いという事が戦局を立て直す大きな要因となった。魔導師達は立て直すことが出来、現在もはやての指示に従いガジェットドローンを撃墜していく。
「クラウ・ソラス!!」
　はやては夜天の書を開き、その一つである砲撃魔法を放ち、ガ

ジェットドローンの群れを一斉に撃墜する。その凄まじさに周りに居た魔導師達が驚きの声を漏らした。
はやてはシュベルトクロイツを下ろし、軽く息を整える。
「はやてちゃん、二時の方向に三型のガジェットの反応複数あるです！」
「了解やリイン！　でもすまんなぁ、まだ本調子やないのに……」
はやての肩で浮遊するのは現場復帰したばかりのリインフォースだ。ヴィータと共にゼストと交戦し撃墜されて怪我を負ったが、マリエルの治療によって無事に回復。だが怪我は治ったとはいえ、いきなりの決戦だ。負担は大きいだろうが、リインフォースは大丈夫と返事する。
「これくらい大丈夫です！　はやてちゃんは気にせず、ガジェットの迎撃を！」
「ああ、了解や。ここまで立て直せれば、後は時間稼ぎや……来るで！」
はやては下方へと視線を向ける。するとそこから凄まじい勢いでゆりかごへと飛んでくる人影があった。ゆりかごから放たれる砲撃を物ともせず、人影――なのはは一直線へと突っ込んで行く。
そしてなのははゆりかごへと衝突。そのまま内部へと突入した。衝撃でゆりかごの下部が爆発を起こし、魔導師達は動揺した声を漏らす。それもそうだろう、なのはの規格外な戦闘能力はクロノ達含む元アースラのクルー。そして六課の人間だけが知っている事だ。現に今の光景を誰一人として人間が突っ込んだと認識できる事は無い。
はやてはそんな魔導師たちの意識を声をかけて戻し、目の前の戦場へと視線を向けた。
「頼むで……なのはちゃん」

◇

薄暗い室内の中心には、表示させているディスプレイを操作するウーノと、その表示させている映像を笑みを浮かべて観戦するスカリ

エッティがいた。
「ドクター、侵入者が三名。こちらへと近づいて来ます。現在トーレ、セッテ、セインが迎撃にあたっています」
「そうかい、ウーノ。進入者の一人は恐らく……フェイト・テスタロッサだろうな。彼女と私は少々縁があるからね」
スカリエッティは顔色一つ変えずに、むしろ愉快そうに笑みを浮かべていた。歩を進め、そのままウーノへと近寄る。ウーノは依然として端末を操作していたが、その手にスカリエッティは自分の手を重ね、動きを止めさせた。どうしたのかとウーノがスカリエッティに振り向くと、スカリエッティはウーノの頭を撫でる。
「もういいだろう、ウーノ。ここまで来たのだ。私達の役目はここで終わりさ」
「ドクター……」
目を丸くしたウーノだったが、スカリエッティの言葉を理解したのだろう。そのまま手を止め、操作していたディスプレイを放置した。ウーノは今まで見せてきたキツイ印象の表情を緩ませ、目を閉じてかすかに笑みを浮かべた。スカリエッティに肩を預ける形で寄りかかる。
その時だった。室内の後方にあった扉が吹き飛ばされ、爆風と共に二つの影が飛んで来る。トーレとセッテだった。二人は地面へとバウンドし、そのまま立ち上がれること無く、倒れ伏す。セッテは気絶し、損傷の激しいトーレもまた朧気になる意識の中、スカリエッティとウーノのほうへ顔を向けて、
「……すみ、ません……ドク……タ……」
その言葉の途中でトーレは力尽き、気を失った。スカリエッティは動揺する事なくその様子を見つめ、破壊されて穴が空いた場所へと視線を向ける。煙が舞う中、人影が奥から歩いて来る。対艦サイズへと刀身を伸ばしたザンバーを片手で持ち、こちらに対し鋭い双眸を向けるフェイトだった。
トーレもセッテもかなり高い戦闘能力を持っていた。それこそヴォルケンリッターの戦闘能力は軽く凌ぐ程の実力だ。だがフェイ

トは規格外だった。室内だからといってフェイトの戦術が鈍ると言ったら大間違いである。フェイトの戦術は狭い空間であっても衰えはしない。いかなる状況であっても、その速さと力は相手を一瞬で一刀両断する。今回に至っては二人がまとめて攻めてきた為、大剣の側面で叩き潰しただけだ。フェイトにとっては他愛もない事である。

「ジェイル・スカリエッティ。貴方を逮捕します」

「ああ、構わないよ。だからその剣をこちらに向けるのは止めたまえ。ウーノが怖がる」

スカリエッティはフェイトに対し、抵抗せずに両手を上げる。フェイトは念のためスカリエッティとウーノを拘束する。視線を上へと向けると、そこには室内に表示させているウインドウがあり、ゆりかごと地上での戦闘の様子が映されていた。

「スカリエッティ。今すぐ戦闘機人と魔導師、そしてガジェットを止めてもらう」

「それは無理だな。例え私を人質にしたって彼女達は止まらんよ。ルーテシアやゼスト辺りは喜んで掌を返すだろうがね」

それを聞いて、フェイトは驚くことも焦ることも無かった。予め予測していた事だ。そもそもスカリエッティを捕らえてそれで終わるならば、スカリエッティがいつまでもこのアジトに留まっている筈が無い。

なら、スカリエッティの目的は一体何なのか、それが気掛かりだった。

「ジェイル・スカリエッティ。貴方の目的は何？　聖王を蘇らせて、ゆりかごを起動させてそれで終わり？　……いや、そんな筈ない。貴方ならそんな事をしても何も得られないと分かっていた筈だ。確かにゆりかごは脅威だ。でも管理局の戦力から考えて撃墜されるのは目に見えている」

その言葉通りだ。ゆりかごは確かに最悪のロストロギアであり大きな脅威だ。しかし六課のはやてが前線に出て、さらに上昇しても待ち構えている艦隊の主砲の一斉砲撃で沈められ、それで終わりだ。一方地上本部でも同じだ。初手こそかなりダメージを与えられるだろ

うが、戦力差から考えて負けるのは目に見えている。大きな被害が与えられるが、結局はそれで終わりなのだ。
　そんな事も考えられない程、スカリエッティという人物は愚かではない。これだけの事をやらかしたのだ。何か目的がある筈だ。
「貴方が言った【新たな世界】って、一体何なの？」
　フェイトは訊ねる。するとスカリエッティに笑い、身体を震わせた。
「確かに。このままでは私は唯の愉快犯でしかないだろう。世界だの何だのと宣言しておいて、結局はただのテロを起こしただけの犯罪者。それで終わりだろうな」
　スカリエッティが自傷気味に笑いつつ、言葉を口にする。次いで口を開き、
「だが、真の目的はその先にある。地上での戦火拡大も、ゆりかごの起動も、聖王の復活も――――全ては下地に過ぎないんだ。私も含めてね」
　フェイトは眉を顰める。スカリエッティが何を言いたいのか理解出来ないからだ。テロを起こし、被害を出し、それで一体何をしようというのだろうか。
「古来より、世界を変えてきた要因は何だ？　時代を変えたのは一体何がもたらした？　その答えはただ一つ」
　スカリエッティはウインドウに向かって言った。
「――――力だよ。世界を変えてきたのはいつだって大きな力だ。力によって革命が起き、戦争をもたらし、そして新たな時代を築いていった。求めらるのは大きな力だ！　ゆりかごでも聖王でもない！　そんなものは過去のものであり、現代では力を持たない！　新たな力が、世界を次の時代へと変えるのだよ！」
　心の奥底から叫ぶように、スカリエッティは言った。フェイトは表情を険しくさせる。今の言葉から、スカリエッティはまだ何かをしようとしている。だが、現に拘束されている状況で一体何をしようというのだろう。
「……種は撒いた。予定通りに成長した。覚醒の条件も満たした。後

は――――彼女が成すべき事をするだろう」
「答えて。その力というは一体何!?」
ザンバーを向けてフェイトが問う。スカリエッティは振り向き、
「――――現代に君臨する絶対的な力。私が生み出した最高傑作だよ」

◇

ゆりかごの後方部にある動力源。その手前の通路でディエチはイノーメスカノンを構えていた。通路は広く真っ直ぐな道が続いている。侵入者がくれば狙い打ちという訳だ。
先ほど衝撃と共に、恐らく六課の魔導師がゆりかご内部へと突入してきたのは分かっていた。狙いは聖王とこの動力源で間違いない。内部のはガジェットドローンが迎撃システムとして蔓延っているが、時間稼ぎ程度だろう。ここに到達するのも時間の問題だ。
ディエチは呼吸を整えつつ、前方を警戒する。こちらへと真っ直ぐ接近する存在を感知した。望遠能力を使い、その存在を視認する。
「あれは……」
此方へと脚力のみで駆けて来る存在は、先日自分を戦闘不能にした人間、なのはであった。その常人とは桁外れのスピードに目を丸くしつつも、砲身をなのはへと向けて狙いを定める。
先日は外したが、今回は条件が良い。この通路は逃げる場所が無い一本道だ。避けるスペースなど存在しない。ディエチがエネルギーを最大限に溜めた砲撃を防げる筈もない。
だからこそ仕留められる。ディエチはそう確信していた。
「今度こそ外さない。これで、仕留める」
狙いを定める。なのはは既にこちらの存在に気付き、そして狙われている事にも気付いているだろう。だが、気付いた所で遅いのだ。ディエチは引き金を引いて、凄まじい威力であろう砲撃を放った。
――――しかし。
「普通のパンチ」
なのはその砲撃を、拳一つ突き出して相殺したのだ。いや、相殺

どころか、その衝撃がディエチの居る場所まで届き、巨大な砲身であるイノーメスカノンがバラバラに砕け散る。吹き飛ばされ、衝撃で地面に倒れ伏す。彼女の内部機能は衝撃によって異常を起こし、戦闘不能となった。

「……化け……もの……」

ありえない現実と、あまりもの理不尽に絶望の表情を見せながら、ディエチは気を失った。

ディエチが倒れている所まで来たなのははそれを見て、

「あ、この間の戦闘機人だったんだ。前とは威力が違ったからびっくりしたの」

そう一言だけ漏らし、まるで何事も無かったように通り過ぎていく。その後方にある扉を拳で粉砕し、動力源をまた拳で破壊する。爆発を起こし、ゆりかごが大きく揺れる。警報がなり、船内に警告を伝えるシステム音が響いた。

なのははレイジングハートへと質問する。

「これで動力源は破壊したね。ヴィヴィオが居るのは反対側かな?」

その疑問にレイジングハートは肯定する。はやてから聞かされたブリーフィングではゆりかごは動力源、そして聖王の存在で起動している。その二つを無力化すれば作戦完了だ。だが、動力源はこのゆりかごの船そのものと同じで、自己修復機能が備わっている。その為早く聖王の存在を無力化しなければふりだしに戻ってしまうのだ。

なのはは来た道を真っ直ぐ戻り、聖王が居る玉座の間へと向かった。地面を蹴って真っ直ぐ通路を進んで行く。ここまで来るときもそうだったが、近接攻撃に特化したガジェットドローンが道を塞ぐように湧き出てくる。蠍を彷彿とさせるその姿は侵入者を切り裂き、蹂躙するように作られている。だが、それでなのはを止められる筈も無く、ただ通り過ぎていくだけの衝撃で破壊されていく。哀れとしか言い様のない光景だが、それを気にすることも呵責も無い。

やがて立派な扉が見えてくる。レイジングハートが目的地の玉座の間だと教えてくれる。なのはは勢いを止めることをせず、そのまま拳を作って扉へとぶつけた。それにより激しい爆発で扉が破壊され

る。
　その空間には奥へと続くように綺麗な装飾がされていた。まるでファンタジーの世界の王室といえる空間である。だがなのははそれに感嘆の声を漏らすこと無く、興味を見せない。なのはの視線はただ一つ――――玉座に拘束されているヴィヴィオだった。
「あらぁ、随分来るのが早かったですねー。先ほど動力源を破壊したばかりだというのに、凄まじい速さをお持ちで」
　横から声が聞こえる。それは玉座より少し横に居たクアットロによるものだ。玉座の高い段差から此方を見下ろし、挑発するように笑みを浮かべている。
「……貴女がヴィヴィオにこんな事を？」
「まあ、実質このゆりかごを操作してるのは私なのは間違いないですねぇ。それで、どうします？」
「決まっているの……ぶっとばす」
　拳を握り、クアットロを睨む。対し、クアットロは演技かかった動作で両肩を抑えて怖い怖いと言葉を発す。この人を馬鹿にしたような性格は好きになれそうに無いと思いながら、一歩近付こうとすると、
「おっと……私を先に倒そうだなんて事しないで下さいよー。……さあ、王様？　貴女にぴったりの強者が現れました。この女を倒さないと、また世界は混沌の闇に陥ってしまうでしょう。貴女の大事なものが、全て無くなってしまいますよー？　嫌ですよねー？」
　クアットロはヴィヴィオに対し、出鱈目な言葉を囁く。ヴィヴィオはそれを苦しそうにしながら涙を流し、嫌と叫んだ。
「ヴィヴィオ!?」
　なのはが心配するようにヴィヴィオの名を叫ぶ。だがヴィヴィオにはその言葉は届かず、ヴィヴィオの叫びはどんどん激しくなる。それに合わせ、空間が振動を起こし、まるで何か大きな力が目覚める前触れのようなものが漂った。
「嫌　嫌　嫌　嫌　いやいやいやイヤイヤイヤ……いやぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーッッ!!!」

その瞬間、凄まじい光と魔力がヴィヴィオを包み込み、空間を白く染め上げる。その隙にクアットロは転移で姿を消す。なのはは視界が戻るまで待つと、そこには先ほどと変わらぬ光景が広がる。

だが、決定的に違うものがあった。

――ヴィヴィオの姿が、明らかに変わっていたのだ。

姿は女児から大人の姿へと変貌し、まさしくヴィヴィオがそのまま大人になったらという印象だ。さらにその身に纏う騎士甲冑は黒く染め上がり、およそ普通の魔導師では絶対に届かないであろう魔力を放っている。

なのはは戸惑う中、必死に状況を飲み込もうとした。そもそもヴィヴィオは聖王のクローンとして生み出された存在だ。しかしその身体はまだ幼かった筈である。本来がその姿なのか、それともスカリエッティによってそういう姿にされたのか。

いや、なのはと過ごしたヴィヴィオが偽りの姿とは考え難い。だとすれば、この姿は力の解放によるものだろうかと思考する。

「……もう……失うのは……嫌……ッ!!」

仁王立ちしながらも、その表情は悲しみに歪められており、涙を流している。

「ヴィヴィオ……?」

話しかけるが、ヴィヴィオはそれに返事しない。どうやら、こちらを認識出来ないのだろうとレイジングハートが教えてくれる。今のヴィヴィオにとっては、なのはは自分の敵だとしか認識出来ないのだろう。

するとヴィヴィオはなのはに向け、鋭い双眸を向ける。魔力がさらに放出され、拳を構えている。

「……やるしかないみたいだね。本当は、こんな折檻みたいな事しなくないんだけど」

なのはは覚悟を決めて、ヴィヴィオへ向けて臨戦態勢に入る。ワンパンで倒しては駄目だ。それは分かっている。何とかヴィヴィオを救い出す方法を見つけなければならない。

「レイジングハート、方法見つけられる?」

訊ねると、レイジングハートは答える。一度接近し、ヴィヴィオがこうなってしまっている原因が分かれば方法はある筈だと。ならば、やる事は一つ。一度拳を交えてみるしかないのだ。

「今までで一番気を使う手加減になりそうなの」

苦笑いを浮かべ、なのはは地面を蹴り、ヴィヴィオへと接近した。

第２５話

地上でのビルの一つ。そこの屋上では現在、二つの影が接近戦を行っていた。エリオとガリューである。エリオはストラーダを構え、その射出される勢いと足の踏み場を瞬時に魔力で作り出し、空中での素早い切り返しでガリューとの攻防を繰り返す。一方ガリューも高いビルの壁を利用しながら壁を蹴ってエリオへと四方八方から跳躍し、腕の切っ先を振りかぶって接近、攻撃を仕掛ける。

一方ルーテシアとキャロも中距離魔法の攻防を繰り返していた。キャロはフリードの背に乗りながら、召還魔法を駆使して鎖で周囲のガジェットドローンを縛り、そのまま破壊する。フリードが旋回しながら火球を放ってルーテシアへと攻撃を繰り出すが、ルーテシアはそれを跳躍して回避した後、魔力弾【バレットシェル】を生成し、それを空へと放つ。魔力弾【バレットシェル】は空中で爆発し、空を飛んでいたフリードは衝撃でぐらついた。その背に乗っていたキャロにも当然爆風の衝撃が身体を襲い、腕を覆って耐える。追撃しようとルーテシアは更に魔力弾【バレットシェル】をその手に作るが、そこで異常に気付く。

足元にキャロのものである魔方陣が展開し、その光は激しさを増す。ルーテシアは危機察知して跳躍すると、先ほどまで居た場所が爆発を起こした。隣のビルへと移り、キャロの方向へと見る。既に態勢を立て直したようだ。二人は互いに睨みあう形となり、別の屋上へと降りたエリオとガリューも同様だ。

互いに仕掛けるタイミングを伺う。

その時だった。キャロとエリオに通信が入る。相手はフェイトだった。戦闘中だが、全体通信の為、ウインドウのみ表示させておく。

『こちらテスタロッサ・ハラオウン執務官。こちらは今、スカリエッティのアジトを押さえた。スカリエッティの身柄も拘束』

その言葉にエリオとキャロは目を丸くし、フェイトの作戦成功の報告に安堵の様子を見せた。だが今は戦闘の最中だ。しかし、ルーテシアはそのフェイトの言葉が聞こえたようで、先ほどまでの鋭い目線が

嘘のように消え去り、あらと声を漏らした。
　するとルーテシアは両手を上げて投降の意思を見せる。ガリューも同様に腕を下げて戦闘態勢を解いた。
「ドクター捕まったのなら、もう大丈夫かな。私とガリューはもう戦闘の意思はないよ」
「ルーちゃん……」
　キャロは意表を突かれたように目を丸くするが、先ほどの会話でルーテシアが戦う理由も聞いたのだ。なら彼女が投降するのも当然と理解する。ルーテシアとガリューは一旦同じ屋上へと合流し、エリオとキャロもまた同様に屋上へと降りた。四人が向かい合う形となる。ルーテシアは口を開き、
「それと提案なんだけど、このまま協力させてくれないかしら？　勿論、これが終わったらちゃんとお縄に付くし、罪も償う」
「それは……」
　ルーテシアの提案ははっきり言って不安だ。さっきまで敵同士だったのにいきなり協力関係になるとなれば不安になるのも当然だ。だが、ルーテシアが此方を騙そうとするようには思えない。エリオへと目配せするとエリオは頷いた。キャロと同意見だろう。
「分かった。一旦協力しよう、ルーちゃん！」
「うん、ありがとう！」
　ルーテシアは心から感謝を述べる。それはキャロやエリオへの素直な気持ちだった。これが別の局員ならば話さえ聞いて貰えなかっただろう。そう考えれば、この二人は甘すぎるのだ。だからこそ、二人と戦い、協力の提案が出来て良かったと思考する。
　ルーテシアは人差し指を上げ、
「今、地上本部には私の他に戦闘機人二人組みと、ゼストとアギトが向かっている筈だわ。私が気になっているのはゼストの方。彼も私と同じで目的があってスカリエッティに協力しているだけだから、話せば分かってくれると思う」
　ルーテシアはそう提案する。確かに管理局の調べとルーテシアの言葉から、ゼストが完全にスカリエッティ側ではないのは分かってい

た。彼女の言葉を信じ、ゼストを止めに向かったほうがいいだろう。
キャロは頷き、
「分かった。なら私とフリードはルーちゃんと一緒にゼストさんの所に行く。エリオ君は……」
「うん。僕はティアナさんの方へ行く」
ティアナは現在、一人で行動している。出撃時に分かれる際に、ティアナはなるべく時間を稼ぐと言った。もしかしたら現在戦闘機人と交戦しているかもしれないのだ。ならば直ぐに向かった方がいいだろう。
エリオが頷くと、ガリューもルーテシアに意見する。ガリューはエリオについて行くとのことだ。戦力的にもそれが丁度いいだろう。エリオとガリューならばスピードも同じである為、片方が遅れるということもあるまい。
四人はそれぞれ二手に別れ、他へと応援に向かった。

◇

ビルの一つの大きなロビーは現在、暗闇に包まれていた。人が避難し、電力も途絶えた為だ。その暗闇で現在、戦闘機人二人は六課の隊員の一人、ティアナと交戦に入っていた。
ノーヴェが黄色のウィングロードに似た能力、エアライナーによって道を作り、ジェットエッジで急加速を行う。そこから飛び降りて下方にいたティアナへと振り下ろすように拳を繰り出す。だが、ティアナに触れたその瞬間、その姿は消え去り、ノーヴェの拳が地面へと突き刺さるだけだった。幻影である。
一方、ギンガのほうも同様であり、幻影に攻撃しては外れの繰り返しだった。
「(……さすがに、一人でこの二人を相手にするのは辛いか)」
ティアナは二人から見えないところの柱の影で様子を窺っていた。現状、時間を稼ぐことしか出来ないが、幻影を駆使して何とかノーヴェにはかすり傷程度にダメージは与えていた。

だが、ギンガのほうは駄目で、全くといっていいほど隙が生まれない。
ギンガを見た時は絶句したが、スカリエッティに回収されたと分かっていれば当然であると考えた。恐らくスバルがいれば精神的にダメージがあるだろうなと考えつつ、思考を現状の打開へと切り替える。
二人を足止めしている間にシグナム副隊長かライトニング二人がこちらに応援に来れば、打開のチャンスがある。そう考えての戦略だ。そしてその戦略に兆しが見える。
『ティアナさん！　ご無事ですか！　現在、自分とガリュー……協力者と一緒に向かってます』
『ナイス！　エリオ！　ガリューってのが何だか分からないけど、味方なら大歓迎よ。こっちは今、戦闘機人二人と交戦中。その内片方がギンガさんってのが辛いけど』
念話を寄越したエリオにティアナはそう言葉を返す。ギンガという単語にエリオは驚きの声を上げていたが、彼もティアナと同じく理解したのだろう。直ぐに向かうとだけ言って念話を切る。
影から顔を半分だし、二人のいる方向へと見る。ギンガは相変わらず隙が無いが、ノーヴェの方は隙があった。ティアナは幻影を作り出し、別方向から飛び出すように幻影を動かす。
「こんの野郎ぉーーーッッ!!」
するとノーヴェは幻影だろうが構わずそちらへと殴りかかっていった。チャンスである。ティアナは飛び出し、クロスミラージュに溜めた魔力を撃つ。不意を突かれたノーヴェは直ぐ様回避しようとするが、完全に回避できずにダメージが蓄積されていく。
しかし、ノーヴェを攻撃すれば片方のギンガが此方に攻撃を仕掛けてくるのは当然だ。拳を振りかざし、こちらへと接近してくる。当然ティアナも銃口を向け、ギンガに魔力弾を撃つ。ギンガはそれを器用に避けつつ、接近する。だがティアナもそれは想定できたことだ。周りに魔力弾【バレットシェル】を展開、一斉射撃を行う。流石に回避が難しいため、一旦下がるか跳躍して避けるしかない。

だが、ギンガもいままでの時間稼ぎでこちらも戦法が理解したようで、構わず接近した。己のダメージを省みない強引なやり方である。だからティアナは容赦なく魔力弾をギンガへ向けて放った。直撃し、爆煙がロビーの一角に舞う。

この隙にまたティアナは別の場所に移動し、姿を隠す。そのつもりでいた。だが――――。

「……ッ！」

ギンガは勢いを止めず、煙から姿を現してティアナへと攻撃を仕掛けた。流石に不意を突かれてしまい、ギンガの拳がティアナの胴へと叩き込まれる。後方へと飛ばされ、ロビーのカウンターへと激突し、衝撃で煙が舞う。

だが、この程度の事で痛がりはしない。これくらいならば今までの訓練で叩き込まれた事だ。むしろ煙が舞ったことで新たな隙が出来たとティアナは思考を巡らせる。

だが、ここに来て予想外の事が起きた。

子供と目が合った。

それはロビーのカウンターの裏に隠れていた子供だったのだ。避難が間に合わなかったのだろう。今まで震えて隠れていたのだろうか、子供は涙目でティアナへと視線を向けていた。

それだけならまだよかったのだが、ティアナが吹き飛ばされてカウンターが破壊された事により、子供はすっかり怯えてしまって飛び出してしまったのだ。その飛び出した方向が不味かった。

煙の向こう――――ギンガの居る方向だった。

煙が霧散すると同時に、ギンガの姿が目の前に現れる。鉢合わせする形となってしまったのだ。ギンガの姿に子供は怯え、尻餅をついてその場で動けなくなる。

「……子供？」

離れに居たノーヴェはその様子を目撃し、眉を顰めた。ノーヴェにも子供が逃げ遅れたのだろうと理解出来た。だからノーヴェは別段子供に手を出そうとは思わない。邪魔なのはティアナ一人だからだ。

だがギンガはその子供を視認すると、冷徹な表情で腕を動かし、手

をドリルのように回転させた。子供は悲鳴を上げ、ギンガの視線は未だ子供へと向いている。ノーヴェもギンガが何をするのか理解できた。

「……ッ!? おいファースト!! 何やってんだッ!?」

声を荒げてギンガを止めさせようとするが、ギンガは聞く耳持たず、そのドリルを子供へと振りかざそうとした。ティアナは直ぐに助けようとするが、動きでは間に合わない。さらにクロスミラージュも先ほどの衝撃で異常が出たようで魔力装填も間に合わない。ノーヴェも駆けつけようとするが、その前にギンガの攻撃が子供に当たる方が先だ。

絶望的。そう思わせる光景だった。

――だが、次の瞬間。

「――ッ!!」

突如ビルの壁が爆発した。いや、爆発というよりかは、何かが衝突した衝撃だった。ロビーに再び煙が舞う。煙が霧散すると、そこには先ほどとは状況ががらりと変わっていた。

――黒い人物が、ギンガが繰り出した腕、ドリルとして回転していた手を、握って止めていたのだ。

その光景にティアナもノーヴェも絶句した。子供は何が起こったのか理解出来ず、ただその黒い人物の背中を見つめ、ギンガは依然変わらぬ表情を黒い人物へと向けている。

「……おい」

黒い人物は後ろの子供へと向けて、

「さっさと逃げろ」

と、言葉をかけた。子供は混乱するも、素直に従ってそのままロビーから逃げていく。その姿が見えなくなってから、黒い人物は再び声を発した。

「……お前、何やってんだ?」

ギンガへと向けて問うた。その言葉から怒りのようなものを感じた。だがギンガは表情を変えずに行動に出る。抑えられている手を軸に、もう片方の腕を振りかぶって拳を黒い人物へと繰り出した。

だが黒い人物はその拳をそれ以上の速さで腕を動かし、手で受け止める。
「……私は何をやってんだって訊いたんだ。そんな事をする人間じゃないってのは分かってんだよ」
その一言で、ティアナは驚愕で目を見開いた。
黒い人物はギンガの両腕を抑えたまま、身体を捻って蹴りを繰り出し、ギンガの横腹へと蹴りを打ち込む。その衝撃でギンガは吹き飛ばされ、壁に激突。そのまま気を失った。
「スカリエッティに弄られて自我が歪んでいるってのは分かるけど、それにしてはあまりにも酷い」
がっかりするように溜息を吐く黒い人物。それに対し、ノーヴェは接近して拳を繰り出した。ノーヴェは混乱してはいたが、この存在が自分達の敵だという事だけは理解できた。それ故に接近し、攻撃を仕掛ける。
だが、遅い。そう思わせるほどに、黒い人物の速度は異常だった。
先に行動していた筈だった。振りかざす拳が命中する寸前だった。それなのにノーヴェはまるで自分が静止したような感覚に囚われ、全身に打撃が加わるのを感じた。
――一瞬。その隙だけで、ノーヴェは戦闘不能となり、黒い人物はその背後へと回っていた。
あまりにも圧倒的な力。それを目の当たりにしたティアナはただ棒立ちするしか出来なかった。黒い人物はティアナへと顔を向ける。それに対しティアナも警戒態勢を取る。

黒い人物は、その姿から人型であるという点を除けば、人とすら言えるか分からない姿をしていた。全身と頭部は黒い何かで覆われており、左右には大きな角が生えている。
だが、ティアナはその人物の正体が分かった。ティアナは黒い人物へ声をかける。
「……あんた、こんな所で何をしてるのよ――スバル！」
「――ティア」

黒い人物――――スバルは此方を見てそう言った。スバルの姿はその身体から声まで何もかもが変貌しており、その口調までも違う。だが長年の付き合いからか、僅かであるがティアナは気付いた。
ティアナは険しい表情を向けて、問う。
「色々と訊きたい事があるけど……先ず、その姿は何なの？」
「これは私の力そのもの。いや、本来の姿といった方がいいだろう。リミッターが外れて、とても清々しい気分だよ。今なら何だって出来る気がする。いや、出来るな」
首に巻いている真っ黒なスカーフを靡かせ、両手を握って言葉を吐く。そこからは自信に満ちたものを感じた。
「リミッター？　あんたが異常なのは見て分かるけど、あんたまでスカリエッティに身体弄られた訳？」
「スカリエッティに身体を弄られたのは事実。でもそれはずっと前、それこそ私がスバル・ナカジマとして生きるようになる前の話だ」
それはつまり、スバルがクイントに保護される以前の話という事になる。その時から既にスバルの身体はこういう処理をされていたという事なのだろう。だが、今まで一緒に過ごしてきたティアナにとって、スバルにそういったものは感じなかった。事実、何回も受けている筈の検査にも、スバルは何の異常も見当たらなかった筈だ。
「だったら何で突然そんな事になったのよ？」
「言っただろう？　リミッターが外れたんだよ。それだけの事だ。だから私はこの力を得た」
ティアナには何を言っているのか理解出来なかった。リミッターという事が原因だとスバルは言うが、そこから意味が分からない。生物の限界を超えたとでも言うのだろうか。
何にせよ、このまま放置する訳にはいかない。ティアナはクロスミラージュを構える。先ほどの異常はもう無い。魔力装填は出来ている。その銃口をスバルへと向けた。
「訳分かんない。とりあえず、大人しく戻ってきて貰うわよ」
「それは出来ない。私はやらなければならないから」
「何を？」

ティアナが問うと、スバルは両手を開き、演説するように口を開いた。
「ティア……なんでこの世から争いが消えないか、考えた事は？　何で争いが起きるか、その答えはただ一つだ。この世は偽りの平和で満たされている」
「偽りの平和？」
ティアナは眉根を寄せて、疑問の声を漏らす。
「そう、偽りだ。本当に世界が平和だったら、争いなど起こらないからだ。世界は偽善で満ちている。小さな悪事を放置して平和とぬかす偽善。争いは常に小さな悪事から生まれ、それが偽善によって膨らみ、やがて大きな争いへと発展する。そんなものは平和とは呼べない。だから、世界が必要とするのは偽善なんかでは無い――――世界が必要としているのは、大きな【悪】だッ!!」
天を指し、スバルは叫んだ。
「大きな力、大きな悪。だれも逆らうことの出来ない絶対的な悪の存在。悪の存在によって世界は恐怖するだろう。だが、それでいい。恐怖によって人は悪事する余裕を失い、誰も逆らえない。恐怖で支配することこそが、世界を救う本当の平和なんだよ!!」
まるで真実を言う様でそんな事を叫ぶスバル。ティアナは激昂するように口を開いた。
「あんたそれ本気で言ってるのッ!?　そうだとしたら……あんた完全に狂ってる!!」
クロスミラージュを構える手に力を込める。未だに状況が全て理解した訳では無い。だが、スバルが明らかに普通ではないのは確かだ。
「――――あんた、何時だか言ってたじゃない。管理局の魔導師を目指す理由。聞いてもないのに勝手に話し始めてきたあの時、あんた言ったわよね？　自分が昔災害に巻き込まれて助けて貰ったのを切っ掛けに、今度は自分が困っている人、助けを求めている人を助けてあげるんだって。だから魔導師を目指すって言ったわよね？」
今でも思い返せる。訓練校時代にたまたま知り合いになったばか

りの時に、スバルが言ってきた言葉だった。
当初は人と馴れ馴れしくするつもりがなかったティアナに、スバルが話しかけたのが切っ掛けだった。そこから彼女と二人で行動するようになった。互いの長所と短所を理解し、それを改善して訓練でも成績を残す。何も考えずに行動しがちな部分が多かったスバルも、ティアナに合わせて思考を巡らすようになり、ティアナも昔のトラウマや目を背けてた現実とも向き合うようになり、より冷静に行動し、確実性を上げていった。
だからこそだ。これまで頑張ってきた時間が、今まで付き合ってきた相棒であるスバルが、偽りの姿だったなんて信じたくも無かったのだ。こんな狂った事を言ったり、ましてやギンガに対してあのような仕打ちをする事など、普段の彼女を知るティアナにとってはありえない事だった。
だが、スバルはそんなティアナに嘆息するように肩をすくめた。
「残念だな……ティアなら少しは理解してくれると思ったんだけど」
「理解出来ないし、したくも無いわ。……もういい、あんたが狂ってるのだけは理解できた。悪いけど、敵としてあんたを認識するわ」
言葉も通じず、正気に戻ることの無いスバル。希望を持っていたが、それは無情にも砕けていった。だからこそ銃口を向ける。こうなってしまった以上は自分がスバルを止めるしかない。止めなくてはならない。相棒の不始末は自分がつけなければならない。
それに対し、スバルは身体を向け、拳を握る。
「なら仕方ない――――悪を執行する」

第２６話

　ティアナとの念話を切った後、エリオはガリューと共にティアナのいる反応の場所へと向かっていた。加速して地面を蹴り、道を進んで行く。反応が近くなり、一際損傷の激しいオフィスビルが見えた。そこにティアナの反応があった為、穴が空いている壁から内部へと入る。

　そこには激しい戦闘の傷跡が残るロビーが視界を埋め、倒れているノーヴェ、そしてギンガを見つける。そして壁際にはもたれ掛るようにして倒れているティアナの姿を確認した。

「ティアナさん!?」

　エリオはティアナの元へと駆け寄る。一体何があったのか。相打ちとしてはやけに不自然な状況だ。ティアナの意識は辛うじて残っており、エリオの事を見ると苦しそうに声を上げる。

「エリオ……？」

「ティアナさん！　一体何があったんです!?」

　エリオの疑問にティアナは咳き込みつつ、

「……スバルよ。……あの馬鹿……まるで別人じゃない……」

「スバルさん……？　一体どういう？」

　ティアナの言葉にエリオは理解が追い付かない。だが、ティアナは次いで口を開き、

「……あの馬鹿を、早く止めて……あいつ、本当に……ッ！」

　そこでティアナは意識を失う。エリオは一体何が起こったのか分からなかったが、スバルに何かが起こった事だけは理解出来た。ノーヴェとギンガの身柄を確保しつつ、エリオはキャロへと通信を繋ぐ。

「キャロ、聞こえる？　こっちは今ティアナさんを見つけた。酷い怪我をしてるけど、命に別状は無い。戦闘機人も二人確保した」

『了解、エリオ君！　こっちも今シグナム副隊長と合流してゼストさんを止めた所』

　その言葉を聞いて、エリオとガリューは一先ず安堵する。

「キャロ、そっちでスバルさんを見かけた？」
『スバルさん？　スバルさんって今、行方が分からないんじゃ？』
「僕もよく分からないんだけど、ティアナさんによれば、スバルさんが現れたらしいんだ。多分、普通の状態じゃないと思う」
　恐らくはエリオの知るスバルでは無いことだけは確かだ。戦闘機人二人は明らかにティアナによって倒されたとは思えない怪我の仕方をしており、ティアナの傷から見て接近戦での攻撃を受けたと思われる。だとすれば、戦闘機人とティアナを倒したのはスバルだろうと推測する。ティアナを攻撃したという事は、スバルが正常ではないという事だ。
　その事をキャロに説明しつつ、とりあえずは皆一旦合流することに決めた。エリオはティアナを抱え、ガリューは両脇に戦闘機人を抱えてビルから出る。するとエリオは上方に何かを感じた。
　そこには、ビルの屋上から空に向かって何かが飛んでいく光景があり、その何かは人間とは思えない速度で一直線に上空へと飛んでいく。その先にはもう一つの戦場である――――聖王のゆりかごがあった。

◇

　もう数えるのも億劫に成る程の砲撃魔法を放って、ガジェットドローンの群れを撃破する。さすがに疲労も蓄積され、肩で呼吸する。はやては周りの状況を確認した。他の航空魔導師の隊も疲弊が現れている。
　だが、休んでなど居られない。気を抜けばガジェットドローンとゆりかごの砲撃の餌食となって空の塵と化すからだ。そして自分らが散れば、塵と化すのはミッドチルダ全てだ。故に弱音など吐いていられない。
　なのはがゆりかごを無力化するまでが勝負なのだ。
「フェイトちゃんの方もアジトを押さえたし、地上のほうも何とか持ちこたえている。後は私等が頑張らな！」

「はいです！」
夜天の書を持ち、詠唱を唱えて砲撃魔法を放つ。それによって更にガジェットドローンの群れを撃墜した。だがゆりかごからは無尽蔵にガジェットドローンが排出される。切りが無いが、踏ん張らなければならない。
――その時である。
「――ッ!?　何や!?」
下方から何かが接近しているのを感じ、視線を向ける。そこにはゆりかごに向けて一直線に飛んで来る人影が映った。まるで先ほどのなのはと同じような光景である。
凄まじく速く、何かしようとする間も無く、人影はそのままゆりかごへと衝突した。激しい爆発がゆりかごの下部に起こる。
「一体何が……!?」

◇

玉座の間にはこれといった障害物が無い。故にどこにも逃げるスペースなど無い。だが、そんなのは二人にとって意識の外だ。なのははヴィヴィオへと接近し、拳を繰り出す。ヴィヴィオはそれを上体を屈んで避けつつ身体を回転させ、そのままなのはの背にカウンターを入れた。がら空きだった背中にヴィヴィオの拳が命中し、なのはは前方への勢いもあってそのまま吹き飛ばされる。
激しく煙が舞う中、なのはは直ぐに身体を起こしてその場から跳躍する。姿が見えない筈のヴィヴィオから直ぐに追撃され、その攻撃はなのはが居た場所へと拳が打ち付けられる。
後方へと跳び、なのははヴィヴィオへと視線を向けつつ、
「……さすがに、手加減が過ぎたかな？」
攻撃を受けたが、別段に顔色を変えることも無くなのはは言葉を漏らす。先ほどのなのはのスピードはいつもの普通の攻撃よりも更に速度を落としたものだ。なのはとしてはヴィヴィオに攻撃などなるべくしたくない。故に攻撃も甘くなった。

だが、レイジングハートはそんななのはへと一つ報告する。それはヴィヴィオを助ける方法が分かったというものだ。
「流石レイジングハート！　それで、どうやって助けられるの？」
問うと、レイジングハートは答える。そうしている間にもヴィヴィオはこちらへと接近し、拳を振るってくる。なのははそれを余力を残しつつ回避し、レイジングハートの声に集中する。
レイジングハートが言うには、ヴィヴィオの身体にレリックの反応があるという事。それによってヴィヴィオが聖王の力を発動しているという事だった。しかし、それが分かった所でなのはにはどうしようも無いのが現実だった。
身体の中にレリックの反応があるからといって、どうすればいいというのだ。以前のナハトヴァール戦とは違い、今回は人間で、しかもなのはが大事と思うヴィヴィオが相手だ。もしレリックを破壊しようとワンパンすれば、間違いなくヴィヴィオの命は散ってしまうだろう。そんな事は出来る筈もない。
ヴィヴィオの拳を避けつつ、なのはは壁沿いを蹴るように駆けて翻弄する。それを拳から放出する砲撃によって追い討ちをかけてくるが、それをも何とか回避して行く。その隙にレイジングハートは答えた。
魔法によって内部に魔力を通せば破壊が可能だと。しかし、その言葉になのはは戸惑いを露にした。
「魔法って言ったって……私、今まで魔法で攻撃なんてした事ないよ？」
なのははこれまで飛行魔法や足場を作る程度には魔法を使って来た。元より魔法適正が高かった故に問題は無かったが、それでも使用する機会などほぼ皆無だ。今更魔法で攻撃なんて出来る筈がなかった。
だが、レイジングハートはそれを重々分かっている。だからこそ言葉を続けた。
なのははそのままヴィヴィオの胴に死なない程度に攻撃すればいい。その瞬間に拳に魔力を込め、それを放出することによってレリッ

クを破壊すると言葉にした。確かにそれならば、なのはにも出来る事だった。
別段難しいことでは無い。ヴィヴィオは魔力弾【バレットシェル】を展開し、拳から放出する魔力と共になのはへ一斉攻撃を繰り出す。それをなのはは普通のパンチを突き出す事によって相殺する。
「分かった、タイミングは任せるよ！　レイジングハート!!」
全力にて承りますとレイジングハートは機械音ながらも声を高くして答えた。丁度ヴィヴィオが跳躍して此方に回し蹴りを繰り出してきたので、その脚をつかみ、勢いに乗ったまま回転して投げ飛ばす。だが手加減故にヴィヴィオは空中で捻ることによって態勢を立て直し、足を安定させて此方を睨んで来る。
「……行くよ、ヴィヴィオ」
その言葉が合図だった。なのはは踏み込み、ヴィヴィオも踏み込む。互いに接近した為、距離は一瞬にして殺した。どちらも腕が届く間合いになり、どちらが先に相手に攻撃するかのタイミングだ。
先に攻撃を繰り出したのはヴィヴィオだった。腕を振るい、なのはの顔面へと拳を突き出す。しかしなのははそれを冷静に避け、がら空きだったヴィヴィオの胴へと拳を突いた。

瞬間、胴に触れたなのはの拳から桃色の魔力光が放出される。拳の威力はかなり手加減したものだが、魔法の威力は全力だ。まるで衝撃波のようにして魔力はヴィヴィオの胴を貫通し、同時に何かが砕ける音がした。
瞬く間に玉座の間は光で埋め尽くされ、それが収まる頃には全てが終わっていた。
視界が元に戻ると、そこには倒れるヴィヴィオの姿があった。身体は元の幼い姿へと戻っており、気を失っている。
「ヴィヴィオ!?」
なのはは心配しながら駆け寄り、ヴィヴィオを抱きかかえる。呼吸はしている。どうやら、上手く成功したようだ。ホッと安堵して笑みを浮かべる。

「ありがとう、レイジングハート。今回は全部、レイジングハートのお陰だよ」
レイジングハートは相変わらずの機会の音声で「それが私の役目です」と答えた。

◇

玉座の間から、船の下部にある空間。そこには所謂コントロールルームのような場所であり、そこでクアットロは端末を操作してガジェットドローンのコントロール、そしてゆりかごの動力炉の復元作業を行っていた。出現させていた立体ディスプレイには地上の様子やアジトの様子、そしてなのはとヴィヴィオの戦闘の様子などが映されていた。すでにアジトは押さえられてしまった為、映像の回線が切れてしまったが、別段それは問題ではない。
問題は、ヴィヴィオがなのはによって倒されてしまった事だ。聖王の存在が無くなった事によって、ゆりかごは本格的に機能を失いつつある。そしてクアットロはなのはの戦闘能力の高さに対しても身体を震わせていた。
「う、嘘……嘘でしょ？　聖王の力が……あんな、いとも簡単に倒されるなんて……ありえないありえない……ありえないッ!!!」
頭を掻き毟り、先ほどまでの愉悦に満ちた表情が嘘のように恐怖で震えていた。もはやクアットロにはどうしようも無い現実だ。スカリエッティの唯一の希望だった筈の聖王とそのゆりかごが、なのはによって無力化されたのだ。聖王が負けるはずが無いと確信していたからこそ、自信に満ちていたのだ。
だがどうだ、現実はもう詰んでいる。必死に思考を巡らせても打開策など出て来やしない。
終わり。その言葉がクアットロの脳裏に浮かぶ。膝から崩れ落ち、地面に手を付けて倒れこむ。もうじき管理局がゆりかごを押さえに本格的に突入してくるだろう。そして無人となったこの船は管理局の艦隊によって沈められるだろう。そして自分達は牢獄へと閉じ込

められるだろう。もはや絶望的としかいえなかった。
だが、そんなクアットロの元に、一つの変化が起こった。
激しい爆発と共に、空間にとある人物が現れる。何事かとクアットロは身体を振るわせつつ、煙が舞っている方向へと視線を向けた。コツコツと足音が聞こえる。やがて煙が霧散し、そこから現れた人物は
――黒い怪人だった。
訳が分からない。一体この怪人は何なのか。どうみても管理局の魔導師には見えない。クアットロは必死に思考を巡らした。立ち上がり、その怪人と目線を合わせることにより、クアットロに一つの記憶を蘇らせる。
「……そうだ。……ドクターが言ってたわ。……この世界に大きな力を生み出すって……」
いつだか言っていた事だった。当時は何のことだか分からなかったが、それは聖王の存在の事だろうと思っていた。
――だが、それが勘違いで、スカリエッティの言っていた事が別の存在だとしたら。
――もしそれが、今目の前にいる怪人の事だとすれば。
その思考の果てに、クアットロは再び表情を明るくさせた。蜘蛛の糸が繋がったような高揚感。興奮し、怪人へと話しかける。
「あなたはもしかして、ドクターの言っていた……大いなる力?」
すると怪人は頷き、肯定する。その事実に、クアットロは嬉々として興奮した。まだ計画は終わってなんかいないと理解した。そうだ、考えてみればスカリエッティがこの展開を予測できていなかった筈がない。この聖王をも格下に思わせる力の波動、この怪人こそが、スカリエッティの夢であるのだ。
クアットロの口から笑みが零れる。身体を震わせる。
「……ああ、最高……最高だわッ!! ドクターは本当に人が悪い!
こんな切り札があったなら、私にも説明してくれなきゃ!!」
クアットロの言葉に怪人は一切反応を見せないが、そんな事は彼女にとってどうでもよかった。クアットロは肩を抱えて身体を振るわせた後、怪人に向かって命令するように言葉を吐いた。

「なら話は早いわ！　今すぐ玉座の間に居る管理局の魔導師を倒して下さい！　あ、聖王のクローンにはまだ利用価値があるので殺さないように。魔導師は容赦なく殺して構わないわ！　私の為、ドクターの為に！」
「――――断る」
　怪人から出た言葉に、クアットロは固まった。理解が追い付かない。一言だけ言った怪人はクアットロに向かってゆっくりと歩き出す。クアットロは狼狽する。
「ま……待って！　何でよ!?　あなたはドクターの為に生まれた存在なんでしょう!?　ならドクターの夢を叶えるのは当然の事じゃない!!」
「……お前は一つ、勘違いをしている」
　怪人は目の前まで来てから、クアットロを睨みつけ、
「私がスカリエッティによって生み出されたのは事実だが、私はスカリエッティに従うつもりも無いし、ましてやお前の指示に従うつもりも無い。むしろ――――邪魔なんだよ。管理局の存在も邪魔だ。世界に蔓延る治安維持の組織も邪魔だ。世界に蔓延する偽善を振りかざす人間が邪魔だ。欲に溺れて悪事を生み出す奴も邪魔だ。……私は、世界の全てが邪魔で仕方ないんだ。だから変えなければならない。邪魔でしかない存在を消し去り、絶対的な力によって恐怖で埋め尽くすんだ。――――大きな悪で、全てを変えてやる」
　クアットロにはもう、思考する余裕すら無かった。ただ、この怪人から発せられるとてつもない恐怖に、失禁し、棒立ちすることしか出来なかった。
　気付けば、クアットロは怪人によって殴り飛ばされ、広い空間の壁に激突した。

第27話

フェイトはスカリエッティとウーノを拘束後、全体に報告を済ませ、アジトの機能が妙な作動をしないようにチェックを行っていた。スカリエッティ曰く何もしないとの事だが、信用などしない。その言葉どおりに特に何もなかったが。一通りの作業を済ませていると、査察官のヴェロッサもシスターシャッハも無事に合流した。シャッハは意識が無い戦闘機人を抱えていた。それを含め、拘束された四人の戦闘機人がこの場で拘束される事になった。

ヴェロッサの報告では、過去に被害にあった陸戦魔導師たちの何人かが生体ポッドで管理されていたのを発見したようで、その中にはメガーヌもいたとの事。それを聞いてフェイトは安堵した。

そうしていると、不意に拘束されているスカリエッティが説明を始めた。その内容は先ほど一旦言葉が切れた最強の力、最高傑作の事についてだった。

「古代ベルカ。その戦乱時代には、数多の歴史でも頂点に存在する強者の存在があった。聖王、覇王、冥王、鉄腕の一族。他にも様々な強者の存在が。だから私は思ったんだ。その存在達よりも遥かに凌ぐ強者を生み出してやろうってね。だから全ての強者の遺伝子を詰め込んださ。だがそれだけでは、まだ足りなかった。いくら注ぎ込んでも、交じり合っても、最強の存在は出来なかった。試行錯誤を積み重ね、プロジェクトFや闇の書など、使えるものは全て使った。そして私は見つけたんだ。最強の力を生み出す方法を。それは特殊な技術も、遺伝子操作も関係なかった、最も単純な方法。――リミッターを外すことさ」

リミッターという言葉に首を傾げながら、フェイトはスカリエッティの言葉を聞く。

「生命のリミッターを外す。それだけで良かったんだ。いや、それが実現出来ないからこそ最も難しいんだがね。だから私は意図的に、生命のリミッターを外せる状況を作り出した。先ずは基本的な身体能

力だ。これはリミッターを外した後では身体が変わるため意味は無いが、下地はとても重要でね。戦闘機人の身体に、身体検査にも引っかからないように古代ベルカの王たちの遺伝子を組み込んだ。リミッターが外れた際にそれが生きるようにね。次に、リミッターが外れるように、その人物がこの現実に絶望するような状況を作り出した。それが今の状況だ」

一呼吸置いて、次いで言葉を吐き、

「幼き頃から普通とは違う存在として生き、災害に巻き込まれ、ようやく成長した所でさらに絶望へと叩き落される。そして極め付けに大災害という状況を生み出す事で、その存在は世界に絶望を起こすだろう。――まあ、実際に成功するかなんて、可能性はとてつも無く低かったわけだが」

自傷気味に笑みを浮かべるスカリエッティに対し、どうも信じられなかった。まず生命のリミッターという時点で現実味の無い話である。そんな漫画やアニメのような事が起こるわけがないと否定した。

しかし、スカリエッティはそんなフェイトに視線を向けて、

「だが、君の身近に存在するだろう？　リミッターを外し、馬鹿げた力を持つ存在――高町なのはという存在が」

その言葉に、フェイトは衝撃が走った。なのはという名前で、今まで信じられなかったスカリエッティの説明が、一気に現実味のあるものに反転した。確かになのはの力というものは自分がよく知っている。もしそれが生命のリミッターを外したという事が原因なのだとしたら。だからこそ、スカリエッティの今までの説明に妙に納得がいってしまったのだ。

もし、そんな存在を生み出したというなら、前例の無い――災害を生み出すだろう。

「……なのはの存在を、どうやって？」

どうやって知ったのかと問う。

「あのプレシアの件と闇の書の件に、私が気付かないとでも思っていたのかい？　当時は衝撃的だったよ。まるで神をも殺すようなあの大きな力に。だから私は研究を始めたのだ。あの存在を生み出す為

にね」
　スカリエッティの言葉にフェイトは恐怖するのを感じた。ヴェロッサとシャッハは困惑しているが、もしそれが現実となってこの世に生まれたとしたら、無類の大災害が発生する。
　フェイトは慌しく口を開き、
「その人間は今、どこにいるッ!?　止めさせることは……」
「無理だよ。どこにいるのかも私には分からん。だがリミッターを外し、覚醒したならば恐らく、聖王のゆりかごにでも向かっているのではないかな。あれは力の象徴だからね、彼女にとっても利用価値はあるだろうさ」
　その言葉を聞いて、フェイトは通信を繋ぐ。相手ははやてだ。なのはは今ゆりかご内部にいる為、通信は出来ない。はやてにスカリエッティの言葉を説明し、ヴェロッサとシャッハにこの場を任させると伝えた。
　もし、万が一の可能性として、なのはが【負ける】事があるとすれば、それは世界の終焉を意味するだろう。フェイトが駆けつけた所で役に立てないかもしれないが、いても立ってもいられなかった。

◇

　ヴィヴィオを抱え、後は脱出のみとなった。突入の際は強引に貫通してきたが、ヴィヴィオを抱えている状態ではそれはしたくない。事前に説明を受けた時に、本来の出入り口は上のほうにあると知っていた。そしてそれは船の後方にあるとの事。故に動力源側にあると予想される。だからこそなのはは玉座の間から出て、その人間離れした脚力で通路を進んで行く。
　僅か数分、その間に船の半分を通ったと思う。その時に前方に人影を見つけた。近づいて行くと、それは騎士甲冑に身を包んだはやてだった。はやてはこちらに気付き、手を上げて近寄ってくる。衝撃を与えないようにゆっくりと速度を落としつつ、はやてに向かい合う形となる。

「なのはちゃん！」
　はやてはリインフォースとユニゾン状態のようで、全身がいつもと違って変色しているのが分かる。
「はやてちゃん！　外の方はどんな感じ？」
「こっちも何とかなった。外のガジェットも機能停止して、砲撃も止んだ。アジトは制圧したし、地上の方も何とかなった。なのはちゃんの方も、何とかなったみたいやね」
　抱えているヴィヴィオの姿を見て、はやては安堵した表情を見せた。後はここから脱出するだけだが、流石に戦闘機人を置いていく訳には行かない。なのははヴィヴィオをはやてに預ける。
「さっき動力源前にいた戦闘機人の子は隊員達に任せてあるから大丈夫や」
「そっか。あれ、そういえばさっき、一人いたんだけど……」
　言って先ほどまで玉座の前にいたもう一人の戦闘機人、クアットロの存在を思い出す。さすがに彼女一人でどうにか出来るわけが無い為、さっさと確保して脱出したい所だ。そう思考していると、はやては問いかけて来る。
「なあ、なのはちゃん？　何か変な人と遭遇せんかった？　さっきなのはちゃんと同じようにゆりかごに突入する人影を見たんよ」
「え？　そうなの？　見てないけど？」
　と、なのはが目を丸くして答えた瞬間だった。レイジングハートが警告の声を発した。そしてそれははやてにも伝わる。
　すると突然、強い何かが身体を伝ったのが分かった。魔力とも違う、圧のようなものだった。
「なんや……これ？」
　はやては表情を険しくさせ、なのはもまた、眉根を寄せてその圧を感じた方へ視線を向けた。それは、先ほどなのはが居た場所。玉座の間だった。
　何かがいる。直感的にそう感じた。そしてそれは、なのはが今までに感じた事の無いものだった。
「――――はやてちゃん、直ぐに他の隊員と一緒に脱出して。あれは

……私が行く」
はやてにそう告げてなのはは踵を返す。はやては静かに頷いて気をつけてとだけ言ってきたので、それに対して振り返りはせずにサムズアップだけを向けた。はやては後ろへと駆けて行き、なのははそのまま地面を蹴って一気に加速して来た道を戻っていった。

◇

玉座の間までのは数分は掛からず、僅か一分程度で到着する。自ら空けたデカイ穴から室内へと入ると、視界には先ほどとは違う光景がある。玉座にはいかにも此方を待っていたかのように立つ存在が居た。全身が黒く、その頭部には二本の角が生えており、まるで特撮などの怪人を思わせる存在だった。

その怪人の手には何かを持っている。それはクアットロだった。意識がなくボロボロな彼女の頭部を怪人は握っており、なのはに気付くと同時に捨てるように穴から外に投げ、通路へと落ちていく。それを視線だけで確認した後に、怪人へと視線を向けた。
「誰なのあなた？　一体何が目的？」
問うと、怪人は静かに玉座へと触れる。こちらの話を聞いていないのかと若干イラつきを覚えたが、次の瞬間にゆりかご内に音声が響き渡る。それは聖王の反応を認識したというものだった。それが示す答えはただ一つ、この怪人がゆりかごの認識によって聖王と判断されたのだ。だが聖王と呼べるかどうかも分からないその容姿に、なのはは首を傾げるのみだ。こんなのが聖王なのかと疑問を浮かべつつ、なのははは口を開いた。
「今の状況を見て判断するけど、あなたは聖王なの？」
「聖王……か。そうでもあり、違うとも言える」
はっきりしない物言いに首を傾げると、怪人は手を上げて口を開く。
「聖王と覇王、そして冥王。それ以外にも鉄腕の一族など幾つもの強

者の遺伝子が私にはあり、そしてそれらを凌駕した力を得ている。まあ、今の私にすればどうでもいい話だが」
　言って、上を見上げて続ける。
「この聖王のゆりかごは私の目的に役立つ代物だ。故にこのまま使わせてもらう。管理局の砲撃が迫るだろうが、私にかかればそんなもの無力に等しい」
「目的って何？　もしかしてこのまま世界征服とでも言うつもりなの？」
「世界征服か……あながち間違いではないかな」
　不敵に笑う仕草を見せる怪人に対し、なのははいたって表情を変えなかった。それもそうだろう。この怪人は見た目といい目的といい、本当に特撮の怪人そのものだったからだ。さらに言ってしまえば、その格好もどうも安っぽい怪人のコスプレにしか見えない。もはや呆れた感情を見せるなのはだが、怪人は気にせず言葉を続ける。
「私はこのまま世界を恐怖に陥れ、恐怖によって支配する。大きな悪で世界を変える。だが、別に人類を抹殺しようとは思わない。故に、あんたを殺す気など無い。そこの戦闘機人のようになりたくなければさっさと逃げ出せ」
「いや、何言ってんの？　逃げるわけ無いじゃん。このままゆりかごが消滅しないなら、それを止めるのが今の私の役目だし」
　当然の事のようになのはが言うと、怪人は首を傾げる。
「……なんだ？　折角見逃してやるっていうのに、そのチャンスを無駄にするつもりか？　正常な判断が出来ないのか？」
「正常な判断が出来てないのはどっちなのかな？　悪いけど怪人ごっこに付き合うつもりはないの。あなたこそさっさとそこを退いて欲しいの。その玉座ぶっ壊すから」
　指を指してさっさと退けるように言う。だが、怪人は退ける気が無く、依然としてそこに立つばかりだ。溜息を吐き、
「何か今までに感じたことの無い気配だったから、何だったのか気になって来てみれば、とんだ期待外れ。やんちゃな趣味でも節度を持ってやって欲しいの。突然現れて演技かかった事されても現場として

は迷惑でしかないの。分かる？」
説教するように腕を組んで言うと、怪人は理解が出来ずに首を傾げるだけだ。
「もしかして、今の状況を理解していないのか？　私が趣味でこんな事をしていると思うか？　ごっこ遊びでも演技でも無いんだぞ？」
その言葉の途中で何かに気付いたのか、ハッとしたように顎を動かすと、怪人はまた不敵に笑う。
「そうか、もしかしてあれか？　私の心にまだ人間の心がーとでも、残っているのなら届いて私の言葉ーとでも、そう思っているのか？　そうだったなら無駄な努力だ。生憎私は本来こういう存在であり、故に戻ることなんて無いんだ」
まるで確信を突いたかの自信に溢れてなのはへと指を指した。何言ってんだこいつはとしか思えない。此方はいたって真面目に注意しているだけだが、この存在はそれを演技へと組み込むことで脳内で補完した。
面倒と思いつつ、なのはは眉根を寄せて、
「何なの、あなた？　ていうかそもそも誰？」
「ん？　もうとっくに気付いているかと思ったが――――私だよ、スバル・ナカジマ」
「……え？」
その言葉に、なのははここに来て初めて驚愕し、目を丸くした。
「え？　あなたがスバル？」
困惑するが、スバルはそれに頷いて肯定した。正直、スバルとは認識出来ないほど面影が無いし、声も変わっている。キグルミ効果でここまで印象が違うのかなと思ったが、それにしたって変わり過ぎている。なのはの印象からでもそれは明らかで、そもそもスバルであったならば、その性格が全然違う。少なくともこんな事をする人間とは思えないからだ。
スバルはまた笑みを浮かべて口を開く、
「そうだ。言っただろう、これが本来の私であり、真の姿だって。それでどうする？　これでお互いに他人同士でしたという言い訳は出来

なくなったぞ？　お前もさっきの戦闘機人のようになりたくなければ、さっさと――――」
「あのさ、一つ言うけど、さっきの戦闘機人。大怪我のように見えるけど全然息があったよね？　本当に悪の親玉目指すんだったら容赦なく殺すのが普通じゃないの？　私を見逃すような事もしないんじゃないの？　そういう所が中途半端に見えて安っぽい怪人にしか思えないんだけど」
　そう言うと、スバルはどこか気付いたように肩を微かに振るわせた。それが気に障ったのかどうかは知らないが、もうこれ以上会話しても拉致があかないと判断する。
「まあいいや……――――とりあえず、ぶっとばすの」

第２８話

一歩、二歩、三歩と歩みを進めて行き、そのまま奥の玉座の前にいる変わり果てた姿のスバルの元へと近寄っていく。向かいつつも拳を静かに握って殴る準備をしておく。そうしてスタスタと近寄って行くに連れ、スバルは口数が多くなる。

「……ぶっとばす？　そう聞こえたがまさか、その歩みを止めずに来るのか？　自殺願望でもあるのか？　その握った拳を私に向か――」

言葉の途中で、スバルの目の前までたどり着いた。その視線を至近距離で受け止め、ただその視線に合わせて睨みあう形になる。それにスバルの苛立ちが頂点に達する。

「――馬鹿がッ!!」

言った次の瞬間、スバルの動きがブレると同時に衝撃が走った。全身に打撃の嵐が突き刺さる。その一撃一撃が凶悪であり、常人ならば肉塊すら残さず文字通りバラバラに粉砕するだろう。

その時間僅か一秒弱。それだけで相手を殺すには過剰すぎる攻撃を繰り出した。腕を引っ込め、態勢を元に戻す。周囲の地面が衝撃で粉砕され、辺りには煙が漂う。

「確かにあんたは強いよ。でも貴女やフェイト執務官、八神部隊長の実力でも、私のこの力には及ばない。だからいくら正義を振りかざそうとしてもこの結果だ。もう二度と人として活動できない状態にな――」

言葉の途中だった。煙からなのはの姿が現れる。何食わぬ顔でこちらへと歩み寄って来たのだ。

「何――!?」

驚愕した次の瞬間、スバルの顔面に拳が衝突する。吹き飛ばされて地面を削りながら後方へと身体を引きずって先ほどとは比べ物にならない衝撃が周囲に破壊していく。やがて壁にぶち当たり、玉座が吹き飛ぶ。それによって再びシステム音が警告を鳴らすが、そんな事はどうでもいい。問題はなのはが怪我はしているものの、大したダメー

ジを負っていない事だ。壁にめり込んだ身体を直ぐ様抜き、なのはへと視線を向ける。
「力があっても悪を振りかざすと、大体そうなるんだよ。今の攻撃でスバルが強いのは何となく分かった。今までで一番強いと分かるよ」
言った言葉は真実だ。事実、なのはは怪我をした。今まで怪我を負ったのはナハトヴァール戦くらいだったが、先ほどみたいな一瞬の攻撃でダメージを負ったのは経験上初めての事だった。
――しかし、はっきりしない点がある。
「……手加減されたのは初めてなの。やっぱり、スバルどこかで無理してると思う。戦闘機人を殺さなかったのもそうだし、完全に悪になりきっていないって」
スバルの攻撃は確かに一番強力だった。だが、ナハトヴァールのようにこちらを殺すようなものが感じられなかったのだ。それがスバルだからなのか、それとも何か別の理由があるのかは分からないが、何にしても【甘い】というのは事実。
「……無理してる？　私がか？」
「うん」
返事をした瞬間だった。後ろに気配を感じる。それは一瞬で移動したスバルだった。こちらの背後へと回って掴もうと襲い掛かるが、それを逆に掴んで背負い投げして地面へと衝突させる。
これで大体の相手は終わるだろう。なのはもそう思っていた。
――だが。
「――どうやら、認識が間違っていたようだ。ぶっ潰す」
周囲の地面が粉々になる程の一撃。恐らく今までの相手ならば立ち上がることがなかっただろう攻撃。それを受けてもスバルは立ち上がり、此方を睨みつけて今までとは違う乱暴な口調へと変化する。思わず目を丸くして驚愕を露にした。
強い。とても強い。そういう相手がなのはの目の前にいた。その事実に自然と興奮してしまう。もう高揚感など味わうことが無いと思っていたが、今こうしてそれが高まりつつある。故に期待してしまった。

なのはが待っていると、スバルは武術の構えみたいなものをした。それが一体どういう武術の構えなのかはなのはは知らない。唯一実家の兄姉などのを見ている程度で、格闘技などの経験は皆無だからだ。

「……いくぞ」

その一言を合図にスバルは動いた。此方が認識するよりも速く、目を潰そうと手が顔面へと迫る。それを上体をずらす事によって回避するが、次には数多もの技がなのはへと襲い掛かった。

だが見える。動きは確かに速いがなのはの視力ではそれを認識することは出来る。故にその一つ一つの攻撃をただ身体を動かして避けていく。

「(……なんて出鱈目で無駄な動きだ。それなのに奇跡的な動体視力と反射速度で私の技を避けている!)」

格闘技や体術の経験が皆無ななのはは、その強さで今まで【ただ殴る】【ただ避ける】だけで今までやってこれた。故に経験する事もなかった。

やがて目が慣れたのか、なのはの回避も余裕が表れ始め、スバルの攻撃の隙をついて拳を繰り出してくる。

――しかし、それは外れた。

「あ」

避けられるとは思っていなかった為、意表を突かれたように声を上げる。その隙にスバルが攻撃を繰り出した。なのはの目を手をかざす事で一瞬塞ぎ、その隙に連続した拳の嵐を繰り出す。

「神殺瞬撃!!」

――神殺拳。文字通り神をも殺す拳。古代ベルカの数多もの英雄が体得していた格闘術の全てを組み合わせ、そして編み出した究極の殺人拳である。

一瞬の視界が潰された為、なのはは反応出来ずにその連撃の全てを全身で浴びてしまう。怪我が蓄積されつつも何とか防ごうと腕を前に出すが効果は無い。連撃が終わると同時に足に力を入れて、地面を蹴って踏み込む。握った拳をスバルへと繰り出すが、それをスバルは

見切り、回避する。その勢いを利用され、スバルの回し蹴りが首元に命中するが、それでもまだ動ける。振り返らずにそのまま後ろ蹴りを繰り出すが、その足を掴まれて動きを封じられる。

「神殺昇撃!!」

次の瞬間にはなのはの顎に拳が突き刺さり、そのまま天井をぶち抜いた。勢いが止まる事を知らず、さらに追い討ちをかけてくるスバルの蹴りが胴に突き刺さったことで更に上へと突き上がり、やがてゆりかごの上へと貫通した。

放物線を描いてなのはの身体は落ち、甲板へと衝突する。跳ね上がり転がるが、途中で立ち上がって体勢を立て直し、スバルへと向かって踏み込み、拳を突くが、それも避けられる。次の瞬間にはカウンターを食らう。

何度も攻撃するが、結果は変わること無く反撃を受けるだけの形になった。連撃を繰り出すも相殺され、果てには逆に腕を引っ張られて顔面に拳が命中する。それによって脳が揺さ振られた為、全身が僅かに痺れて身体の感覚も僅かに鈍る。僅かに隙が生まれれば攻撃を受ける。故にスバルの連撃がなのはの全身に打ち込まれた。

「パワーもスピードもまるで化け物。今の私と張るかもしれないレベルだが、格闘技の経験が無いだろう？　私は様々な格闘技経験を全て遺伝子操作によって記憶継承している。故に相手の動きが手に取るように読める。構え、視点、動きのパターン解析だけでもある程度の見切りは出来るがそれに加え、重心の移動、筋肉の緊張、呼吸、気。それらを複合的に観察することで【次】が手に取るように分かるんだ。お前ほどのスピードの攻撃は反射で回避しても間に合わないかもしれないが、私はお前が攻撃する前に避けている」

此方に指を差して、

「つまり、お前に勝ち目は無い。経験の差が明暗を分けたということだ」

スバルは宣言した。その言葉通り、なのはのダメージはかなり蓄積されていた。このまま続けていれば間違いなく敗北するだろう。だからこそ、なのはは笑顔を作った。

「なんだ？　あまりのショックで壊れたか？」
「いや、感動してるだけなの。こんな強敵と戦ったのは初めての事だから。……でも」
なのははスバルへと指を差し、
「結局、スバルも本気出してないでしょ？　素人目でも分かるよ？　やっぱり甘い」
先ほどの攻撃は確かに強烈であり、なのはに傷を負わせたり肉体的に痺れを生み出すほどの物だ。だが確かな致命傷となる一撃は避けている。今の言葉が真実ならばさっさと急所をついて終わらせることが出来る筈だ。それをしないのは結局スバルが甘いという事だろう。
だからこそ残念に思う。こんな強敵に会ったのだ。どちらかが殺し、殺される。そういう闘争を期待してもいいと思ったからだ。だからこそ、なのはは拳を構える。
だったら、甘さを捨てさせるくらい、こちらが本気を出せばいい。
「私も本気になるよ。だからさ、やろうよスバル。多分それでお互いに気が晴れるから」
「……何？」
上空の強風になのはの髪が靡き、スバルの首に巻かれたスカーフが揺られる。スバルが首を傾げて、
「お前は……今までが本気じゃなかったと？」
「うん、まあいつもの動きといった感じかな。でも割と強めにいったつもりだよ。でも、だからこそ今から本気出す。ここからは本気【マジ】モードでいくよ」
言って、なのはは少し横へと駆けて行き、移動する。
「――必殺【マジシリーズ】」
移動後、先ほどの衝撃で輝が入った甲板に手を突っ込ませ、なのはが呟く。同時にスバルは何かを感じた。その不安は何かは分からないが、何かが来る。直感的にそう感じた。厄介な何かをされる前に、見てみたい気持ちもあるが、その前に終わらせたほうがいいと判断する。踏み込み、なのはへと距離を殺そうとした刹那だった。

「……マジちゃぶ台返し」
声が聞こえない。それも仕方ない。何せ、目の前に突如黒い壁が出現したからだ。
甲板を粉砕させ、その瓦礫が全て宙を舞ったのだ。辺りの空間を全て埋め尽くすような瓦礫に視界が一気に悪くなる。
だがこの程度で慌てる事はない。冷静に分析し見極める。宙に浮きながら近くの瓦礫に足をつけて移動する。こんなものは結局派手な演出だ。空中にゴミを散らして死角から攻撃を仕掛けるつもりだろうが、それは無駄だ。この程度の瓦礫はなんら障害にはならない。隠れているのならそれごと粉砕すればいい。スバルは拳での連撃を辺りに繰り出して周りの瓦礫を粉砕させた。
気付く。感覚がおかしいと。
この浮遊感はいつから続いていたと疑問に思った。普通無数の瓦礫を飛ばしたとしても直ぐ様重力によって落ちるはずだ。まして今ゆりかごは上昇中。よって甲板に落ちるのも直ぐの筈だ。だが未だに下が見えない。ゆりかごそのものから落ちたとは考えられない。だとすればなのはがそれほど上に飛ばしたということだった。
不意に背後に気配を感じた。反応に遅れ慌てて振り返るが、もう遅い。向いた時には既になのはの連撃がこちらに襲い掛かり、攻撃が全身へと当たる。吹き飛ばされて幾つもの瓦礫が身体に当たって粉砕されていき、一際大きな瓦礫へと衝突して勢いは止まった。
直ぐ様場所を移動する。瓦礫を跳びまわり、此方の隙を見せないようにする。動きが止まれば追い討ちを喰らうだけだ。
「……上等だ！」
なのはが居た方向へと向けば、そこから迫り来る瓦礫が見える。小賢しい。飛んで来る瓦礫を全て拳で粉砕させていく。
だがそれは囮だった。瓦礫を粉砕されたその後ろには既になのはが迫っていた。
「砕けろ!!」
だが予想の範疇だ。スバルがなのはなら同じことをするだろう。故に構えは出来ていた。握った拳をなのはへと向けて打ち出す。

「神殺瞬撃!!」
無数の拳の嵐がなのはへと襲い掛かる。対しなのはも拳を構え、
「両手連続マジ殴り」
二人の連撃が互いの攻撃を相殺する。打ち合いは凄まじく、衝撃であたりの瓦礫が全て粉々になっていく。だが徐々にスバルの方が攻撃の速度が落ちていき、打ち合いで圧倒されつつあった。技術ではスバルが圧倒しているが、これは拳の打ち合いであり、なのはよりアドバンテージが無い。単純な体力勝負ならなのはに分があるからだ。
動いて翻弄するしかない。一旦脱出するしかない。連撃から一旦距離を取り、スバルはもっと高い位置へと跳んでいった。一回不意を突かれて動揺しただけなのだ。慎重になって冷静に戦えば勝てる相手だ。だからこそ先ずは距離を取らなければならない。スバルがもっと高い位置へと跳ぼうとした時――――。
身体が甲板へと突き刺さった。
感覚が完全に狂っていた。なのはは余裕を持って甲板へと着地する。直ぐ様上体を起き上がらせ、なのはから距離を取った。だが先ほどの攻撃でこちらには結構なダメージを負ってしまった。不味いと思考する。
優位な状況であったが、これでは互いの負傷はほぼ同じとなった。なのはの攻撃は確かに強力であり、その一撃を直撃すれば負けるだろう。だが動きで言えばスバルが上であり、その技術でなのはの攻撃を避けるのは難しくない。
なのはが攻撃を当てるのが先か、スバルがなのはをダウンさせるのが先か。そういう戦いになっている。
スバルが先に動いた。距離を殺し、なのはの周囲を瞬時に移動して翻弄していく。その動きをなのはは目で負っていたが、スバルの速さはフェイトの速さを遥かに凌駕しており、動きの全てを見ることは出来なかった。背後に気配を感じ、後ろへと目線を向けるがそこにスバルの姿は無い。
次の瞬間、無数の拳が全身に浴びせられた。正面からだ。後ろの気配は囮であり、その隙に正面へと回りこんでの攻撃。単調な動きでは

あるが、スバルのこの人外じみた身体能力ならでは可能な戦法だ。
両腕で前方を覆って防ごうとするが、その腕を潜るようにして拳が全身に浴びせられる。防ぎきれず、ただ己の耐久力のみで耐えているだけだ。その一つ一つが強烈故に身体が悲鳴を上げているのが分かる。頭部には何度も拳を喰らい、血が流れているのに気付いた。
どうせ防ごうにも防ぐ事が出来ないのだ。なのはは反撃の為、拳を構えて前方に向かって打ち込む。そうすることで衝撃波が生まれ、スバルが距離を置くことを余儀なくされた。
後方へと跳び、着地するのと同時になのはは踏み込む。ただ正面に肉薄するだけ故に、簡単に回避される。だがその動きは先ほどと同様だ。ならと、なのはは腕を横に振るって裏拳のように繰り出す。それによってスバルの動きに僅かにだが隙が生まれた。その隙を見逃さず、拳を打ち出す。
「マジ殴り！」
本気の一撃を胴に打ち込んだ。正面から捉え、ど真ん中にぶち当たる。だがスバルはそれを後方に逃す事によって威力を逃した。衝撃で身体を覆っていた黒い塊が砕け、本来の姿である漆黒の戦闘装束が露になる。
しかし次の瞬間にはスバルがカウンターを入れる。なのはの突き抜けた腕を掴み、そのまま地面に向かって投げ飛ばした。全身に凄まじい衝撃が伝わり、骨が軋み、内臓が圧迫される。衝撃でクレーターが出来上がったところに、スバルは更に追い討ちをかけようと後方へと跳躍し、先ほどバラ撒いた瓦礫を使い、強大な塊を此方へと投げ飛ばす。
命中すれば唯ではすまない。だからこそその正面から見据え、地面を蹴って飛んで来る塊を真っ向から突っ込み、拳で粉砕すると同時にスバルの顔面を捉えた。それによって頭部を覆っていた塊も砕け、黒く染まった髪と、印象が変わっていたスバルの顔が露となった。
落ちるように吹き飛ばされていく。だが接触すると同時に衝撃を逃すように転がることによって直ぐに体勢を立て直し、口に溜まった血を吐き捨て、なのはを見据える。

「やっとスバルの顔が見えた……」
笑顔を作り、額から流れる血を腕で拭ってスバルに言う。なのはのバリアジャケットもボロボロな状態で、息も上がっている。お互いにもう体力が無い状態だ。恐らくあと一撃喰らえばそれで終わるだろう。だからこそ互いに最後の一撃を仕掛けるタイミングを見計らう。
「……スバルは何で、世界征服なんか目指すの？　そんな事をして何の意味があるの？」
構えつつ、スバルへと問う。スバルは返答するか迷っていたようだが、少し間を置いてから口を開いた。
「……私が望むのは、こんな偽善で満ち溢れている世界ではなく真の平和だ。いくら争いの無い世界を目指そうにも、影では悪事が未だに繰り返されている。その小さな悪事が、やがて大きな事件を引き起こすんだ。この状況だってそうだ。ならその原因はなんだ。それは偽りの平和によって、人に余裕というものを生み、やがてその余裕が欲を生む。その欲が悪を膨らませ、やがて戦争を起こすんだ。だからこそ、人から余裕を無くせばいい。その答えが、恐怖によって支配することだ」
その言葉は間違いでもあり、ある意味では正しいのかも知れないと思った。現になのははこれまで地球やミッドチルダの生活を得て、数々の悪事を見てきたからだ。強盗だってそうだ。結局、表面上の平和は影の悪事を隠しているのに過ぎない。
「管理局や……統治する組織は皆、人間も世界も何も見えてはいない。街で死にゆく子供一人も救えない狂った存在だ。だが世界の人間は管理局という組織に依存している。守られているのが当たり前だと勘違いしている。何かがあっても誰かが何とかしてくれると。災害が出ても対岸の火事。大半の人間の日常が変わるわけではない。その結果心に余裕を生み、それは悪へと変わる。偽善の象徴が偽者の平和を作り、人間を悪に染めるんだ」
その言葉の真意に、スバルの意思だけでは無いと直感で感じた。恐らくその思いはスバルの中にいるベルカの王族達の思いもあるのだろう。古代ベルカについてはヴィヴィオを世話するにあたって軽く

だが調べてはいた。詳細は諸説あり、確実なものは分かってはいない。だが、今もこうしてベルカ戦乱時代による無念などがスバルの中で渦巻いているのだろう。そしてスバル自身の世界に対しての思いが重なる事によって、その思考に行き着いたのかもしれない。

「だから私が為ってやる！　全人類を恐怖によって支配する強大な悪として！　生存の余裕が無い世界からは悪事も消える。イジメも差別も戦争も！　世の中に必要なのは不平等な正義ではない。平等な絶対悪だ！　全人類が強大な悪に怯えながら、皆が心を合わせて生きるために活きる！　これ以上の平和があるか!?」

感情を露にし、叫ぶようにして言い放ったスバルの言葉。それは確かに一理ある。人類に余裕がある限り、悪事も戦争も無くならないだろう。そしていつか戦争を繰すだろう。故に根本的な所を変えようとするのは、世界を変える一つの手段なのかもしれない。

だが、その手段は間違っている。

「……やっぱりさ、私には分からないよ。だから賛同することは出来ない。ここで止めさせてもらうよ、スバル」

「最初から同意など求めていない。――いいだろう、これで終わらせる」

言い終わると同時に互いに踏み込んだ。一瞬にして距離を詰め、互いが目の前に迫る。なのはは変わらずただ拳で殴ることしか出来ない。だからその拳に残る全ての力を込める。一方スバルも自分の技でなのはの拳を冷静に見切り、カウンターを入れて胴へと拳を入れた。

だが、次の瞬間にはスバルの胴にも拳が打ち込まれる。自分が拳を受けると知っていてのゴリ押し。この土壇場でこんな手段を取るとは馬鹿げていると思ったが、なのはが戦法に関して素人だと思い出すと、妙に納得がいってしまった。

僅か数秒。その一瞬で全てが決まり、互いに弾かれるようにして吹き飛ばされた。甲板を跳ね、倒れこむ。互いにピクリとも動かなかったが、片方の身体が動き始める。起き上がり、倒れる方に向かってたどたどしく歩き出す。

――スバルだ。
目の前には倒れて動けないなのはの姿がある。見下ろし、トドメを差せば殺すのは容易いだろう。
だが、スバルにはそれだけの体力はもう――残っていなかった。
目の前まで迫り、そこで力尽きる。倒れる間際に仰向けになり、なのはの隣に倒れる。意識はあるが、もう身体を動かすことは出来ない。
「……私の、勝ちだね……」
なのはが声を出す。言いながら片腕を空に突き出してガッツポーズを取る。なのははまだ僅かだが身体を動かす事は出来た。それに対しスバルはもう悔しさなど感じず、ただ呆然と空を見上げていた。
「……何だか、こうなるだろうなって……思ってました……」
「あ……口調元に戻ったの」
スバルの口調やその雰囲気からはもう、先ほどの悪役らしいものは消え去っていた。作っていた演技とは違うのだろうが、あれもスバルの中にある無数の思いがそうさせていたのだろう。だから決して先ほどのスバルが偽りという訳ではない。
「……あのさ、スバルが言ってた事ね。私は思ったんだ。確かにこの世界から悪は消えないって。今回の事件だって多分色んな事情が交錯して起きたことだって思う。でもだからって、恐怖で支配するなんて間違っているって思う。その事はスバル自身も気付いていたんじゃないかな。だから殺さずに無意識に手加減してたんだよ」
「……」
互いに空を見ながら、なのははそう言葉を口にする。
「だからスバル。その考えはやめてさ、別の方向で平和を作っていこうよ。何も恐怖で支配しなくたっていい。もっと皆が自由に、そして誰もが幸せになれる方法がきっとある筈だよ」
「……そんな事……出来る筈ありませんよ……」
「出来るよ。……だって、スバルは凄く強くて、そして強い思いを持ってるじゃん。スバルはさっき強大な悪に為るって言ってたけど、それは違うと思う……」

なのはは上体を起こし、スバルの顔を見ながら言った。

「――――ヒーローに成りたかったんだよ、スバルは。世界の平和を守れる、真のヒーローに」

「……あ」

その言葉に、スバルは目を見開いて声を漏らした。

「悪事とか戦争とか、人の欲望だとか、色々難しい事考えて変な方向に答えを出しちゃったみたいだけどね。でもそんな事じゃない。悪事が消えないんだったら、それを徹底してやっつければ良いだけの話だよ。いくらキリが無くても、困っている人、泣いている子がいたら、直ぐに助けられるヒーローを目指せばいいんだよ。それだけの力を、スバルは持っているんだから」

「……あ……ああ……」

その言葉通りだった。何でこんな単純な答えを見つけられなかったのだろうと、スバルの目から涙が零れ落ちる。

「はやてちゃんもフェイトちゃんも、皆も。そういう世界を目指してる。だからスバル、皆と一緒に戦おうよ。その思いは、皆一緒だと思うからさ」

言って、なのはは立ち上がってスバルの身体を両手で抱え、笑顔を向けて言った。スバルは泣きながらそれに頷く。その姿は、かつて自分が空港で救って貰った光景を思い出させた。

「とりあえず、先ずはここから出ようか。そして皆に謝ろう」

「……はい……ッ！」

涙に濡れながらも、力強く返事を返した。その表情にはもう悪といったものは感じられない。なのははレイジングハートに言って飛行魔法を発動し、スバルを抱えてゆりかごから脱出する。

ゆりかごの高度は既に高く、だいぶ降下した場所ではやての姿を確認した。その腕にはクアットロが抱えられており、あの後無事にはやてに救助されたと分かる。一方はやても、なのはに抱えられたスバル

を見て、事情を何となく察したので深く追求しては来ない。細かい話は終わってからでいいだろう。
その後、ビルの屋上に着地してから上を見る。そこには既にゆりかごは見えなくなっていたが、数秒後には空に大きな光が閃光した。クロノ率いるクラウディアの艦隊によって破壊されたのだろう。
そうしていると、六課のメンバーがヘリで駆けつけて来るのが見えた。心配で駆けつけたフェイトもその場に現れる。色々と話すことは多々あるが、それは帰還してからでいい。先ずは無事に作戦終了という事で、安堵していいだろうとなのはは思った。

第２９話

カタカタ、とキーボードを打つ音が執務室に響く。表示されているディスプレイを見て、ようやく一段落ついたと確認してから背もたれに寄りかかり、腕を伸ばした。周りを見てもそこには誰もいない。それはそうだとフェイトは思う。この執務室は本局にある自分の個室のようなものだ。故に集中して仕事をすることが出来る。机に置いてある時計の時刻を確認すると、既に二二時を回っていた。そろそろ退勤しようと思い、ディスプレイに日報を入力してから更新し、電源を落とす。荷物をまとめてから席を立ち、扉の前まで歩いてからキーカードをかざして扉を開けた。

本局からは転送装置で地上へと降りる。転送装置に向かう際に、まだ仕事をしている局員を見かけて挨拶緒交わしていく。流石にまだ慌しいなと思いつつ、転送装置についた為、地上へと転送した。

事件終結から既に二ヶ月が経過した。

魔法技術の賜物で復旧作業はかなり進んではいるものの、ミッドチルダは以前の平和を完全には取り戻してはいない。現場の被害の爪痕も未だに残っている状態であり、集積所では瓦礫の片付けが未だに行われている。また地方都市ではスカリエッティが扇動した犯罪者の暴れ回った為、略奪が酷かった地域ではいまだに手が付けられない部分も多く、多くの局員が収拾作業にあたっている。

それでもクラナガンを始め都市部では先の復旧作業である程度は生活できる状態にまで回復はしていた。生活する上での不便な所はほとんど無いだろう。だからこそ、局員にとっては今が一番大変な時期だ。

本局の転送装置から地上本部にある転送装置へと転送を完了し、そこから歩いて外へと出る。途中の通路では案の定、陸の局員が慌しく仕事に追われている様子が見て取れた。お疲れ様と挨拶していき、駐車場へと向かう。すると途中によく見る背中を見つけた為、声をかけた。

「ティアナ」

「あ、フェイト執務官。お疲れ様です」
書類が入っているだろう鞄を下げ、六課の制服に身を包んだティアナの姿があった。振り返り挨拶をしてきたのでそれを返し、二人で並んで廊下を歩く。
「ティアナは今日は地上本部でミーティングだったっけ？」
「はい。ナカジマ三佐の付き添いで。私は個人的に済ませたい用事があったので、この時間に」
ティアナの外出連絡から思い出す。現在、機動六課はナカジマ三佐率いる陸自と合同で仕事をしている。主に事件の収拾の為だ。故にティアナも含め、陸自の局員と一緒に行動する機会が増えた。元より対スカリエッティの為といっても過言ではない目的で作られた機動六課だ。その目標が達成されたからといっても、一年という期間が途中で終わることはない。残り約半年はこんな感じで仕事にあたることだろう。
停めてある愛車に乗り、ティアナが助手席に座る。エンジンをかけて道路へと出る。都市部とあって車の量も多く、人工的な光に照らされながら幹線道路を走っていく。ビル群は災害前と比べ光の数が少ない。完全に復旧が進んでないのか、入っている企業も以前よりかなり減った為だろう。先ほど自販機で買っておいた飲み物に口をつけながら真っ直ぐ進んで行く。
「そっちの方も上手くいってる？」
「はい。ナカジマ三佐が率先して事件の収拾に力を入れているので、こっちも問題は無いと思います。時間はかかると思いますが……」
「まあ、そうだよね」
苦笑いしつつ、納得する。
あの事件が終わった後、逮捕されたゼストが差し出した過去の戦闘機人に関するデータを元に、スカリエッティの事件の捜査は一気に進んだ。それと同時にレジアスも汚職を認め、全てを吐いたのもあって局内の捜査も進んだ。更に秘密裏に査察部と協力して調べていたユーノによって最高評議会も直ぐに告発され、処分を下された事により、芋づる式に関わった局員が次々と逮捕されていった。その光景は

ある意味衝撃的だった。因みにユーノが事件当時に最高評議会の元へ向かった際に戦闘機人と遭遇し、ユーノの捕縛術によって直ぐに確保された。もしユーノがいなければ最高評議会は今頃この世から消えていたのかもしれない。レジアスも処分を下され、現在は完全に引退している。

一方、スカリエッティの処分の方だが。管理局を襲撃し、犯罪組織を扇動してテロを起こし、さらに古代兵器を使ってクラナガンに莫大な被害をもたらし、挙句の果てにミッドチルダ壊滅のあと一歩までやらかしたのだ。正直死罪が適正だろう。その結果、スカリエッティは終身刑へと決まった。このまま牢獄暮しで一生を過ごすことだろう。

戦闘機人はスカリエッティによって使われていたという事もあって、捜査に協力的であれば更正施設にてしばらく過ごし、刑期を短くすることが出来る事となった。だが何人かの戦闘機人は非協力的である為、スカリエッティ同様に牢獄へと送られている。

ゼストはあの事件終結後に容態が悪化し、残念ながらこの世を去った。ルーテシア、アギトはスカリエッティ確保後に協力したという事もあり、更に肉親が実質人質に取られていたという事もあり、更正施設へと送られて刑期が軽くなるようだ。前にギンガと一緒に様子を見に行った際は元気そうに過ごしていたので大丈夫だろう。

カーブに差し掛かったため、ハンドルを切りつつフェイトが口を開く。

「はやては今日も本局泊まりだって」

「今日も、ですか。まあ、大変ですよね……」

「あはは、まあ仕方ないね。部隊長だし」

あの場で前線にいた一人であるはやては現在でもなお仕事に追われている状態だ。それは前線での指揮を担当したのだから、後始末もそれなり多いのは当たり前だ。自分もアジトに突入した故にやることも多かったが、ヴェロッサとシャッハもいた為、はやてと比べると少ないのが幸いだ。幸いというと起こられそうだなと思っておく。

「ヴィータ隊長たちも地方都市に行ってますから、今日は戻って来れなさそうですし」

「そうだねぇ……」
ディスプレイを起動して届いているメールをチェックしながらティアナが言う。
あの事件の最中に全身負傷で治療を受けていたヴィータとザフィーラとシャマルは、その驚異的な回復力で直ぐに復帰し、いち早く仕事に復帰していた。現在はヴィータ、シグナムとザフィーラの三人で被害を受けた地方都市に行って仕事をしている。
ティアナはメールの内容をチェックしながら、ふと画面端に映ったネットニュースの内容を見た。そこには先の事件【ＪＳ事件】についてある事ない事が書かれているのを見て少し溜息を吐いた。その様子を横目で見て察したフェイトが口を開く。
「またネット記事でデマ？」
「デマ……といえばそうですね。全部が間違っていないんですが、一部憶測が入っていますねこれ」
「まあ、全部マスコミに公表できないからね」
ＪＳ事件。そういう内容で世間にはこの事件が知れ渡っており、その全容は語られてはいないが故に、管理局を叩くような記事が広まっているのが事実。組織内の裏取引やら犯罪組織と繋がっている等、内容は様々だ。管理局もそうであるが、聖王教会側でもこの手の話は多く、今回の事件に聖王が関わっていたのだとか、どこから漏れたのか知らない内容が含まれており、それによって信仰者の一部で騒ぎになったりもした。
それでもだいぶ落ち着いた方ではあり、今ティアナの目に映った記事はまだマシな内容だった。相変わらず皮肉が多く含まれてはいるが。
「エリオとキャロは先に隊舎のほうへ戻っているそうです」
ティアナの言葉に安心したように答えた。エリオとキャロは現在、地方の復旧作業もそうだが、基本的に六課の仕事はロストロギアの調査とその確保だ。それは変わらない。故に二人はどちらかというとその調査のほうの仕事にあたって貰っている。二人だけではなく、何人かの魔導師と組んでいるので心配は無く、更に復帰したシャーリー

を始めとしたロングアーチがついているので問題はないだろう。
機動六課の隊舎の方も復旧が終わり、現在では寮も含め元の形を取り戻していた。訓練場のほうはまだまだ先の話であるが。
「そういえば、スバルの様子はどうだったの？　今日の午前中、様子を見に行ったんだよね？」
「はい。相変わらず、といった感じでした」
フェイトの問いに、ティアナは苦笑いを浮かべつつ答えた。
スバルはあの後、直ぐに入院と検査を受ける事となった。当然といえば当然であるが、その時のマリエルの話によると、以前のスバルの身体とは殆ど構造が変わっていたらしく、以前の戦闘機人の身体とは違うものになっていたそうだ。人間の身体に近いものへと変化していたらしく、メンテナンスも今後ほぼ必要が無いくらいになっていたらしい。その時のマリーの様子は完全なる機械と人間の融合体の完成形と興奮していたのは衝撃だった。
スバルの事については、こちらで被害に遭った者がティアナとなのはくらいなものだったので、そこまで重い罪にはならなかったが、本人が自首した故に、現在戦闘機人たちと共に更正施設へと入っている。刑期が終わるのは一番早いだろう。何故か戦闘機人の赤髪の子達や茶髪の姉妹に怯えられていたのは何だったのだろうかと疑問に思うが。
「ティアナ的には、相棒がいないのは寂しいよね。多分一番早く釈放されるとは思うけど」
「いえ、大丈夫ですよ。あの馬鹿にとって頭を冷やすいい機会ですから」
スバルに対する軽い毒を吐いてティアナは笑う。ゆりかごが沈んだ後、スバルは真っ先にティアナに謝罪した。当然ティアナも複雑な心境であったが、長い付き合いというのもあって許す事にした。一度フルボッコにやり返したのが条件だったが、それは良いだろう。友情の証だから仕方ない。
同じくギンガも操られていたとあってギンガ自身には特にお咎めは無かったのだが、それでも罪を償うと自白して処分は受けた。逮捕

まではいかないものの、やることは多々あっただろう。因みにギンガはスバルに対して何も思っていなく、むしろ自分が民間人に手を出すのを止めてくれたとして感謝していた。それもあってギンガは更正施設にて更正プログラムの仕事を担当している。

そうこう話をしていると、そろそろ六課に着く頃合だ。高速道路から降りてから道路を進んで行き、やがて隊舎が見えてくる。門を通り、敷地内へと入って行く。あの事件で怪我を負った殆どのクルーが復帰したお陰で、現在六課の機能は通常運転だ。怪我の酷かったヴァイスもリハビリを終わらせてヘリパイロットとしての仕事に復帰している。

駐車場に車を停めてから歩いて隊舎へと向かう。ティアナは書類を事務室に。フェイトも執務室へと向かう。

「ではフェイト執務官、お疲れ様でした。ありがとうございました」

「うん、お疲れ」

挨拶を交わしてからティアナと分かれる。執務室へと入り、そこで本局の執務室でまとめたデータを自身の机のシステムに同期させておく。隊舎が復旧する前までは本局で執務室を借りていて、復旧が終わった今でも本局と六課の両方に自分の執務室がある。これはクロノが手を回してくれたのが切っ掛けである。何かと本局での用事が多い為、現在でも本局で執務室を借りているのだ。

執務室から出てから寮へと向かう。寮に入り、淡い光が出迎えてくるのに対し、一気に気持ちがリラックスされる。軽く腕を回しながら自分の部屋とへ向かう為、廊下を歩いていく。

すると目の前になのはの後ろ姿が見えた。

「なのは」

「あ、フェイトちゃん。今帰り？」

駆け寄ってなのはへ声をかける。部屋着姿で廊下を歩いていたなのはは振り返った。どうやら自販機に飲み物を買いに行く途中だったようだ。折角なので、なのははフェイトと共にフェイトの自室へと向かう。

室内へと入り、置いてるソファに腰掛けてフェイトが着替えを済ま

せるのを待つ。
「ヴィヴィオは、もう寝たの？」
「うん、今はぐっすりと寝てるよ」
　着替えながら訊ね、それに答える。
　ヴィヴィオはあの後、聖王教会にて検査、入院してからしばらく経ち、無事に退院した。ヴィヴィオの事をどうするかで聖王教会と色々話はあったのだが、本人の希望もあって、なのはが正式にヴィヴィオの保護責任者となったのだ。現在なのはは六課の嘱託魔導師としての期間中の為、こうして隊舎で過ごしているのもあり、ヴィヴィオもこの寮での暮らしとなっている。
　フェイトが着替え終わり、なのはの向かいの席に座りながら口を開いた。
「なのはの嘱託の期間、もうすぐ終わりだよね？　今後はどうする予定？」
「んんー……とりあえずはヴィヴィオを学校に通わせたいから、その準備かな。お金はお陰様で沢山あるし」
　顎に指を当てつつ、ニッと笑いながらなのはは答える。なのははそもそも自宅が被害を受けて嘱託魔導師になった身だ。故に色々とお金はあるし、ヴィヴィオの事に関してはある程度聖王教会からも手助けはするとの事。その厚意に甘え、学校も聖王教会の学院に通うことになるだろう。家の方も復旧手当てにより、不便の無い高級住宅地に建てる事になったので、問題は無い。
「後はそうだね、喫茶店でも始めようかなって思ってる」
「喫茶店？」
「うん。色々と準備は必要だけど、実家の経験もあるし何とかなるかなって」
　その言葉に思わず笑みが零れる。今まで無気力に生きてきたなのはが、いきなり自営業を始めると言うのだから当然だろう。しかし、今のなのはの様子を見れば、結構様になるのかもしれないと思う。
　――なのはの姿はもう、かつての無気力さなど微塵に感じられないからだ。

以前とは違い、今は生き生きとしていると感じる。それもこれもヴィヴィオのお陰なのだろう。ある意味、なのはの心を救ったヴィヴィオはヒーローなのかもしれない。
「じゃあ、頑張らないとだね、なのはママ」
「あ、フェイトちゃんにからかわれたー！」
言って互いに笑い合った。こんな風に素直に笑い合えるのも久しくも感じる。蟠りが消えたのが大きな要因だろう。力やそれに伴っての孤独感や疎外感に振り回されて無気力になっていたものが無くなり、素直な感情が出てくる。
――だからこれでハッピーエンドとして締めてもいいだろうと、今までの戦っていた自分に対し、なのははそう思った。

――ＯＮＥ　ＰＵＮＣＨ―ＧＩＲＬ　ＥＮＤ

あとがき

計１７万文字。一撃少女含めると２８万文字。ボリュームは抑えて駆け抜ける様にして完結。そしてほぼ全話挿絵付！　頑張りましたｗ

ここまで読んでくださった読者様に心から感謝を！　どうも作者のラキアです！

さて祝、完結という事で、終わりとなりました。元々思いつきで浮かんだ【リリカルなのは×ワンパンマン】という一発ネタ。一撃少女の後書きで少し言いましたが、まさか自分でもここまで書くことになるとは当初思ってもいませんでした。適当に無印あたりで終わりでもいいかなくらいに思っていたのですが「あれ、無印ってフェイトくらいしか戦うことなくない？」と思って、比較的戦闘が多かったＡｓまで伸ばしました。ストーリーの序盤としては【リリカルなのは】としてのストーリーでありつつ【ワンパンマン】のパロをぶち込むスタイルでいきましたが、流石になのはがサイタマ過ぎたかなぁと思っていますｗ

そして今回のＳｔＳ編ですが、今回のでやりたかった事は間違いなく【ガロウ】戦のオマージュでした。ぶっちゃけこれがやりたかっただけの物語でした。しかしストーリーの流れから、無印やＡｓ編みたいな感じで巻くことが出来なかったので、今回は六課の視点を中心として、特にスバルやティアナがどう成長していくのかという所に力を入れました。

やりたかった事の一つとして、原作よりも優秀なティアナとスバルが見てみたかったという思いがありました。原作の泥臭い感じもいいんですがね。それとなのはさんが割りとスパルタ過ぎたので、今作では緩く新人に接するなのはさんを見たいのもありました。友達感覚に話しているのが見たかっただけですｗ

ＳｔＳの流れ的にガロウポジになるのは間違いなくヴィヴィオだろうと誰もが思った筈です。私も最初はそう思っていました。しかし操られている設定でガロウの役をやらせるのも微妙かなと思い、こ

こは一番壁に当たっているスバルに任せることにしました。
スバルに関しては地上本部襲撃から一気にキャラが変わって急展開すぎると思ったでしょう。しかし元はといえばスカリエッティによって【そうなるように】仕組まれた実験体だとすれば何ら急では無い訳でして、更に古代ベルカの超人達の全てを詰め込まれたら、まあ、そうだるだろうなっていう感じでした。
当初はワンパンマンの原作通りに「うるせーーーー!!」の一蹴で終わらせる予定でしたが、それだとなのはさん自身が救われないエンドになってしまうので、なのはと同等の強さに引き上げました。もしくはヴィヴィオによって感情が復活したという事もあって、なのはの力が弱まったという説もありますね。
何はともあれ、これでなのはさんのワンパン物語は終了です。今後は引退して翠屋ミッドチルダ支店を開業して働きつつ、ヴィヴィオを溺愛する親馬鹿と化すでしょう。のちにユーノにプロポーズを受けて籍を入れる予定。
フェイトさんは今後も管理局で執務官として働き、そして一刀両断して数々の伝説を作っていきます。原作と違ってなのはと同棲しませんし、ヴィヴィオのもう一人のママになることは無いです。あくまで親友として結構頻繁に喫茶店に足を運び、なのは達と過ごす感じです。
はやてはＪＳ事件の功績もあり、今後も地位を上げていき、やがてはフォースのような司令のポジションに立つ事でしょう。息抜きの為にヴォルケンリッターの皆と共に喫茶店へと遊びに来る感じです。
スバルに関しては罪を償った後、管理局の魔導師として復帰し、原作同様に救助隊として活躍していく予定です。マッハキャリバーと共にイクスを救ってくれるでしょう。なのはさんと同等に強いからきっと大丈夫。
ティアナ。この娘は本当に今作でも特に目立つ優秀キャラ。苦労も耐えないけど、彼女ほど優秀なら上手く世渡りすることでしょう。何かと説明役に仕えて書き手側にとって役立つキャラでもありましたｗ

エリオとキャロは良くも悪くも原作通りでした。故に出番は少なめでしたが、被害も少なかったのである意味勝ち組なのかもしれません。ルーテシアは最初からＶＩＶＩＤ状態でしたので書いててとても楽しいキャラでした。恐らく今後もわいわいと盛り上げるキャラになるでしょう。

スカリエッティと戦闘機人についてはほぼ原作通りです。スカリエッティはスバルが覚醒した事を知ると満足げに余生を牢獄で過ごす事を決めます。

ウーノ、トーレ、セッテ、クアットロも同じく牢獄組。ただしドゥーエが生存してます。出番を犠牲にして生き伸びることを選びました彼女。そして協力的になって更正施設に入った後、妹達と幸せに暮らす事でしょう。何気にスカリエッティやウーノ達を何とかして釈放させてあげたいという思いもあったりして、努力していく感じです。

そしてヴィータ。最終決戦こそ欠席したものの、恐らく主役に次いで今作で出番があったキャラかもしれませんね。ある意味勝ち組みです。出番の少ないシグナムとガチで喧嘩したりしなかったり。

最後にヴィヴィオ。割と家事も出来て仕事も出来るなのはママの下ですくすくと育っていく予定。どこで聞いたかは知らないがサイタマ式トレーニングを得てＶＩＶＩＤでは継ぐ者として活躍する予定。その強さを目撃したアインハルトが弟子入りしてジェノスよろしくの展開に。

という事で結構色々とキャラを弄ってみて書いてみた今作でした。割と色々とやりたいことが増えて最終的に尺が足りなくなって急ぎ足となってしまいましたが、やはりテーマは絞らないと痛い目みるなと痛感させられました。

とりあえず今作のテーマとしては【力があっても何でも得られる訳でも救えるわけでもない】という事が分かる内容を目指して書きました。かつてアインスが言った言葉が伏線ですね。

また別の作品を書く際はテーマを一つに絞って書きたいと思います。

それと恐らくこの作品の特徴といえば【挿絵】だと思いますが。当

時は「挿絵使えばインパクトあるのではないか?」とワンパンマン風の絵なら描けないこともないだろうと始めたのが切っ掛けです。予想を上回る反響を頂いて当時は驚嘆しましたw

評価してくれた皆様や感想を下さった皆様に感謝しつつ、これにて締めたいと思います。

最後まで読んでいただき真にありがとうございました!

次回、また別の作品でお会い出来ればなと思います!

後日談　一撃聖王

ＪＳ事件から四年が経過したミッドチルダの治安は比較的には良くなったといえた。その理由は四年前の災害によって犯罪者が一斉に暴動を起こしたこともあり、膿が一斉に始末できたようなものだったからだ。そしてそれから二年が経って冥府の炎王イクスの事件が起きたりしたが、これは元六課所属であるスバル・ナカジマによって難なく解決したりもしたが、それはまた別の話。

しかし、良くなったといえど、それはまだまだ表面上の問題。裏では絶えぬ悪事が起こっているのもまた事実なのだ。おまけに別世界では新たに人ならざる化け物が出現したりして、これらの対応に現在八神はやて率いるヴォルケンリッターの部隊が対応にあたっている。

そしてまた別の世界では犯罪組織による凶悪事件が発生したりしてフェイトやティアナが対応にあたり、スバルはエリオ、キャロと共に災害地区で救助活動したりしている。

かつての六課のメンバーはそれぞれの仕事にあたり、現在も忙しい毎日をおくっている。それに比べたらミッドチルダは治安もしっかりしているだろうが、影で小さな悪事が起こっているのも事実だ。

◇

ミッドチルダの外れにある場所に、廃棄された街が存在する。そこは主に影に潜む犯罪者が根城にしている場所であり、治安活動しようにもキリがないのが現状だ。その為、一度大きな制圧作戦を行う計画が立てられている。

そんなある日の深夜。その廃墟に一人の影があった。その影は廃墟の真ん中に佇んでおり、周りには粗暴の悪い見た目の人間が囲っている。だがその周囲に臆しない中心の人物は、静かに息を吐いた。

長い緑髪、ツインテールに髪を結い、白い戦闘装束を身に纏い、さらには特徴的な仮面を被り、目を完全に隠していた。が、その体格とボディラインは惜しげなく女性だと識別出来る。そんな女性に、周り

の男は下卑た笑みを浮かばせるものも当然のようにいた。だが、相手の強さを感じれる者にとっては、この女性が只者ではないことは肌で分かる事だろう。故に賢い類の連中は逃げる算段を思考していた。

だがそれを待たずして、女性が口を開く。

「――――世界に害を生む者達に告げます。今から貴方たちをこの拳を以って制圧させていただきます」

その一言を言って、女性は動いた。その動きは周囲の者達の時を完全に置き去りにして、逃げようと動いていた者が一瞬で吹き飛ぶ。ついで周りに居た男数人に対し、回し蹴りを放って周囲を蹴散らした。驚く暇も無いその動きに、男達は混乱することしか頭を動かせない。だが銃のデバイスを構えていた男は何とか思考を維持し、冷静に女性に向かって照準を合わせる。幸い男は影から見えない位置に身を隠している。そして女性の背後を取っていた。距離からいっても気付かれている事はないだろう。そう信じて必死に心を落ち着かせ、静かに呼吸を整える。手の震えを押さえ、完全なるタイミングで女性に向かって魔力弾を放った。

男の予想通りに、女性は気付いていない。弾を撃ったタイミングでも避ける気配はない。プロテクションを展開しようとも、この弾は男の切り札であり、馬鹿魔力で作ったプロテクションでない限りは貫通性能を持つ。故に仕留めたと思った。

だが、その一瞬の期待は砕かれる。

「――――無駄です」

女性は弾が当たる直前に腕を動かし、その弾を素手で制止したのだ。周囲の者達も驚愕する。意味が分からないとその場にいた全員が思っただろう。

「これはお返し致します……――――旋衝破ッ!!」

言うと、女性は銃弾にさらに己の魔力を重ねて数倍にも弾を大きくし、それを狙撃手へと投げる。およそ人が肩で投げたとは思えない速さで弾は放たれ、男は完全に沈黙することとなった。

もはやここにいる者たちではとても太刀打ち出来ない。一方的に蹂躙されることしか出来なかった。一斉に襲い掛かろうとも、一瞬の

動きでそれぞれの急所に的確に拳を打ち込まれ、そして背後から襲いかかろうとする者がいても一瞬の動きで逆に背後を取られるという余裕の身体捌き。そして殆どの連中が制圧された時に、一人の男が車へと乗り込み、その場から逃げ出した。その場にいた男を気絶させ、胸倉を掴んでいた手を離して地面に落としてから、女性は地面を蹴る。

正面へ蹴る。そうする事で凄まじい加速を生み出して車を追跡した。バックミラーで確認した男はまるで幽霊でも見たかのような恐怖で染まった表情をさせてひたすらアクセルを踏む。だが加速しても全然離れていく気がしない。廃墟からだいぶ離れ、そして山道を降りていく。あと少し走らせれば街がある。そこまで逃げれば男も逃げられる可能性があった。

バックミラーを確認する。後ろには先ほどの女性が居ない。流石に山道の悪路で追いつけなかったのかと少しだけ安心し、ホッと息を吐いた時だった。

ドン、とルーフから音がした。

その恐怖で、男は悲鳴を上げた。

車の上に、女性が着地したからだ。

音がした次の瞬間にはルーフが女性の拳によって突き破られ、運転する男を視認する。

「――逃しません」

一言言って、女性は男の意識を奪った。運転手を失った車はそのままコントロールを失って車線がずれていく。男を車外に出してから、女性はその場から跳躍し、地面に着地する。車はカーブにある岩壁に突っ込んで、そのまま爆散した。

◇

「――という感じで、普段から影に潜む悪を拳で制圧したりしていたんですが……」

「うん。一般人がやる事じゃないですよねそれ？　下手するとアイン

ハルトさんが管理局の面倒になると思うし、それは今後しない方向でお願いします」
「しかし、ヴィヴィオ先生……」
「……あの、それと先生って言われるのはちょっと……アインハルトさんの方が年上ですし……」
「では師匠」
「師匠はやめて下さい！」
緑髪の少女――――アインハルトの話を聞いていたヴィヴィオは、その危険すぎる行動の話を聞いて頭を悩ませていた。
何故、こんな事をしているかと言うと、それは先日の話となる。アインハルトは普段、覇王の拳の強さを証明する目的もあって、街に潜む悪事をその拳で制圧していたのだ。しかしある日、その光景を夜のランニングをしていたヴィヴィオに見つかったのが切っ掛けで知り合い、さらにヴィヴィオが巻き添えになりそうな所でヴィヴィオが母親譲りのワンパンで男を仕留めた事によって、アインハルトとこういう関係になった。
ヴィヴィオは改めてアインハルトから話を聞こうと、現在自室に招いて話を聞いていたが、アインハルトは先ほどの話のように危険なことをしている事が分かった。
いや、アインハルト程の実力者からしてみれば危険ではないのかもしれないが、どちらかと言うと世間的に問題があるのだ。そう言うのは管理局の仕事である。一般人が制圧しても、管理局側からしてみればアインハルトの行動も十分に問題なのだ。実際後から知った話では一連の騒ぎは結構問題になっている事をギンガから伝えられる事になる。
ヴィヴィオはコホンと咳払いした後、口を開いて、
「力を証明したいって、そんな面倒な事しなくてもいいんじゃないですか？　ミッドには格闘競技とかありますから、それで結果を出せば……」
「たしかにヴィヴィオ先生の言う事も分かります。ですが、私は覇王として、影で横行する悪事を放っておけないという気持ちがあるので

す」
　それを聞いて、ヴィヴィオは「ああ」と声を出して納得してしまった。そういえばスバルもＪＳ事件の際にそういった理由でなのはママと戦ったと聞いたことがあった。もしかしたらそれが覇王の記憶が強かったのが理由なのかもしれないとヴィヴィオは思った。
　しかしこのまま続けさせる訳にもいかない。ヴィヴィオはどうするかと思考を巡らして、試しに一つの方法を口に出してみる。それは冗談のようなものであり、大した期待はしていなかったが。
「ではアインハルトさん。もし、そういった事をやめてくれれば、正式に私の弟子として認めましょう」
「やめます!!」
　即答だった。

◇

　翌日の昼間。丁度学校が休みだった事もあり、正午前の時間でも構わずアインハルトと行動出来る。場所はひらけた荒野だ。辺りは岩肌の地面が露になっており、周りには岩の山が並んでいるのが見て分かる。
　だがこれらは全て現実の光景ではない。魔法の技術を使った仮想ステージだ。以前六課で使われていた訓練施設の進化版であり、この空間ではいくら物を壊しても支障は全く無い。世の中も便利に進化したなと思う。
　現在、ヴィヴィオとアインハルトは互いに向かい合っている状態だ。その姿はどちらも本来の子供の姿では無く。魔法によって大人の姿へと変身し、それぞれバリアジャケットと戦闘衣服を身に纏っている。
「今日は無理な頼みを聞いてくれてありがとうございます」
「いえ、まあ弟子にするって約束しちゃいましたから。それに礼は私ではなく、ノーヴェに言って下さい」
　言うと、アインハルトは横に向き、そこに出現している立体モニ

ターに向かって頭を下げた。そこには現実世界でこちらの様子を見ているノーヴェの姿がある。
「突然の無理を聞いて下さり、ありがとうございます。ノーヴェさん」
『いやいいって別に。これくらい大した事ねーよ』
ノーヴェは笑みを浮かべつつ手を振る。ノーヴェは現在ミッドチルダで他の姉妹達と共にナカジマ家で生活しており、今はヴィヴィオやその友達であるリオやコロナのトレーニングの先生役をしている。ヴィヴィオに関してはノーヴェ以上に強いのだが、ヴィヴィオ自身は格闘技術の基礎を学びたいという事でノーヴェに教わっている。故に今日のような無理な頼みも聞いてくれたという訳だ。
さて、とノーヴェが口を開き、
『じゃあ、そろそろ始めるか。カウント始めるぞー？』
「お願いします」
ノーヴェの言葉を合図にモニターの画面が切り替わる。その表示には１０と数字が表示され、それが秒と共に減っていく。アインハルトがヴィヴィオに向き直り、ヴィヴィオもそれにあわせて口を開く。
「ええっと、手合わせといってもガチじゃなくてもいいんですよね？」
「私はそのつもりです。ヴィヴィオ先生の本気を引き出せるように、ぶつかっていきます」
カウントが３に切り替わる。
「では――――お願いします」
カウントが０になった。
次の瞬間には、距離を殺してヴィヴィオに肉薄するアインハルトの姿があった。凄まじい勢いの加速と共に、蹴りを繰り出す。だがそれをヴィヴィオは上体を下げる事によって回避した。だがアインハルトはその蹴った反動を利用し、もう片方の足をそのまま空中で切り替えつつ踵落としを繰り出す。
その衝撃で岩の地面は砕け、地面を伝って巨大な罅割れとなった。しかしそこには既にヴィヴィオの姿は無い。アインハルトの足が当たる前に上に飛んで回避したからだ。
砂埃が舞い、上から見下ろすヴィヴィオはアインハルトの姿が見え

なくなる。だが次の瞬間には翠の魔力光が煙の中から輝く。
「――――覇王……空破断ッ!!」
掌打と共に強烈な衝撃波を飛ばしてヴィヴィオへと迫る。その威力は並の人間であれば塵と化す一撃だろう。衝撃波はそのまま一直線へと貫通し、背後にある岩山に命中すると巨大な爆発となった。寸前で回避したヴィヴィオは地面へと着地し、その様子を見て感心の一声を漏らした。
その余裕な振る舞いから、アインハルトは自身へと責め立てる。
「(……これでは駄目だ。この程度の速さではヴィヴィオ先生に追いつけない……ッ!)」
思考し、アインハルトは自身の魔力を高めて、それを身体に纏わせるように展開する。魔力光が全身に溢れ、ヴィヴィオはその様子を目線で確認する。
次の瞬間にはアインハルトの姿は消えていた。音を置き去りにして、光だけが先に行動する。その動きは先ほどのヴィヴィオを線上に捉え、真っ直ぐ突っ込む。常人では何をされているのかも理解出来ないだろう。アインハルトはその一瞬だけで無数の拳をヴィヴィオへと浴びせているのだ。勢いと共にそのまま圧し切り、岩山へと衝突する。
しかし、アインハルトはそこで気付いた。
ヴィヴィオの姿がそこには無い。
「(……いない!? 最初から残像を相手に!?)」
直ぐ様振り返り、辺りを確認する。広大なステージであるが故に、視覚だけでは人一人を探すのには骨がいるだろう。だがアインハルトの身体能力は常軌を逸している。視覚のみでヴィヴィオの姿を捉えることが出来た。ヴィヴィオは衝撃を置き去りにするような速さで地面をかけているが、アインハルトであれば追いつく事は可能だ。直ぐ様跳躍し、ヴィヴィオの向かう先へと先回りし、その正面へと着地する。
同時に、拳を構えていた。
「――――覇王……断空拳ッ!!」

足から練った力を拳の直打又は撃ち下ろしとして叩きつけて攻撃をする技であり、アインハルトが最も得意として最も威力のある技だ。正しく必殺技と呼べるその技の威力であれば、対象を塵とも残さず消滅させてしまうだろう。

「(――――完全に捉えた！　これでヴィヴィオ先生も少しは本気に……！)」

アインハルトも手ごたえを感じたのだろう。思考でそのように考えるが、それは一瞬にして途切れる。

背後へと気配を感じた。振り向くことも出来ぬまま、気配のみを感知する。

それは彼女ですら畏怖するような感覚。間違いなく死を感じる気配。

ヴィヴィオはアインハルトの背に向かって拳を繰り出していた。アインハルトが振り返る頃には拳は回避不可能であり、その額へと拳が当たる。

――――寸前に、ヴィヴィオは拳を制止した。

何秒か送れて衝撃の轟音が鳴響く。一瞬の空白で、アインハルトは目を丸くすることしか出来なかった。ヴィヴィオは呆気になっているアインハルトと目を合わせて、笑みを浮かべる。

「お腹が空きました。丁度お昼ですし、ご飯にしましょう。アインハルトさん！」

「……は……い。行きましょう」

今の一撃で手合わせは終了である。当たればアインハルトの敗北は確定していただろう。だからこそ終了に関してアインハルトが思うことは特に不満は無かった。

ヴィヴィオは立体モニターを出現させてノーヴェと連絡を取る。その様子を未だに呆然としながら見て、アインハルトは自分の背後を見た。

「（――――強くなる為には、どんな事をする覚悟はある。……でも、私がヴィヴィオ先生の強さに近づけるイメージが全く沸かない……）」

視界に映るのは、先ほどのヴィヴィオが放った拳の衝撃で、無数の岩山が消滅した光景だった。

振り返り、ヴィヴィオの方へと向く。ヴィヴィオはどうかしましたと首を傾げた為、何も無いと伝える。

「（……次元が違う。そう思えてくる。でも……それでも私は）」

ヴィヴィオはモニターから離れ、アインハルトの方へ向いた。

「アインハルトさん！　今、ママから連絡があって、ご飯用意してくれているそうです！　一緒にどうですか？」

「はい。お邪魔でなければ喜んで」

――――ヴィヴィオ先生について行き、少しでも近付けるように自分を鍛えよう。

後日談――――ＥＮＤ